一月一日發行

女學世界

第十二巻
第一號



博文館


賀正
クレームレート
緑りの松に
眞白の鶴
美しき人に
クレームレート
皆この初春を
祝ふべき
床しき心の
化粧の姿
東京 平尾賛平 大阪

謹賀新年

三越呉服店

▶本號には新年附錄として

女學世界 第十二巻 第一號 新年號目次

社會教育新鶉衣(二)……曙内侍
お姫様へ女中の仕事を授けた話(一〇)……木村貞子
諸國名婦傳(二〇)……横山健堂
◎歌留多あそび◎福引と雙六◎新年カード
女優の日記(三三)……川上葉子
百八一首下馬評(四八)……司馬僧正
◎上臈生活の四季◎家の内と家の外◎冬の衛生
料理食品文盲手引(五七)……小泉迂外
燈のもと(六五)……紅梅
むかし昔の正月(七二)……平俊蔭
◎新案動物模様◎九重の春
繪もの語連理草(八二)……太田三郎
昔し話京の女(八九)……中川四明
文藝の春(九八)……
△春の一夜(大江百合香) △松の内(津末操子) △一夜あくれば(紅梅)
△若き友へ(野菊女) △我里の正月(野中君子)

四季風俗雙六（山本昇雲書伯）を添ふ▲

家政整理の要件（一一五）……女子大學教授 井上秀子

世に拗た女の噂（一二一）……尾崎恒子

◎源氏五十四帖繪がたり◎新年互禮會◎新案夫婦合せ（懸賞課題）

つれ〴〵日記（一三二）……柴田環

家庭化學日用帳（一三四）……大阪藥學校長 須田勝三郎

◎むかしの風俗◎烈女百人一首

句に現はれた女性（一四九）……福原雨六

水引と熨斗（一五六）……笹木幸子

ハイカラ令孃と其背景（一五九）……八つ橋

◎一部分の印象◎熨斗の意匠

森律子孃と語る（一七〇）……婦人記者

春宵記（一七四）……內藤千代子

◎謎字のあそび◎正月と胃の腑

新年の化粧と晴着の着方（一八六）……遠藤波津

在原業平（一八九）……物集梧水

◎懸賞くみ繪◎誌友俱樂部

口繪‖△明眸（原色版）△紛蝶花（彩色石版）△千代の春（北野恒富畵）△追ひ羽子（平福百穗畵）△嫁が君（河崎蘭香畵）

◎北白川宮妃殿下◎山內侯爵令夫人◎保科子爵令夫人◎德川公爵世嗣夫人◎令孃かゞみ◎松上鶴◎英國女權運動者其他（寫眞版）



父様はポマード
母様は洗粉
お姉様は白粉
そして妾は歯磨
それがみんな
クラブ
なの！
クラブ洗粉
クラブ白粉
クラブはみがき
クラブ美身クリーム
クラブ美髪用ポマード
クラブ水白粉
クラブ粉おしろい
クラブ打粉白粉
クラブ化粧水
クラブ洗粉特許罐入

心膓を一洗して本年の劈頭より本書を必讀せよ！

松村先生は其畢生の努力を本叢書の完成に注がる!!

松村介石先生新著

修養叢書第壹編

修養四書

論語 孟子 大學 中庸

金ぶち函入

ポイント式新活字組 紙數六百頁 總クロース綴金文字入頗美製本 定價金壹圓 送料八錢

活人介石先生は精神界の覇王です、新時代の新思想を善導して行く人です、此先生が時代の要求に鑑みる所あり、古今の腐儒の爲したる所を追はず、講解皆精神的新註を試みて、新時代の新人が直に取て修養の資となすべく畢生の努力を盡して編れたる者が即ち本書です。四書が如何に我國士國民に取ての恩典たるかは玆に言ふを俟たず、此千古不磨の寶典が先生によりて如何に新樣の意義を備へて諸君の前に展せられたるか、希くば處世の規箴として生命の活書として、修養の大經典として日常座臥に之を讀み給はんことを。

女學世界の特別懸賞に應ぜんとする人に……

水野葉舟著

新樣式文範 **愛の書簡** 五版

新樣式文範 **小品作法** 再版

各冊四六判三百三十頁
各冊定價六十錢送八錢

手紙でも文章でも舊來の型に囚はれては眞情を流露して、心を其儘に人に傳へることは出來ない、本書は文界の新人水野葉舟氏が、自己の經驗よりして、如何に新しき手紙を書くべきか、如何にして新しき文章を作るべきかを丁寧に敎へ、且つ小説的興味ある自家の創作的作例を示し、附錄に蘆花晶子藤村紅葉花袋獨歩虚子子規白鳥鷗外等の諸大家の傑出せる模範的作品を添へたるもの、新人必讀の名篇である。

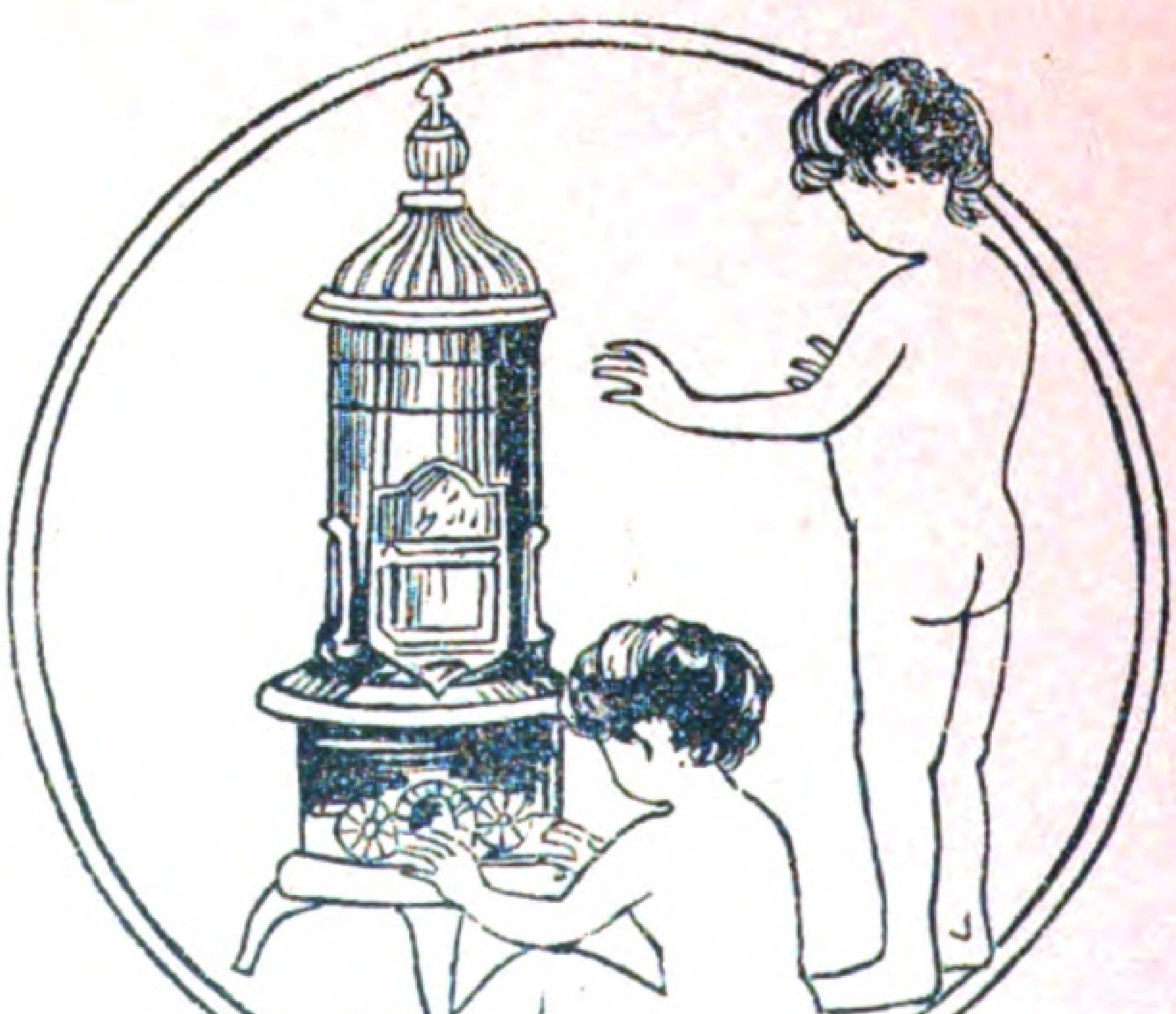
東京市京橋區中橋廣小路六 文榮閣（振替東京四一〇九）

發兌

東京市神田區錦町二丁目五番地 春秋社（振替東京二〇七八九）

女（いの二）





明眸



田中製版所三色版

女(ろの二)

▲宮内省御歌所長男爵高崎正風大人
▲阪正臣大人、大口鯛二大人 御校閲

歌會始御式眞圖

(縱一尺五寸横二尺一寸)
詳細說明書附
定價 金一圓 (送料不要)

▲本圖は御式場たる鳳凰の間に兩陛下既に御出御遊ばされ各皇族各役員御着席の御模樣は勿論貴重なる御床飾の御品々御衝立御花の位置等に至るまで悉く其の眞を寫し製版の技印刷の術何れも其最高級最高度の手腕を發揮したるを以て森嚴崇高なる御式場の光景彷彿として陪聽の光榮を得たるの思あらしむ。

▲說明書は御歌會の沿革、講頌の作法及御模樣及懷紙の認方、詠進者心得等詳細を極め殊に挿入したる懷紙書式八葉は大口鯛二大人の麗筆に成る。

教育掛圖發行所 東京市京橋區宗十郎町十一 東京造畫館
電話新橋(七一二三)
振替口座(東京六六二〇)

女(ろの三)

濃艶



恭賀新年



日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領

宮内省御用達

釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一番
振替口座五〇二一番

女(はの一)

謹賀新年

新學期開講

第十三回

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

講師東都の大先生十數名

今や入會の絶好機

産婆科六ケ月 看護科四ケ月卒業

産婆 看護婦 講習生募集

本會は通信教授を以て産婆及び看護婦たらんとする女子を養成するに有り

規則郵券二錢要

東京市四谷内藤町

東京産婆看護婦講習會

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

◎音樂生徒募集（一月八日始業）

■今回東京音樂學校受驗科を新設し

■各科共補缺生徒を募集す

神田今川小路二丁目十二 私立東京音樂院

ね小便袋

本品は子のある親病人ある家には必ず一器を備へられよ

舶來特種のゴム製品故永久使用し得らる洗濯の世話なく蒲團衣裳を汚せず立すわり自由



特製大人用貳圓

大人用一圓六十錢

中人用一圓十錢

乳兒用九十錢

送料八錢

百人一首歌かるた

●本品に男女の別あり御指定を乞ふ

箱入上下一組

甲二圓 丁八十錢

乙一圓卅錢 戊五十錢

丙一圓 送料拾錢

大阪南區内安堂寺町一丁目

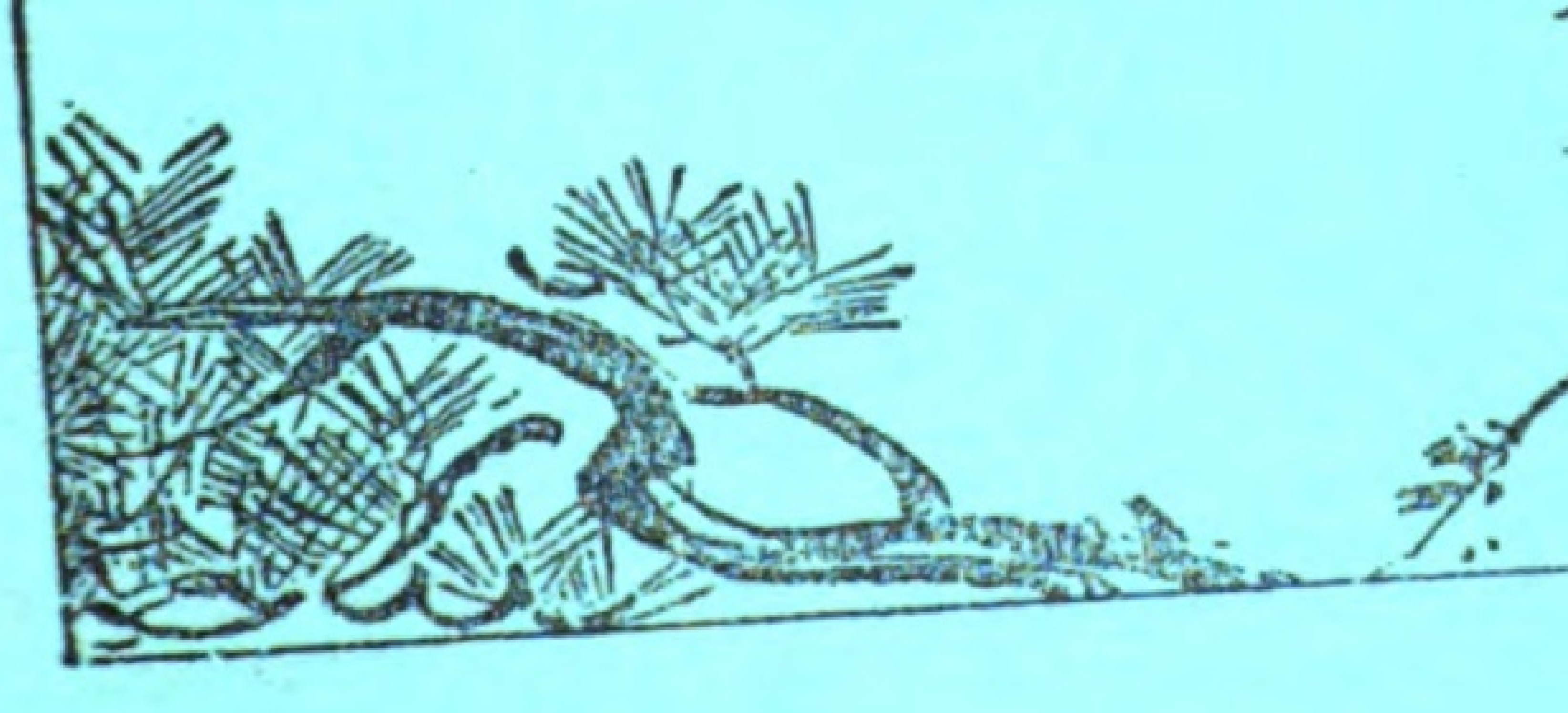
振替口座大阪九七五〇番

小塚春光堂

女(はの二)

女（はの三）







北野恒富筆

女(にの一)

新年大附錄 二十四時 家庭双六 を添ふ

婦人世界

定價拾五錢　正月號　郵税二錢

◎現代の美人は誰か……（跡見花蹊　高橋義雄　江木粂子　棚橋絢子）

■九年目に親子の再會……北村美那子

■女學生と歌留多遊び……下田歌子

▽勅題髪の結び方……（關口ぶん　伊賀とら）

▽歴史講談「春日局」……風谷

▽をりをり草……村井弦齋

小説「子寶」……村井弦齋

▽櫛笥のうち……與謝野晶子

▽川柳話子年の春……春日野

▽勅題立見新料理……石井泰次郎

○衣服仕立直しの新工風

○急場の時の即席料理

○生花を習ふ西洋人

○古今名歌松上鶴

○お正月の總菜

○名家の年賀狀

○古今名人の逸話

○女三人よれば姦し

○着物は着方で美しい

○餅の食べすぎと數の子

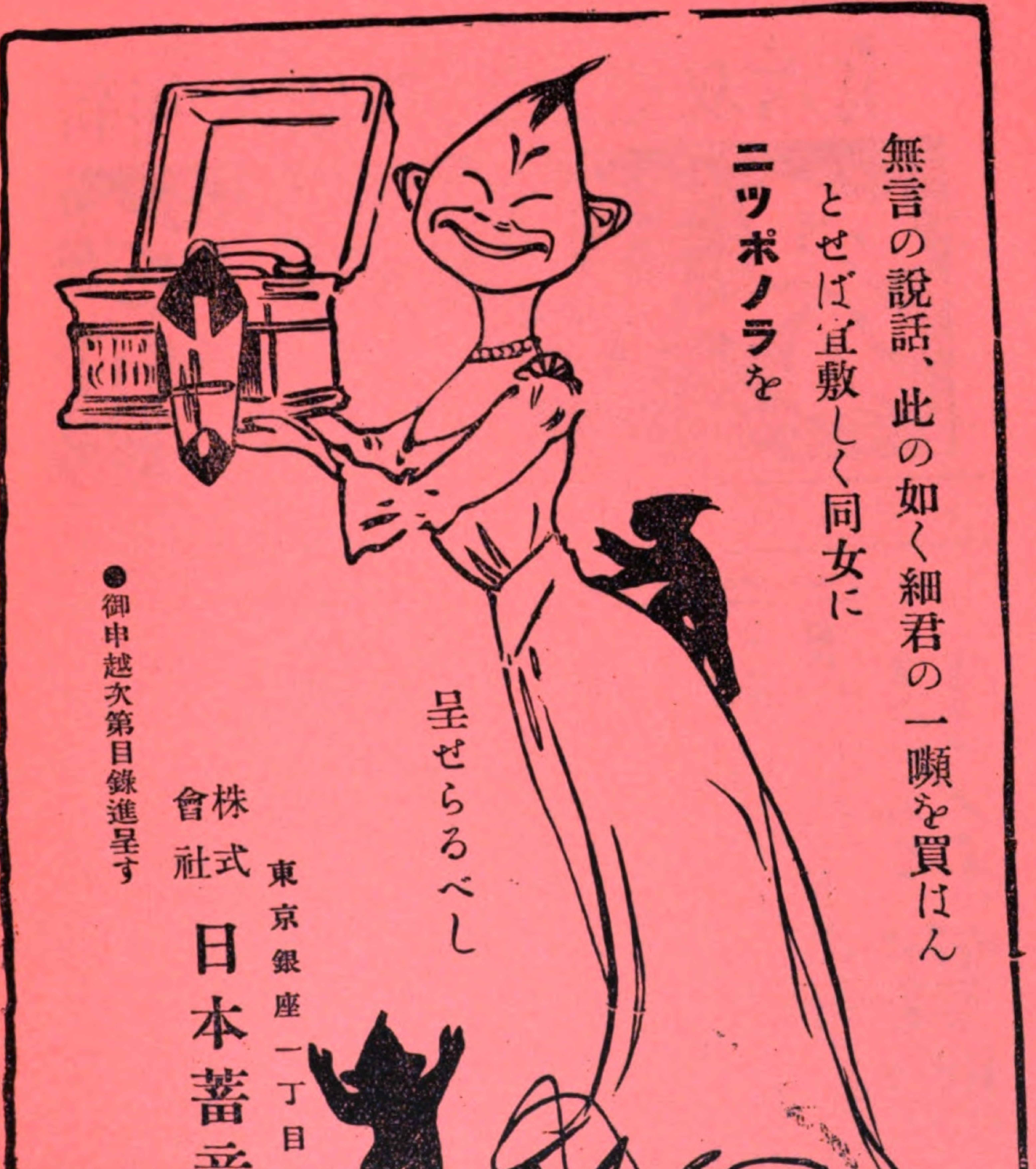
東京京橋南紺屋町二十
實業之日本社

■千島の雪中に迎へた正月……那司兼代子

■新婦人國記其一熊本出身の婦人……蘇川漁郎

◎見合ひの實驗……（丸山代議士、塚原澁柿　小久保代議士、宮田修　巖谷小波、樫田學士　石黒男爵、堀越善重郎）

女(にの三)



無言の說話、此の如く細君の一嚬を買はん
とせば宜敷しく同女に
ニッポノラを
呈せらるべし
東京銀座一丁目
株式會社
日本蓄音器商會
電話京橋 二五八 二五七 番
●御申越次第目錄進呈す

女（への四）

追ひ羽子



平福百穂筆

君が嫁



河崎蘭香筆

羽仁もと子主筆

婦人之友

新年號（一月一日發行）一册十八錢（郵稅二錢）　半年分前金郵稅共一圓八錢　一年分前金郵稅共二圓十錢

●幸福論……………羽仁もと子

●娘時代の回顧（三宅花圃）

●最も嬉しかりし事（名流夫人數氏）

●主婦として模範的の三夫人（加藤、山脇、横河三夫人）

●老人會を見る記……

●下婢の使ひ方（一）（加藤富子）

十年にわたりて加藤醫學博士夫人の適切なる實驗談を連載す……

●子供の扱ひ方（一）……羽仁もと子

子供を賢く強く敎へ導くには如何にすべきかを說く……

新年附錄　臺所節用

（石版彩色刷優雅なる册子　一年中の献立表はじめ　勝手道具の取扱方、食料品の取扱方等を滿載す）

●子供と新年　加藤照麿

●子供の話（一）　倉橋惣三

●子供　新年會の食卓　笹木幸子

●燃料の比較研究

「若き婦人」欄

成女高等女學校長　宮田脩氏每號執筆

研究部の新設

昨秋以來羽仁主筆指導の下に組織されたる本社の研究部は有益なる家事研究の結果を續々誌上に發表す

●女性觀……文學博士　三宅雄二郎

女（ほの三）

東京市小石川雜司ヶ谷町　婦人の友社　電話番町三六九八番　振替東京壹壹六〇〇



女（ほの四）

北白川宮成久王妃房子內親王殿下



徳川公爵世嗣夫人實枝子の方



夫人は有栖川宮威仁親王殿下の姫君にして徳川慶喜公令嗣慶久氏へ嫁がせ給ひし御方なり。


謹賀新年
!!新春の娯樂品
象印兩面盤多數着荷
新ナシ ラッパ 蓄音器各種
◎最新吹込の天女印王冠印
片面盤多數取揃居ます
!!家庭の必備品
定價表音譜目錄御一報次第進呈仕候
STARKTON
東京市銀座一丁目
三光堂
電話京橋九七八 九七九
支店
東京市淺草駒形町 長電話下谷九八八
大阪・南區順慶町四丁目電話東三一八三
福岡市博多下西町電話五〇一
北海道小樽區色内町電話三二一三

女(へ四二)

特許竹中式絲掛付絎臺

●御婦人方の新福音！

弊店發賣のくけ臺は御婦人方の毎日針仕事に絲を糸巻にまき取る時に一々人様の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり「ヨゴレ」たりするが如き不便更になく御使用後は「ヌリタ、ミ」も輕便で且つ針差しや尺度を自由に「シマイ」得る様に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此の上もありません。

使用法

此絲掛付絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に依りて「ネジ」鋲を以て自由に「シメ」絲口を中央にある輪に通して絲巻にまく時は二個の絲掛車は自由に回轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に絲巻にまくことを得て輕便此の上もありません是非御試用を願ひます。



定價
- 御誂黒塗製 金六拾錢
- 特製 金參拾錢
- 上製 金廿五錢
- 並製 金貳拾錢

美麗なる箱入なれば進物用に好適也●市内は一本にても御一報次第無料配達す●送料地方は拾錢●清鮮臺棒は三十錢を要す

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 竹中商店 電話芝二八八四番 振替東京三一二一三

●特約販賣 御望の方は御照會あれ

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓●三圓半●送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓二十錢●送費十錢



◀にせ物あり御注意▶

リウマチス根治劑

驚く可き天下唯一の保證 藥禮狀山の如し

七日分三十五錢 半劑七十錢 一劑一圓三十錢 二劑二圓四十錢 送料八錢

方名パウル氏丸は獨逸醫學大博士パウル先生發明の靈藥にして其効驗の確實なる實に神の如し如何なる難病のリウマチも此藥二劑にて奏効す證明禮狀寫希望の方申込あれ送呈

(全快禮狀店內に保存す) 新宮藥館 (東京本郷三丁目 振替一二五八四)

電話下谷五一四六番

女(への二)

お待ちかねの畫報は出ました

少女画報

第一巻第一號　定價十五錢　郵税一錢五厘　●　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十五錢

口繪

- お待ちかねの本誌は愈出ました!!! 美しい畫と面白い記事と何とまあ花やかなことでせう。
- 口繪は四十餘の寫眞が綺麗に立派に新装して皆さんを迎へて居ます
- 五女王殿下を初めとして鼠のいたづら正月の遊び色々
- 七女學校の生徒色々　八小學校の授業時間何とも云へない
- 美しい寫眞にこと懸賞「手の色々」は皆さん當てゝ御覧なさい

見よ大附録

仲よき姉妹　二頁大石版　井川洗厓氏筆

バラダイス双六

- 少女と新年　高島平三郎
- 本誌讀方　倉橋惣三
- 小説　みしめ繩　三宅花圃
- 小説　鞠の行方　菊上みよ子
- 小説　羽子板娘　海賀變哲
- 小説　太鼓の音　尾島菊子
- 面白くて誰にも出來る少女家事　手塚かね子
- 祝辭　長谷部文相、跡見三輪田棚橋嘉悦諸先生

- お正月の遊び……
- 妙な獸
- ポンチ繪……
- さがし繪……
- 兩殿下御少女時代
- 梅と鶯……
- 學校參觀記……
- 講談　春日局
- 倫敦見物……
- 文學遊戯……
- 名媛の少女時代……
- その他いろいろ

東京麹町區飯田町四丁目一番地
東京社
電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八

女(への三)



女（への四）

山内侯爵夫人禎子の方



夫人は伏見宮貞愛親王殿下の姫君にして侯爵山内豊景氏に嫁き玉ひし御方なり

保科子爵夫人武子の方



夫人は北白川宮成久王殿下の御妹君にして子爵正昭氏に嫁ぎ玉ひし御方なり

女(その一)

●本法は 女髪結師安部歌子女史

ちゞれもくせも もはへうりあい 二大奇方劑

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す 濟世園

●東京市麴町區三番町六十七

●かるた界最新の發明

練習用 標準かるた

定價六拾錢……郵稅八錢

かるた競技の練習に此かるたを使用すれば普通のかるたで練習するよりも非常に其勞力を節減する事ができます。

發賣所 東京銀座大通 新橋際 新橋堂 電、新、一九九一 振替東、二〇〇

隆鼻術（はなたかくするほう）

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

午後 夜間

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒 りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ち

中央醫院

東京淺草瓦町 廿八淺草橋通 瓦町停留場横

ぢ 諸病 梅毒 横根 下疳 全身梅毒等 りん病 消渇

子宮病 血の道 月やくとまりたる病 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等 生殖器病萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

わきが 色の黑き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきんた蟲等症

▲病狀記し郵劵四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

中央藥院

東京市淺草區瓦町廿八番地 淺草橋通瓦町電車停留場横

女（との二）

女（との三）

家庭の栞

一月　新春の献立

新玉の年の初めは御臺所も忙しくお雜煮お節、田作の献立より煮肴、煮物に至るまで一通りの鹽梅にては飽ちいお腹には喉へも通らねば色々と御工夫あそばされお臺所のお手際をお目にかけ旦那様の御感に預らんとする時

女、との四）

令嬢かゞみ



上圖　實業家青木松太郎氏令嬢榮子

下圖　畵伯橋本雅邦氏令嬢さと子

令嬢かゞみ



上圖　高安氏令嬢秀子（本郷）、下圖　細井氏令嬢桃子（芝）

悪筆は御損です

文字の拙きほど恥かしきことはありますまい、ところが僅かなお稽古と僅かな費用で自分ながらも驚くほどお上手になれる方法があります、それは本會に葉書で御申込みになれば詳しき説明書の付いた見本を送ります。

◎女子部及男子部

書者
小野鵞堂先生
玉木愛石先生
稲川雲谿先生



東京本郷區大學正門前 帝國習字速成學會 電下三〇一一番 電下三二一〇番

久しく病を養ひたる社員**夏目漱石氏**は健康舊に倍して新たに小說「**彼岸過ぎ迄**」を書く

女(ちの二)

諸君疑あらば乞ふ朝日新聞を見よ

新聞は　第一に信用のある新聞を讀むに限る

新聞は　內外通信組織、通信機關の完備した活動ある新聞を讀むに限る

新聞は　有力な記者の揃つた新聞を讀むに限る

東京朝日新聞

(年中無休刊)

新聞は　趣味の饒かな新聞を讀むに限る

「廣告す」るにも信用のある新聞に廣告するに限る、信用ある新聞に出る廣告が信用のあることは云ふ迄もない

本紙定價
一ヶ月　金三十七錢
三ヶ月　金一圓六錢
六ヶ月　金二圓七錢

廣告料
五號活字十八字詰
一行　金六十錢

發行所
東京市京橋區瀧山町四番地
東京朝日新聞發行所
電話 新橋 百三十四番 百三十五番
營業用
振替口座一七三〇番

女子文壇

一月一日發刊（第八年第一號）新年特別號　定價三拾錢　送料二錢五厘

◉貴婦人論……幸田露伴、內藤鳴雪、田岡嶺雲、松浦政泰、宮崎湖處子、服部博士夫人、日向きむ子

◉自分の文學的生活……與謝野晶子

◉新年と花……文學博士 姉崎嘲風

◉文藝問題……早稻田大學講師 島村抱月

◉女性の姙孕力……田中祐吉

◉歩きぶりの內輪と外輪……澤田順次郎

◉我邦婦人の最大美點……菊地幽芳

▲正宗白鳥（平和）

▼中村吉藏（同窓會）

▲田村俊子（紫色の唇）

▼森鷗外（驅落）

◉壁畫の話……澤村文學士

◉彌生の誕生……河井醉茗

◉歡喜……横瀨夜雨

◉王妃と薔薇……森川葵村

◉光源氏の一生……外島浪之助

◉詩人と結婚する勿れ……引佐細江

◉磁器國の記憶……竹久夢二

◉耳袋……猿丸太夫

◉聞覺一口淨瑠璃一覽表……

◉私の顏……今井邦子、神近市子、加藤筆子、早川花子、木村あやの、伊藤きみ子、江森美子、平塚白百合

◉新年の巻……長曾我部菊子

◉終の夢……はやぶき

◉路傍の人……白木絲子

◉一人の價値……太田喜志子

◉京都の町……廣江曉子

◉小說……佐藤增子

◉夜……若杉濱子

◉若き婦人の感想 文十數篇

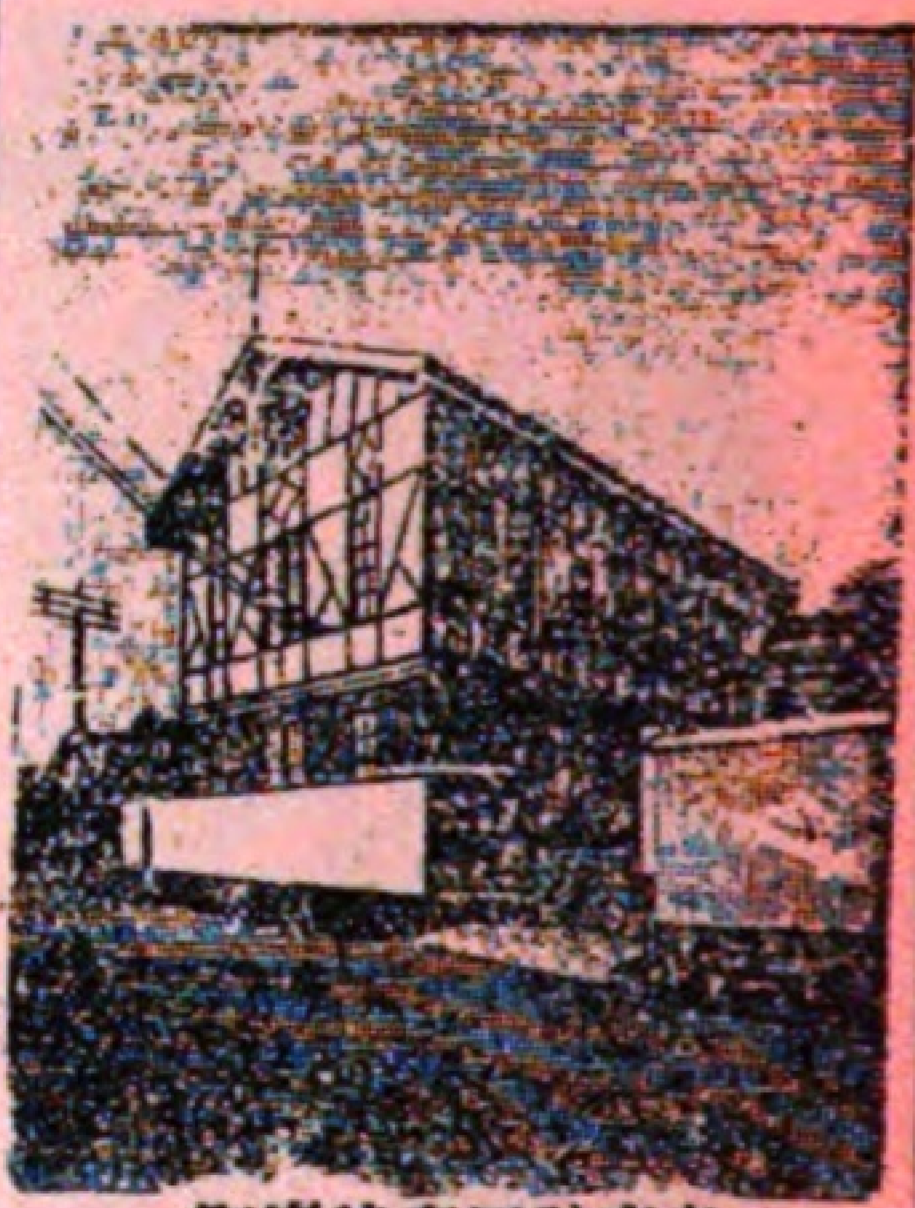
◉誌友欄 小說、自然、人事、評論、和歌、詩、俳句、初作等

▲口繪 本誌二倍大の原色名畫及石版[illegible]彩色[illegible]一一氏の書・寫眞 光澤紙刷十二頁皆美觀

東京市京橋大鋸町十一　女子文壇社出版（振替貯金口座東京第七九壹貳番）　賣捌各地書店

女（ちの三）

女(ちの四)



東京神田區猿樂町

東洋音樂學校

電話本局三八五四番

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科

一月八日始業

生徒募集

ピアノ、オルガン。バイオリン。唱歌。其他管絃樂器及理論等

入學志願者ハ本校ヘ照會アレ

醫學士古川榮校閲、藥學得業士金澤嚴著

肺病の强敵

本書は著者自ら肺結核に苦しみ百方療養の結果全快したる實驗に基き最新の學説を參照し完全なる自宅療法を詳記したる物郵劵二錢封入申込者に無代送本すべし

●東京市下谷區上根岸町 衛生書院●

美術

造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋

關口商店

電話下谷四〇五一番

振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノ事

謹賀新年

汎く取揃多少共御値段にて差上申候

内外洋紙類一式

小間紙類

製本紙函用材料

印刷用インキ

各種附屬品

本年も倍舊御愛顧賜り度候

上村洋紙店

東京市淺草區駒形町

電話下谷一一六五番

振替東京一六九三番

一七一六八番

店主 上村新之助

店員 石田政市 高橋伊助 檜山留吉

新案特許

琴調子笛

東京音樂學校琴曲科教授山口巌校御賛助

箏曲遁信教授所御撰定坂本湖月先生考案

（音律嚴正 體裁優美）

此調子笛を御使用になれば不調子本雲井牛雲井古今曙中空岩戸さては小督秋風ラッパ軍人御製ほとゝぎす等如何なる六かしき歌曲の調子なりとも容易に合はす事が出來ます又専門家の方は教授用作曲用等應用無限眞に箏曲界の明星なり苟も琴曲にたづさはる人は必らず座右の珍とせられよ

特別製金貳圓

ニッケル製金壹圓五拾錢

竹製金壹圓

平調子專用金五拾錢

詳細なる說明書附

（送料不要）

坂本湖月案

新案特許

新式バイオリン調子笛

四連 金六拾錢 送料不要

在來の調子笛は使用頗る困難加ふるに高調子なるため初學者は調律の際屢々糸を切り然るに駒を倒す事あり然るに此調子笛は遺憾なく之等の缺點を補ひたるものにて使用輕便調律誠に爽快なり

箏曲遁信教授所譜本發賣所

發賣元

福岡市中島町

振替福岡八一一番

積善館樂器部

櫻痴全集

全三冊

洋装三六判
函入上製美本
各冊壹千壹百頁
正價各金壹圓廿錢
小包料各八錢

女ちの六

櫻痴居士の文は瀟洒にして簡明、殊に淡粧の中に絢爛の趣を具へたるは、江戸子質なる居士の特色を最もよく發揮したるものと稱して可也。居士生前作るところ、小説あり、脚本あり、史論あり、戯文あり、短文あり、長短宜しきに從ひ、繁簡趣を成し、才思の横溢せる、學識の卓越せる、當代實にその匹儔を見ざるの概ありき。唯其作品の多量、雄編大作にして、猶且散逸するもの多きを憂ふべしとするのみ。今その粹を抜き、妙を集め、以てこの上中下三巻をなす、庶幾くは居士の彩筆に渇するもの、望を滿すことを得ん乎。

上編

あはれ浮世──東鑑拝賀の巻──小楠公脚本──關原譽凱歌──女侠駒形おせん──喜劇二人袴──芳谷義士譽──扇の恨──平重次郎──求女塚身替新田──新作夜の鶴

中編

人生X光線──斬奸──滑稽小説花懺悔──廻る因果──女浪人

下編

僞稱紳士──色慾二筋道──滑稽小説陰陽大和錦──車善七──仙居の夢──出放題──鳥居甲斐──高島秋帆

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

中村高等女學校長 戸野みち子女史
元華族女學校講師 近藤正一君
共著

實用女子作文全書

女子をして容易に文章を起稿し且つ作文に圓熟せしめん爲に編述せるものにして文の組立方、修辭着想等作文上の大法は勿論記事、紀行、日記、叙情、弔祭、祝辭、書簡等諸種の文章に就き一々文例を擧げて其作法を懇切に記述し又作文の資料として美辭、類句、用語等を四季若くは題目に分つて列記し更に進で家庭に必要なる公用文の認め方をも示し苟も女子に必要なる文章上のことは之を盡したれば女子座右の寶典として女學生は勿論家庭に於て一日も缺くべからざる必要の書籍なり

和裝菊判美本
紙數四百五十餘頁
正價六十五錢
郵税十錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇

可憐なる少女冒險譚

少看護婦

▼少女讀め！ 少年讀め！ 可憐なる少看護婦の一奇談

櫻井鷗村先生譯
沖州畫伯畫

普佛戰爭の際兄妹の孤兒あり、兄は兵學校に入り妹は叔父に養はる會々兄は敵圍中に入りて戰死の厄難に瀕すと聞き深夜家を脱して義侠なる人々の助力により困難を凌ぎてパリ府に着きし兄に逢はず偶然赤十字病院に入りて少看護婦となり、敵の少年を看護したるが戰終つて家に歸れば兄また家に住るの一奇談、可憐なる少女の冒險譚とも稱すべく、又家庭の讀物として最好の書なり、敢て諸子にすゝむ

全一冊
洋裝大判美本
紙數二百二十餘頁
正價廿錢 送料八錢

發兌 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

賣捌所……全國各地到る所の書林雜誌店

女(ちの七)

女(ちの八)

松上の鶴



英國の女權運動者



これは英國の婦人選擧權聯合會の幹部の人々で、上段の右は、モリエルマッツァース孃、左はパンクハースト夫人、下段右はコンスタンスレートン夫人、左はアンツリーフセンネット夫人、中央はピルリントングレッジ夫人です うちでもパンクハースト夫人は、先年倫敦の婦人選擧權の示威運動の際に、自分の孃と共に總大將のやうな地位にあつたために、またモリエルマッターース孃は國會開會中に輕氣球に乘つて婦人選擧權に關する「チラシ」を配布したなどの爲めにことに有名です。

女一代の衞生

婦人病者の心得

無代進呈

實驗報告書添附

久我侯爵‖伊東元帥‖東久世伯爵題字‖産科婦人科專門醫學士佐藤得齋先生述

處女の煩悶 ―年頃になつても月經の來潮せぬ時、又は有ても經血の量が不規則で一定せず、或は來潮期が齟齬したり或は月經時に痛を感ずる樣な事があつた場合には如何に處置す可きものか

新婦の恐怖 ―新婚前後に於て最も罹り易き病氣の、原因及徵候は如何なるものか、若し醫療を乞ふ事の出來ぬ場合は手前療治で治す方法が有らうか、又良人に淋疾あれば何うして豫防するか

主婦の悲嘆 ―夫婦共丈夫で居て結婚後幾年經ても姙娠せぬ婦人、只一回姙娠して途中流産し其後姙娠しない婦人、又幾回も姙娠するが何時も流産する婦人は何うすれば滿足に子寶を得られるか

姙婦の心配 ―姙娠に惡阻は附き物の如く誤解して打捨ておく爲めに、早産流産死産等の不幸を招き甚しきは命迄も失ふ婦人が尠くないが、其原因は如何なるもので何んな手當が必要か

病婦の苦痛 ―永年子宮病血の道で醫者通ひ病院歩きこの藥あの妙藥と頭から浴びる程飲んでも一向効なく年中蒼白い顏して、ブラ〳〵不愉快な月日を送つて居る婦人は何うすれば治るか

老女の誤解 ―月經閉止期前後に時々出血したり下物が有たり、足腰が冷へ、又は浮腫などの出來る樣な事が有ても老人だから子宮病ではあるまいなど、平氣で居る婦人は何う云ふ危險が伴ふか

申込所‖東京市京橋區新榮町‖笹岡省三

ハガキにて申込あれば直ちに送本致します

女(りの一)

化粧水

ライラック

日本政府登録

謹賀新年



安心の出來る化粧水？・

として最も歡迎せらるゝ理は美顔術實驗有効と云ふ絶對の保證と其卓越せる効能の効が即ち

御顔に

朝夕用ゆればライラックの高き香りと共に終日艶々として素顔の美を發揮しニキビソバカス吹出物等を全治す。

御化粧

時に白粉下。白粉ノバシとして斯の有名な無鉛芳香理容白粉と併用せられなば思ふが儘の御つくりが出來

フケトリ

用として御痒みの時御頭中に塗込みおけばフケはすつかり浮きて翌朝はサツパリとして心地爽かにクセを直し艶を出す。

等の特色を兼備するからで數ある化粧水中特に嗜ある方々の本品を手放せぬ故もこゝにあるのです

（定價大瓶五十錢）

ライラック水一手販賣 新橋竹川町十二番地

理容白粉本舖 美顔術 理容館

電話新橋[illegible]番 振替口座[illegible]番



は歐米各國にて進化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を高能主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に効ある諸說を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き賣藥山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れは普通に醫師の處方する発毛藥「ト」幾、「レゾルチン、」サリシール酸、昇汞等の在來の生毛劑や本舗悪の賣藥にて効なきとて落膽せず是非劑を試みよ頭髮は、へざはまゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一瓶八十錢二劑一圓三十錢郵劵代用二割增の事

●●●●●●●●●●●●●● 取次所なき地方は直接本舗へ注文あれ

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參參壹番
長電話刈谷三拾貳番

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

●●大取次左の通り●●

東京市

本郷六丁目赤門前	瓜生藥局
麹町區紀尾井町三	齋藤藥局
日本橋檜物町十八	龜田藥局
京橋區八官町八	野田藥局
神田淡路町二の四	森田藥局
芝田町四の二ノ二	加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二	岩本支店
赤坂田町四の一	竹内藥局
同青山北町五	西井藥局
本所若岡町廿五	小島藥局
四ツ谷大傳馬町二	永野藥局
神田旅籠町一ノ一	瓜生支店
[illegible]市大寺南門東入	一色藥局
京都市上京區寺町通り	石藥師角
京都市下京區五條通り	富小路行當り

●●大取次附近の各藥店にあり●●

大阪市平野町二	丹平商會
丸亀市本町	櫻井藥局
名古屋京町三丁目	飯田藤七
同　同	荒川長太郎
高松市片原町	菊明藥局
神戸元町一丁目	西村商[illegible]局
廣島市播本町	萬代藥堂
神奈川青木七軒町	水崎藥店
仙臺市新傳馬町	櫻井藥局
岡山市橋本町	加藤藥店
弘前市下土手町角	菊地藥店
大津市屋町	磯崎藥局
[illegible]知	藥局
[illegible]江	洋反物店

女(りの三)

東京帝國大學文科大學講師
文學博士　佐佐木信綱君著

和歌入門

全一冊洋裝四六判上製
紙數二百八十餘頁
（近刊）

此書は和歌の敎授に多年の經驗ある佐佐木先生が、初學者の手引の爲に著されたもの。穏健な説を懇切に述べ引例も豐かで、誰でも本書を讀む人は、知らず識らず歌心を養ひ、歌の世界に入つて歌の眞味が解り、歌が詠めるやうになる。本書一冊あれば、古來の歌論の書や多くの歌集を見ずとも、古來の歌論の精神古來の歌人の眞髓は含められてある。併し本書は、古人の説や古人の作の註解や評釋では無くて、先生が自己獨特の經驗から自得された所を述べられた初學者の道しるべである。男子にも女子にも、老人にも青年にも、初學者にも、多少心得のある人にも、凡てにわたつて和歌を學ばうとする人の爲に、此書ほど適當なものは他に無いと思ふ。

東京 本町
博文館

新案實用ポケット百人一首全集

かるた繪はがき

●本品は某大家の筆になる石版十数度刷極彩色入優美高尚なる上句四枚下句四枚にて全八枚宛よりなりたる繪はがきにして一名ポケットかるたと云ふ此繪はがきを切り取りはなして机の上の加留多取りこれ又一興味あり且一家庭における少年少女の敎育品なるが故に朋友知人に進物となすには最も好適當品なり

上下各句にて八枚纏壹組　定價拾五錢　送料貳錢

●此の雜誌を見て御注文の方には本年の二福神金屬製の戎大黒一組及弁に美術繪はがき數十種を進呈す

景品進呈

大阪市東區越中町
浪華堂
目錄進呈
振替大阪一〇五四六番

●子を持つ親病人ある家人の必要品



大人用壹圓八十錢
小人用一圓廿錢
乳見用一圓
男女の別有
送料八錢



舶來ハーモニカは神の如き美音を發し人を感佩せしむ學生間に於て非常に流行しつゝあり
特三圓、一號二圓、二號一圓五十錢、三號一圓廿錢　四號七十錢、五號五十錢　送料八錢　獨習書付

新式改良手風琴



堅牢優美音律正確何人も獨奏得る獨習書進呈
軍樂印上製一號一圓より十號順次廿錢上り
送料十二錢

女（りの四）

女子齒科醫學生徒募集

寄宿舍ノ設備アリ（規則書郵劵貳錢ヲ要ス）

神田區北神保町參番地
（電話本局二二三〇）

私立 東京女子齒科醫學校

齒科
口腔外科 實費治療

東京女子齒科醫學校

診察時間午前九時ヨリ午後五時迄
（但日曜祭日午前限）

附屬齒科醫院

新刊

家庭小說 孤兒の心

わらび山人作＝中村花菱＝四六判全一冊二百九十餘頁▼定價三十五錢郵稅六錢

いくら行つても〳〵も兩親を合ふ青い花は見當らない。灰色の空の下に儚む野の菊の花、かうした世界の荒野の孤兒の涙は、むぼは、果てどうか？作者は一孝女白菊の綺き涙の研究者わらび山人である。特に此一篇を夏き家庭の讀物としておすゝめする。

好評

島川七石著＝山本昇雲口繪及裝畫＝林緑水口繪及裝畫

大好評 四版 小柳富代

四六版四百九十五頁
定價金五十錢
送料金八錢

●富代は數奇なる運命に囚はれ悲慘なる境遇に塗擦するも撓せず撓まず其初一念を貫徹する涙の歴史なり

三版 富代夫人

四六版五百三十餘頁
定價金五十錢
送料金八錢

●夫人は婦女の守るべき道を終始操守しつゝありしも重疊たる大暗礁の中に讀者をして其赴く處を迷はしむ多涙多恨の家庭小說なり

東京日本橋區蠣殼町二丁目九番地
磯部甲陽堂
（振替東京一五〇五六番）

女（りの六）

一月の御用命

○新柄チヴァーコートの御新調
○縞御召、好貴織の御撰擇
○御題模様小間物の御買上
○サーキュラーケープの御注文
○修整一時間寫眞の御撮影
○防寒ショール帽子の御用命

女(りの八)

謹賀新年

東京日本橋
白木屋呉服店

（地方御在住の御方様）本年より通信販賣課の業務益々擴張致し御便利相計り可申候得ば倍舊の御愛顧御注文の程奉願上候

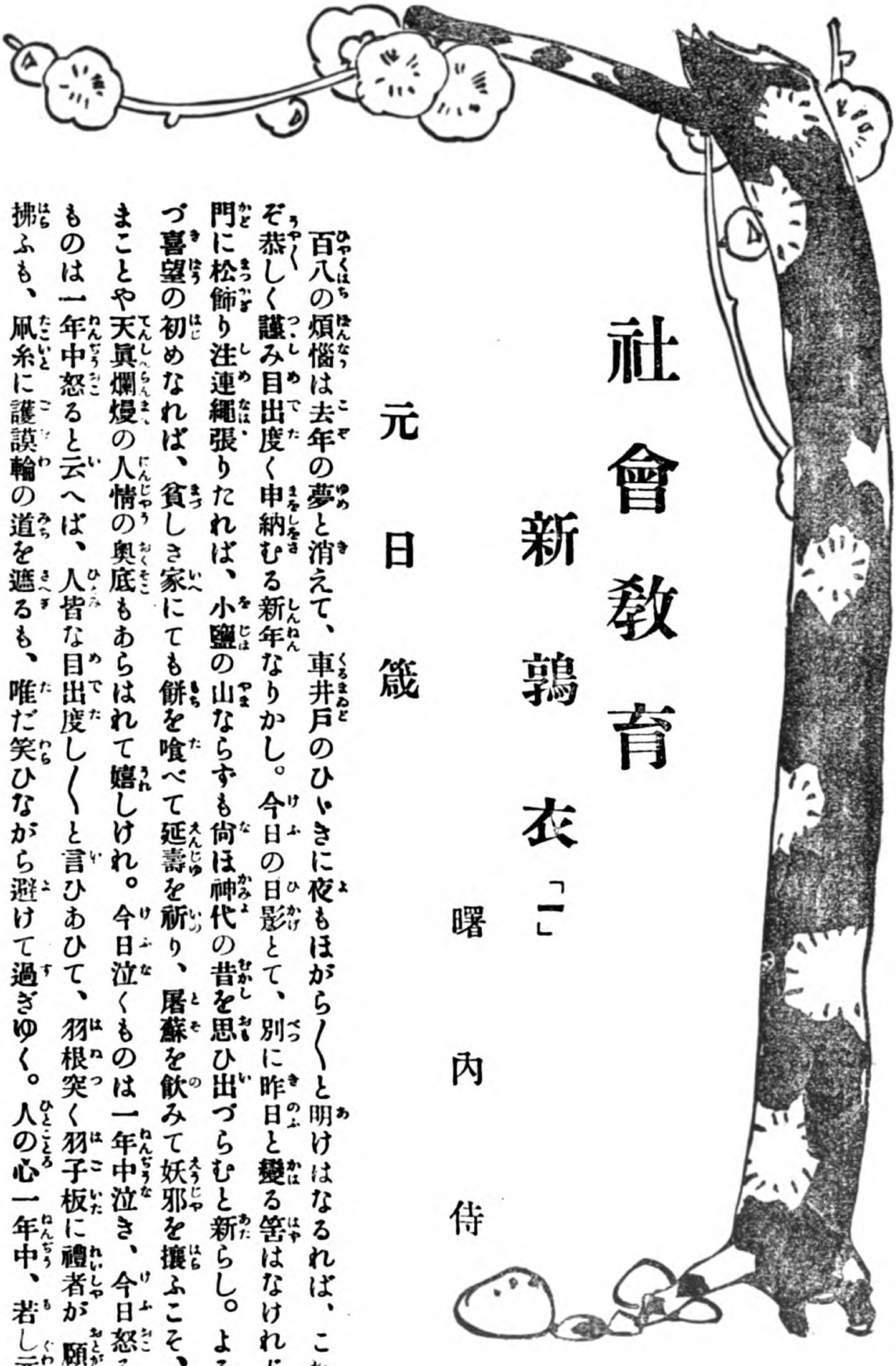
女學世界



新年號

初日の出、光うるはしく東の空を金色に彩ろ、吹く風も枝を鳴らさず、四方の海、波靜かなる大御世に生れて御稜威あまねきすめらぎの大御蔭の下に、やすらけく月日を送り迎ふるこそありがたけれ。

第拾貳巻 第壹號



社會教育

新鶉衣「一」

曙内侍

元日箴

百八の煩惱は去年の夢と消えて、車井戸のひゞきに夜もほがら〳〵と明けはなるれば、これぞ恭しく謹み目出度く申納むる新年なりかし。今日の日影とて、別に昨日と變る筈はなけれど門に松飾り注連繩張りたれば、小鹽の山ならずも尙ほ神代の昔を思ひ出づらむと新らし。よろづ喜望の初めなれば、貧しき家にても餅を喰べて延壽を祈り、屠蘇を飲みて妖邪を攘ふこそ、まことや天眞爛熳の人情の奥底もあらはれて嬉しけれ。今日泣くものは一年中泣き、今日怒るものは一年中怒ると云へば、人皆な目出度し〳〵と言ひあひて、羽根突く羽子板に禮者が頤拂ふも、凧糸に護謨輪の道を遮るも、唯だ笑ひながら避けて過ぎゆく。人の心一年中、若し元

日の如くなれば、世中の爭ひごとフッツリ絶えて、靄靄たる和氣は、春霞のごとく棚曳き、一家は一家の平和あり、一國は一國の平和ありて、革命などと事々しう鐵砲持出すことも無かんめり。敢へて今日の心を一年中としたまへと、三千世界の同胞へ今更あらためて申すも、あら玉の年の始めなればなりけり。

門松



色變ぬ松の心にならふらん春もみさをに殘る雪かな（千涙）

笑説

笑はむかな、笑はむかな、笑ふ門には福來るといへど、夫れ頬をつく／＼と慮みれば、等しく是れ笑ひゝ云へる中にも、また樣々の趣なきにしもあらず。大黑天の笑顏はいと無邪氣なれど、明店の惠比壽は稍ゝ阿呆氣に見え、おかめの笑顏は至つて智惠の足らぬ相なれど、下ざまの若き女には其れに似たるが甚と多かり。扨ても美人の一笑には、城を傾け、國を傾くる王者もありと聞けば、その價値何億兩といふことを知らず。それに引換へて世に英雄と云はるゝ人は必ず萬事鷹揚、カンラ／＼と大束に笑ひ捨つると思ひきや。それは舞臺の上の武者なりかし。彼の鬼をも取挫ぐ田村麿將軍の、カンラカンラと笑ひては、いかで小兒の懷くべきぞ、馬鹿の高笑ひは、唯だ夫れ滑稽に聞ゆなれど、深山幽谷を彷徨ふ折から、忽ち雲に響く天狗の高笑ひには、一ばしの修行者も膽をや冷すべ

く、女幽靈の笑ひは、その聲低きほど益ゝ哀れさも物凄さも骨身に徹るべし。抑も斯くの如く、元と是れ一つの笑ひなれど、物に應じてさま〳〵の區別あれば、治者も、被治者も、細くこれを研究して、以て表情の用に充てなば、一生の幸福、得て掌の中に歸しなむ。

カルタ會記

人戀三枚、雪月花五枚、勝負は其時の運と觀じて、ひとへに隱し札の出づるを待ちしは、今は昔、棚から牡丹餅の轉げおつるを待つ人ありし頃なりけり。去るほどに世中大にすゝみて、生存競爭の意義ひし〳〵と胸に徹ふれば、宋襄の仁は愚者の鑑、なんぞ坐して自から滅亡を招かむやと、こゝに競技も概ね源平の二組にわかれて、吟者が讀みあぐる聲も高しの濱ならねど、どつとばかりに仇浪かへす兩軍の勇士、矢庭に一枚の札を摑みあひ搓りあひ、必死となりて相爭ふさま、是れや宜べ山風の勢ひ物凄じく、氣弱き人は胸や潰れんずらむ。されど飜つて思へば、是れ元と眞の喧嘩にもあらず、戰爭にもあらねば、たま〳〵過つて手甲に流矢の爪は立つとも、あながち眦を立てゝ一矢を報ゆるにも及ばず、たゞ笑つて唾を附けて濟ますぞ嬉しき。若し夫れ玆に娘子軍の一隊相加はりなば、蒙古人の勇氣は忽ち騎士の遜讓と變じ孔子の所謂る君子の爭ひも斯くやとばかり、やがては



卯月の美人（上松松園筆）

修養の一端ともなりぬべからむに、然りとは何處ゝ眼の着きし人ぞ、カルタ會は青春男女の風儀を紊す基因など、難波の葦の悪しざまに言ひのゝしりけむ人もありしが、其時はお宮を恨みし貫一の一輩か。さらずば却つて遍昭が心に似たる人なりけらし。

虚榮辨

そも男子さへ玉の盃底なきが如くとの譏もあれば、況して女子の虚榮はなどか、左様に呪ふべからむ。惟ふにこれは世中次第に進みゆきて、生活難の聲大に起りける折から、女子は尚ほ古への遺訓を守りて、何處までも己れを愛するものゝ爲めに装飾はんとするに、男子は早や意氣地なくも女子を養ふ糧に乏しうなりにければ、何處よりか女子に面當がましき言葉を探し出して、虚榮々々と虚榮の榴散彈あびせかけ、その隙に掩蓋の蔭に隱れて、ホッと胸撫で下す、甚とも卑怯なる振舞にはあらざるなきか。凡て女子の、虚榮にも、實榮にも力の限り装飾はむと努むるは、是れ己れ自身の爲めにあらで、皆な己れを愛する人の爲めなり。されば世中の男子、この所に氣づきなば、女子の虚榮を呪ふ暇に、更に大に努力して、虚榮を轉じて實榮たらしめよ、是れ所謂る敗を轉じて勝となし、禍を轉じて福となすの法なれば、六韜三略の作者も、泉下に手を拍つて快哉を叫ばむ。



うたゝ寢（池田蕉園筆）

行燈袴賛

今は二十世紀の御世なり。行燈袴の名いと舊けれは、何とか其れにかはるべき名あらむやと問ふ者あり。我れ答へて云ふ、周は舊邦と雖どもその命維れ新たなり、行燈袴は其名舊しと雖ども亦た侮るべからず、君見ずや、その海老茶なるは、燈火の將に油盡きなむとするが如く、その紫色なるは、有明に消えて殘れるがごとく、何れか行燈の色に通はざるべき、且つは青春の血に逸りて、思はず戀の闇路に踏み迷ふ其折よ、この行燈袴ありてこそ、流石に我れと我が足元を照して、墮落の難を免るゝこともあるべし。午後三時の眞晝間に、この袴穿いて天下の大道を濶歩するは、いさゝか其名に對して面羞く思はるゝめれど、內藏之助ほどの英雄ですら晝行燈々々と人に嗤笑はれたる例あれば、我れに於ては何ぞ怕れむ、私かに肝膽相照すも行燈なれば却つて一入の光輝を増しなむか、問はるゝまゝに此れが賛を作る。

若水



君がためみたらし河を若水に結ふや千代の始めなるらん　（俊成）

ロハ臺辭

大に鳴き大に蜚ばむとの大望あればこそ、三年鳴か

ず蜚ばずの辛抱をもゝるなれ。唯だ夫れ大悟徹底を求むれば、こそ面壁九年の難行をも積むなれ、さるを其身こゝに生れてより死に至るまで、鳴かむとも思はず、蜚ばむとも思はず、小時とてと立寄る旅人には足の疲れを休めしめ、行き暮れて木の下蔭の風流知らぬ乞食にも尚ほ一夜の宿をゆるすのみかは、鴛鴦のかたらひ睦しき喃言喋語をも馬耳東風と聞きながして、唯だ默々として終身人の爲めに盡すなる。其の大慈悲心よ、其の大宗教心よ、假令ロハ臺の名は賤しくとも、誰れかは滿腔の情を以て感謝せざらむ。

御題松上鶴



年立て始めて明る天の月をいつろ日かけも神代なりけり　（景樹）

鼠解

鼠賊といひ、鼠輩といふところを以て見れば、鼠は唯だ卑小なるものゝ形容詞に過ぎざるやうなれど、朝に火災を知りて逸早く脱れ夕べに風害を悟りて遯逃の妙を極め、その智は寧ろ百獸に冠たらむか、若し夫れ首鼠兩端の策に至りては、强ひて筒井順慶を例に引出すまでもなく、そんじよ其處等にも斯かる策を施す人は澤山ありぬべし。彼の松前鐵之助に鐵扇で打たれし鼠は稍ゝ器量を落したれど秦の李斯に敎へし鼠は犬に誇るに足りなむ。莫遮、

昔は大黒天の御使ひしめと崇められしに、今はペスト殖民地の如く嫌はるゝは、唯だ是れ世の變遷と諦めて、人間をば恨むべからず。

活動寫眞賦

小松曳

世に活動寫眞といふ物あり。坐ながらにして世界の風景を眺め、演劇、角力、その他何くれとなく忽ち眼前に展開するが故に、我が國へ渡りてより未だ十年餘りに過ぎざれど、その勢ひ誠に燎原の如く物見盛場は云はずもがな、如何なる場末に至るまでも、何某館々々々と常設館めけるもの無き所なく、最初は活動寫眞と四字判然言ひたりしものを、今は寫眞の二字を切捨て、唯だ活動とのみ云ふ方判りやすきぞゆゝしき。然るからに如何に泣く兒も、活動へゆくと云へば忽ち泣き止み、如何なる下婢も、活動へやると云へば必ず掌を覆すやうに働き、三十四十の堂々たる男子までも、熱心なる活動家なりと聞きては、日來出不精の我れも時代の潮流遲れてはならじと、先週の土曜日に行きて見しに、外題は『不如歸』の通しに瑞西の風景、それに滑稽物四つ五つ、電氣踊まで添へて、六錢とは汽車の内で買ふ繪端書よりも尙は安價なり。折からピリ〱ピリと呼子笛を合圖に表舞臺のパット明くなれば、フロックの辯士衝とあらはれて滔々懸河の辯にて說明するに、その身振といひ、その說明といひ、いかさま外交官にもと思



みゆきせし北野の春の姫小松引もかしこき例なりけり　（千陸）

ひしに、隣席に坐れる友の囁いで曰く、斯く風采揚れる辯士ならでは、婦人の客も少く、婦人の客少ければ、男子の客も亦た少きこと、人情哲學の眞理なり、一を以て十を制し、十を制して百を迎ふは、孫呉にも無き兵法なりと說く。我れ之を聞いて、最初は稍ゝ疑けるが、館外へ出ての後、オペラ館の辯士の假聲つかへる青年に遭ひ、餘りに趣味の安直なるに驚きつゝ、呆れかへりけり。

葱頌

秋ゆきて冬さりくれば足曳の、淋しきは獨り山里の住居のみかは、都大路の其れさへ凩に吹きまくられて人目も草も枯れもぞする折から、見よや八百八町の八百屋の店頭、大束の葱に一脈の生氣動くを。そのクッキリと白きは冬枯の雪をあざむき、その鮮かなる青きは下萠の春をや偲ぶべからむ。蕪村はこれを枯木に配して色彩の美を稱ふれど、何ぞ啻だに其れのみ限らむ。牛鍋に添へられて學生の前へ供せらるゝ時、鮪鍋に入れられて江戸ッ子の食膳へ置かるゝ時、亦た多少の色彩美なきにしもあらず。然るが上に此物は至つて滋養分多く、感冒にも、腹痛にも、能く効くと云へば、一擧三得の効に免じて、むかし女房が蒜女のそしり、いさゝか臭き香はするとて、それは大目に見のがすこそ大度量とは云ふべけれ。茲に遲蒔ながら推賛の辭を作りて、ひともじの偏へに賞味をねぎ奉るとなむ。

初化粧



春はものゝ美くし姿野も山も京としいへば懷かしきかな（讀人不知）



お姫様へ女中の仕事を授けた話

木村貞子

近頃は各高等女學校で大分裁縫を奬勵するやうでございますが、どうも進歩いたしませんのは惜しいことと存じます。これは學ぶ時間が少ないためではなくつて、敎ゆる方も習ふものも精神が足らぬ加減ではありますまいか。一體手藝の學科は生徒の耳と口があきものになり易く、自然ほかの方へつかふやうになり、裁縫室へお喋舌にはいらう位の心持になつて居ります。第一先生に敬意をはらひません。女學生はこんな氣樂な學科を好きさうなものですのに一般に嫌ひでございます。これでは技の進まぬうへに品性をわるくする傾きがありますから、我學校でもつと裁縫敎師を重んじて生徒に敬意を拂はせ、敎師に奬勵の方法を工夫してお喋舌の弊をふせぐやうにいたしましたら、短い時間に良い成績が上るにちがひありません。

▲私の實驗した奬勵法

私は以前から學習院の武田太郎吉氏の敎授法に基づいて裁縫を敎へて居りますが、華族女學校で敎へた實

驗を、御參考までに一寸申上げませう。先づ初歩の一學期は唯運針ばかりを勉強させ、種々の形に目をひろつて雜巾を刺すことなぞは一切いたさせませんでした而して初めの内は曲つても何んでもかまはずに、早いのを勝といたし、一回ごとに紙へしるしを附けさせて置き、各生徒一時間の回數を私の手帳へチヤンと控へました。それから體をまつすぐにすること、運針の手は、眼から八寸乃至一尺はなすことを嚴しく守らせ、背面から見廻つて、首の下つた生徒の襟を引ぱつて直し、又栂指の動かぬ生徒の指つきを直してグン〳〵と針を運ばせたのです。



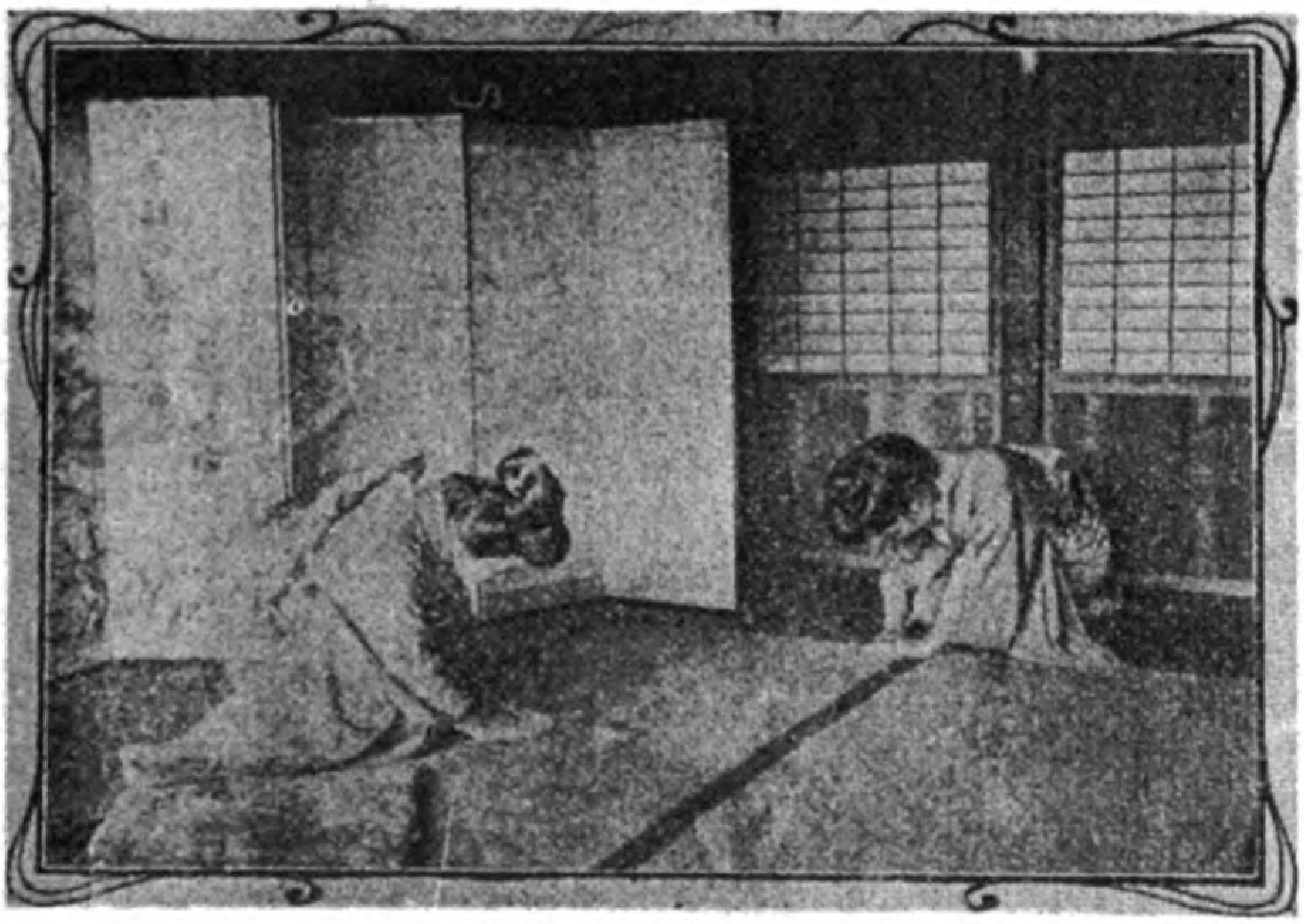
萬世の旗のなびきにのどかなる
風の心の程もみえけり　永好

かうして回數の多いものは賞として時々はぎ物をさせることに定め『貴孃方は反物の耳でも裁屑でも木綿の不用切を持つていらしやい』と申しますと、貴顯の令孃方は女中達から貰つて澤山もつて來られ大悦びではぎ物をなさいました。この奬勵法で運針が大層進みまして、木戸侯爵の令孃なぞ一學期に運針の回數が一萬にのぼられた位で、生徒は皆無駄話しの暇を惜しみ、教場はいつも水を打つたやうに靜かでございました學期の進むに從がひそれ相應の奬勵法を設けて時間中精一ぱいに勉強する習慣を養なひましたので、卒業頃には却々の進歩が現はれ　木戸侯爵酒井子爵の令孃な

ぞ御自分の振袖を見事にぬはれたのでございます。

▲はぎ蒲團の光榮

屑切や反物の耳をはいだのへ呉服包みのうこん切をはいで裏につけ、綿屑のつばなしたのを入れて脊負ぶとんを拵へさせ鑛毒地や海嘯被害地へ送りましたが、なか〳〵美しい防寒具でもあり、特にやんごとなき姫君方のお手工細だけに、窮民達の感喜も一しほであつたこと〻存じます。恐れ多い事ながら嘗て皇后陛下行啓の砌り、このはぎ蒲團も生徒の成績品の中につらねて天覽に供へ奉り、幹事が委細の趣を御耳にいれ奉りましたところ、陛下には御機嫌うるはしく、玉歩を御とゞめ遊ばされましたとの御事で、誠に忝けなく存じました。



まづ明けましてお芽出とう

▲割烹材料の廢物利用

私は割烹の方も受持つて居りましが、一番最初に鍋、俎、さいばし、など普通臺所道具の名から説明いたさなければなりません。いきなりお玉杓子なぞと申しましても一寸考へていらつしやる方もございますから。併しこれは本の少數の方々で、御地位から考へましてもさう〳〵御無理はないのでございますが頑固な私は、こんな方々に、下拵から後始末まですつかりおさせ申しました。最初

はお米とぎ、味噌すりなぞ随分おむづかしさうでしたが、追々お慣れで、宮家の姫君でも『先生お米とぎは面白うございます』と仰つて悦んで遊ばしたのです。庖刀使ひのお稽古にはヒヤ〳〵いたしましたが、私が手を出しては何んにもなりませんから辛抱して拜見して居ました。お膾につかふ大根の千六本なぞ却々揃ふ筈もございませんから、刻み上つたところで、太いのと細いのを撰り分けて太いのはとりのけて大阪漬にいたしました御刺身の作り損ひはぬたに拵らへ、魚類の骨や頭は鰹節のだしがらと一緒に、煮出してスープを取りこいた大根ッ葉のゆでたのを實にしておつゆを拵らへると云ふ風にいたしたので豫定よりもいつも二三種餘分なものが出来、それを學校の小使にやりますと、大悦びで頂きました。令孃方も始は吃驚しておいでゝしたが追々慣れて旨い廢物利用を工夫するやうになられました。



居蹝くむや今日改まる心して

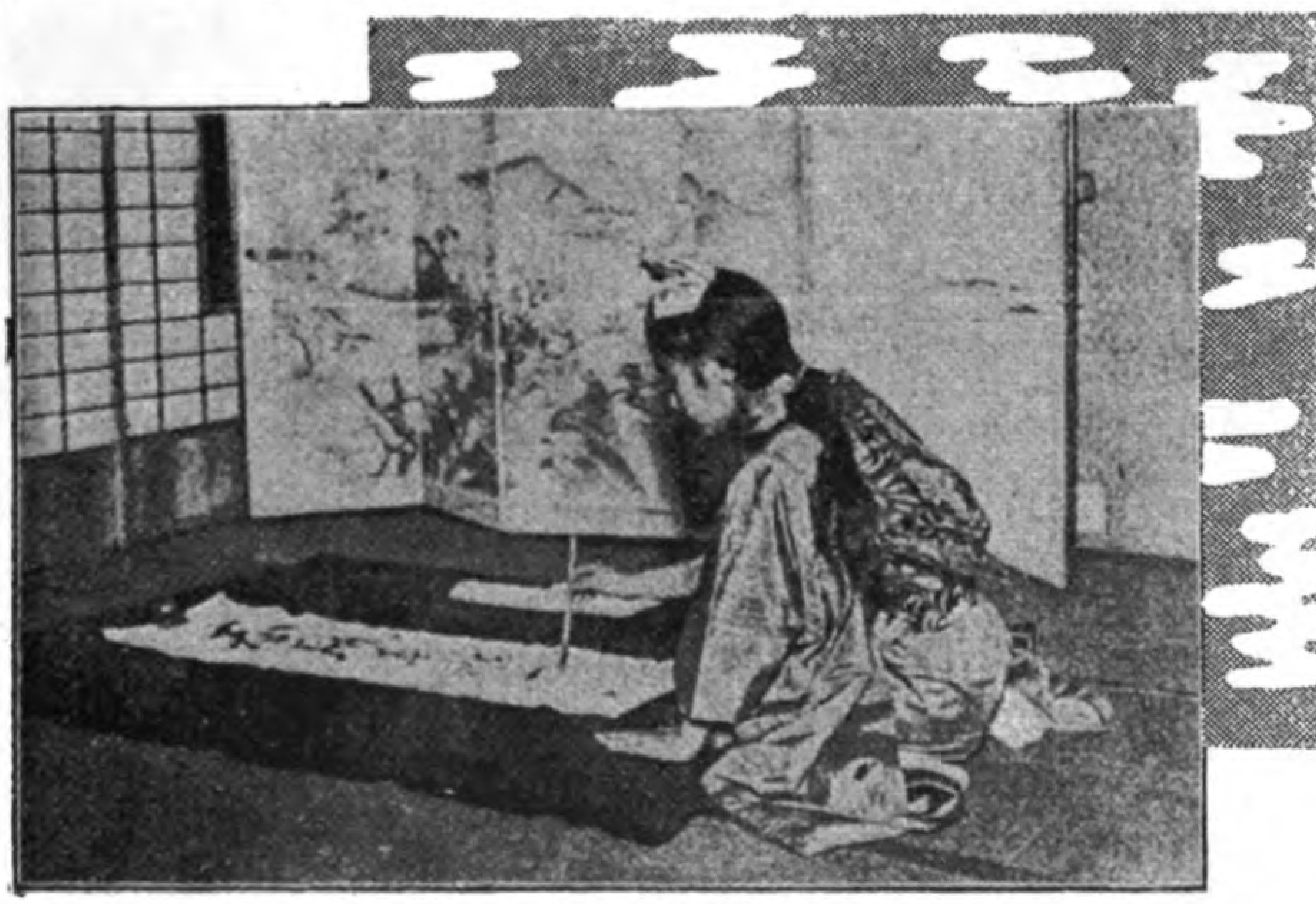
▲お米の直段まで

北白川宮の姫君、徳川、鍋島保科　竹屋の各姫君方もこの時代の在學生でいらつしやいましたが、何から何まで忠實々々しく遊ばしました。只今は割烹の後始末を學校の女中がいたすのださうですが、私の時代には鍋釜、桶、小鉢の磨き、ふきん洗らひ、流しのさゝらかけ、七輪の灰の始末まで、殘る

くまなく各自におさせ申しましたから、小使の手を借りることは少しもございませんでした。それから割烹・材料の値段は、私が一々分量表の下へ明細にかきあげ、おすもじなぞの折は米何升代、今日の相場で何程と云ふ風にかいたのでございます。

▲陰徳をおつつみなさい

私はいつも、「世の中に捨る物はございません。お肴のあらや野菜の屑も始末の仕方で下々の者に舌皷をうたせ、布屑、ぼろ綿も丹精すれば凍えに泣く者の寶となることは、私の實行でお分りになりませう。貴嬢方が親御様の賜物で慈善をなさるのは容易いでせうが、それより時を惜んで廢物を丹精し貴嬢方の勞力から産み出した慈善が本當に立派な價値があるのですからして、始終陰德をお積み遊ばせ」と申して居りました。こんな事も講釋だけでは役に立ちませんが、實行して見せると効驗があるやうに存じます。



月花は心の奥よ筆初（基也）

▲紙屑籠の整理

只今私共の塾へお預りいたして居る華族の令嬢方も矢張かう云ふ主義でお躾申してをります。私の塾では紙屑籠を直に屑屋の手に渡しません。溜った時必らず一度調らべまして、日本紙は皺を延ばして重ねて置き小さいのは紙撚に、大き

いのは敷紙や籠張りにつかひ、洋紙の屑は焚付にいたします。大掃除の芥も、芥屋の厄介にならずに、五右衛門風呂の下へ入れて焚いて了います。平常も落葉や芥を焚きますから風呂の焚物は餘り買ひません　糸屑は殘らずつないで機屋へまはし，御飯の洗ひ流しは糊に貯え，雞の餌にも使ひます。塾生はこんな事で却却世話しく暮しますけれども、自然お喋舌のくせも失せ、學科の復習にも充分身がいるのでございます。而して天物を大切にして聊かでも貯蓄したものは慈善寄附に用ゆることを奬勵して居りますのが餘程精神修養になるやうに存じます。

着衣初め



眼に見ゆるもの丶匂ふや着衣初　（蕗々）

▲塾生は泣いたり笑つたり

私は汚いことでも面倒なことでも先立になつて爲て見せます代りに、ビシ／＼と容赦なく小言を申しますから、塾生は泪をこぼすこともあるやうですが、わかい女子を仕こむのはどうしても嚴重の主義がよいと信じて居ります。併し遊ぶ時には又鬼ごつこでも、お茶坊主でも私が先立になり、羽目をはづして笑はせますから、皆割合に快活でございます。

▲私の父母

私の父は實に嚴格な人でしたが、母も却々の八釜しやで、少し變りものであつたと見えまして、私の生れた時、父に向つて『この女の兒には充分學問を仕込で頂きたい。その代り衣服は決して買つて頂きませんから』と頼みましたので、父も大層喜んで六歳頃から兄達と一緒に漢學の師匠へ通はせてくれました。毎朝燈火で朝飯をすませ、半里程の道を往ますのに、寒中は只今のやうにショールや手袋があるではなし、雪國（その頃父は越後の天領を勤めて居ましたから）の朝風に顔も手先も凍えて辛らかつたことを覺えて居ります。東のしらむ頃歸宅しますと、父はチャンと机を控へて私を待つて居り、習つたところを讀ませましたが、一字でもつかへれば用意の鞭で横顔をピシャリと打ちました。母はその側で聞いて居ましたから子供の私よりよく覺え、父の出勤後は針仕事の傍ら毎日復習してくれたのです。家事の手傳ひもこの頃から仕こまれ、兩親が私のふいた縁側をすかして見て、縞が出來て居ると直に拭きなほせと申しました。皺のある着物は自分で疊み直して着

生けぞめ



春立と言ふはかりにや三吉野の山も霞てけさはみゆらん（忠岑）

ると云ふ八釜しい父の袴を小さい手で疊むのが却々困難でございました。私の兩親はこんなに八釜しい代りに又大層寛大なところがありまして、命じたことさへ素直にいたして了へば、いくら跳ね廻つてもかまひません。私は性來お轉婆で、娘盛りに稽古着の儘で擊劍の道場へ通ふた位ですから、幼少の内も竹馬は兄を凌ぎ戰ごつこには餓鬼大將、喧嘩では男の兒を泣かせると云ふあばれ方をいたしましたが、兩親は餘り小言を申しません。一度兄の眞似して大きい溝をとび損ね、濡鼠になつて歸りました時なぞも、母は『ちとお轉婆が過ぎるネ』位で着物の汚れたのも叱りませんでした。かう云ふ風な敎育法も折衷しましたら、今日の女學生を仕こむに多少の參考にならうと存じます。

初音



いひ出る今朝を調の始にて　この一年もつみくらさはや　（千浪）

因に木村女史はこの頃女學校設立の計畫中でお出でヽすが、それは普通の高等女學校より卒業年限を一年早くし、月謝は一圓五十錢。寄宿生は自炊制度の由。尚女史は女史一流の敎育法で實際の役に立つ健全な女性を養ひ尤も裁縫に重きを置かれるのださうでございます。

かるた遊び

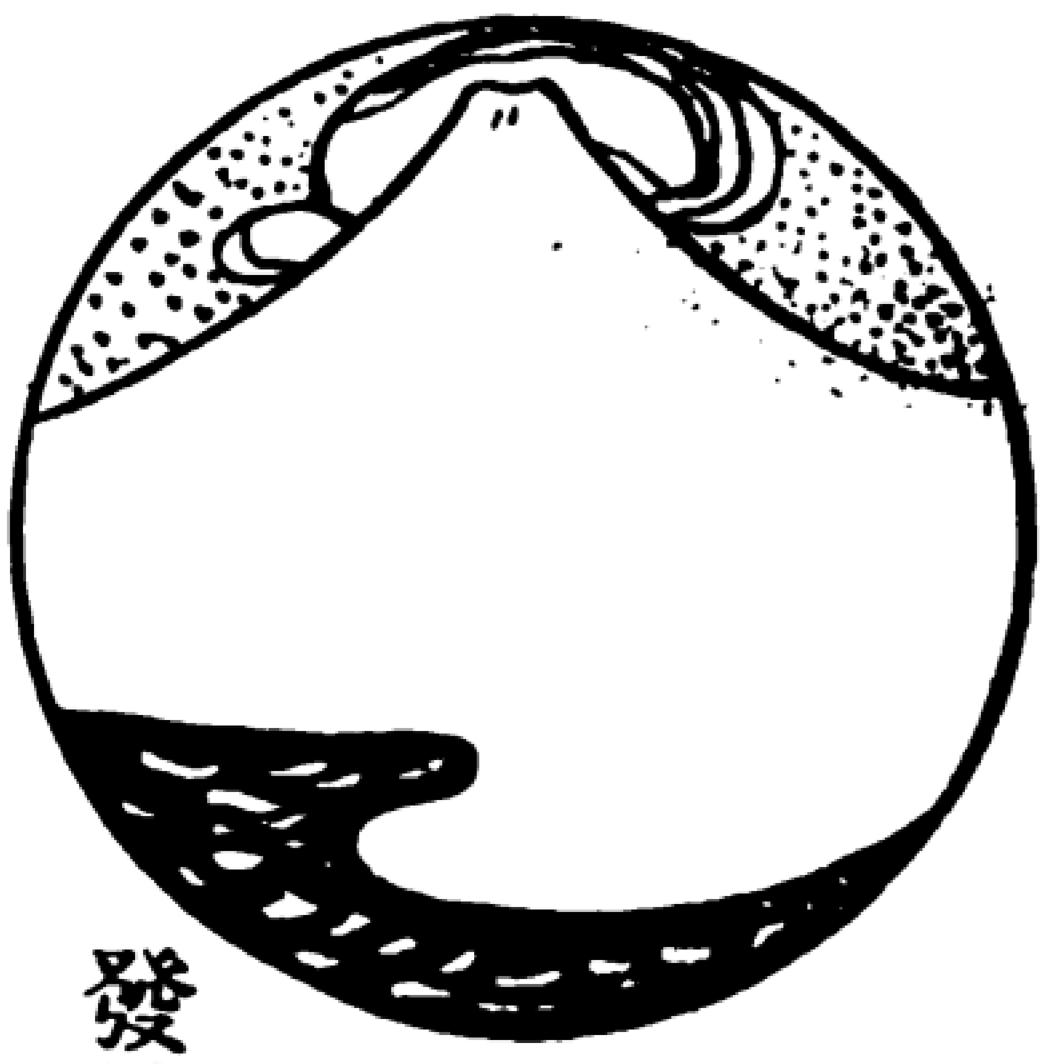


福引





双六



諸國名婦傳（一）

黒頭巾

發端、名花と名婦

其一

●日本橋を去ること西に六十里、遠州池田の宿は、謠曲の佳人、熊野の出生地、此のゆかしき女の魂の留まる處には 如何なる花や咲くらん。蓼太の句に、「先づゆかし熊野が摘みたる菫かと」實に、此のあたりの菫草には熊野の面影ぞ殘るなるべし。

●名婦の生れし郷の 一草一花にも、其の名殘こそ偲ばるれ。必ずしも名花ならずともゆかしき句あらん。笆梁の、熊野親子の墓に詣でゝ、「夕顔は朝顔の留守を咲きけるか」の句は、何人にも起るべき同情なるべし

●朝顔といへば、加賀の千代女も思出さるれ。「柿の初契り」に やさしき心を寄せし彼女の爲に、風情少なき柿の花まで趣味ある心地するも面白からずや。

●東海道にて、されど朝顔といへば、「露の乾ぬ間」こそなつかしかるべし。淨瑠璃に描きし朝顔は、熊澤蕃山の夫人に似通ひしところ有りや否やは知らねども、其の貞烈の表操こそは、朝な〳〵に咲きかはれども、色香久しき朝顔の花に比すべきものなるべし。

●尚ほ此のあたりにて聯想さるゝは、三河の鳳來寺山の百合花なるべし。鳳來寺山の名花、昔の人に知られず、今、輸出品となりて、日本の國香を海外に薫じつゝあり

●鳳來寺山は峻峰、夏尚ほ涼し 蚊 棲まず、家康の父母、此の山の藥師に祈りて蓋世の英雄兒を生みし靈驗の跡。晩臺の句に「草臥や百合に慰さむ鳳來寺」實に、此の花の特徴は、香氣非常に高く、之を庭中に植

うれば、室內までも香んばし。

其二

◉吾輩先日、兩國を發し、房總線に依つて大原に向ふ幕張に近くして、長作の夫婦梅といふ名花あり。長作は鐵道線路より、十丁許りも山の手にある村名也。此の梅、花開き實を結ぶに、必らず雙顆連結して離れず、故に夫婦梅と名づく。

◉幕張は、靑木昆陽先生、始めて薩摩芋を齎らし來り



舞ひ初めや落花の姿胡蝶の袖

て、江戶附近に試植せし舊蹟也。此の村に隣り、海岸に並びて檢見川あり。蘭學の大家海上隨鷗が北總に漂遊せしとき、此の村の女、お冬と相識り、夫婦となり、相携へて上方に往く。

◉隨鷗は、元と、稻村三伯と稱す、鳥取の藩士、蘭學を專攻せんが爲めに態と、浪人して、姓名を變じ身を隱くしたる際に、此の佳人を得たるなり。

◉お冬の父より、隨鷗に、お冬を送りし文、頗る興味あり。隨鷗の生涯は波瀾多し而して相提携して艱苦を共にしたるは、お冬なり。

◉隨鷗は、蘭學を關西に開發し、一時、斯學の覇權を握るの勢あり。彼、文化八年正月十八日を以て京都に病歿するの後、お冬は遺兒を携へて歸鄉し、稻毛に寡居し、專ら、其兒の敎養を

事とす。其の兒、成長の後、二代稻村三伯と稱した醫術を開業し、大に行はる。子孫今、東京の深川に在り。

◉九十九里の沿岸は、東京とは袷一枚ほどの溫度の差あり十一月の晩に、草花さまぐ〜に開き、八幡岬に、太平洋の怒濤を俯瞰しつゝ、薊などの色鮮やかに、咲きしなども人目を惹けり。中にも此の地方に標出すべきは、大原邊に、所謂ボン花にして、四季、斷えず咲き匂ひつゝあり。ぼん花とは即ち大和撫子なり。

◉此の地方の、風俗の淳樸にして、尚ほ昔ながらの美風を存するものも少からざる可しボン花の、荒き風勢濤勢を笑つて不斷に咲き匂へるは此の地方に祭れる橘妃神社の神威の大和撫子の乘りうつれるにもあらん。



歌の會（遊びよき月日のもとや宿の春）

◉吾輩、未だ房州を見ず、然れども、其の奇景に富めることを聞く。八房の梅の事は、馬琴の八犬傳に詳說す。八犬傳には、英雄に伴ふに、自から八個の佳人あり。八房の梅は、今、尚ほ健在なりや。

其三

◉吾輩は、此に、名花の一語を用ふ。然れども名花に二樣の意義あり。珍らしきが故に名花といはるゝものと、由來因緣のあるに依つて名花たるものと是也。

◉例へば、越中立山の里百合の如きは、いづれの株も

名花ならざるは無し。橘も櫻も珍らしとせず、然れども、右近の櫻、左近の橘といへば、無比の名花なり
◉古人の遺愛の花はすべて名花ならざるは無し。盆栽の花などは、百年の後を期しがたし。されど、砌の花草などは、冬に枯れて、春風に復た蘇し、年々、亡き人の面影に匂ひつゝあり。
◉秋色女の櫻は世に名高し。名は無けれど、昔の香に匂ふ草もあり。三四年前の春、吾輩、京都に往き、上賀茂に參拜し、轉じて、神護寺に、蓮月尼の舊廬を訪ひしとき、有の儘なる茅屋のまはりに、折柄咲き匂へる黄水仙花の、芳香殊に清き姿こそ、めでたきものに思ひし。蓮月尼の墓表は、自然石の右面、雨に打たれて粗に、模して齎らし歸りしかども、版木に移す可くもあらず。
◉押花といふ事、西洋の婦人は、好みつ爲す事なれど各國にては、古來、その習慣無かりしかば、可惜古名婦の遺愛の、花、菫なんど今に殘るもの極めて稀なるべし。



花といふ花の咲へき春くれば匂はぬ程も珍らしきかな（筑波子）

其四

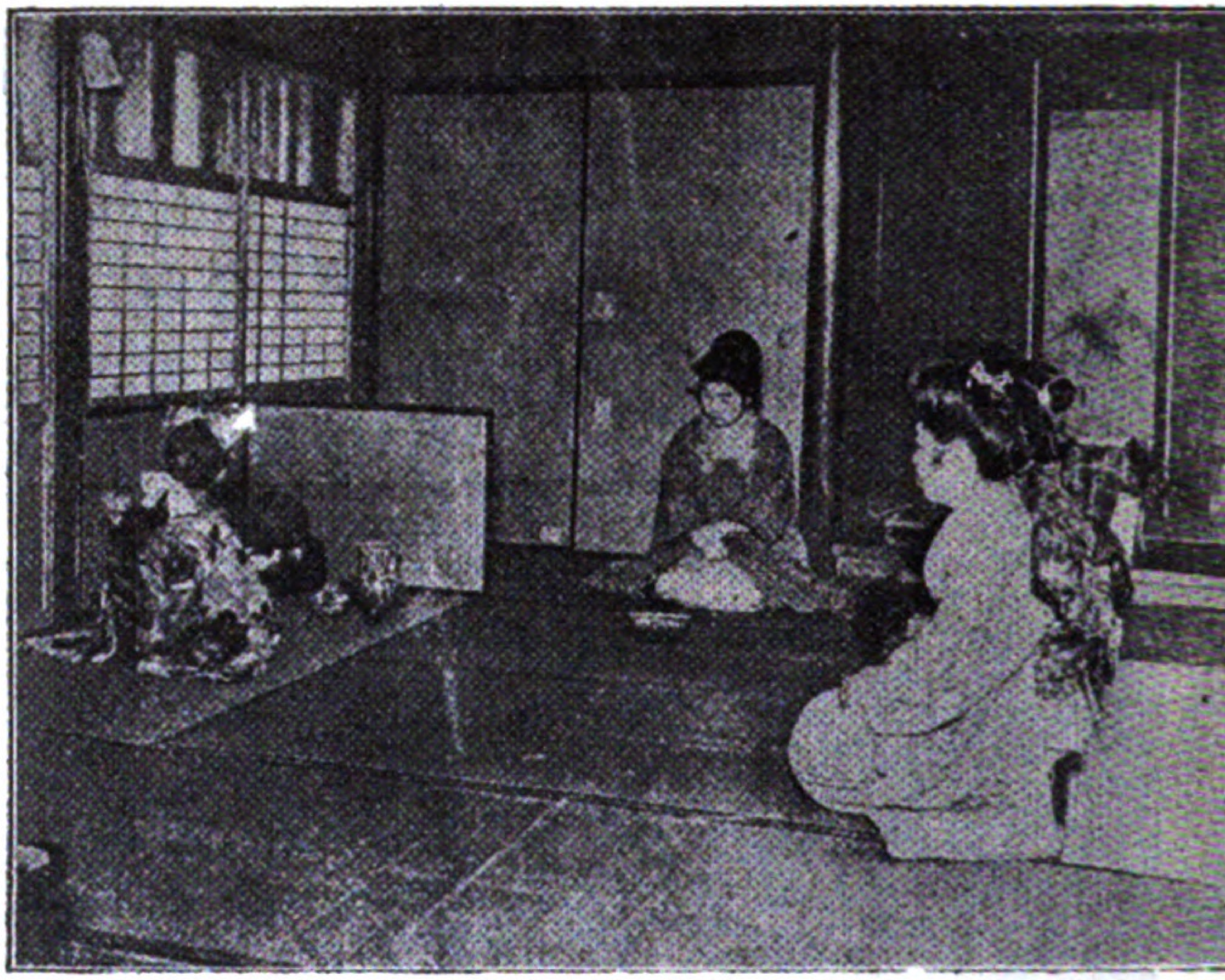
◉名花の語に、更に、新義あり。其の咲き出でし地點の名所なるに依つて、自から名花の感想を與ふるものと、其の色と香と、或る廣き地點を占領して、花に依つて、其の地を著はす場合の名花とあり。

◉吾輩、嘗て、富士山に登り、其の浩々たる天風の吹き透す高處に、虎杖草の榮ふるを見ては、木花咲耶姫命の威靈の表現を感嘆せずんばあらざりき。山中、濱梨、殊に石楠木の紅花愛すべし。是等の草花、高山到處にあり、勿論、富士山の特産といふには非ず、されど此の山に生ふれば、自から榮あり。今は、富士登山を試むる婦人、年々に多し。願はくば、此の花を齎らして歸り來れ。鐵路、此の山下を過ぎて、停車場に賣り來る濱梨羊羹を見る人、また須らく山中の花を思へ

◉宮城野の萩の花、宮城野、信夫を憶起せしめずんばあらざるべし。此の二人の名婦は、萩の花と共に、奥州の誇りなり。



（盆石蓬萊　尺寸の天地匂ふや福壽草）



初手前　（さればとて遊ぶ間もなし松の内）

◉「七重、八重、花は咲けども」の歌は殘りて、其の人の事は別に傳はらず。然れども、唯だ此の一首の歌其の人を想見するに餘あり。古より、唯だ、一篇の歌に依つて、此の如く、萬古に傳稱さるゝ名婦は多からじ。

◉山吹の花は、何處の、垣根にも、山の井にも咲く。道灌の墓上には、松の老木聳えて、墓下に、山吹の花の咲き溢れたのは、何人の、意ありて植ゑしかは知らねど、歌詠みし人の才華の匂ふ心地せらるべし。

◉京畿の平原に、菜花の咲き滿つるときは、櫻、紅葉にも勝さりて、天地の春光を占斷する心地す。菜花は、上方の光華ならずんばあらず。古京も、南都も、大阪も、此の花の匂ひに、籠めらるゝよ。

◉吾輩昨春、浪華に遊びて、客中、節句に逢ひ、家郷の兒女を想ふの情に堪へず。此の地方に、「菜花雛」あり。菜花の、小さきを以て、雛人形を造る、風情言ふ可らず。試みに、之を卓上に置きて、之に對して、桃花を捧ぐれば、未だ嘗て見ざりし「雛節句」の趣を得

たり。

●京に京雛あり。京の、家庭趣味を發揮す、然れども上方女性の、花に寄せたる趣味は 即ち「菜花雛」ならずんばあらず。

其五

●北海道の春は、辛夷花に始まる。文運の急激に開けし北邊に、將來、如何なる名媛の蔚出すべきや、南方の沖繩なる椰子の花かげには尙寧王女の、雄々しき、美しさが、猶ほ幻ろしのように殘るなるべし。

●山東京山は、女性文學の研究 熱心にして、地味なる女を描くに努めしが、諸國の名媛を、多く紹介せしは馬琴なりき。白縫姫と尙寧王女の貞烈を描き出さんと力めしも彼なりき。

●馬琴は、八犬傳に於て、關東の女を描き、美少年錄に、上方中國の女を、而して椿說弓張月に於て、伊豆七島と九州琉球の女を描きたり。

●馬琴の描ける、舞臺は小說にして、必ずしも、女性人國記の理想ありし事を想像するに足る可き材料は無けれども、彼の傑作には、必らず、其の半面に、地方の名媛を、小說的に描き出すをつねとす。

●椿の花散る伊豆の七島の女は、油と髮とに洗はれて近世 一の名媛ありし事を知らず、無き乎、或は埋沒せしなる乎、馬琴は、即ち、七百年前の此の島の、美人の、鎭西八郎に配して、不似合ならざりし名媛を標出し來れり。將來、椿の花の 春風に匂はん限り、此の島の女性は、馬琴に感謝せずんばあらず。

其六

●日本アルプスは、明治の新文壇が、標出し得たる奇景なり。日本アルプスの花は、今、日本の花に新光彩を添へつゝあり。"トガクシショーマの崇厳なる、三色スミレの可憐なる、すべて、此の日本アルプス一帶の高山植物は、從來 知られざりし花を發揮し、吾が國民の未だ味はひ得ざりし新趣味を鼓吹しつゝあり。

●吾輩、頃日、飛驒山川の一書を讀み、此の高山國の

荒寥たる天地の中に、意外に、人物事蹟の多きに驚嘆せずんばあらず。日本アルプス一帶の國、名花と名媛と併せて、世上に發揮すべきもの必らず多からん。

◉高山植物の中にても、戸隠ショーマの如きは、名山に育ちて、麗葩を發し、嘗て、東宮殿下信州行啓の時、台覧を辱くす。日本アルプスの名花の中にても最も早く、無上の光榮に浴せるものたり。

◉京都の桃山、大阪の高津の桃林の如きは、皆、史的観念の相伴ひて、更に、其の美を發揮するものあり。高津の桃花は、吾輩嘗て目に熟す。仁徳皇后の、天皇に侍して、竈の煙と、藻草燒く煙とを、慈しみ眺め給ひし跡に、輝きつゝ匂ふ桃花の豐麗なる、今は、年々に、人家の建ち塞がりて、藻草の煙は見えず人家の煙の、立ち騰りつつ花を環りて竈の賑はひまさり行くは、仁徳皇后の尊靈も、如何に喜ばせ玉ふらんと察し奉る也。



諸ともに千代も變らぬ例には



竹の根岸の松なこそひけ（千濱）



春の日は遊びあまりて立かへり立かへりては出る家鳩（弘　範）

◉桃山城址の桃花は、一段、豪華の史的聯想を以て美化せらる。三百年來の豪華、桃山を第一とし、豪宕瑰麗の筆、狩野山樂の畫に過ぐるは無し。山樂の畫に現はれたる女性は、元祿よりも、更に健剛の氣象あり。必ずしも或る二三の名婦といはず、あらゆる佳人の才色、絢爛として、一杯に輝きしを想像するに餘あり。蓋し、名蹟に名花を生じ、豪健の時代に、絢爛たる女性を產する也。

◉時代の柔嫩なるに生れ出づる女性は、弱き地方に育ちし草花の如く、概ね纖細なる色彩を帶びて名花とするに慊らぬもの多し。然れども、女性は剛健なる男兒を生み、やがて健全なる時代を作る、女性は時代の母也。

◉東北の都を蔽へる梨花の、冷やかに月に匂へる、中國のげんげん畑の、長閑かに南風を漂はせる、共に此の地方の女性を想見せしむるに足るべし。

◉地方に、往々、水仙花の園あり、東京附近にもあり然れども、吾輩の觀たる、白盡せる水仙花園は、肥前

の七ッ釜の半島ならずんばあらず。

◉七ッ釜は玄武洞を以て著はれ、玄海に面して捕鯨の舟、奔濤の間に游戈しつゝあり。豪快なる九州男兒の國たるを見るべし。而して其の半島の上、地を覆ひて皆水仙花なり。山艸も路草も、田の畦も、すべて水仙花也。雜草はすべて水仙に驅逐せらる。清香、野に滿ち、天地殆んど白盡す、吾輩の國にて水仙花は、頗る貴し、一輪二輪、白衣の花、尚ほ書齋を飾るに足る此の水他花國に至れば、馬背は、此の捨草を運び去る爲に疲る。

◉此の如き水仙花國は、其の傍に、神功皇后征韓御出發の地點なり。松浦佐用媛の石と化せし舊蹟も遠からず、近ごろ、此の郡に、唐津より奥村五百子出づ。晩近異彩ある一名婦也。彼女は若かりしとき美しかりきといへど、吾輩は唯だ其の晩年を識る。彼女の、勇猛にして、霜雪を恐れざるの慨あるは、即ち水仙花と相似たる也。

其七



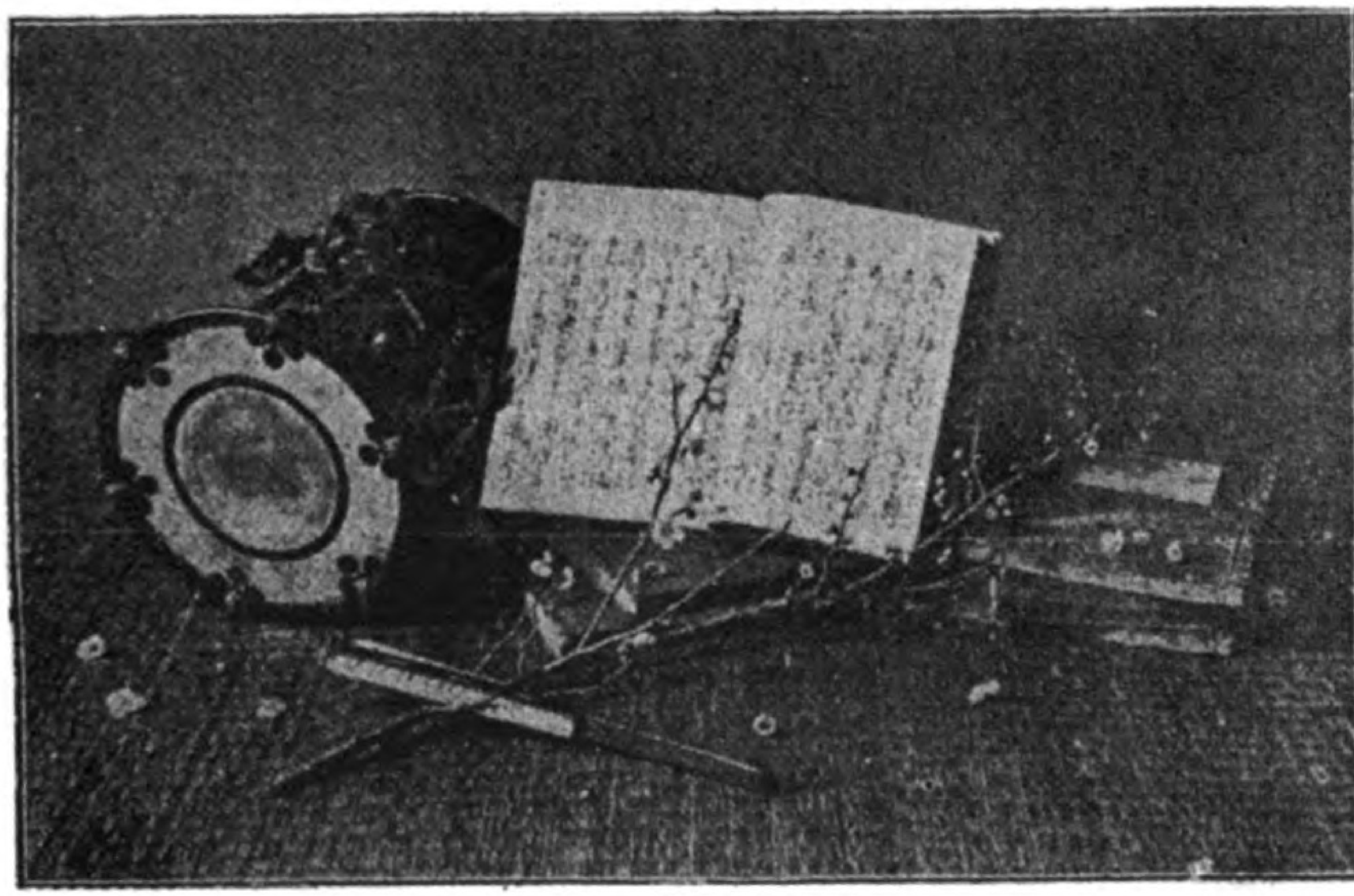
彈き初めや須磨の浦波松の風　（紅鶯）

◉一花の中にても、地方色を帯びて、特殊の精彩を發揮するものあり。地方に特有の名花あるのみに非ず名花の小にも地方色あるなり

◉菊花は、東京、名古屋、熊本の如き、各、特殊の姿態美を發揮す。然れども、それは人間培養の力に依ること多し然に放任するも、尚ほ、這般の特色を見るべきものあり。

◉櫻は、日本の名花、而して地方色の多きことも亦た殆んど百花に冠絶す。中にも、盛岡市の石割櫻の如きは、老幹三四間の巨岩を、眞中より劈んざきて、年々、朝日を帯びて國香を薫ず。櫻花の中にても、「大和魂」の歌を、具體的に表現せるものは、此の石割櫻なるべし。

御代の春



春やとき花やおそきと聞わかん鶯たにも鳴すもあるかな（言直）

◉維新前、長崎に彌西涯あり。近代畫壇の一大家也。櫻の畫に於て、前古匹敵無かるべし 此の人、藩主敬親公の命を帯びて、全國を周遊し、櫻花を描く、所謂「櫻修行」なり。吾儕は、彼を泉下に起して、櫻花と名婦との人國記を語るを得ざるを遺憾とす。

其八

◉吾儕は嘗て、女性より見たる人國記を作らん事を希ふ。人國記を説きて女性に及ぼさざるは、恰も裏無き袷を着るが如し。世の中に、裏なき袷の有ること無し、女性無き人國記は、不完全なるを免

かれず。

●古來、女子は、社會の表面に活動すること無く、隨つて其の地方色もまた男兒の、それの如く顯著ならず故に、女性人國記を著はして、諸國の地方粹に現はれたる女性を論究するは、未だ容易に期す可らず。

●諸國の名花を說くは、恰も名婦を說くが如し。名花必ずしも、未だ、地方の普通花を代表すとは言ふ可らず。然れども、名花は、國の誇りにして、名花を見れば、また以て、其の地方の花を想像するに足るもの無くんばあらず。

●名花は國華なり。宜しく是を保存すべし。而して、地方の名花と稱せらるゝものは、世上に著聞するもの割合に少し。旅行者が、案內記を讀み、或は、花前の高札を見て驚き、始めて之を世間に紹介するといふやうの事多し。想ふに、諸國の名婦といふも亦た、此の如き事情の下に隱れて、未だ世上に知られざる者少しとせざるべし。

●吾輩諸國に遊歷するに、鄕人の、國の誇りを說き聞かすもの、槪ね、古來の英雄人物、名勝古蹟、或は現在の會社工場に及び、而して名花と名婦とには及ばず。

●極端に之を言へば、地方にては其の名物蹟、或は藝妓等の繪葉書は發賣するものあり。是等は、觀光采俗の一材料とするに足る。然れども、未だ此ばかりを以て地方の女性の爲に、氣焰を吐くには足らず。

●名花は、啻に人目を樂ましむるのみに非ず、併せて之に伴ふ古來の物語を聯想せしめ、鄕土の歷史を人の心頭に憶起せしむ。名婦は此外に、風敎に關係す。名婦は、名花よりも貴し。

●近來、停車場の案內札等にも、名木、名花等を標示する事となれるは太だ好し。諸國の名花、此より益〻世上に、其の光彩を知らるゝに至らん。ひとり諸國名婦の、猶ほ未だ、大に世人に紹介さるゝの途無きは、豈、一遺憾事に非ずや。是れ吾輩の本傳を作る所以なり。

正月生れ

婦人と格言

一月
一日　四方拜
三日　元始祭
五日　新年宴會
三十日　孝明天皇祭



(一)

日	月	火	水	木	金	土
7. 14. 21. 28.	1. 8. 15. 22. 29.	2. 9. 16. 23. 30.	3. 10. 17. 24. 31.	4. 11. 18. 25.	5. 12. 19. 26	6. 13. 20. 27.



(二)



(三)

婀娜たる貞婦は天神の完全なる妙作なり、天使の眞正なる光榮なり、地上の珍奇なる靈怪なり、世界の單一なる佳品なり。

美人若し貧しくば之に一樣の注意を加へざるべからず、何となれば其美麗は他人を誘惑すべく、其貧困は己れを誘惑すべければなり。

婦人は造物中の最も美なるものなり最も後に造られ且つ最もよく造られたるものなり。

(一)島津公爵夫人伊楚子(明治二十一年一月)
(二)大隈伯爵若夫人光子(明治十七年一月)
(三)島津公爵令嬢薫子(明治二十九年一月)

狩野謙吾先生著

◉噫文明病!!!

神經衰弱自療法

第九版　價六十錢　郵税六錢

此二冊の書物は神經衰弱症治療の專門大家として有名なる狩野先生が各種の神經衰弱症例へば**腦**神經の**胃**神經の**生殖器**神經衰等の衰弱症衰弱症の治療法並に豫防法を通俗に而も詳細に講述せられたものです斯病には特に罹され易い敎育ある人士が是非共一讀する必要ある書物です

増補訂正 神經衰弱豫防法

第四版　價六十錢　郵税六錢

◉附錄……煩悶壓世豫防法

體力養成叢書

◉大澤醫學博士述

第一篇 **冷水浴と冷水摩擦**

第四版　價二十錢　郵税四錢

◉二木醫學博士述

第二篇 **腹式呼吸**

第八版　價廿五錢　郵税四錢

◉第三篇 海水浴 ◉第四篇 深呼吸 ◉第五篇 滋養物の攝取 ◉第六篇以下近刊

東京日本橋區檜物町八番地　文星堂
振替二〇三〇番、電本二六三八番

東京銀座大通新橋際　新橋堂
振替二〇〇番、電新一九九一番

◉東京かるた會競技用

▲萬朝報遊技部發兌

小倉百人一首 標準かるた

讀札定價四十錢　取札定價四十錢　郵税各八錢同一組十二錢

此かるたは近頃大流行の活字のひら假名かるたです、東京の學生社會では殆んど皆此かるたを使用して居ります取札の文字が總て假名で書いてありますから坊ちやんでも嬢さんでも又小僧さんでも女中さんでも假名さへ讀めればどなたでも面白く遊ぶ事が出來るのです、眞にお正月の家庭に無くてはならない品です

◉かるた界最新の發明

練習用 標準かるた

定價六十錢　郵税八錢

かるた競技の練習に此かるたを使用すれば普通のかるたで練習するよりも非常に其勞力を節減する事ができます

◉園野精造君著（君は東京かるた會逃年の優勝者也）

最新 かるた競技秘訣

價三十五錢　郵税四錢

著者の自序に曰く前略……著者多年の研究を實戰に應用し着々其効を奏したる秘術を披瀝し同好の士に薦む……以て本書の内容が何を知るべし

女(わの一)

▶發賣元　東京市京橋區銀座通新橋際　新橋堂　振替口座東京二〇〇番　電話新橋一九九一番◀

少女雜誌界で一番ご評判を受く

第七巻 第一號……一月一日發行
（菊判百廿八頁　口繪澤山）
（正價十錢郵税本誌限り一錢五厘）

少女世界

（口繪）
◎お人形（石版）……長沼智恵子筆
◎追羽子（石版）……井川洗厓筆
外に二色刷寫眞版四頁

●千代の紙鶴（少女お伽噺）……巖谷小波
●春代さん……沼田笠峰
●現代少女訓話……第三高女校長　小林盈
●お年玉……永代美知代

少女會館
學藝室、女學部と小學部とに分つ談話室
問題娯樂等何れも春の喜びに滿つ

●冒險小說 人形の奇遇……押川春浪
●少女の春
●ほゝゑみ……松井ゆり子
●眞紅の光……大竹雅子
●神戸にて（新體詩）……與謝野晶子
●市松リボン……巖谷小波
●鼠の誕生……武田櫻桃
●笑ひ餅……黒田湖山
●河江媛（日本神話）……木村小舟
●少女の勝利……あふひ
●手帳の中より……沼田笠峰

新年號大附錄
●●日本少女雙六　極彩色石版刷
岡野榮、太田三郎、河合英忠
山村耕花、木村光太郎　合作

東京日本橋本町　□博文館□　振替東京二四〇

女（ぬの二）

▲家事に就ての智識と良妻賢母の徑捷を最も親切に詳述せるは本講義也

▲苟も家庭改善に志し幸福なる生活を望まるゝ人は本會講義に據られよ

女子大學家政講義

入會隨時

東京市小石川高田目白臺

日本女子大學校內通信教育會

會員募集

科目と講師

- ○修養談……諸名士教育家
- ○修身講話……成瀨仁藏
- ○敎育……麻生正藏
- ○實驗心理學……文學博士 松本亦太郎
- ○兒童研究……高島平三郎
- ○法制大意……法學博士 奧田義人
- ○經濟大意……文學士 中隈敬三
- ○社會衞生……醫學博士 三宅秀
- ○家庭理科……近藤耕藏
- ○家事……井上秀
- ○作法……小笠原清務
- ○日本料理……笹木幸子
- ○西洋料理……手塚かね子
- ○裁縫手藝……櫻楓會 研究部
- ○生花……兒島晩翠
- ○家庭園藝……農學士 佐々木祐太郎
- ○自然研究……大橋ひろ子
- ○文藝……文學士 武島羽衣
- ○美文評釋……文學士 下村彰英

其他科外として家庭衞生顧問結婚問題女子と演劇等あり

(每月二回發行)

會費一ヶ月金五十錢半ヶ年貳圓八十錢壹ヶ年五圓四十錢二ヶ年拾圓

(二ヶ年修了)

會則附き內容見本申込次第進呈

發行所 東京小石川區久堅町一〇八 精美堂 電話番町(九三二一) 振替東京二八三八番

女(わの三)

博通社特賣品

安心の出來る買物は博通社に限る!!!

專賣特許 永田式 家庭用洗米器



本器は寒中米を磨くに少しも手を濡らさず而も混砂及小砂利、芥等を除き去り頗る綺麗に磨ぎ上げ得るは當社の實驗上斷じて保證する處である故に衞生を重んずる家庭に於ては是非共一基を備へ付くる必要あり

● 二升五合器 八拾五錢
● 三升五合器 壹圓
● 五升器 壹圓貳拾五錢

△外酒造用軍隊用各種あり
●取次希望者は申込あれ▲送料市内無料内地廿八錢

○○純銀製自由ピン○○



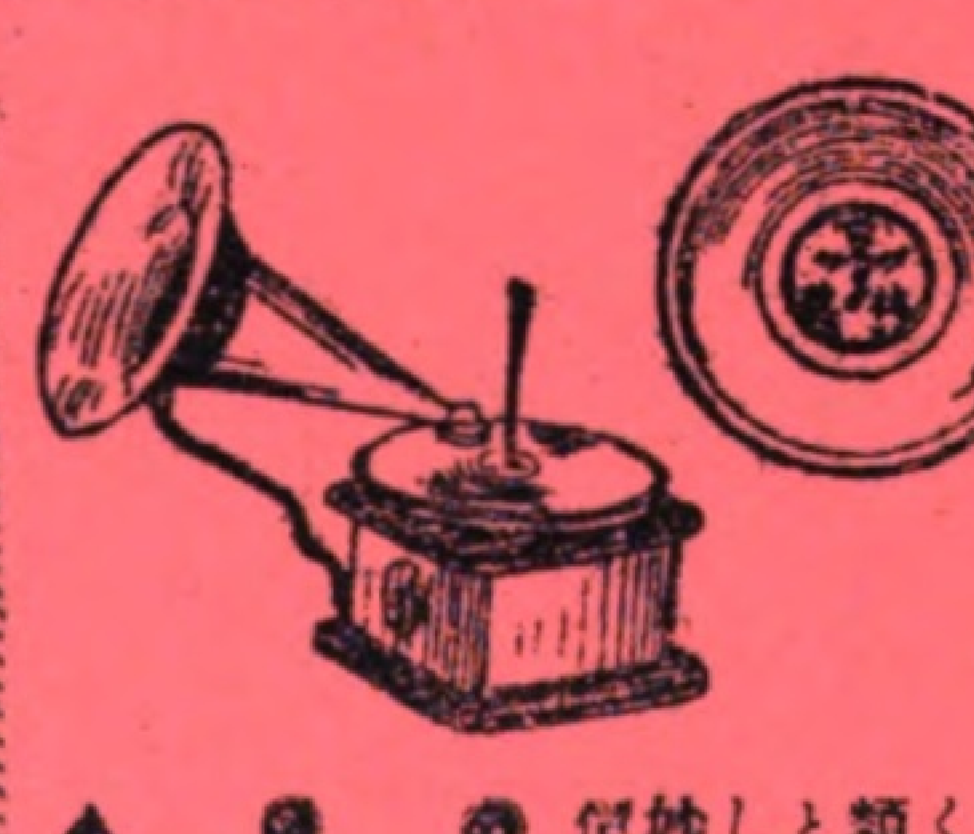
帝都に於ける大流行中なる束髮用純銀七寶入自由ピンで頗る高尚にして上品であり目下盛んに歡迎せられつゝあります、殊に本品は東京某大デパートメントストアーに於て貳圓五拾錢づゝで販賣しつゝある事を御承知願升

● 純銀製七寶入自由ピン美麗函入 特價壹圓九拾錢

● 種類廿余種ありますから御注文の節は年齡御申越されたし

▲送料内地八錢海外卅錢

教育用大聲蓄音器



正月の贈答用、娯樂用として斯くの如き好適品は決して他に比類なし、本器は高價なる蓄音器と、原理構造、發音に於て少しも變る事なく實に精巧且つ巧妙なり、教育參考品としての眞價は現品に就て見られよ。

● ラッパ付蓄音器壹臺 特價七拾五錢
● 平圓盤音譜壹枚 拾七錢
但音譜唱歌華廿余種あり

▲送料内地廿錢 海外四拾五錢

金屬製大黑天置物



本器は有名なる名工の手に成り技術の精巧にし、優秀なる普通出來合品に非ず當計が特に讀者の爲めに千個を限り調製したる逸品なり、新春の福運を望まるゝ方は品切とならない中に早く御求めなさるに限る目出度事限りなし

● 高サ三寸幅二寸五分銀色、特價八拾五錢

▲荷造送料内地金貳錢臺、樺清、朝四十錢

御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

女(ねの四)

大橋メールオーダービジネス

東京日本橋區本町一丁目

博通社

電話本局六百四十番
振替口座東京五十番

少女世界 第六巻第二號 増刊

希望の春

□ 壹月拾日發行 □

口繪

▽春の宵（三色版）井上雄太郎筆
▽乙女の望（凸版二色）山村耕花筆
▼寫眞版二色刷四頁 ▼卷頭二色刷卅二頁

春は希望の時です、少女の時代は美しい希望に滿たされてゐます、私たちは常に、新らしい希望に生きなければなりません。

少女の希望がいかに美しきか、將たまた少女はいかなる希望にあこがれて居るか。あゝ、聞きたいものはやさしい少女の胸のさゝやき！

本誌の増刊は、世の少女子に美しい希望を與へるものであります。而してまた少女の希望を大膽に發表したものであります。

希望に生きやうとする少女諸子は、この増刊によつて、多大の慰安を得られることゝ信じます。

記事には

▽巖谷小波氏の少女對話
▽沼田笠峰氏のおとめ草
▽嘉悦孝子女史の訓話……
▽新らしき少女小說……
▽華やかな少女時代……
▽學校たより……………
▽少女の文章……………



菊判百廿八頁
口繪石版豐富
正價十錢
郵稅壹錢

東京日本橋區本町
博文館
振替東京二四〇番

女（ぬの五）

冒險世界　第五卷第二號　臨時增刊

壯絕　**鐵血號**　快絕

青年を誘惑し之を腐敗せしむるものは、似而非現代思想也、文弱輕薄、唾棄せざらんと欲するも得べからず、吾徒が決然起つて玆に鐵血主義を叫ぶ所以のもの、實に國家百年の前途を慮るが故也。天下百萬の讀者諸君！乞ふ、吾徒が主張の結晶たる鐵血號の出づるを待て!!

大判百廿八頁
壯快口繪澤山
正價十五錢
郵税一錢五厘

東京　博文館　本町

一月十五日發行

女（四の六）

少年世界(第十八卷第二號)增刊……一月十日發行

進軍喇叭

表紙は尾竹竹坡氏の戰爭見物(頗る美麗)
口繪{(尾竹國觀氏の出陣の圖(石版二頁大)
(岡野榮氏の喇叭の圖(油繪原色版)
寫眞は悉く光澤紙にて彩色刷(最珍最奇)

西洋にも戰爭がある、支那にも戰爭がある、戰爭の話はいつ聞いても面白いものだ!處で少年世界も武裝して新年增刊には『進軍喇叭』と云ふのを出すことにした。先づその陣立を見てくれ給へ!

いつもの倍大
菊判紙數……二百五十八頁
口繪石版寫眞版澤山
正價(本號限り)廿錢
郵稅(本號限り)貳錢

記事はドレモコレモ勇ましくって面白いものばかり

- 爲朝の子(お伽脚本)……巖谷小波
- 少年軍使(勇壯物語)……竹貫佳水
- 楠の泣男(お伽講談)……細川風谷
- 日本十八大戰爭……△▲△▲
- 僕の十八歲の時……木村小舟
- 少年世界愛讀者名刺交換會開催……
- 新案珍懸賞問題……



東京日本橋區本町
博文館
振替東京二四〇番

女(めの七)





女優の日記

川上葉子

▲上の巻▼

三等列車からやつと放免されて痛かつた腰を伸ばして居ると、「さあ今三里歩るくんだよ」秋塚某と、藝名ばかりは一人前な南京金魚と名のある下役が怒鳴る、「まあもう三里？私死んで了ふわ」ドヤ〳〵改札口から溢れる。もみ上の口端まで有るのや、色の青白い女形や眉落した嫌な格好の若い男や、菊石の座長を先に砂利の上にズラリ立つ、女も二三人交つて同勢二十三人、さながら百鬼夜行の體たらく、これが私等一行の地方稼の俳優樣の一團體。

染々情無く一人はなれて茶金石の握りの付いた水色の洋傘ついて、チャンと木の下に立つて居ると、「ソレ役者だ」と向ふ鉢卷に青鼻汁たらした子守や頰かむりに豆ネジをかぢり乍らモグ〳〵さして居る兄や、乘合した土地の爺樣婆樣、ジロ〳〵見せ物の樣に、須田町を生蕃人が通る樣な騷ぎ、俳優の素顔を見樣とて村郎

野譲は死に物狂だ、俳優の素顔なるものはかれ等に取つては此の上も無い珍らしい貴い？物としてあるらしい。女形の素顔、「美くしいもんだな」「あれ好い男やしな」行く先々で此の語を耳にする私は妙な氣がした「あの女形の顔見なはつたか」「まだ見まへん」「あかんな私はもうちやんと見ました」「えろおますな」むくつけき男子が平氣で話すのを聞いた私はその度質に嫌で仕樣が無かつた。

黄金の波打つ稲田の中の停車場、鶏頭が石垣の前に血の樣な色で咲いて居る、寂しい秋の色彩は只此の一本の花で補つて居る、田の中の一筋道、乾いた土を二丁も歩るいて町の裏手に出るのだ、田舎町の停車場を振返ると「花枝さん足はどう」座長の次に話の分るのは此の人ばかり、近松だの馬琴だの、西鶴だのと話しだけでも他のガチヤパイ共とは變つて居る、柳澤蛙水と云ふ二枚目「迚も歩るけないわ町から車で行きます」五里の山路を景色に浮れて下駄がけで越したのだもの足の付根に實が入つてヘト／＼になる、「先生 私 車でお先へ行きますわ迚も／＼ついて歩るけませんから」菊石の座長メリヤスのもゝ引に深ゴムの靴、成美團の座長森住憲二とは誰が見樣、高く買つて淺草玉乗の世話焼か大工の頭、舞臺の上でこそ夫婦役ばかりする私でも、かう向つて見るとゾッとする程目が鋭い、澤山さうに埋めた金歯を有りたけさらけ出して「え足が痛え？そんなら車で行くと好い雇つてやらう、今金箱に病はれると困るからな」いさゝか言譯らしく、座長樣だから我慢をして居るもの、他の人なら直ぐ喧嘩だ。

デコボコ道の細い露路をズラリつながつて通りまで出ると、そら役者だと又山の神や職人、此の地は柳行李の名産地なので家毎に白い柳で行李を編んで居る。其の手を止めて「チヨイト役者や役者や」ドヤ／＼と道の両側は人の垣、其の中を行く皆は平氣なもの、私は顔から火が出さうで洋傘で顔隠す樣にサッサと行きたくても足が痛くて歩るけない、文庫を負ぶつた家鴨の腰つきでやつと車屋が見付かつた「オイ○○まで一輛」先生のお聲がゝり赤ん坊を内肌に入れてゆで栗食



べて居た女が傘の下からグイと私しの顔覗く、時計を見ると午前十時「皆樣お先へ」ホッと息ついてゆられゆられて京極氏壹萬五千石の城下、私等の職業とは緣の深い大石内藏之助良雄の室睦子、芝居でする力彌の母お石の方の生地、屋敷もあると聞くものを……左は湯島街道右にとつて〇〇通デコボコを通り越すと掃いた樣な美くしい道、右と左は稻の波小川を隔てゝ赤襷の賤の女の稻刈姿や運ぶ人の多忙さうな有樣、畔に草刈る人の心もなく尾花水引など籠につめる樣も秋の趣の一つか、職業とは云ひ乍らかうして過す私は勿體ない樣な氣がしてならなかつた。

地理で習つた三開山の城址を後に仙石讃岐守の城下三萬石、糊米大名と云はゝ云へ彼の兇賊石川五右衛門を捕つた豪傑は實に此所の城主仙石權兵衛秀久ではないか、町の入口に續いた一里ばかりの松畷の絶景古松の間からホノ見ゆる但馬富士の妙姿、紫に霞んで日は斜にスーイと蜻蛉が飛ぶ、あゝ丹青の技が有つたならと私はおもつた……。

正午十五分前に町の入口何屋とか云ふ茶屋まで來た振り返ると三里の間は夢の樣、洗ひ去られた私しの心も又明日からは俗事に追はれて……あゝ嫌だ〳〵車を乘り捨てゝ柳町の〇田屋旅館大橋の袂にある水淸きそれ、川に向つた一室に通された黃ばみ初めた榎の枝で目を突く程欄干に身を乘り出して淺瀨を泳ぐ白鳥に四季袋からカステラの欠投げて居ると、やつと一座が足引づり〳〵ドヤ〳〵來る出迎へに出た私に「お早う」例の二枚目の蛙水さん「先生は」「あとでやつてるの」と左の手を口に持つて行く、「まあ一人で」「えゝ」酒呑みはだから嫌ひ。女は女同士、囃方のおかみさんと、入座から二月目の吉野と云ふ私しの弟子分の女優の卵と先生の妻君と、四人六疊の間に詰められて命令の下るのを待つて居ると食事が出る。私の好きな燒松蕈の香り鮎の白燒「田舍でも氣がきいてるのね」と奧さん(向つては奧樣と云ふ事に吉野さんと相談する)好きなわさび漬は聲が惜しいので見ただけにして置く「あの恨めしさうな顏」ッと囃方のおかみさんが笑ふ。

隣りでも下でも唄ふ、怒鳴る、わめく、欄干から乘り出して奥さんが、「皆ちと靜かにしや騷々しい」鶴の一聲パタリと止まつた又初まる、蚊の鳴く樣な聲で吉野さんが「メ、アが敵を……」なんて白石噺の信夫の科白を讀みはじめる、聲自慢の伊藤五郎と云ふ敵役が……碓氷峠の權現樣よ……」と怒鳴り出す、風邪ひいた豚の樣な聲で、「成るも成らぬも貴郎一人の胸三寸……」雲右衛門張でなにやら節を恥かしげもなく讀む人女中を呼ぶ、手をたゝく、果てはモシモシ龜よ龜さんよーなんて大の男が嗄辛聲で押へつけるやら騷々しいので、橋の上に黒山の樣な人集り、よく室内が見えるので……「あら嫌だ、奥樣もう一度怒鳴つて下さいましな」未來の團十郎や菊五郎、高田や河合好みの皆がお浮れの最中「コラッ」と奥さんの聲「ワッー」「あゝ驚いた……」「驚いたも無いもんだ騷々しい名優や千兩役者はそんな不行儀なものぢやないよ、人格の高い者が名優だ、ちと靜かにするが好い、二階の女は蟲が出る」上で聞いてる私等三人笑ひ轉げて居ると先生のお着、何處でお乘りなすつたか半丁程の所を車で横付け、三文役者の座長でも職業となつて見ればえらいもの、女中がペコ／＼頭下げる、「どうぞこちらへ」天鵞羅にせよ、帶に卷きつけた金色鎖の手前祝儀は乾度五十錢？だらうと吉野と笑ふ。

足の痛いのをさすつて居ると「さあ町廻りだよ」と印度のダルマと名のある千代萩の鼠や、忠臣藏の猪、になる男が上がつて來る「まあ今日直ぐ……さ花枝さん着かへて仕度するのよ」と奥樣が手傳つてお召の袷に金糸澤山のつゞれ織の帶、裾模樣は嫌だと云ふのに目に立たないからつて大模樣の濃納戸、髮は亂れたまゝのローマをチヨイとなでつけて下さる、拔襟が嫌なのでわざと素人臭く耳の下までかぶつて立つと「まああんな着物の着樣して……」吉野の帶結んで居られた奥樣嫌な顏しられる、平氣で吉野さんと手を取つて下りると宿の女中が四五人かけて來て前後からチロ／＼見る、田舍だわねえと小聲で話乍ら車はどれとまごまごとして居ると、「やあ女役者だ」二人を又ドヤ／＼と圍

んで、種々の批評やら惡口やら・・・町内の車を殘らず集めて十九輛、半紙を二枚ついで藝名を黒々と書いた旗が車に立てられて座長の次が例の蛙水、三番目が私、四番五番と順々に連ねて小太鼓を前にガラ／＼とゴム輪でなりと有る事が、金輪の太い車で押し出す、私はこれが身を切られるより嫌なのだ、顔見せと云つて一町行つては座長が演説口調で廣告する。その間他の者は馬鹿面して大道に晒らされて居る間のわるさ海山千年づゝの甲經た印度のダルマでさい「一番嫌だ」と云つて居る「女役者」つて私の前に顔突出すんだもの、こんな情ない心によく成つたと自分乍ら染々感心して了ふ、洋傘もさゝないで晒らされて宿に歸ると直ぐ筋書を貰つて讀み初める、一昨日まで○○山と云ふ田舍で興行て大入を占めた悲劇濱娘、切りが二十四孝の燒香から狐火まで、主人公のお露は私の役、呑み込んで居るのでザッと目を通して二タ役勝頼の科白を繰り返して見る大丈夫らしい、濱娘の筋書、鮑買に來る漁師の娘お露を若旦那が見染て妻としたが、繼母がねたんで鮑の醫師と腹合せ顔の頽れる毒藥呑まして離縁すると云ふだけ、濱の別れが山なのだ、ゴーンと釣鐘、砂の上に色の白い若旦那が泣いて居ると舟の中には眉の所々拔けた汚い顔の露子が正體なく泣き倒れる追分の

舟に乘るなら身を大切に—よ—
舟—は—浮きもの—流れもの—

を聞かして「露さん—」「あゝ死んでも貴夫の妻ですは」月が出てタイ／＼と艪の音、木なしの幕、月並の嫌味たつぷりでは有るが、脚色は座長の手際○○山では五日間の大入、客止の景氣だつた、毎夜／＼話題を差かへても客止めなどはめつたにない位な山家でも、此の大當り都に懸ける不如歸もかくや——より以上の成功ではあるまいか、若旦那の座長、露子の私、大根役者の私しがするのでも露子と云ふ女性に同情してお孃樣方の白粉が大分はげた・・・けれど若しや可笑涙ではなかつたかと。

＊　＊　＊　＊　＊

旅館から手を出せば届く程の所にある劇場○○町民



の唯一の娯樂場、永樂館と申すので……手打の終んだ時の見た樂屋の有樣、聞いてびつくり見てびつくり花道の後からバタ〳〵樂屋に行く道の砂が足の裏にザラザラ氣持の惡い事幅の廣い梯子をギシ〳〵上がると直ぐ左側が座長の化粧部屋、次が私と以下順々だが、疊一枚分の部屋、室内は荒壁の横にグワンと割つたばかりの割木が一尺程打ちつけられて、これに半分缺けた鏡が立かけて煙草盆の古いのが二つ打ちつけて白粉皿置く臺、壁に五寸釘をヤケに打つたのが三本、これが刷毛かけ、下つちや恐いね」と誰やらが笑ふ、全く泣きたく成つて了ふ、是ればかりは持つて來た〇〇白粉皿に溶いて置く、鼻の先がぶつつかる位しなければ見えない樣な水銀のはげた鏡「鏡は上等のが用意して有ります」と云つて與れたから持つて來なかつたのだのに、どの部屋もどの部屋も皆かうだ、そつと先生の部屋を覗いて見ると矢張り割木の鏡臺に手鏡立てゝ眉引いて居られる、泣寢入りに持つて來た蒲團敷いて顏にかゝる。序幕から終りまで私が出るんだから多忙しい、

ふと眉潰しかけ乍ら壁を見ると、爪の跡や鉛筆で種々な落書がして有る「太物屋の美人」だの「給料を皆飲んで了つて奴にしかられた」だの型にはまつた樣な不平を並べた下に「天下の浪人だの」「未來の名優」だの勝手な熱を吹いて白粉や紅や眉墨が指の先でコスリ付けて有る、其の汚い事、おまけに窓が一つも無いので晝間の化粧は後ろあかり、ほんとに〳〵こんな辛い目は初めてだわ、「先生出來ました？」隣りに聲かける「あ、出來た」「すみませんが左の眉引いて下さいませんか」「ヨシ」秋の夜寒に薄いメリヤスのシャツ一枚で顏こさへて居た先生はドシドシやつて來て太い指先でグイと眉引いて與れる、道具建の騷々しい音バターリ何だか倒れた樣な「そらカンテラの火がヤーッ大變ランプ倒した」舞臺裏は一面にパッと燃え上がる「何だ何だ」樂屋からズラリ並んで面白さうに見て居る人、襖を倒してやつと消えた、水引の間から、覗いて見ると半分以上見物で埋まつて、下りて舞臺に行くと薄暗い二分心のランプの下にショボリ坐つて居る床山「さかけ

て下さい」見ると舊式の髷の格好なんて成つて居ない銀杏返、眞白の羽二重に植たのだから際立つて化粧に苦心したつて何の甲斐もないんだもの、おまけに地が二番の銅だから重くつてフラ〱する、肌襦袢一枚に成つて衣裳部屋に飛んで行く、まるで廿日ねずみだ、私し自慢するぢやないが藝なんか帝劇の皆様にだつておさ〱劣りはしない積りだけれど、同じ女優でも餘りへだてが有り過ぎるわ、乳姉妹の君江もする、房江もする、俠艶錄の力枝もして賞められた、二十四孝の濡衣だつてうけこなした、金閣寺の雪姫もした、千兩役者とくらべればそれはおくらべなさる方が御無理と云ふもの、吉田屋の夕霧や不如歸の浪子の時には新聞の三面では芝翫や河合も及ばないとほめられた事もある、阿古屋の三曲では隱れたる名優だと書かれたけれど、惜しい事には年が若いのでヒレが無いと結んで有つた。

小道具部屋の入口に立つて見渡すと眞赤に煤けたランプがボンヤリ光つてよく有る怪談の？部屋の樣な氣がする、地に紺紙を貼つて無細工に大きな梅の花を金紙で切り貼りの煙草盆ばかりが目につく、一寸見ては掃溜の中の樣な隅つこに居眠り乍ら頭のツル〱禿た爺さんがチヨコンと番して居る、板切れに赤紙貼つた鯛が壁の間に突きさゝれてある〇〇町第一の劇場の小道具にして是れ、大道具も十年程前、此の劇場を新築した時に出來たガタ〱ものばかりそれも大形紙が破れて骨が出で居るのや下手なお多福の怒つた樣な笑顔や是ればかりはと思はれる金襖の繪は刷毛書の黒繪の松、今夜二十四孝の御殿に立てる襖は即ちそれ、一興行毎に何千圓かけた長谷川式の大道具を見た私は泣きたい樣な氣になる、衣裳も鬘もその通り何百人の人が着たのや知れもしない不潔な衣類白粉で汚れた襟が首筋にヒヤリ氣味が惡い、惡臭は鼻をついてプンと來る嗚呼すまじきものは俳優なりけり、暗い所に立つて見て居るとチヨンと木の音、私は驚いて下手の笹や枯れた立木の間に隱れて立つた。

▲下の卷▼

田舍縞のゴツ〳〵したのに黒繻子の襟かけた着付にん染の赤澤山の帯裾巻いて手拭深く下手から飽の籠抱へて「奥樣、あわび買つて下せえまし」と出る「まあ好い女、男の樣ぢやあ無いワ」と聞こえるのも可笑しい、花道の付際に坐つて横目で見ると押すな押すなの一パイの入り、木戸口で聲を枯らして斷はつて居る留どんの後姿がチラ〳〵見える、田舍町と云つても汽車の便が好いので大分ハイカラが見える、狹まい枡の中に三人四人詰められて幕の開ない中から大風呂敷廣げて握御飯を手摑に口に押込むお孃樣、黒い顏に白粉塗つて上品らしくハンカチで口を隱して柿を丸ごとかじり付く奥樣、芝居を見に來るより物を食べに來るのだ。それを舞臺からチラ〳〵見る可笑さ花道に兩手をかけてグー〳〵居眠りして居る老人その不規律なダラシの無さ加減、それでも棧敷に居る人は幾らか落付て御髯の手前とか何とかすまし込んで居るのも不思議、「奉公して見る氣は無いの」と若旦那の聲に私はあはて、「ハ、そりやあ…」とうなだれて木の頭、町内の大きな商店の廣告が一面に染め出された大幕が引かれると、ザーッと潮の樣に立つて幕の下を持ち上げて爺も婆も娘もその下から覗くそれを又叱る人も無いんだから、まさか片はづしの奥女中が襖もかつぎ出しもしないけれどクルリ裾卷いて黒い毛むくぢやの足を緋縮緬の裾除の間から出す位は平氣だ、姫御前のあられもないそのまゝ靜御前が足角力をとつて居る陰氣屋も時によれば拜ませられる、砂のザラ〳〵した舞臺裏を通つて樂屋に入るとベタリ入口に寢てモグ〳〵蒸芋を食べて居る男、「まあ人の部屋に寢そべつて誰です」見ると土蜘蛛の吉川だ「のいて頂戴よ今一人來るんだから」此の人は下廻りの下なんだから十八人の俳優に五つの部屋しかないので二幕目から座長の室に蛙水さんが同居、私と吉野と合宿それでもまだ四つ足らぬと云ふ悲慘なもの行く所の無い吉川は私しの部屋に轉げ込んだのだ、いづれに變りは無いけれど俳優の修業中程情ないのもは無い小使錢に困り着卷に困り乍らも氣樂なのを目當に付いて歩るいては居るんだらうけれど未だ若い



二十一と云ふに中學の二年まで修業し乍ら「オオ吉川餅菓子を五錢買つて來い」「ハ」つて座長の仰言り付けに飛び出したり同年輩の女優の化粧の水汲んだり可愛さうになる其の度五錢なり十錢なり氣は付けて居るけれど…「花枝さん水刷毛一つ借して下さい」隣の室だ、私の姉娘になる金井と云ふ女形、俳優には持つて來いの顏形、聲も女の樣に鋭い…けれど背中は一面の大蛇の入墨を見ると身ぶるひが出る、それで平氣の平座で丸髷の鬘かけたまゝ全裸體で湯殿から衣裳部屋に入るのを見る私はムシヅが走る程嫌だ入墨を見ると一日御飯が咽喉越さぬ、鉛のキツイ○○白粉をゴテゴテ塗り付けられるので大切な刷毛も一度で臺なしだけれど、ケチン坊だのシミツタレだの惡口屋さんだからハイ〳〵と貸して了ふ。

釘に引つ掛けた私の常着の袂、フト氣がついて手を入れて見ると昨日渡して貰つた給料の財布が無い、さあ右と左と代る〳〵座蒲團の下まで探しても無い僅かな金では有るけれど座長にそつと話して置く「はねてから探してやる」と仰言る、化粧直すだけなので譯は無い財布が氣になるけれど其の儘にして置く電氣のある樣な土地では無いので石油の五合も入る五つの空氣洋燈に火が入る、それも道具方が火をつけて歩るくのだ、プス〳〵火が中に入いつて黑煙りワーツ火が入つた〳〵と見物席は大變な騷ぎ、舞臺に出演して居樣がお搆ひなしバタ〳〵走つて來て火を消す、あゝ情ないと思はず溜息が出る、三幕四幕と終んで泣かして泣かして舟の場もすんで上から幕が下りる、阪東花枝孃江と○○町で貰つた水色繻子の引幕を手入れして上から下す樣に直したのだ、金糸で定紋の重ね扇「まあ好い幕」と誰やらの聲も聞こえる二番目は八重垣姫だ一幕二場座長の八重垣姫に私の初役勝賴、吉野の濡衣、妙な取り合せとは思つたが、「客を呼ぶ一つの手段と聞いて見れば無理も云はれず、面白半分に引き受けて稽古して了つた、女優に成つて初めての男役、むづかしいと云ふ長袴をつけ、花道の引込みを後からそつとかけて來た蛙水さんが、足で裾押へたので前にのめつた

拍子に鼻を打つて血が出る、蛙水さん青くなつてふるへて居たそれは稽古の時の出來ごと。

繪姿に向つて口說の所を襖の影で聞き乍ら五分程のスキ間から見物席を見る、枠に兩手をかけてグー〳〵高いびきの娘さん、その上に重なつて御神さんがよだれを流し乍ら、ムニヤ〳〵をやつて居る、早く出たいとムヅ〳〵するが仕方が無い、サと相圖の木がなる、襖が左右に開いて刀をついた簑作、トキ色の着付に納戸に櫻模樣の𧘕𧘔……われ民間に育ち云々……から花作りとなつて入り込みしを……艶の無い座長の八重垣姫意氣が合はないので演りにくい、それに奥さんのチヨポちやあ……暗の夜に踏み付けた蛙の聲もかくやとばかりギユー〳〵云つてるんだもの「やあチヨポチヨポ上手だつせ」と怒鳴る人が有る「諏訪ホッシユーの、いゝ、おんかびと」と座長のなまりが氣に成つてならぬ「諏訪ホッシユーの御かびと盗み出せえと有るからは矢張あなたは勝頼樣」一句毎に大根と怒鳴るので座長ブルブル汗、小聲で畜性だの土百性だの、何だ蛙切り、と罵言をあびせるので聞える私は可笑しくつて吹き出したいのを辛棒して居る辛さ、お客こそ好い面の皮、聞こえなければ好いかと思つてハラ〳〵して居るのに前の人は吹き出された。

ギー舞臺が廻つて黒幕「もう嫌だ女形なんぞ仕ねえや、花枝君にゆづるよ」先生のお言葉に仕方なくあはてゝ顔直す側から着付持つて待つて居る、チリ毛の付いた大きな唐輪の鬘かけて立つと白綸子の銀糸で寶珠のぬひとりに赤を重ねて黒地に秋草模樣の帶、私は身體が小さいので帶の爲めに後ろに倒れさう、チヨンと幕の下た音パタ〳〵走つて飾つた兜の前にかしこまる池に姿を寫して驚ろく事型の如く「うまいぞ前のと代つた樣ぢやあないか」と大向から……諏訪明神に乘り移られてから躍りたくても重い裾が細い足にからんでフラ〳〵ハッとする度に白毛が地について……でも大根の聲は一度も聞かなかつた、雨の樣な拍手の音を幕の内に聞いて衣裳脫いで部屋にベタリと腹這になつた時の氣持の好さ、役の無かつた人は皆歸つて了つてガ

ランとした樂屋に殘つて居るのは五六の人に囃具方、後ろから抱起されて綿の樣な身體を湯殿に行くと桶はたつた一つその不潔さ加減、五右衛門風呂とか云ふ十九世紀式であはてるゝ膝栗毛の二代目をやりさうなのだ白くドロッと濁つたの見ると入る氣にもならず歸つてから入る事にして白粉のまゝ眉だけザッと落してガクリとなつた鬘下地のまゝ部屋に歸つて皿だの白粉の瓶始末して居ると黄色い聲でお師匠さんと吉野が呼ぶ「あれ程言い付てあるのにお師匠さんなんて呼ぶんだないよ」小言云い云い「ハーイ」來て見ると皆の泥まみれの千代田草履や駒下駄を兩手に抱へてトヤ口に立つて居る、まだ出切らないので立つたまゝ土間を見ると手拭ひかむりの御茶子が皿の樣な目で我一にとお客の落して行つた物や忘れて行つた物は無いかと探がして多忙しく懷中に拾ひ込む鼻紙御座れ、柿の皮御座れクルクル廻つて座蒲團を片付乍ら腰の痛いのも忘れて夢中だ、その淺ましさ、嫌な商賣ね」「全くで御座いますよ」ギギーと開戸の閉まる音「あら一寸待つて頂戴な出るのよ」吉野さんと二人手をつないで外に出る、ああこれが若い女優の一日か初日の狂言にあんなソヽリの樣な事して明日から人氣はどうか知ら、無事に終つたとは云ふものゝ心配でならなかつた、先生は後に殘つて座主や世話方と何やら御相談、夜寒がゾッと身に染みる藪疊の薄暗横を拔けて宿の裏口からスイと入るゴロ〳〵眠つて居るのや情ない聲で……寒からぬ程に見て儲け蜂の雪……雲右衛門好みでわめく人の中を拔けて湯殿に吉野と二人入る「ね先生明日は金色夜叉と鏡山の二幕ですつて」と吉野が云ふ、「また起きぬけから稽古ねえ」嗚呼多忙しい身の上二十一の秋も後一月で消えて了ふのに……好きで身を投じたのだから不平をいへば勿體ない田舍廻にせよ藝も無いのに此の人氣逆境に泣いた昔は藥だつた扨ていまは……枕に通ふ流れの音、行先を考へる樣なひまは無いあはれ吉野さん可愛寢息して……うつゝの境を夜もすがら狐が啼く

（完）







百人一首下馬評

司馬僧正

◎百人一首は、定家卿が小倉山莊に籠居してゐた時にその子爲家の舅から頼まれて、色紙に書いて贈つたものである。

◎百人一首は、天智天皇から順德院まで、大略時代の順序に依つて排列されてゐる。故に其歌を讀めば、朧げながら和歌の變遷の具合もわかる道理である。

◎百人一首の中で、孰れが一番の歌人であるか。これは各時代に依つて各々趣きを異にしてゐるから、一概に云ふことは能きない。

◎萬葉集時代の人丸と赤人、古今集時代の貫之と躬恒、それから降つて和泉式部と赤染右衛門、新古今集時代の定家と家隆、此等は能く孰れが上手なりやと比べられる問題である。

◎併し要するに柿本人丸は往時から和歌の神さまにされてゐる。德川時代に儒者共が孔子を祭つたのに對抗して、國學者の人丸を祭つたのを見てもわかる。

◎人丸は實に空前の歌聖である。抒情に、叙景に、各方面の事物を悉く歌つてゐるが、俊成卿は

身に寒く秋のさよ風吹くなべに
　ふりにし人の夢に見えつゝ

を非常に激賞してゐる。

◎山邊赤人のは、やはり『田子の浦』が好いやうだ。

◎中納言家持の歌は、男性的で、極めて雄雄しい。彼の有名な『海ゆかば水つく屍』は云ふまでもなく、

ますらをは名をし立つべし後の世に
　聞きつぐ人もかたりつぐがに

などは、實に懦夫をして奮起せしむる。而も家持は却々の好男子である。

◎喜撰法師は、六歌仙の一人に這入つてゐるが果して其れほどの歌仙であつたか何うか、『我が庵は』の歌一首しか殘つて居ないから判らない。嗚呼僅かの一首で六歌仙の一人に數へられるとは、誠に偉なる哉である。







◎之に反して正三位家隆は、極めて多作家である。驚くなかれ、其數六萬首。

◎小野小町の歌は、眞に女性の聲である。

思ひつゝ寢ればや人の見えつらむ
　夢と知りせば覺めざらましを

うたゝねに戀しき人を見てしより
　夢てふものはたのみそめてき

など、一讀そゞろに果敢き哀れさを思はしめる。

◎僧正遍昭の歌は、隨分褒める人もあるけれど、眞率の態度を缺いてゐて、甚だ狂歌に類似してゐる。

蓮葉の濁りにしまぬ心もて
　なにかは露を玉と欺く

名に愛でし下れるばかりぞ女郎花
　我れ落ちにきと人にかたるな

◎在原業平朝臣は、中納言行平の弟である。其歌は、人丸ほどの大さもなく、貫之ほどの美しさもないが、極めて感情の熱烈なところは、バイロン其のまゝである。彼れは歌人と云ふよりは、寧ろ詩人である。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
　わが身ひとつは元の身にして

名にし負はゞいざ言問はむ都鳥
　我が思ふ人はありやなしやと

◎藤原敏行朝臣は、歌も旨いが、殊に書が上手だつた。村上天皇が小野道風に、古今の名筆をお尋ねになつた時に、直ちに、其れは空海と敏行朝臣であるとお答へ申したさうである。而も敏行の卒する時、歳僅かに二十有七。

◎伊勢の歌は、女性に似合はず確乎してゐる。後世まで非常に尊敬されて、或歌人などは、伊勢の住んでゐた家の前を通る時には、態々馬から下りたさうである。

◎元良親王は陽成天皇の皇子、素性法師は僧正遍昭の子である。

◎文屋康秀は、名高い割合に餘り名歌がない。『吹くからに』などは極めて愚歌で、大納言公任などは、此歌を下品上に過ぎないと云つてゐる。定家卿は何うして斯んな歌を入れたのだらう。

◎菅家とは菅原道眞のこと。此人は詩の方が可い。







◎醍醐天皇の延喜五年に、今古和歌集の勅撰があつた。撰者は紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人であつた。

◎以後、和歌の勅撰集が澤山出た。百人一首の中で、其勅撰に與つた人の名を擧げて見れば、大中臣能宣朝臣、清原元輔、大納言公任、源俊頼朝臣、左京太夫顯輔、皇太后宮太夫俊成、參議雅經、正三位家隆・權中納言定家である。

◎紀貫之の歌は、いかにも美しく、誠に歌人の歌らしく見える。且つ假字文も巧ければ、書も美事である。

◎貫之の歌では、孰れが一番好いか。玆に二つの説がある。或人は、

櫻散る木の下風は寒からで
　空に知られぬ雪ぞ降りける

が第一等であると云ひ、或人は・

掬ぶ手の雫に濁る山の井の
　あかでも人に別れぬる哉

を第一等としてゐる。私は前の方が美しくて好く、後者は餘り技巧を弄しすぎてゐると思ふ。

◎技巧と云へば、貫之も能く古歌の調子を眞似るやうである。萬葉集にある、厚見王の、

かはづなく神南備川に影見えて
　今や咲くらむ山吹の花

を眞似て、

逢坂の關の淸水に影見えて
　今や牽くらむ望月の駒

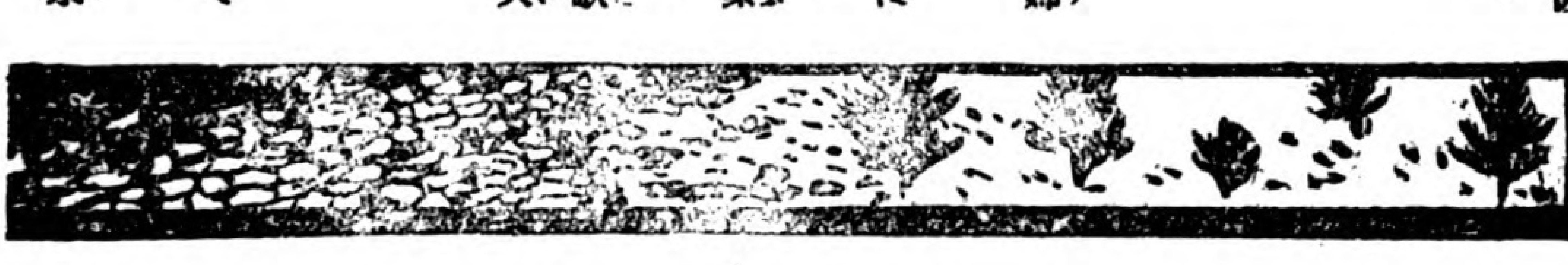
と詠んでゐる。兩々相比べると宛で歌の姉妹のやうだ。

◎壬生忠岑は、身柄こそ卑いけれど、その歌は朗々誦すべきものが甚だ多い。後鳥羽院が、或時、定家卿、家隆卿、の兩人に人代集の中で孰れが一番好い歌かと問はせられたら、兩卿とも同時に、『有明のつれなく見えし』の歌が第一等である旨をお答へしたさうである。大納言公任は、忠岑の・

春立つといふばかりにや三吉野の
　山も霞みて今日は見ゆらむ

の歌を激賞して、上品上であると云つてゐる。

◎忠岑の子忠見も却々和歌の名人であつた。未









だ小兒の時分である、禁裏からお召があつた時菓物がなくて參内致し兼ねる旨を申上げるとそれでは竹馬に乘つて來すとの仰せである。忠見は早速、

竹馬はふしかげにしていと弱し
いま夕かげに乘りて參らむ

と申しあげたさうである。

◎併し天德の歌合の折、平兼盛に負けた爲め、終に病氣になつて死んで了つた。これは百人一首の中にある『忍ぶれど』と『戀すてふ』とである。

◎平　兼盛は赤染右衞門の父である。

◎清原元輔は深養父の孫で、清少納言の父である。

◎中納言敦忠は、美男子の上に、非常に管絃の道に長じてゐた。

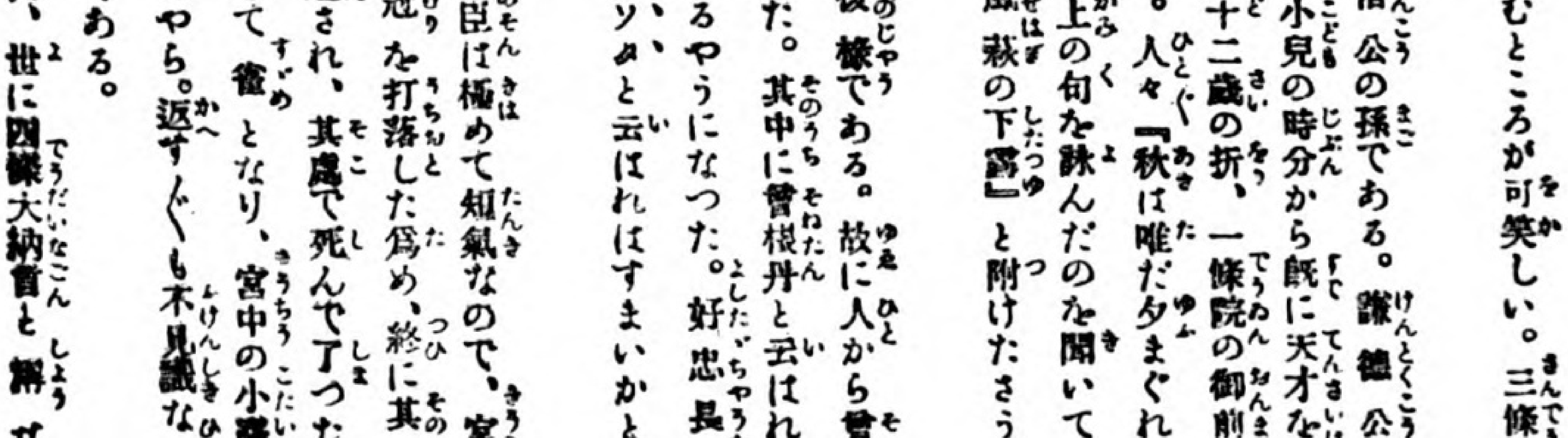
◎それに引換へて中納言朝忠は、大兵肥滿の、大食漢である。自分では何うかして瘦せるやうにと希つてゐたけれど、餘り大食するので、益々肥る一方である。それでゐて『逢ふことの絕えてしなくばなか〳〵に』などと、柄にもない戀歌を詠むところが可笑しい。三條右大臣の子である。

◎謙德公は貞信公の孫である。謙德公の子藤原義孝は、小兒の時分から旣に天才を發揮してゐる。恰度十二歲の折、一條院の御前で連歌が催された。人々『秋は唯だ夕まぐれこそたゞなられ』と上の句を詠んだのを聞いて、直ちに『秋の上風萩の下露』と附けたさうである。

◎曾根好忠は丹後掾である。故に人から曾根丹後と云はれてゐた。其中に曾根丹と云はれ、終に曾丹と云はれるやうになつた。好忠長歎息して、今に唯だソタと云はれはすまいかと云つたさうである。

◎藤原實方朝臣は極めて短氣なので、宮中で行成卿の冠を打落した爲め、終に其罰として陸奧に左遷され、其處で死んで了つた。所が魂魄化して雀となり、宮中の小臺盤を啄ばんでゐたとやら。返す〴〵も不見識な評判を取つたものである。

◎大納言公任は、世に四條大納言と稱せら









れ、頗ろ和漢の學に通じてゐた。和漢朗詠集なども此人の作である。けれども餘り學問がありすぎた爲めに、歌に理窟を附けて、大層難かしいものにして了つた。是れぞ軈て歌學の發達、和歌の衰退をなした主因である。

◎歌學の發達は斯うである。先づ公任卿に起り、基俊、俊成を經て、定家卿に至つて、終に難しいものになつて了つた。歌學を知らぬ者は歌を詠む資格がなく、而も是れは一切口傳で敎へないのであるから、次第々々に歌が衰退するやうになつたのも元來當然である。

◎併し當時公任卿の勢力は素晴しかつた。此人に嘲けられて、病氣になつた歌人さへあつた。

◎公任卿の子は權中納言定頼である。ズボラの癇癪持で、春日神社の行幸の時などは、從者を嗾かして摑みあひをさせた位である。

◎和泉式部と赤染右衞門、此の兩女の優劣は屢次問題になつてゐた。歌は和泉式部の方が巧いけれど、品行が好くないからと云ふのが結論となつてゐる。恰度學校の採點のやうで、標準が餘程珍である。

◎紫式部の源氏物語、清少納言の枕草紙は、國文學の粹であるが、兩女とも歌は餘り巧くないやうだ。到底和泉式部の上には立てない。

◎小式部内侍は和泉式部の女、大貳三位は紫式部の女、伊勢大輔は大中臣能宣朝臣の孫である。序でに云ふ、儀同三司母の孫が左京太夫道雅である。

◎能因法師は眞に風雅の趣味を解してゐた。飯は極めて少く、別に副食物などもなく、何か粉のやうな物を振りかけて滿足してゐた。

◎或時、藤原節信といふ、是れも頗ろの風流人に逢つた。その時能因は、徐かに錦の嚢から一片の鉋屑を出して、是れは長柄の橋を造つた時の削り屑でありますと云つて得意がると、節信も懷中から干からびた蛙を取出し、是れは井手の玉川の蛙でありますと云つて、各々大笑したさうである。

◎能因法師の歌は、誠に韵致に富んでゐる。









山里の春の夕ぐれ來て見れば
入相の鐘に花ぞ散りけり

◎併し歌に熱心な餘り些が莫迦げた話がある。或時、

都をば霞と共に立ちしかど
秋風ぞ吹く白河の關

といふ歌を作つたので、急に人々に自分は是れから陸奥へ旅立すると云ひふらし、其れから毎日炎天に出て顏を太陽に燒けさせ、程だつてから再び人々に會つて、白河の關で此歌を作つたと得意げに云つたさうである。

◎大納言經信は公任卿以來の屈指の歌人である。

沖つ風吹きにけらしな住吉の
松の下枝をあらふ白浪

などは立派な歌である。經信の子が源俊賴朝臣、俊賴朝臣の子が俊惠法師、實に代々立派な歌人が出てゐる。

◎經信に對して權大納言匡房がある。是れが卽ち大江匡房のことで、源義家に兵法を教へた先生である。和漢の學に通曉し、四歲で初めて書し、八歲で史記漢書を讀み、十一歲で、詩を作つたなどの、驚くべき天才である。

白雲と見ゆるにしるし三吉野の
吉野の山の花ざかりかも

の如きは、實に名歌の標本であると、鴨長明が激賞したさうである。

◎源俊賴朝臣の歌は、實に其詞に苦心したものである。

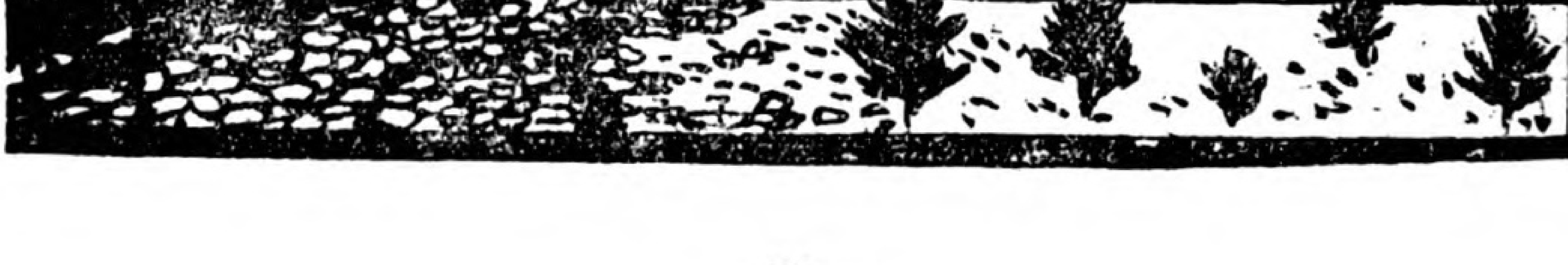
鶉鳴く眞野の入江の濱風に
尾花浪する秋の夕ぐれ

右の歌などは、一讀晩秋の荒涼たる景色を思はしめる。併し能く〳〵これを見ると、あらゆる小道具が使ばれてゐるので、少からず嫌氣が起る。殊に、

卯花のみな白髮とも見ゆるかな
賤が垣根もとしよりにけり

と、自分の名を詠み込んだなどは愈々氣障である。

◎その子俊惠法師は、歌を作るよりも批評が巧妙であつた。人に會ふ每に、諄々として名歌を講釋し、一々物に譬へて說くのに妙を得た。



家の外



家の内



冬の衛生注意

△呼吸器の保護　此の頃のやうに寒くて冷たい風の吹く時には、衛生上色々の注意がいるが、就中呼吸器の保護に力めなければならぬ。けれども、日本人のやうに首卷や襟卷を一種の装飾的に濫用して居るやうでは何の役にも立たぬ。冷温の急激なる變化な咽喉部に與へることは非常に悪いことであるが、斷えず之を用ゐるのは却つて身體を弱くする。外國では病人でなければ首卷を用ゐぬ習慣になつてゐるが、これでこそ呼吸器保護の法に適つてゐるのである。

△煖爐と炭火　近來洋風の建築が増加するに從ひ、冬季室内に煖爐を据付くる家が多いけれども、是は決して衛生上感服ができぬ。煖爐の火熱は一時は烈しいから、勢ひ此室内に居る人の皮膚の調節作用を害し、加之燃炭の煤煙や塵埃やらが呼吸器に不知不識の間に冒すのである。故にストーブを要するならば寧ろ瓦斯や蒸氣が理想的である。炭火は尚更いけない。冬になると大體の家で、締込で炭火を赫々とさせて置くので、不潔の瓦斯が盛んに發散する。此炭酸の中毒は恐るべきもので、頭痛、眩暈、甚しきは腦溢血などを起して卒倒することがある。行火もいけない。行火を入れて寢る不精な人があるが、あれは最も可けない。

△子供の要求　夫から子供の衛生であるが、諺にも「子供は風の子」と云つて、寒ければ寒い程外へ出て飛び廻りたがるものである。是は發育旺盛の爲め新陳代謝が急であるから、默止して居られないものである。それゆゑさういふ時にもヤヽ足袋を穿け帽子を冠れ襟卷をせよと餘りに煩さくせぬが宜い。又た食事なども子供は大人より餘計に食べ、尚幾回も〳〵要求するが之は發育上當然の事で、之を抑制すべきものではない。乍併教育上餘りに不規則ならしむるのも悪るいから、適度に許ゆるすべきである。菓子なども宜い。子供に砂糖分は生理上必要なのである。

△抱寢は悪るい　可愛いがつて寒いだらうとて、能く子供を抱寢させる家があるが、元來子供の體温は大人より大いものであるから、却つて之が爲めに子供の體温を奪ふ譯になつて、子供を利益せぬのみならず、萬一大人に疾患等がある場合には之を傳染せしむる動機を作ることになる。次に嬰兒であるが、嬰兒の泣くのは色々あつて、必ずしも乳が欲しくて啼くのでは無い然るに泣きへすれば乳を飲ます母があるが、其爲め消化不良に陷いつて、腸胃病などを起すのは珍らしくない。嬰兒には三四時間毎に乳を飲まして宜い。寒いから泣く飲みたいから泣くと云ふて餘りに大事がると可けない。

料理食品文盲手引

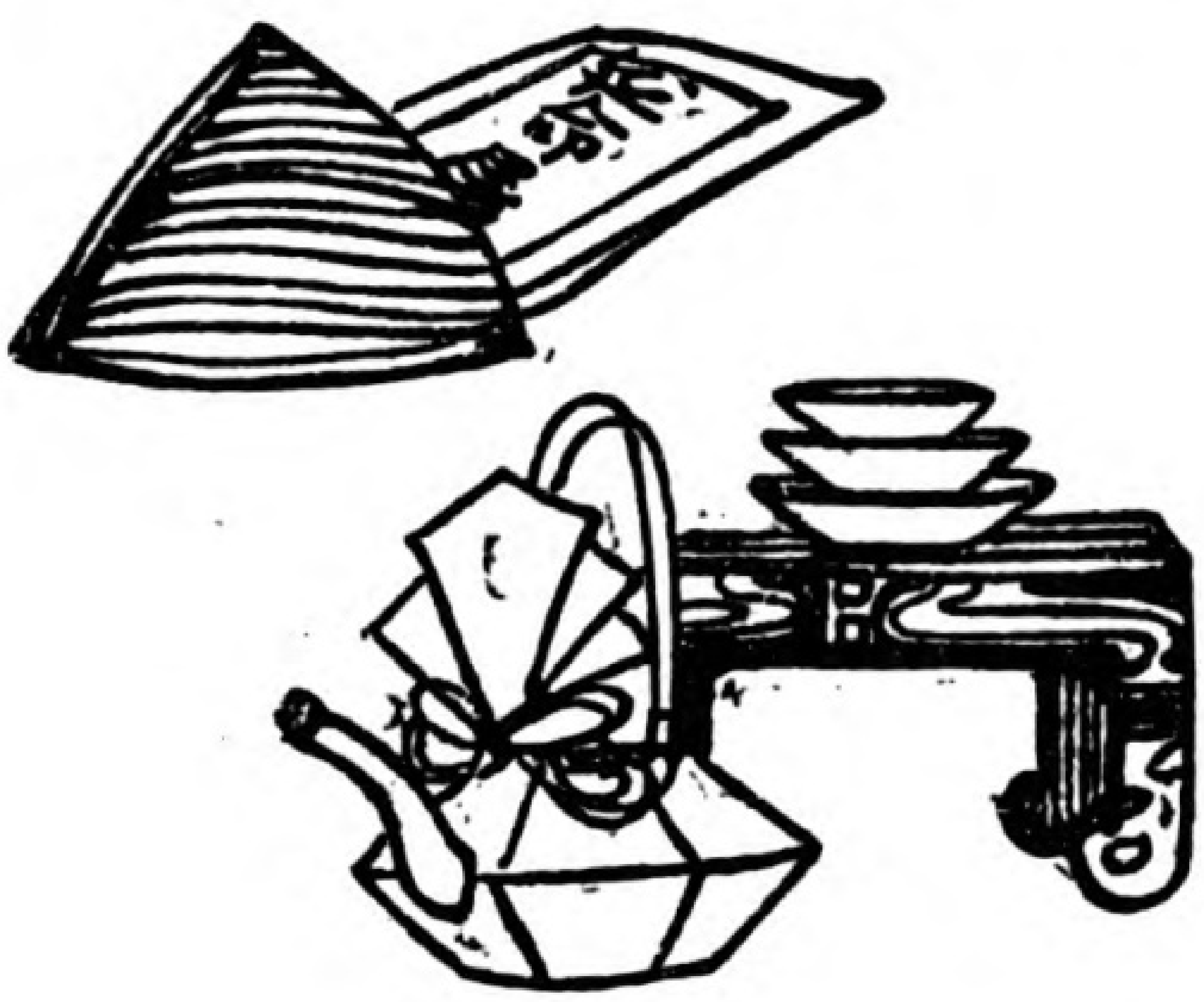
小泉迂外

喰積や山の匂ひに海の色　二丘
數の子や祝儀ばかりの小さかつき　都水
蓬萊に聞ばや伊勢の初だより　芭蕉
七くさやあとにうかるゝ明からす　其角
三椀の雜煮かへばや長者ぶり　蕪村

表題の如く本稿は、料理、菓子を初めとしてあらゆる日常の食品にわたりて、逐號趣味的小話を戴錄す。之には先づ新年號に因みて、主として新春の食膳につきて開陳す。

△屠蘇

平常は少しも召上らず、半盞の白葡萄にも



眉を顰めて御辭退あそばす若い御夫人や令孃がたが、艶なる眼もとをほんのりと薄紅に染めて、さながら淸方さんや蕉園さまの口繪が拔け出たかと思はれる嬌態は皆此のお屠蘇のはたらきでございませう。



それで、なぜ皆樣が此お屠蘇をお祝ひあそばすかと云ふと、是れは一人是れを呑めば一家に病無く、一家で是れを呑み頒つと一鄕に病無しとかいふ、お禁厭で日本では嵯峨天皇の御宇に初まつて、一般に儀式となつたのですが、もとは支那からの渡來でございます。

一體、屠蘇とは藥草の一種で、現今では屠蘇酒などと申して瓶詰入が手輕の處で用ゐられますが、これは昔の通りにやはり紅絹の袋に入れ、味淋酒に浸して、土器に注ぎうける方が趣味がございます。

古式の呑み方は、幼より長に及ぶと申して、小兒から侑めて大人に至るのでございます。

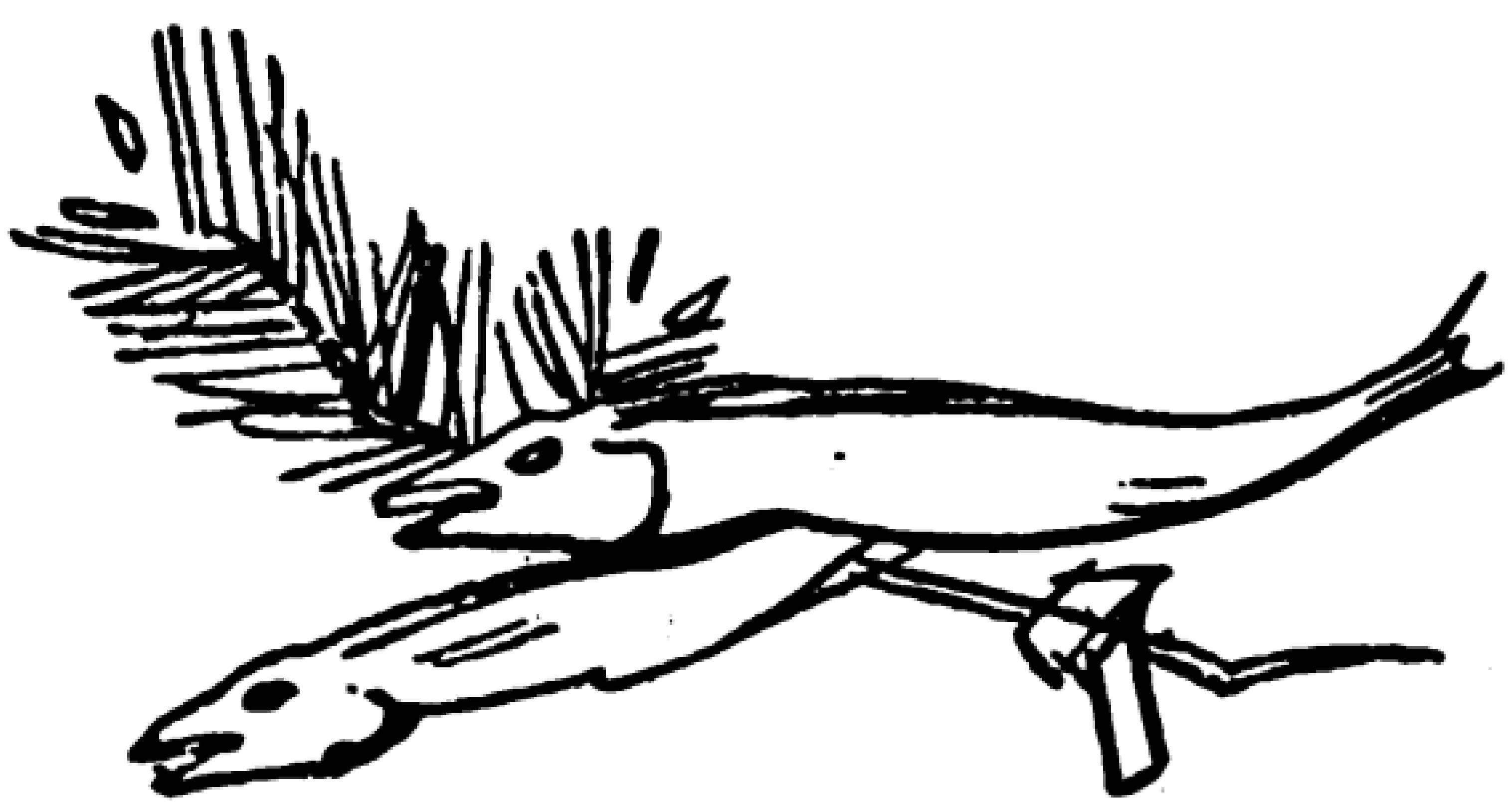
△蓬萊

新年のお飾物には鏡餅熨斗等が普通でございますが、それよりも、いつそ蓬萊をつくる方が古雅で、且つ興味が深うございます。

蓬萊は手輕につくれば、普通の御三寶に紙を敷いて

田作、熨斗、大豆、勝栗、榧、海藻、海老、蜜柑、柑子、串柿、野老、橙、歯朶、白米、藪柑子、楪、昆布、木俵、

の十八種を手綺麗につみ重ねて盛るのでございます。さして費用もかゝらず、子女衆の多い家庭等には最も相應しく思はれます。



此蓬萊は支那では春盤と稱へまして、蓬萊とは東方にある神山の名稱で、其山の果實は皆滋味く、喰らへば、不老不死になるとの傳説から、其山に象どつて飾物をつくつたので、それが又日本へ傳來へられたのでございます。古い句に

蓬萊の山まつりせん老の春　　蕪村

などゝ見えます。

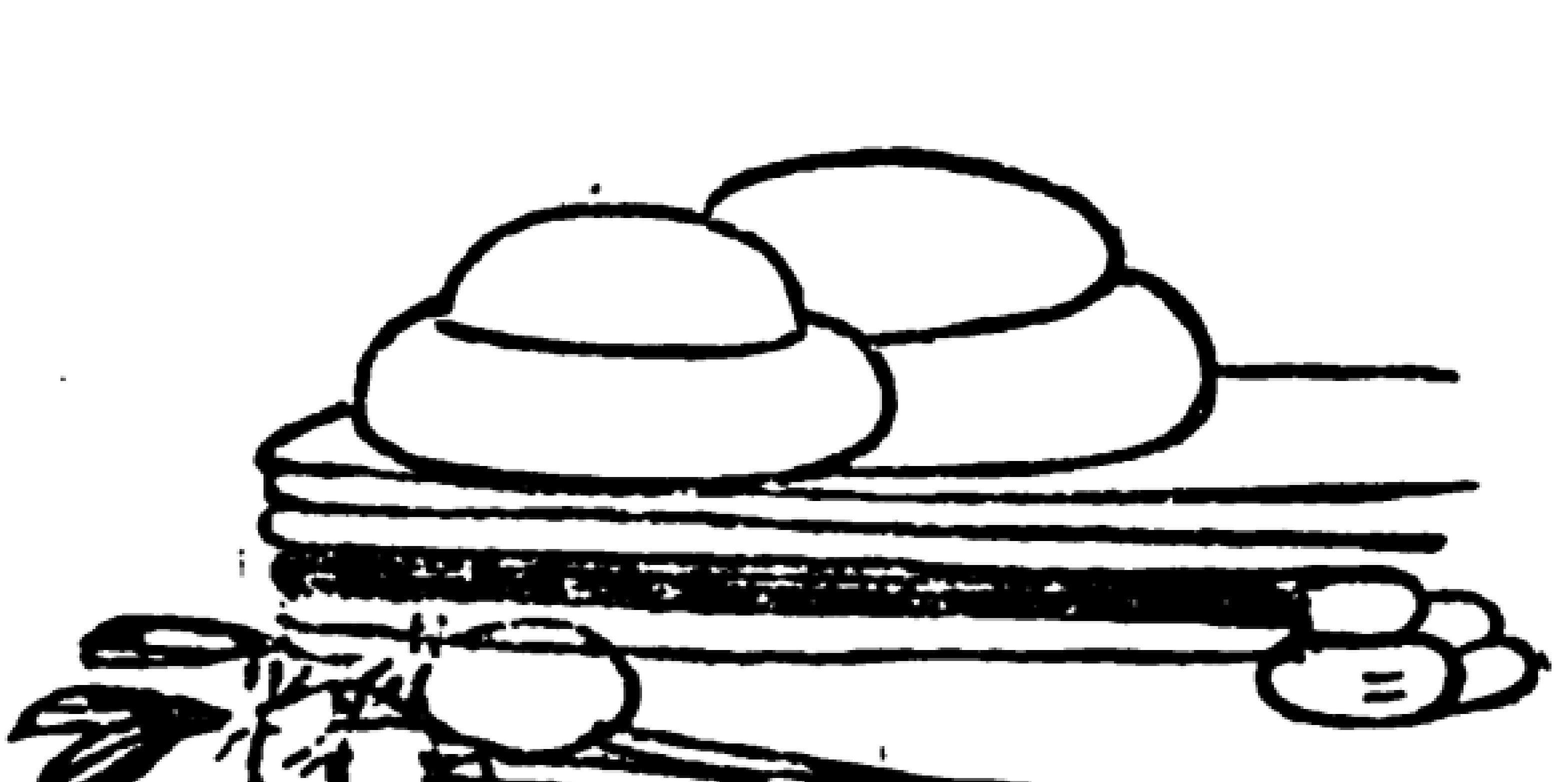
序でに申しますが之の蓬萊は喰くものだといふ説と否や喰かれぬものだと云ふ二つの説がございまして、食用の方では、

ぼつ〳〵と喰積あらす夫婦かな　　嵐雪

といふ證據があり、食用で無い側では、

初春を喰ふべき爲の幼兒も喰はで罪をや作り物なる　　齋藤彦麿

と云ふ不平の聲が洩れま



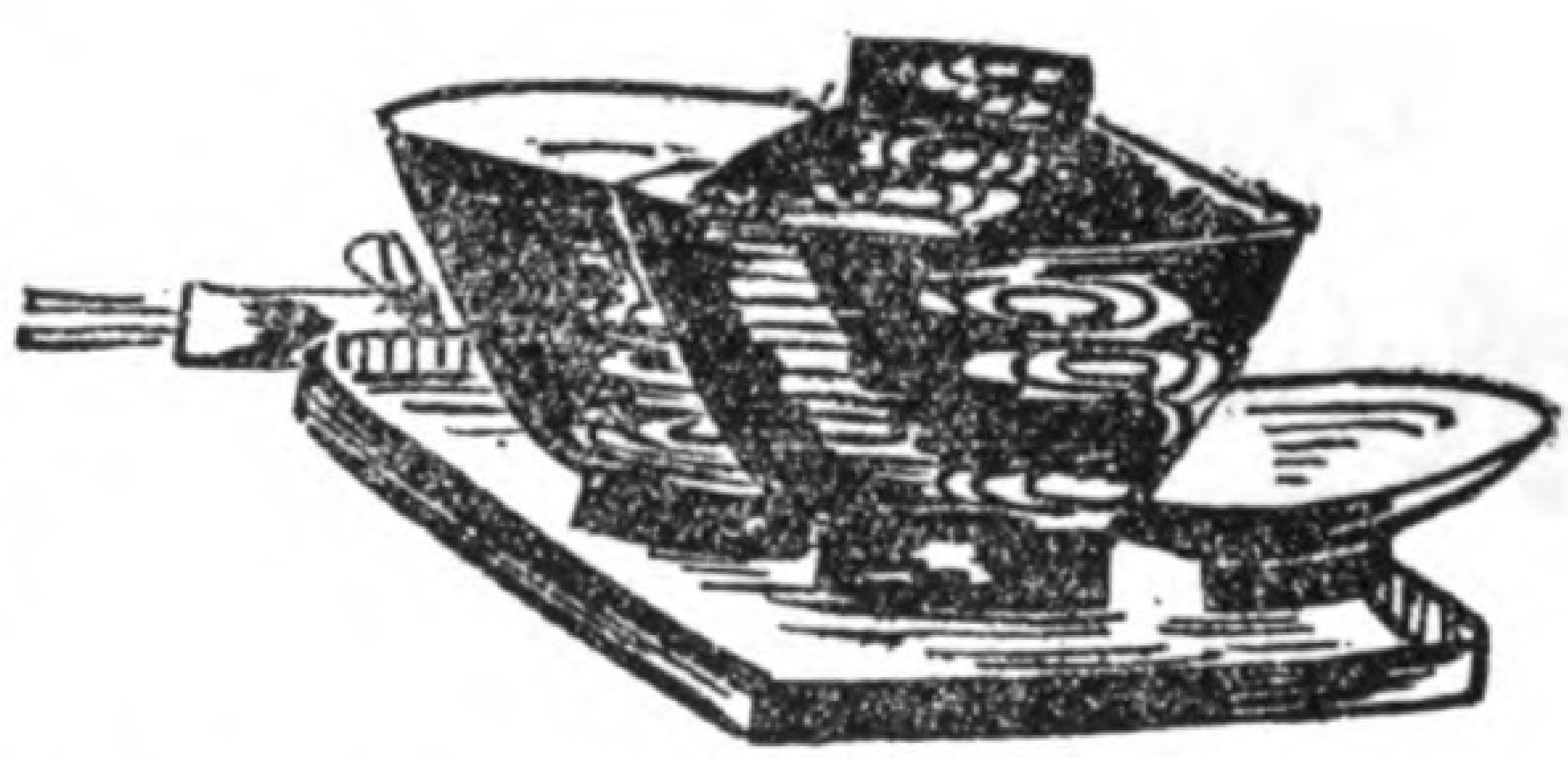
す。要するに飾り物には相違ございませんが、三ケ日が濟むと、崩してポツ〳〵と喰くのでございませう。

△餅

初春の御祝儀には鏡餅、のし餅、なまこ餅など〻、其形狀によつて唱へも變つてまゐります。一體、餅といふ言葉は、黏氣があつて物に附着くから起つたので、糯と同意味だとの說もございますが、いかゞでございますか受合いかねます。

又餅をいたゞく事を古くから齒固めと稱へますのは、齒を固めると申す意味なので『源氏物語』の初音の卷に、「齒固めして、もちひ鏡さへとりよせて」などゝ見えます。

現今でも御婦人方は、この餅のことをよくおかちんと稱へられますが、これは彼の新井白石も申した通り『搗飯』の音便でございます。これに就いて面白いのは、昔し歌の會に賞物として餅を出したから



それで歌賃であるといふ說と、內裡式微の時、褐色の袴を着けた賤しい男が、小豆餅を箱に入れて築地のあたりを賣り步いたのを、女房達が見つけて、餅屋々々と呼び迎へるのもおもはゆげなので、褐々と申したといふ小話がございますが、どちらもよく附會たものでございます。

△雜　煑

雜煑は初春の御祝儀として、何をおいても無くて叶はぬ食品でございます。ちか頃新らしい家庭では、鴨雜煑、牛雜煑などを元旦早々用ゐる風も尠くございませんが、しかし鴨の、蒲鉾のといふのは、御來客にはよろしうございませうが、家族同志の食膳には、却て昔の儘の方が簡單で、却つて古味のところが御祝儀らしうございます。

雜煑にも正式に致せば、餅(紅白)、串貝、串子、大根、燒豆腐、芋、昆布、若菜の數品を加へるのがよろ

しいでせうが、しかしこれはあまりごた〳〵過ぎ、串子、串貝などは手數がかゝると思つたらば、餅、大根(銀杏に切る)、芋、菜、花鰹ぐらいでも足りませう。昔から料理本に、雑煮には必ず大根を加ふべしとありますのは、畢竟大根は餅を消化せしめる爲でございます。

可笑しいのは、京都では昔から白味噌の雑煮に、頭芋を箸にて輕く切れるぐらゐに蒸したのを一つ宛入れて、さうして是れを三日迄決していたゞかず、雑煮は幾杯代へても芋は一つで、眞の見せびらかしに入れ置くのを、古風の法式としてありますのを記者の友人の某子が、さうとは不知に、初めに此芋の味が格別に美味かつたので、雑煮を代ゆる毎に一個宛平げたので、家内の人數に豫め適當て貯へ置いたおさん殿に尠からず恐慌を來さしめたと云ふ滑稽がございます。

又雑煮を祝ふときに太箸を用ゐるのは、足利義政から始まつたと云ふ事でございます。一體迷心家では箸の折れるのは馬から落ちる前兆として忌むので、義政の兄の義勝も少年の折、正月雑煮を祝つて居りましたところが、中途でポキリと箸が折れましたので、臣下の者どもは大に心配致しましたが、果して其年の秋に落馬が因で失くなりましたので弟の義政が後を嗣いだ歳の元旦には、前に懲りて、こんどは折れぬやうに太箸をつくりました。ですから足利家では代々雑煮には太箸を用ゐたと云ふ風が、いつしか一般に傳つて現今でも太箸に限るやうになつたのでございます。



△七草粥

七草薺唐土の鳥の渡らぬ先に……などと打ち囃す七草粥は、昔も今も一般に行はれて居りますが、然し今日では事實七種の菜根を用ゐる家庭は尠なく、大抵は小松菜、薺位を使用するに止まつて居り

ます。

それで七草とは何かと、まだ御存じ無い方もありませうから申上げますと、延喜式に據りますと、薺、繁縷、芹、菁、御形、須々代、佛の座の七種でございます。延喜式と申すのは、醍醐天皇の延喜十一年の正月七日に初めて此の七種の菜を禁庭に捧げ、それが例となつたのをいふので、本來は支那の舊習が輸入されたのでございます。

又此の七草は今日とは名稱が變つて居るのもございますので、名は聞いても一寸解らぬ草があるので、御不審を抱いてる方の參考迄に　簡單に説明を加へおきます。

●薺は誰方も御存じのペン／＼草で、日本では此草を食用にするのは七草粥の時斗りでございますが、支那では昔から食いたと見えて東坡が詩に、天生此物、爲幽人山居之福とあります。しかしペン／＼草では餘り山居の福とも申難い御馳走でございます。



●繁縷は今では金絲雀の餌などに遣ふハコベで、學名ではステラリアメジアと申して石竹科に属します。

●芹は今の三葉芹で、摘草で先刻御承知でせう。

●菁は蕪の事で、スヾとは狹々で小さいと云ふ意味であるといふのと、スヾとは鈴で、根の形が鈴に似て居るからだといふ說もございます。

●御形は野原や田の畦などに生へて、今では鼠麴草の名が附けられてゐる粉綠の葉で、黃色な細い花の咲いてる草でございます。

●須々代は今の大根で、其葉を使用ふのでございます。

●佛の座は紫草科の土盌菜の事で、一體佛の座といふのは初生の根生葉が地に藉いて、まるで佛座の蓮華に似て居るから申すので、土盌菜は御承知の通り花は薄い縹色で可愛らしいものであるから斯く稱へたので、今日唇形科にホトケノザといふのが見え

ますがそれとは別でございます。

△白　魚

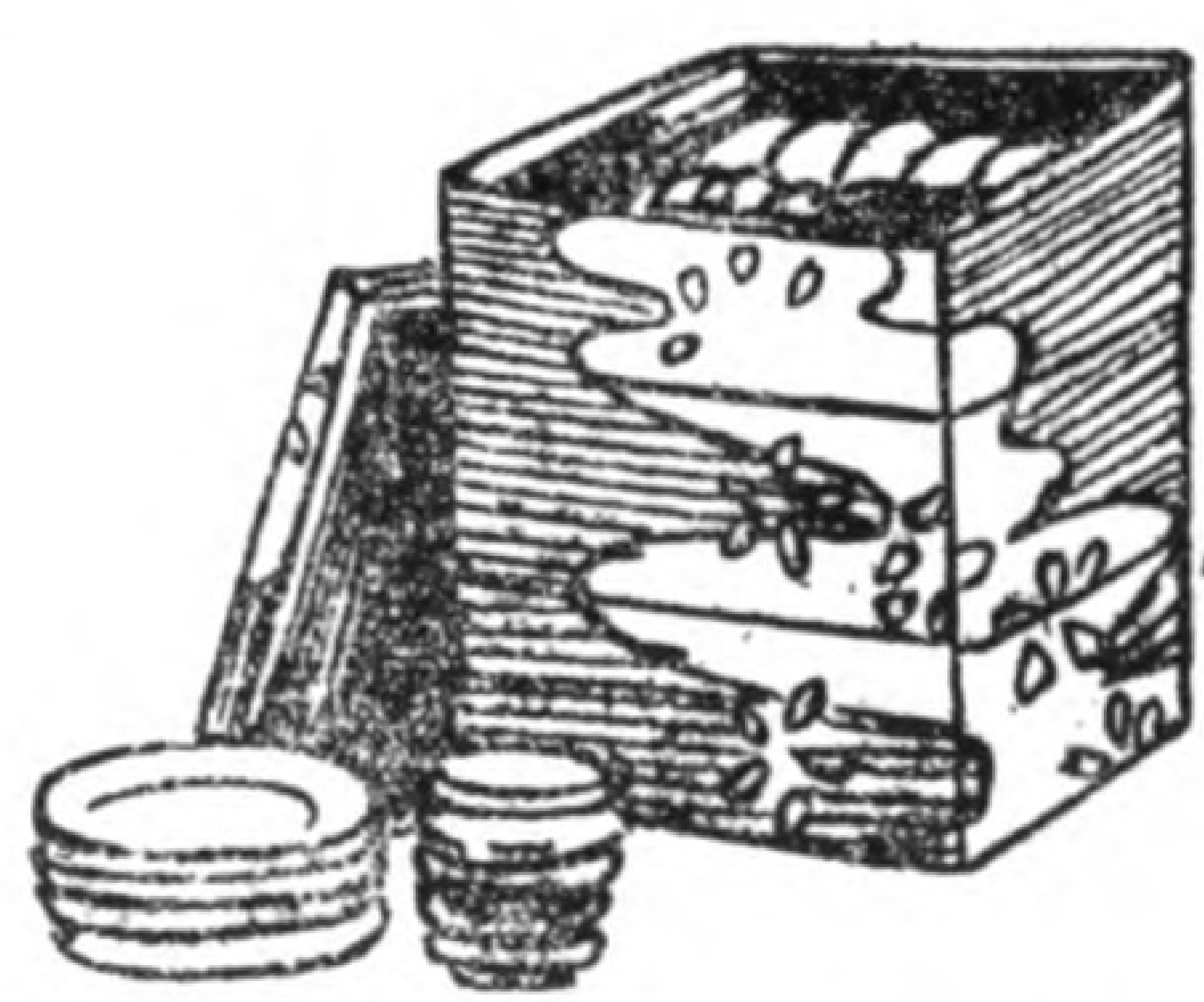
白魚は古くから隅田川の名物で、殊に年末から年始へかけましては、吸物種に致しても、甘煮に致しても又はお鮨に致してもいろ〳〵に調理次第で賞翫致されます。

白魚網を營業と致して居る者は、彼の芭蕉の句に

あけぼのや白魚白き事一寸

とございます如く、筑波颪に肌も凍る計りの冬の夜に篝火を焚いて、初季は佃沖から永代橋附近へ網をおろして、段々上流へさかのぼり、四月頃には隅田川の上流荒木田のあたりまでまゐります。しかし白魚は櫻の頃には卵を持つて大味になり、風味もやぶれて天ぷら種か安料理屋の鉢に





盛られるばかりでございます。

白魚は舊幕時代には、將軍の膳に上りますので白魚網は一の特權となつて、白魚屋敷などゝ申すものもございまして、小魚の癖に非常の權威があつて佃島の住吉神社では今日でも白魚祭の式がのこつて、年々網下しの際には祭典を執行ひます。

しかし斯樣に江戶の名物として、海苔と共に悅ばれました魚も、近頃では段々減つてまゐり、隅田川は勿論、佃島近所でも收獲が乏しくなつてまゐりました。これは川蒸汽船の出入が都鳥の夢を破つて、出入毎に石炭殼を河中へ捨てますのと、沿岸の各工場でつかつた機械油又はセメント會社の灰殼等が水を流れるところから自然白魚の發生をそこなふのでございます。

こんなわけですから今日では普通の割烹店では本場の佃の魚は使用ひ切れず、大方は三河邊から汽車で送られます、形の平たい、少し薄鼠色のものでございます。

△海　苔

白魚や海苔は下部の買合せ　其　角

白魚をあげますと、どうしても海苔といふ順で、などと元祿あたりの句にもございますやうに、淺草海苔と白魚は古くから江戸名物とうたはれて居ります。

御承知でもございませうが、年末から年始へかけて市中到る處に『新海苔』といふ看板が掲げられます。この新海苔と申すのは俗に年始海苔などと稱へまして初春の御進物用に主としてつかはれますが香氣の高いもので、載いた家庭では尠からず賞翫いたします。

しかし此新海苔は前にも申した如く、香氣と輕淡な味の處をめでますので、海苔卷などをつくるには一寸向きかねます。と申すのは、新海苔は概して薄く、擦れ切れが多いので、これに飯をつけ、加藥を入れ、さて簾で卷く頃には外見がいたく破れます。こんな故に海苔卷にはやはり、普通の佳いのを撰む方がよろしうございます。

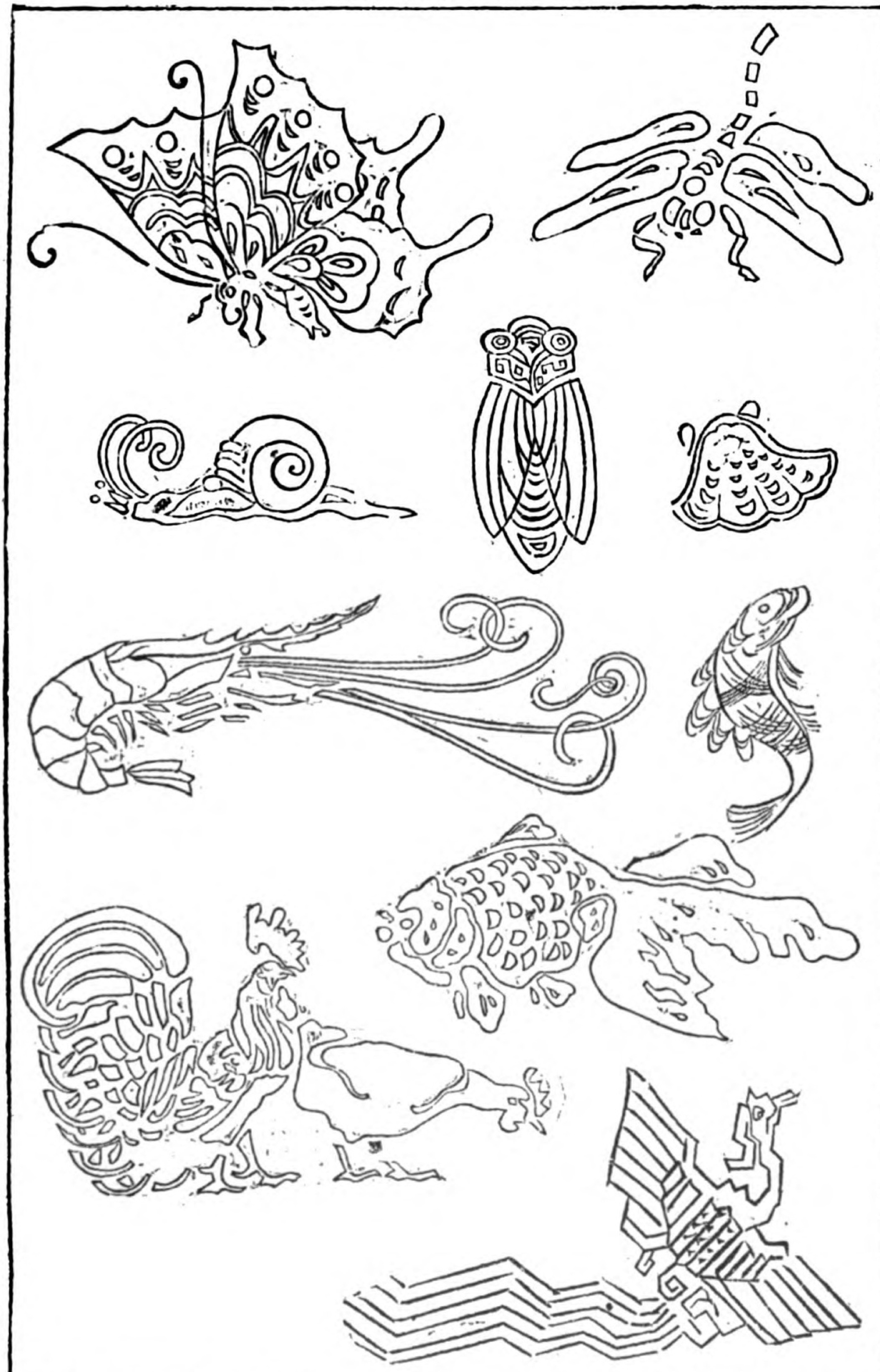
一體淺草海苔は東京灣で採りますのを最上と致してございますが、それも採る日によつて甲乙がございます。丁度陰暦の正月十五日と二十六日とを松汐と稱へまして、此日に採つたのを香味ともに一等と致して居ります。又海苔の色の黑く、艶のない、一體に曇りのあるのは、これは一日中に干し上らなかつた品で、簀泊と申します。それから品がよくつても表に擦り切れがあつたり致すのは、これは干して居ります最中に雨などに逢ひましたか、又は干し初めから表面を出して干しましたので、味は變りませんが見たところが厭でございます。

——(以下續出)——

亥白や數寄冷たき海老の守　禾水

七種や霞の中なる東山　紅鶯

△とんぼ△帆立貝△鯉△蟬△金魚△孔雀△蝶△蝸牛△蝦△鷄





燈火のもと　紅梅

△されぱとて遊ぶ間もなし松の内　貞祇
△花の春面白い世に生れけり　釣雪

△鴫と雲雀

山里に智惠みたぬ男ありけり。母親より、鴫と申す鳥かふて參れとて鳥目をわたされ市にいでけるが、何處にてひさぐやらむをしらず、市中を大聲あげて、しぎ買はう、鴫かはうと呼びありくうち、とある鳥屋に呼び込まれ、雲雀を鴫といつはりて賣りつけられしが、いそぎかへりて、鴫と申す鳥買ふて參り候といへば、母親呆れはて、こは雲雀と申すものよ、とく往てまことの鴫と代へて來よ、うつけ者よとさん〴〵に云はれ、腰もおろさず、はる〴〵鳥屋へもちかへり、これはいつはりの品にて候よし、まことの鴫と代へてたまはれと乞へば、鳥屋、おん身は何事も知らぬよな、和歌にても詠むごとく、百しぎやと申して、鴫にも百種あり、こもその中の一いろぞといふに、男はげにもとうなづき、又もや下げて戻りきとなむ。

△居ねむり客

三人よりあひて、曉がたまで歌よみ句つくりて興じあひにけるが、あくれば、否みがたき方より朝會にと招かれ、寢たらぬ眼おぼつかなくも、うちそろふて參りけるに、會



もやう〳〵すぎ、まづひとてまへとて、あるじの茶をたつるに、都とせし數寄屋のうちに、いつしか三人とも居ながらにいねにけり。上客のひとり見かねて、次の膝をひそかにつねれば、眼をひらきてはづと氣づき、となりの膝をそつと突くに、これも心づきゝ、つめの一人の膝をつねれば、こも茶の湯の禮かとおもひ、さて此の指は、どちらへ持つて參らうぞ。

△泰然自若

大家の隱居にて、眼不自由なるがありけり。雨の日、小僧ひとりしたがへて知るべの方を訪はれけるが、歸りは雨もあがり、路もやゝかわきてけるを、隱居はさりとも知らず、まだ雨の止まぬものと心得、門をいづるや、小僧に手をとられつゝ、傘うちかざして歩みけるを、常に小言わづらはしう云ひきかさるゝにくらしさに、小僧は見ても知らぬふりにて、やがてわが門ちかくなるや、御隱居さまには、雨も止み、日がよう照つてをりますのに、何故傘をさしてお出でなされます、あれ、道行く人たちが笑ふて居りますのに……といへば、さわがぬ體にて、そち體に云はれいでも、雨の上つたを知らいで居らうか、われらが傘をかざすは心あつてのことなりといひつゝ靜かにたゝみをさめ、その傘の上をすうと撫でゝ、おゝもう大分かわいて居る。

△大盡の大耳

大盡といふものは大耳ゆゑ、少しのことなどはきいても聞かぬふりで一向取りあげぬと云ふを、かたへの兒、大盡を大神ととりちがへ、ぢや、奈良の大佛さまみたいに、耳



の中へは傘さしても入れるんだね。

△佛道鼓吹

雲右衛門は武士道鼓吹だといふを、かたへの人、いや、あれは今度から佛道鼓吹になつた。なぜと問へば、でも髪をおろしたもの。

△鼠と質

いづれ下ざまの育ちなるべし。家に飼ひし南京鼠を父親の見て、こんな役にも立たぬものを飼ふて何に成る、場所ふさげゆゑすぐにも打ちころして了へと、荒々しくいひける時、母ちやん、こんなものでも質にとるの。

△天下一品

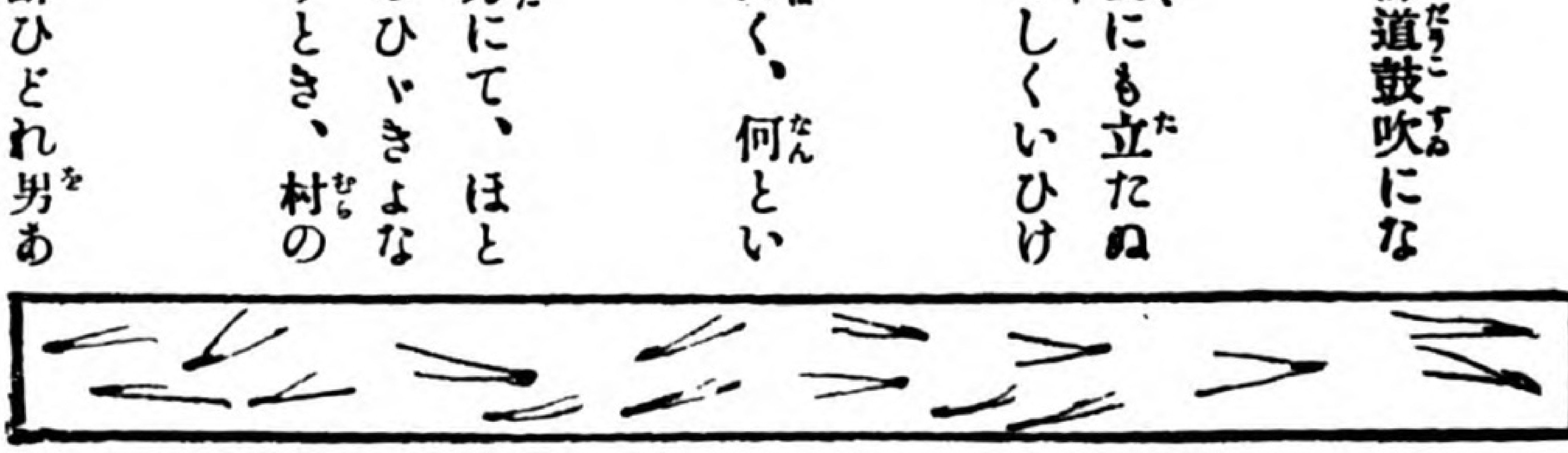
女かみゆひの子、母の名の人にもてはやさるゝを、自慢げに友に語りて曰く、何といつたつて、家の母ちやんは天下一品だ。

△三人三様

夕まぐれ、寺子屋に子供あつまりて、ものよみならふ折しも、おもての方にて、ほとほとほと／＼と音するに、侍の子耳さとく聞きつけ、あれは、ものゝ具のひゞきよなと云ふに、歌よみの子かたへより、いや水鶏の門をたゝくならむといひ消すとき、村のわらべが中へ入り、いゝやありや、藁打つ音でやんせう。

△醉人の言

霜さゆる冬のよを、足もとしどろにて、とあるそばやの暖簾をくゞりし醉ひどれ男あ





りけり。ものいふもわかちえぬほどに成りたるが、二椀ほどのそばを喰ひ終るや、はたとその場にふしたふれて、前後もしらで寢入りけるを、やゝありて女中がゆり起し、もしお客さま、もう店をしめますゆゑ、どうぞお勘定をすまして下さりませといへば、やう／＼起きなほり、いやあ、いつの間にそばを喰ふたやら、と呆れ貌しつゝ拂ひをすませ、よろめき／＼門に出で、それにしても、そば位で、どうして此樣に醉つたらう。

△酒好の男

酒好みの男、ある家に奉公にまゐりしが、親よりくれ／＼もいましめられしことゝてひと雫も口にすることなく、わびしき月日をおくるうち、やがて家に女うまれ、初節句なればとて、ひなまつりに、白酒おびたゞしくもとめたり。終の日ともなれば、下々にもそれ／＼わかちあたへしに、かの男、なまじひに口にせしだけ、こらへがたくなりて殘りしを瓶のまゝそつと盜りいだし、何處へがなといろ／＼に考へし末、井戸の中に釣りかくし、かまへて人が見たらば蛙となれよと云ひ／＼、座しきへかへるを、他の下男がふと見つけ、してやつたりと打ちよろこびつゝ、白酒の瓶を引きあげ、かはりに、大きやかなる蟇をとらへきたりて結ひさげおきしに、前の男はさりとも知らず、頃を見はからひ、忍びよりて、心たのしみに手ぐり上げれば、思ひがけなく大がへるの飛びいだすに、あはてふためき名のりかけ、己ぢや、おれぢや、見忘れたか

△出家と魚

身狀おさまらぬ出家あり。いましめをやぶり、師の目をしのびて、つねになまぐさも



のをかくし喰ひして居たりしが、風邪こゝちにて床につきしに、好物の魚を口にすることあたはず、一日二日はこらへ居たりけれど、ある夜、をりを見て小坊主をよび、ちと藥に要ることあれば、この先の料理店にゆき、小い鯛のしほあぶりと申すもの、一尾もとめこよとて、若干のあしをわたしけり。小坊主かしこまりて、いそぎとゝのへもどれば、折ふし、師の坊の、枕もとに見舞はれけるを、氣轉利かねばかくしもやらず、臥しゐる人はせの品、持てまゐりて候とばかり、ふたりの間にずいとさしいだせば、おはあはてまどひ、あゝこれ〳〵、見するには及ばぬ、その魚をすぐに裏の川へ放ちてまゐれとぞ申しける。

△達磨と蕎麥

これも、おなじやうなる破戒僧、一室のうちに押し込められ、肌寒むに夜風さへひまもりて、空腹たへがたきをりしも、窓の下を夜啼そば賣る聲するに、これ幸とひそかに呼びとめ、衣のうへより赤き毛布をうちかつぎしまゝ、窓先に首さし出してしたゝめ居たるを、通りがゝりの子供が見つけて大聲あげ、皆來いやい、此處の窓で、だるまがそばを喰ふてゐる。

△庭前の品

ある人、朋友を訪はむとしけるに、折ふし、心利きたる妻女の、庭の柿の色よきを枝ながらに折りとり、これを手土産にもちたまへと云ひければ、いしくも申せしよと、早速そをたづさへて參りける。さて、かしこに行きて、こは味よからねど、庭前のにて候



へば、おなぐさみまでにとさし出しけるに、先のあるじもうちよろこび、これは〳〵お心入れの品、美事に色もさして候、店などにてあがなひたらむには、なか〳〵かほどの新しきは得られまじきを…とて、いたくたゝへけるを、その家の妻女の物にうときが聞き、われもおとらでやはと、さそくに膳部などしつらひ、客の前にもちいでゝ、先づ鉢肴をすゝめ、これは庭前のにて候。

△失　念

三井寺の法師に知音の人ありて、ある時、門まで訪づれけるを、一人の稚兒が見かけ法師のかたはらにゆき、お師匠さま、たゞいまあなたの許へ、人がたづねておはせしと告ぐれば、人とは誰がことぢや、なにゆゑにお貌を覺えては居ぬ、さても〳〵うつけなものよと云ひ〳〵、方丈よりたち出で、ものゝかげよりつく〴〵ながむれども、見知りがほながら、とんと名前のおもひ出せぬに困じはて、手もちぶさたにてたゝずみ居ればもしお師匠さま、こなたへお通し申しませうが、お名前を何と申されますと問はれ、されば、まことに人ぢやよ。

△羊羹一棹

その日ぐらしの職人、大切なる得意先へ年禮にまゐるとて、妻をよび、○樣へ年玉にもて參るゆゑ、新道の菓子屋で羊羹一棹買ふてこいと云へば、妻は目をまろくして、なんぼ大切のお店へでも、借金してまで、長持で配らずとも好からうに。



むかし昔の正月

平俊蔭

乾坤一轉、同じく是れ新年である、然りながら各〻時代に依つては、その狀態も、その趣味も、決して一樣でない。今いさゝか其輪廓を敍べて見よう。

▲奈良朝時代(今より八九百年前)

◎靑丹よし、奈良の都の新春は、抑や何んな有樣であつたらうか、何と云つても史實に乏しいので、到底深く探究することは能きないけれど、爰にその大略を記して見る。

◎東雲の空、ほがら〳〵と明けかゝれど、朝暾は未だ三笠山の端に昇らない。折から夙くも諸山の寺院に讀經の聲が聞える。鉦の響きが聞える。薰物の香は徐かに流れて、寒けき法衣の袖に染みわたる。

◎左京、右京、奈良の都大路を眺め見渡すのに、門松注連繩を飾つた家は一軒もない。然りながら美しく掃かれた道路には、霜柱が紫色に凝つて、其上を鹿が可愛らしい眼色をして徐ろに漫歩してゐる。歲華玆に新たになつても、蒼古の情は犇々と胸に迫るやうである。

◎朝暾うら〳〵と差昇る頃、宮中では朝賀の式が行はれる。何時しか宮門がサッと心地よく開かれたかと思ふと、召の鼓が鼕々と鳴りひゞく。その嚴肅と云つたら、云はうやうもない。それに連れて百官悉く大極殿に參列する。やがて主上には高御座に即かせ給ふと、兵庫寮の者鏘々と銅羅を擊つ。それを合圖に一人の女房、肅然に參つて御帳を八の字に掲げ、近衞の次將、警蹕を命ずる。其間に圖書寮、主殿寮の者は、靜かに御香を燒いてゐる。折柄典儀が再拜の聲を懸けると、

それを合圖に並居る百官が一樣に悉く再拜する。次で百官の中から二人進み出で、去年中諸國にあつた祥瑞をば上奏する。其れが終ると、軈て風雅やかな音樂に連れて、陵王、青海波なんど云ふ舞踏が初まり、百官皆な恍惚として其れを眺める。實に奈良朝の元日は長閑けきものであつた。

◎正月の上子日には、子日遊が催される。此日、主上には、諸皇子を始めとし奉り、遍く群臣を從はせ給ひて、霞棚引く春日野わたりに出御ましますのである由來松は目出度いものであつて、子日に小松を曳けば齡齒を延べると云はれてゐるのであるが、如何にも其の御催しは風雅やかなものである。

◎小松を曳く序でに、若菜をも摘ませられるのである。これは七種など〻限られては居ず、芹、薺、其他喰べられるものは、何でも摘ませられるのである。この若菜を摘むことは、當時新春第一の遊びとなつてゐたので、奈良朝の歌人は其歌を澤山詠んでゐる。

　初春の初子の今日の玉は〻き手に執るからにゆらぐ玉の緒　　大伴家持

　あすよりは若菜摘まむとしめし野に昨日も今日も雪は降りつ〻　　山邊赤人

◎それから正月七日になると、白馬節會が催される。當日、左右の馬寮から、三七二十一疋の白馬が、ぞろぞろと宮庭に牽出されるのを、主上には其れを篤と御覽せられるのである。新春に白馬を御覽せらる〻は、當年一切の邪氣を掃ふと云つて、却々大切な節會になつてゐた。

　水鳥の鴨の羽の宮の青馬を今日見る人はかぎりなしと云ふ。　　大伴家持

▲平安朝時代（今より凡そ七百年前）

◎軒に支へるばかりの門松、大きやかな注連繩は、すでに歳暮の内から飾られてゐるので、新春第一の初東風は、先づその門松、その注連飾を訪れるのである。

　門松を營み立つるそのほどに春あけがたに夜やなりぬらむ　　修理大夫　顯季

山がつの外面の松も立てりけり千歳を祝ふ春のむかへに
待賢門院 堀川

◎元旦の四方拜ほど、世に神々しきものは無い。夜るの帷帳未だ明けやらず、み空に明星の瞬き忙しき頃、主上には、淸涼殿の東階に前砌に出御ましますのである。御座の御傍らには屛風を立て廻らし、その御前には白木の机が据ゑられ、その上には香華、燈明などが供へられてゐる。主上には、軈て起たせ給うて、徐ろに天地山陵を拜し、寶祚の彌目出度く、災禍の無からむことを祈らせ給ふのである。この御祈が終る頃ほひ、燈明の光うすらいで、東天の雲破れ、初日影うら〳〵と照りかゞやくのである。

◎四方拜が終つて後、暫時すると、御藥を供ずる式が



始まる。主上には、淸涼殿の東廂に出御あらせられると、軈て命婦などゝ云ふ女官共が、御齒固めの餅を運んで來て、主上の御前に供し、次に藥子と云つて、美しい少女が、鬼の間から肅然に進み出て、几帳の下に畏まると、女官は先づ藥子に屠蘇を斟んで飲ませ、次に銀の盃で主上に奉るのであるが、第一献には屠蘇、第二献には白散、第三献には度嶂酸。斯くて芳ばしき薫は、靜心なく大内に漲るのである。

◎次で朝賀の式に移るのであるが、これは奈良朝時代から旣に有つて、其れと略ぼ同じ樣である。

◎扨て夜に入り、大内に燈火の點る頃ともなれば、甚とも目出度き元日の節會が催される。主上には、紫宸殿に出御あらせられ、暫時すると、藏人

から地方官の有様を奏する。これを外任奏と云つて、却々儀式ばつたものである。其れが濟むと、陰陽寮から、今年の暦のことを奏し、主水司からは氷室の有様を奏し、内膳司からは腹赤贄を奏する。此等を諸司奏と云つて、その故事來歴は却々深いのである。諸司奏が終ると、百官に酒を賜はり、國栖の歌笛などを吹かしめて、遍く歡樂を盡さしめたまふのである。凡てこれをとよのあかりと云つて、君臣皆な御酒に醉ひ、面を朱らして大御代萬々歳を祝ふのである。

もゝしきや春を迎ふる盃に君が千歳の影ぞ映れる

慈　鎮　和　尚

睦月立つ今日のまとゐや百敷の豐のあかりの始めなるらむ

法　橋　顯　昭

◎子日遊は、平安朝になつてから、ます〳〵盛んになつて來た。菅公なども、主上に供奉して雲林院に子日遊をしたことを精しく記してある。從つて當時は、子日は内膳司から七種の若菜を羹として、これを奉ることさへ一つの儀式となつた。

今日はまた野邊の若菜の七種に君が八千代を摘みやそふらむ

右　大　辨　光　俊

◎上卯日には、諸衞府から卯杖を献上する。桃、柏、椿、梅、柊、木瓜などの木を、その長五尺三寸づゝに切つて、其れに種々の裝飾を附け、洲濱に添へて献上するのであるが、後には其れに、卯槌と云つて小さな槌をも添へるやうになつたのである。これは惡鬼を攘ふ禁厭になるさうな。卯杖は唯だ献上物にのみされてゐたけれど、卯槌の方は、上流社會の間に贈物として用ゐられ、其形が如何にも趣きのあるところから、源氏物語、枕草紙を始めとして、其他種々の物語にも隨分記されてゐる。誠に婦人には氣に入りさうな恰好をしてゐるのである。

色かへぬ常磐の峯の玉椿君が八千代の卯杖にぞ切る

橘　盛　永

山どよむ斧のひゞきをたづぬればいはひの杖の音にぞありける

清　少　納　言

◎卯杖、卯槌に比べて、甚とゞ可笑しいのは、十五日

の粥杖である。此日、宮中で御粥を煮て献るのであるが、其折に焚いた木を削つて杖を拵へ、それで婦人の腰を敲けば、立派な男兒を産むと云ひ傳へられてゐる故に宮中などでも男子共は密とこの粥杖を隱し持ち、逃げまはる女房達の腰を敲くのである。敲かれるのは元來年若の女房達であるから、恥しさ、極りの惡さに、後ろを用心しながら逃げ惑ふさま、得も言はれぬほどの面白さである。主上を始めとし擧り、普き雲上人も、この日ばかりは、腹を抱へて笑ひ倒げたのに違ひない。枕草紙、狭衣物語、辨内侍日記などには、等しく筆を揃へて、この有様が書かれてあるのを見ても、如何に頤を說いたかが分說る。

粥杖や梨壺の五人打ちはずし　几董



子の日

◎なほ此日には、淸涼殿の御庭で、靑竹を立てゝ焼き、疫病を追ひはらふ禁厭をする。これを左義長と云ふ。次で十八日にも亦た靑竹に扇などを飾り添へて焼き、其折、鬼の假面を被つた者が身振可笑しく躍りつゝ歩くのを、傍らから大勢でどんど

と囃し立てるのである。此等は孰れも皆な善き年の來れかしと願ふ餘りに起つた儀式ではあるが、實に平安朝位ゐ種々の公事が行はれたことは無い。

▲鎌倉幕府時代（今より凡そ五六百年前）

◎武事と節儉とが總ての掟となつてゐた鎌倉幕府の新年は、平安朝の其れに比べると、誠にひつそり閑としてゐる。

◎併し元日の旦は流石に正月らしい趣をも見える。執權を初めとして、鎌倉の武士達は大概將軍家に伺候して年始の御壽を申しあげると、軈て垸飯の振舞がある。君臣、此時に相對座して樣々の御物語をするのであるこの風が何時か關東に擴がつて、正月元日には、必ず親類縁者が相集まつて、嫁取の相談、相續の談議、その他家屋を普請すること、田畑賣買のこと、何くれとなく一年中の計畫を相談することになつた。虚禮の爲め可惜時日を潰すよりは、遥かに好い思ひつきである。

◎公の儀式ばつた節會は一向無かつた代りに、御家人同士が互ひに相招き、相招かれて、今で云へば新年宴會のやうなものが、其處此處に催され、等しく泰平の春に醉うた、其れには白拍子を聘んで舞を舞はせたり若しくは琵琶法師を招いて平家琵琶を語らせたのである。

◎鶴岡八幡宮は此地の產土神である。故に新年には必ず將軍が參詣することに決められてゐた。强ち其日は定まつてゐる譯ではないけれど、將軍參詣の日には、其行列の嚴めしさ、却々物に譬へやうもない。鎌倉の人達は此行列を拜觀しやうと思つて、群がり集まつて來る。

◎併し新年の主要な儀式は、何と云つても弓始である。是れも最初から何日と云ふことは決められてはゐない。唯だ豫め其日が決まると、射手の姓名を名簿に記して置く。扨て愈ゝ其日になると、由比が濱邊に陣幕を張りめぐらし、射手を左右に分つて相爭ふ。其時には鎌倉中の武士は殆んど殘らず濱邊に集まつて、射

術の善悪を批評する。故にこの弓始の優勝者は、非常な名誉になつて、永く其姓名を記されるのである。

弦音に松の響くや弓始　　几羊

◎尚ほ弓始の他に、笠懸、鏑流馬、犬追物、蹴鞠などの催しもあるけれど、其等は弓始に比べれば、餘り重きを置かなかつたと見える。

▲江戸幕府時代
（今より凡そ二百年前）

◎同じく江戸幕府時代と云つても、三百年の間及び京都江戸に依つて、其趣きも餘程異なつてゐるから、到底一様に云ふことは能きない。故に其の部分々々を區劃つて叙べて見やう。



◎百八の煩悩の鐘に、去年は去り、今年は來たのであるが、尚八百八街の町々は、人の跫音、提灯の光に、物凄じさ云ふばかりもない。然ながら丑三つ過ぎる程には、流石の大路も稍靜かになると思ひきや、忽ち『はせや〱』と物賣の聲が聞える。是れぞ新春第一の訪れである。抑や此のはせこそは糯を煎つて花を咲かせたやうな物、今は僅かに雛の節句に其俤を止めてゐるに過ぎぬけれど、昔は實に新春第一の魁であつた。

◎寸時、寸時すると、重くるしく大地に染み込むやうな警蹕の聲が聞える。江戸詰の大名が初登城の行列である。其間に夜が白々と明けわたる。

◎登城の行列は、實に江戸時代の見物であつた。槍持、挾箱持、悉く一種の調節を爲して練つてゆく。大大名、小大名、扨ては旗本など、各ゝ其身柄に依つて、大紋を着る者もあれば、又素袍、布衣などを着るものもある。乘物も、駕籠で行くものもあれば、馬に騎つてゆくものもある。假令その有樣は千差萬別ではあるが、儀容の犯し難い所に、言ひ知らず賴母しさが含まれてゐる。

　熨斗目より夜は明けにけり初登城　柳枝

　誰殿の紋は何々初登城　蛇足

◎扨て旭日輝々とかゞやく千代田城の大奥は如何なる狀であらうか。聞く所に依れば、お流れ戴くお盃に溢れて飜れて、御座の邊津々にうるほひ、芳ばしき香は坐ろに大奥を罩めるとかや。

◎初東風心地よく注連飾を戰がせ、門松の綠さへ一入鮮かに見える折から、年始の廻禮者は連りに來往する。雖然元日は未だ眞正に人を唆かすほどに陽氣でない。

◎二日から愈ゝ賑かく、益ゝ陽氣になつて來る。廻禮者の繁きことすら昨日に益したのに、萬歲が來る、猿廻が來る、鳥追が來る、太神樂が來る。太鼓の音、鼓の音、三味線の音。天地は唯だ雜然、騷然たる物の響に裹まれて了つたやうな氣になる。

　萬歲や首の短き鶴太夫　蘭更

　鳥追の昔模樣や梅に鳥　屠龍

◎男子は紙鳶を擧げ、女子は羽根を突くことは、實に盛んなものである。又手毬を衝くことも盛んなことは、當時の手毬唄が、今でも澤山殘つてゐるのを見てもわかる。

◎殊に正月の趣味を深からしめるのは、粋な男がこはだの鮨を賣りに來ることである。小瀟洒した唐棧織の衣服を着た若い男が、こはだの鮨の這入つてゐる箱を

二三十を重ねて、其上に紅木綿を蔽被せてあるのを、手際よく擔ぎながら、善い聲をして賣りに歩く。

◎京都の市街では、元日から十五日まで、毎朝、懸想文賣が歩いて廻つた、其扮裝と云へば、赤い袴に立烏帽子を着け、白布で面を包み、纔かに兩眼だけ露してゐる。手には洗米二三粒入れた紙符を持つて、其れを懸想文と名けて、買手があれば、其の人の縁談を祈るのである。

妹が家に買うてありけり懸想文　呂蛤

但し此の懸想文賣は、何時とはなしに其跡を絶つて了つた。此他、、、、ちよろ、大黑舞、夷舞の類まで數へたてたら、數限りもない。



◎初夢、初荷、惠方參、鷽換の神事。扨ては藏開き、藪入など、江戸幕府時代に行はれた事は尚ほ〳〵多くあるけれど、今も尚ほ引續き行はれてゐる故に、悉く略して、爰に筆を擱く。

△身を修むるの本は物を恐るゝにあり。

△家盛なる時福を惜むを要とし、家衰ふる時、分を守るを要す。

△人寡言にして沈默なる時は最も利益あり。

△樂は極むべからず樂極まれば哀み生ず、慾は縱にすべからず、慾縱なれば災を生ず。

九重の春

△四方拜

慶雲たなびく春の宮居の御有様を漏れ承るに、聖上には、午前五時に御床をはなれたまひ、女官の捧ぐる白羽二重の御衣を召し、御湯殿へとならせられます。それより新たなる御衣を召し、御束帶を着けさせたまひ、五時三十分に、掌典長の御先導にて内苑なる神嘉殿の前庭に出御になり、四方拜の式を終らせられ、しばし御休憩ありて、さらに大禮服に召換たまひ、表御殿へ出御遊ばされます。

皇后陛下には、午前四時半御起床遊ばされ、聖上と御同様御入浴の後、大禮服に改めさせられ、聖上の出御を待たせられ、恭しく新年の御祝詞を申上げられたる後、御同列にて表御殿に出御になり、晴の御膳に向はせられます。

△晴の御膳

晴の御膳は、新年の一日、二日、三日の三ヶ日に、鳳凰の間に出御あらせて供進を聞食す御儀式で、明治四年のころから行はせらるゝと申します。これは維新前の御儀式に正月一日・二日・三日に、清涼殿の朝餉（御食事の間の名）に出御あらせられて聞食す朝餉の御膳に當り、極めて嚴かな儀式であります。

表御殿に於ける晴の御膳は、ほんの御儀式に止まり、僅かに御箸を手にし給ふのみで、御式は一時間ほどにて終り、直ちに大奥に入御、兩陛下御一緒に朝の御膳に向はせられます。朝の御膳と申しても、御膳に就かせ給ふのは、もはや午時に近い頃で、此の御膳こそ年の初めの御祝のものなれば、御機嫌麗はしう之を聞食したまひ、芽出度く朝の御膳を終らせられます。





けれど新年の宮中は、下様の人々の到底思ひはかり難きほどの御多忙に渉らせらるゝことゆゑ、朝と晝との御食事はゆる〳〵召し給ふ御暇だにおはしまさず、たゞ夕の御食事のみ両陛下御同席にて典侍を御相手にいろ〳〵御物語の中に樂しく召したまふと承はります。之を脇の御膳と申します。此の時には特に御祝酒の外に日本酒を熱燗となし、鹽燒した雉子に注ぎたる雉子酒といふを參らするが例年の御嘉例であると承はります。此の夕の御膳は御物語の中に樂しく召し給ふゆゑ、思ひの外に時が移つて十時過ぎ頃に至つてもなほ御膳部の下らぬこともおはすと承はります。これで一日の御祝儀が終るので三ヶ日ともほゞ同樣であります。

△庖丁天覽の事

御膳の御給仕は、掌侍等が之をつとめ、また御膳を重ね給ふなりには、別の御茶椀に盛つてさしあげ決して先に召し給ふた茶椀に進めまゐらす事はないと申します。御膳部の調進は、大膳寮でうけたまはり、大膳の司が夫れ〴〵分掌して調進し奉るので、それには燃ゆるやうな緋羅紗の禮裝で奉仕するのであります。

今は廢せられたれど、明治四年の頃までは新年に鶴庖丁とて、鶴の調理を天覽あらせられたものであります。此の日、聖上が御簾内に御着座あらせられ、陪觀の文武百官がまた左右に居流れて着座すると、調理を承つた庖丁人は烏帽子素袍を束帶して恭しく御前に進み、膳部の運び出せる爼板の前に着座して、白木唐櫃から庖丁二挺を取出し、黑塗筥に納めてある一羽の鶴を爼板の上に移して、方式正しく之を解き了るのです。かくて天覽が終れば、解いた鶴の肉は御厨所に於て調理した上、其の内の九切を聖上の御膳部に上せ、他を各親王方等に賜はつたものであります。



繪もの語　連理草

太田三郎

井出の下紐

ある旅の男が、或る時大和の井出といふ里に泊りました。

と、其宿に八ツばかりの極く可愛らしい女の子がありました。男は不圖柔かい其手を執つて、末は必ず女夫になどゝ笑ひながら戯れました。幼い女はじつと星のやうな眼を瞶りました。男は軈て旅嚢の底から紅の絹を取り出して、下紐の料にと與へました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

十年ばかり經つてからのこと、男は又其邊を通りました。が、其時はもうすつかり往昔の事を忘れて居りました。すると突然、とある家から呼びかけられました。

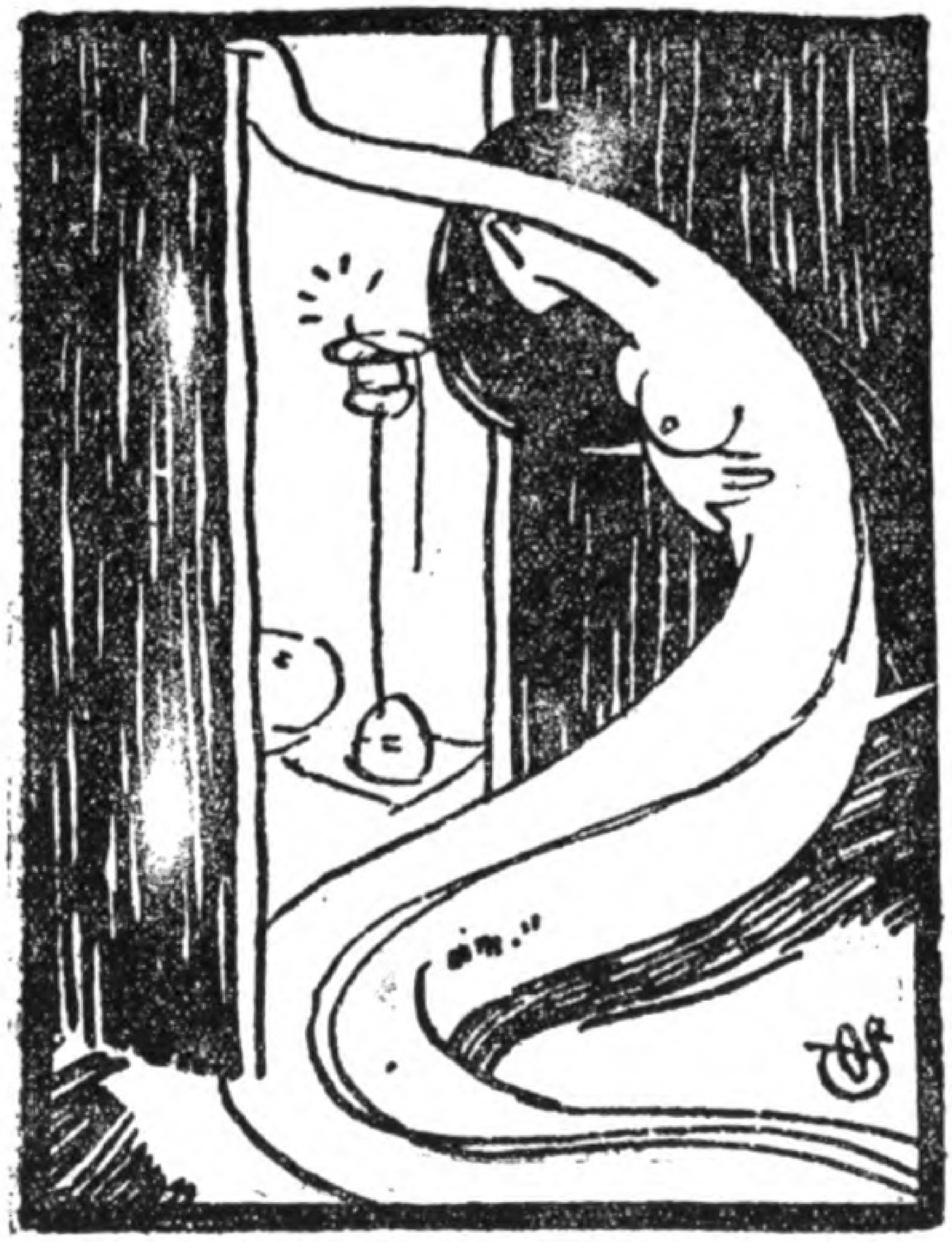
ときかへし井出の下紐ゆきめぐり逢瀬うれしき
　玉川の水

嚮つて振返ると、其處に花耻しい少女が、燃ゆるやうな瞳を此方に向けて居るのであります。——男ははたと膝を打ちました。俯首いた女の頰は颯と染りました。

一夕の戲れ言は終に事實となりました。



執着



美くしい少女がありました。黒髪長い十七の純な血潮が、そゞろに人懐しう湧き立ち初める頃、不圖鎌倉の若宮の兒の一人を見初めて、様々に心を砕きましたが、少年の心の春は未だ淺くつて、燃えに燃える女の欲求はどうしても充たされませんでした。

少女は片戀の惨めな悶えの中に身まかりました。

すると、其夜から夜毎に兒の部屋に當つて、艶めかしくさゞめき合ふ聲がするやうになりました。周圍の人は怪しんで、或夜窃かに覗いますと、こはいかに其處に蘭燈かげほのかな下に、美くしい少年と八尋に餘る雌蛇とが、さも樂しそうに抱き合つて居るのでありました。

驚怖に震へる人々の顔は宛で死泥のやうでした。加持祈禱いろ〳〵と手を盡して、其不可思議を除かうとしましたが皆徒でした。歡樂の聲はなほ夜毎に聞へました。

する中美少年の顔から、何時とは無く血の氣が失せて行つて、丁度少女の死んだ翌月の其日、無惨にも冷たくなつて了ひました。

後、或る時故あつて少年の墳墓を開いて見ましたら、其處に亦件の蛇が、亡き骸を七重八重に固く〳〵抱き締めて居たそうであります。

失戀の少女の烈しい執着が、蛇となつてまで心の人の肌に觸やうとしたのでせう。

燕

山城の國に、一人の娘と而して其聟とを持つた老夫婦がありました。ところが聟は不幸にして世を早うしたので、思慮深い渠等は、未だ年若い女の爲更に配するに他の男を以てしやうとしました。が、女はどうしてもそれに從ひません。再び仇し人に目見えて、故人を想ふ其懐しい追憶からさへも離れねばならぬのは、彼女の堪へ得ぬところでした。併し親はまた、老い行く己が身を思ひ愛孃の未來を憂いて、そうした心の儘にのみ任しては置きませんでした。執拗な老人達はなほ日に夜に絶へず其娘に迫りました。拒み難い恩愛と沒し難い自己、氣の弱い女は當惑の頸を深く〱襟にしました。

と、丁度其頃その家の軒に、配偶を惡童に奪はれた雌燕が住んで居りました。女は或る日ふとそれに思ひ村いて、恁う其父母に請ひました。

「ではどうかあの雌燕が歸る時、何か印して放つて下さいまし。翌年もし異なつた雄を伴つて參りましたなら、其時こそ如何やうともなりませう。」



斯くて燕は其頸に紅の糸を結ばれて去りました。

やがて其翌年の春もやゝ更ける頃、件の燕は又姿を古巣に見せました。が、貞操な小禽は終に孤獨でした

女の頬には。寂しい喜びが寂しく浮びました。

父母も憐れとも見よ燕すら二人は人に契らぬものを

繪の女

描ける女に戀をした人のはなし。

京の室町邊に篤敬といふ青年が住んで居りました。或る時何心無く求めた衝立の、賦彩あざやかな繪の人を堪へがたく美くしと見て、圖らずも烈しい物思ひに陷つて了ひました。

併し描かれた女は、たゞ徒づらに而して不斷に嬌態を見せるのみで、素より其の衣紋の線の一すじすら動かしません。男の脣の火のやうな情を受けるには、繪具の脣はあまりに冷たくあまりに小さ過ぎました。

終に青年は懊惱の床の人となりました。

と、ふと憑う云つたものがあります。

『繪の人の名を指してつねに深く念じ高く呼ばゝりたまへ、軈ては應へるときがあらう。』其の時、百軒に酒を買つて供へたまへ。君の望みは必らず遂げられやう。』



青年は喜んで其云ふが儘を行ひました。

不思議にも言は事實と現はれました。百樽の清酒の芳醇な薫りにつゝましう繪を出でゝ、面眦ゆげに寄添ふ黑髮の手觸り、男は身も魂も蕩け果てゝ、驚喜にときめく靑春の筋肉が、いつそもう、唯わなく〳〵と慄へるのみでありました。

斯くて現世の男と繪の女とは、行末長く睦じい日を送つたとか云ひます。

あはでの森



『妾の可愛いゝ可愛いゝ男はどうしたでしやう。』

いじらしい女は、尾張阿波手の森の木下闇に佇んで行く人毎に尋ねるのでした。――奥州から京都への其頃の驛路は、ほの暗い森陰に一すじ白う東から西へと走つて居ります。

『妾の可愛いゝ可愛いゝ男はどうしたでしやう。』

彼女の夫は或年の秋暮るゝ頃、やみがたい用を帶んで奥州へ下つたきり、其思ひ出の秋は幾返り幾返りしても、なほ未だ歸つて來ないのです。

『妾の可愛いゝ可愛いゝ男はどうしたでしやう。』

併し慌しい行旅の人が路傍の女に應へるものは、氣味惡そうな眼差と冷やかな笑ひとばかり、男の消息は杳として知るよしもありませんでした。

憫しい女は、終に明け暮れの悶へに捉はれて消へました。

ゆくりなく其可愛いゝ男は歸つて來ました。驚愕と絶望とに胸潰れた夫は、旅の草鞋の紐さへ解かないで新塚の上に伏した儘、日を夜を泣きに泣きました。がなほ堪へ兼て、時の聖東岸居士に反魂の法を請ひました。

法の力、否、女夫の愛の強い力は宙に凝て、軈てありし日の美しい妻は、立昇る香烟の中に微笑みました。

今猶殘る反魂塚が、其艶容を葬つた所であります。

女夫蝶

大和の國に、草の花を世の何よりも好む若い男がありました。赤い花、靑い花、四季折々の花といふ花は悉くこれを育て培つて、芳烈な色と匂ひとの中に、自己のすべてを沒して居りました。

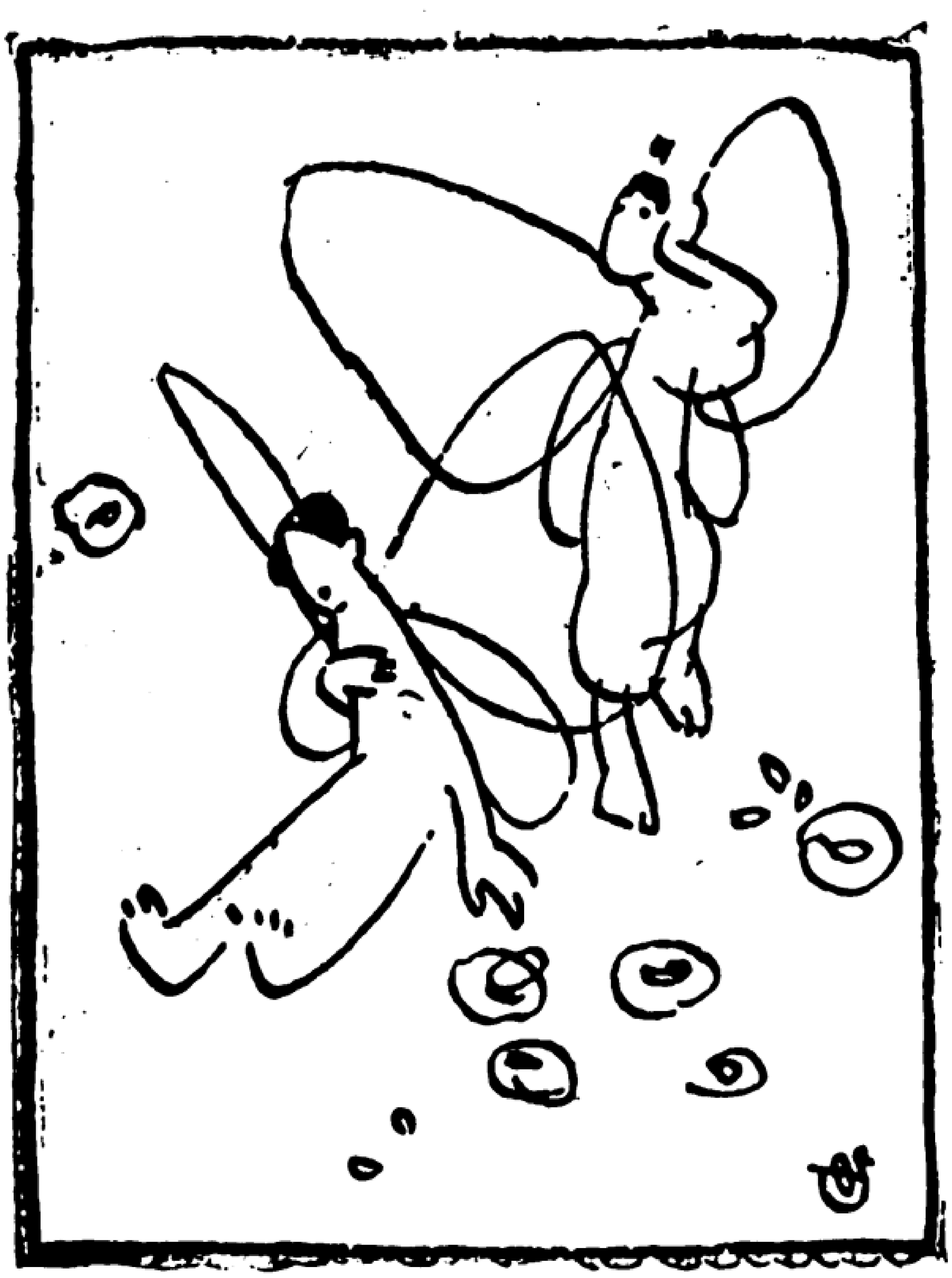
と、丁度同じ部落に、これも亦其靑年に劣らぬほどの嗜好を草の花に持つ若い女がありました。優しい美くしい男と女とは朝夕に往き來して、同じうする趣味の、にほやかな樂しみを怡しみ合つて居りました。

する中、わかい若い心は互に引かるゝ或る何物にか引かれて、終に紅深い花陰に人目を避けるやうな仲となりました。

戀は戀て圓滿な結末を見ました。歡喜の情に其花瓣を慄はせる幾鉢も幾鉢もの草花は、或日女の家を出て男の家に入りました。

程なく新郎新婦は玉のやうな男の子の親となりました。春の光夏の光、秋冬の光は愛と美の花園に注ぎ注ぎました。かくて二人は紅紫の間に天壽を終へて、或る年夫妻殆ど同時に花と子との世から離れました。

後、二月三月經つてからの事、殘された子が夢に懷しい父と母とを形見の園に見て覺めて、ふと後庭に出てみると、其處に嘗て見た事の無い美くしい雌蝶雄蝶が睦まじげに纏れ合ひつゝ、咲盛る花の間に戯れて居たそうです。



雨

亢奮した感情に驅られて、二言三言つい云ひ過した言葉の搖ぎが、終に破綻の大波を立てゝ、玆に或る女夫の赤縄は果敢なく切れました。

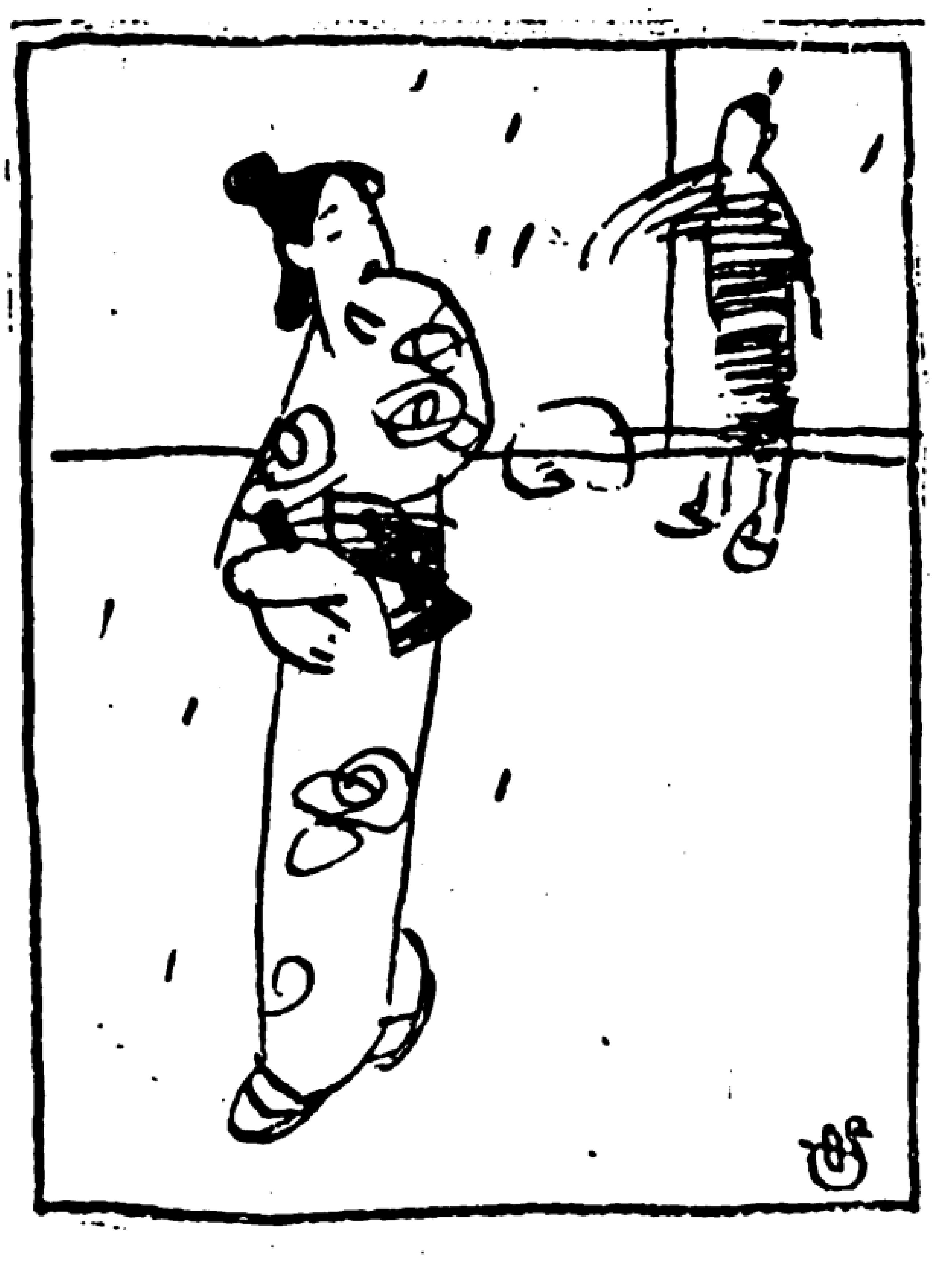
去られた女の遲々たる歩みは、やがて潜るに慣れた門を後にしました。

と、折から遽かに變る空模樣、篠突く雨は其悄然とした後すがたに降りしきりました。

戸に凭る夫は思はず呼び止めました。一度去つた女は渠にとつて全く路傍の人ですけれど、然も年ひさしく添ひ慣れた夫婦の情の微妙な力は、なほ其の路傍の人の雨に濡れそぼつのを厭はしめたのです。せめては晴れるを待つて去らしたい。男はそれを云ひました。

驚いて振返つた女の瞳はちらと輝きました。が、直ちに思ひ返して、

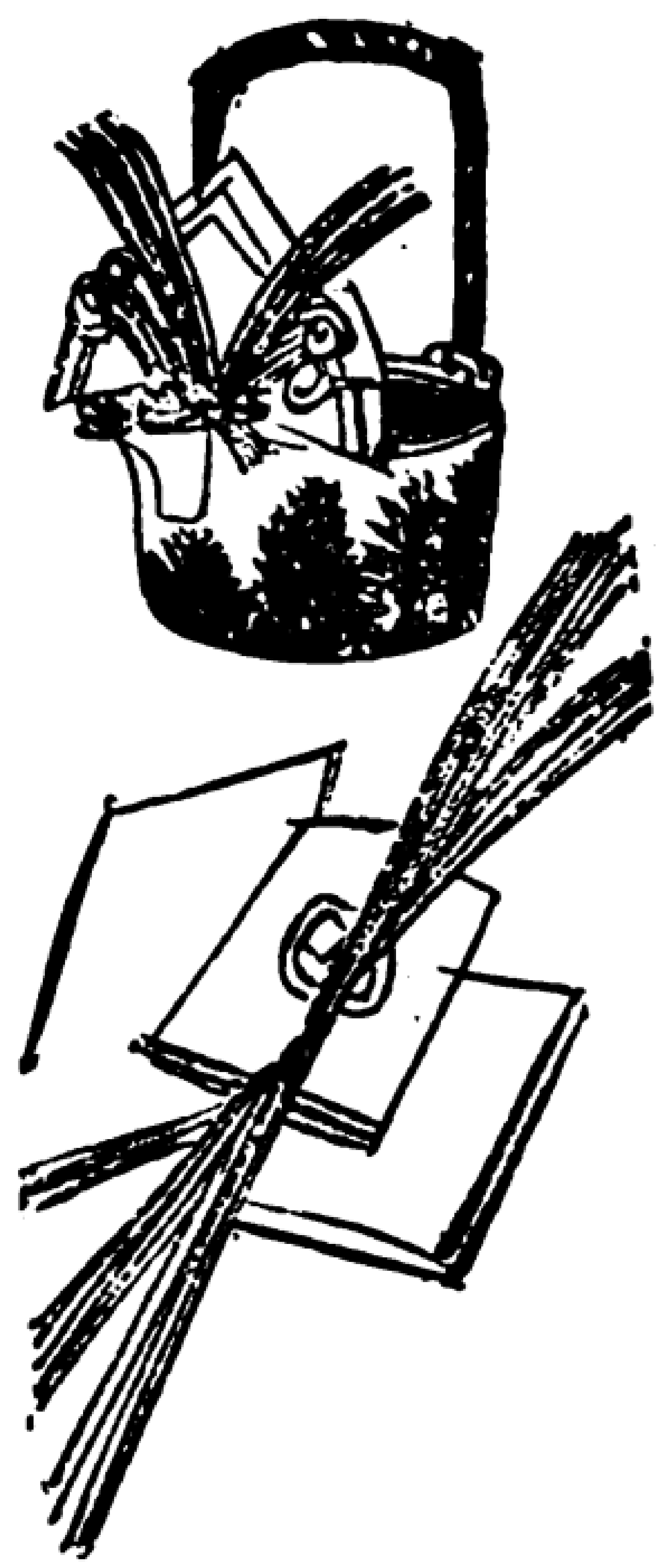
降らば降れふらずば降らず降らずとて兎ても干ける袖ならばこそ



語尾は涙に消へました。——雨は益々強く女を打つ。

男は矢庭に飛んで出て、いとしい妻を抱き入れました。

軈て空は霽れました。併し女は再び外へ出ませんでした。



むかしかたり 京都の女

四明老人

○京の水といへば、京都の美を代表した名のやうにも聞える。京の紅といへば、京女の代名詞にもならうか、明治の天地へ片足かけて、七分三分に新舊時代に跨つて、尚ほ活きてゐる余の如き老人には、むかし戀しう思ふ面影も眼に殘つてゐるし、今目のあたりに見つゝある文明の風俗もあり、その變化、その移り行き宛がらに時代祭の其れにも似通ひ、歴史とも覗ゆるがあり、演劇とは想はざるがあり、能狂言にも歌舞音曲にも類するがあり、東山の朝夕の眺め、鴨川の昨日に變はる淵瀬啻ならずで、そこにをかしみもあり、思ひ出の美といふものもありと謂はふか。

○試みに先づ御苑を逍遥して見る。すると皇居は儼然存し、その界隈には稚松も早や梢高う茂り、常磐の緑の色も濃く、建春門の破風の聳えた其の形は、鶴の翼を伸せるにも似て、端なく今年の勅題も思ひ出されるが、それ許りではない。そこはかとなく徘徊すると、今も猶ほ昔の如く、さま〲の幻影が眼に遮ぎり、節會の采女も見え、被衣の上臈も見え、扨ては、文使ひお花使ひの麗はしい姿までが、髣髴するを禁じ得ないのである。

○されば以下に記することも多くは此の御所を背景に取り組みての繪であるから、或は土佐の末派の何の守の筆にも似て、油繪の流行今の趣味には、蟲蝕たる障子繪の如く、恐らく無味の譏りを免かれまいか。否、四條の畫風そのまゝの蒲團きた山の姿を背景とし、棕蔭時代の繁昌も亦繪として擧ぐる場合もあらうが、これさへ今の新思潮には、觀照の價なからんか、然しな

がら、京の京らしき美といへば、むしろ過ぎ去つた時代にあるので、却つて眞の京の匂ひが味はれはすまいか兎にかく畫い付けて見るのである。

●岩倉家の老女

光琳の落し込みのやうな白綠の苔蘚が、檜皮の屋根の處々に見える。その四脚の御門は常に鎖されてゐる此方の通用門から今出られたのは岩倉具慶卿である。一門の棟梁たる一條家へ往かれたので、何の御用であつたのかは知るに由なしであるが、烏帽子狩衣の路服で、六十四五とも見える老卿であつた。次裃に股だち取た三石さんが、例の如く太刀を持て、其の後から御供をして行つた。沓持は淺沓持て、又其後から

春も尚ほ淺き乾御門の此方、照る日にも陽炎の立ち兼ねてゐる寒さ。殊に今とは異ひ、諸公卿の御殿で建て詰つてゐた時のこと。後影の坐ろに淋しう見えたも道理。御養子であつた具視公の爲に、容易ならぬ心配をせられてゐたのである。

具視公は當時尚ほ勅勘の御身で。北岩倉に幽棲し給ふたのである。御父子の對面さへ禁じられてゐたのである。

棚引く霞とも見えた筋壁の御築地に沿ひ、公家門の前を南へ、南門の前を東へ、有栖川宮の御殿を西に見て、堺町御門から、內丸太町の宅へ歸られたが、當時は尚ほ僅かに百五十石といふ貧しい堂上のこと。御殿といふも名ばかり、廣からぬ御住居で、「御歸り」と觸れ込むお供の聲も裏まで筒ぬけ。

それでも御玄關には、迎へ出る人の影も見えず、老卿は草履ぬぎすて、突と奧へ入り給ふたが、物の陰まで、迎へ出てゐられた女中があつたか、

「おゝ、初島、今歸つた」

との仰せ、初島といふは老女の名で、當時誰れ知らぬものなき男まさりの賢女であつた。素は膳所の家中といへば、武家の育ち。何處やらに其れと知られる品格も見え、歲の頃は早や五十路の坂を越えて見えたが身の嗜みの薄化粧は、いづれの御殿も同じこと。髮を

厭へ苞とやうに結ひ、殿上眉の黛の色も匂ふ許り常衣ながらも刺繍の華やかな打掛の裾長く曳き、老卿の後からお便室へ入らせる。老卿は床脇の漆も剝げた冠臺に烏帽子を置き、其儘火鉢の側。

「お寒うあらせられましたでせう」

老女も近う御側に侍し、埋火を搔き起す。

「いや、格別寒うも無かつたが、殊の外話しが長うなり。……」



「では諸太夫方にお逢ひ遊ばして」

門流の堂上でも、特殊な事情のある場合は知らず、攝家方に對面を得ることは容易に出來なかつたのである、何の願ひがあらうとも、諸太夫に會うて引き取るのが常の事、況して具慶卿の今日參殿せられたのは、勅勘を蒙りをられる御養嗣の身の上に關したことで、諸

太夫さへ情よく聽いてはくれまいかと案じゐられたはどのこと。歸つて後にも尚ほ殿下の思召如何を氣づかひをられたのである。

「幸ひ今日は、保田因幡の當番であつたので、聞き込んだ次第を、逐一述べ置いたぢや。因播守も、其れは容易ならぬ儀、嘸御心配であらう。殿下へは折りを見て申上げ、早速取計らひを致さうといふことであつた。それで其の夜分密かに出入りを致す藩士らしい武士が、薩摩であるか、土佐であるか、又た何處かに隱れてゐる長州であるか、其邊のことは分り兼ねるが、孰れの藩士に致せ、朝廷へ對し、畏れ多いことで御座るで、乾度御叱りを蒙りたいと、斯う申し置いたのぢや、何と御處置を下さるか、先年のこともあり、現にまだ御勘氣を蒙りをる身の上のこと家名にでも拘はるやうなことがあつては、先祖にも申譯け無し……」

洛外に蟄居の身でありながら、何か秘密に謀議せられることのあるか　夜分密かに往來をする怪しい武士があるといふ風聞を告げに來たものゝある處から、老卿はきつう心配致されて、此儘では打捨て置かれぬ、殿下へお縋り申し、事の洩れぬ中に、といふ計らひであつたのであらう。之れが爲に昨今は、一倍歲を取られたやうに、冠下に結ひ上げてあつた御髮にも雪霜を加へたのである。

「然りながら、そのやうに御心配遊ばすには及びますまい何も御上の爲と思召して遊ばすことゝ御察し申上げまする。いつそ私しが只今から岩倉まで……」

「いや〳〵、そのやうなことは相成らぬ。」

御臺所向きの不如意がちであつた時代には、女ながら密かに仲間の姿に身を扮し、買物歩きは愚か、參内の御供をさへせられたといふほどの老女。彼の近衞家の村岡刀自とは、その道を異にするものゝ、その宮つかへの家庭から、維新の大功臣を出だしたるを見ても亦忘る可からざる老女ではあるまいか。

余が竹馬の友早苗某と云者の母も、同じく膳所藩の人であつた、初島老女と昔馴染であつたが、「今日は岩

倉さんへ行く』と、遊戯の際、幾回か耳にしたことのあるを今に記憶してをるのである。尚は此外に聞きし逸話もあるが、追つて機會を待つことにする。

●有職の御鐵漿筆

○蕪村の句に

養父入や鐵漿もらひ來る傘の下

といふのがある。拙いが予が句にも

桔梗や遠かりし緣も鐵漿もらひ

といふのがある。



○嫁入前には、親族の誰れ彼れ、近邊の誰れ彼れ、五七軒も目出度い夫婦の鐵漿を乞ひ得て、それを涅けたのである。今から考へれば、随分をかしな風俗であつたが、それでも當時は當然のやうに思ひ、何も不自然とは思はなかつた。

○然し斯様なことが長くいつ迄も續かう筈がない。福澤翁の楠公權助の論と同じく一時世を驚かした片輪娘の諷刺から女の鐵漿を染める風俗は漸く廢れて來て、今は此の京都でも、纔かに片田舍の人の昔氣質の記念に殘つてゐる許りである。

○維新前には、女ばかりでなく、御所では關白樣を始め、堂上方は皆齒を染めてゐられたのである。畏れ多いが、聖上にも鐵漿を召されたのである。其の記念とも謂はうか。老人の秘藏してゐる一品で、御上の御鐵漿筆といふのがある。これが又た有職風に至て麗はしう調製せられてゐる。

○大要その美しさを述べて見やう。普通の鐵漿筆のやうに、鳥の羽で筆さきは出來てゐるが、鴨であらうか鷺鷥であらうか、翠色で幾枚も重ねてあつて、横にすかつと切てある。粗ぼ扇形になつて、頸とも謂ふべき處が、絹の綿糸の濃紫で卷いてある。

○普通のは軸が至て細いが、此の御品は太筆の軸ほどで、羽根の頭を除いて、四寸餘もあらう。それが紅、綠、黃、白の四色で、一歩幅もある綿糸で左右から網代のやうに交互卷き詰めてある。そして其上に淡紫の細い綿糸で同じやうに左右から粗目に卷てある。それで業平菱のやうに麗はしい一種の模樣が出來てゐる

○それから軸の一端には、白、紅、綠、黃、靑の五色のまが糸で、寸に餘る流蘇が附けてある。飾り物にもしたいほどに、美しい、これを御用ひになつたのかと思うと、他の御調度などの美しさも想ひやられ、宮中の御品の有難さが偲ばれる。

○今も節分の日に、京の町家の小娘ばかりか、廓ものなどが、競うて花嫁の裝ひをなし、お齒黑紙で、齒を黑くし、例のお化けをして市中を步るくも、斯ることも昔の面影かと思へば、惜からぬ心地がする。椿頰紅茄子鐵漿とか言た過去の遊戲も思ひ出される。

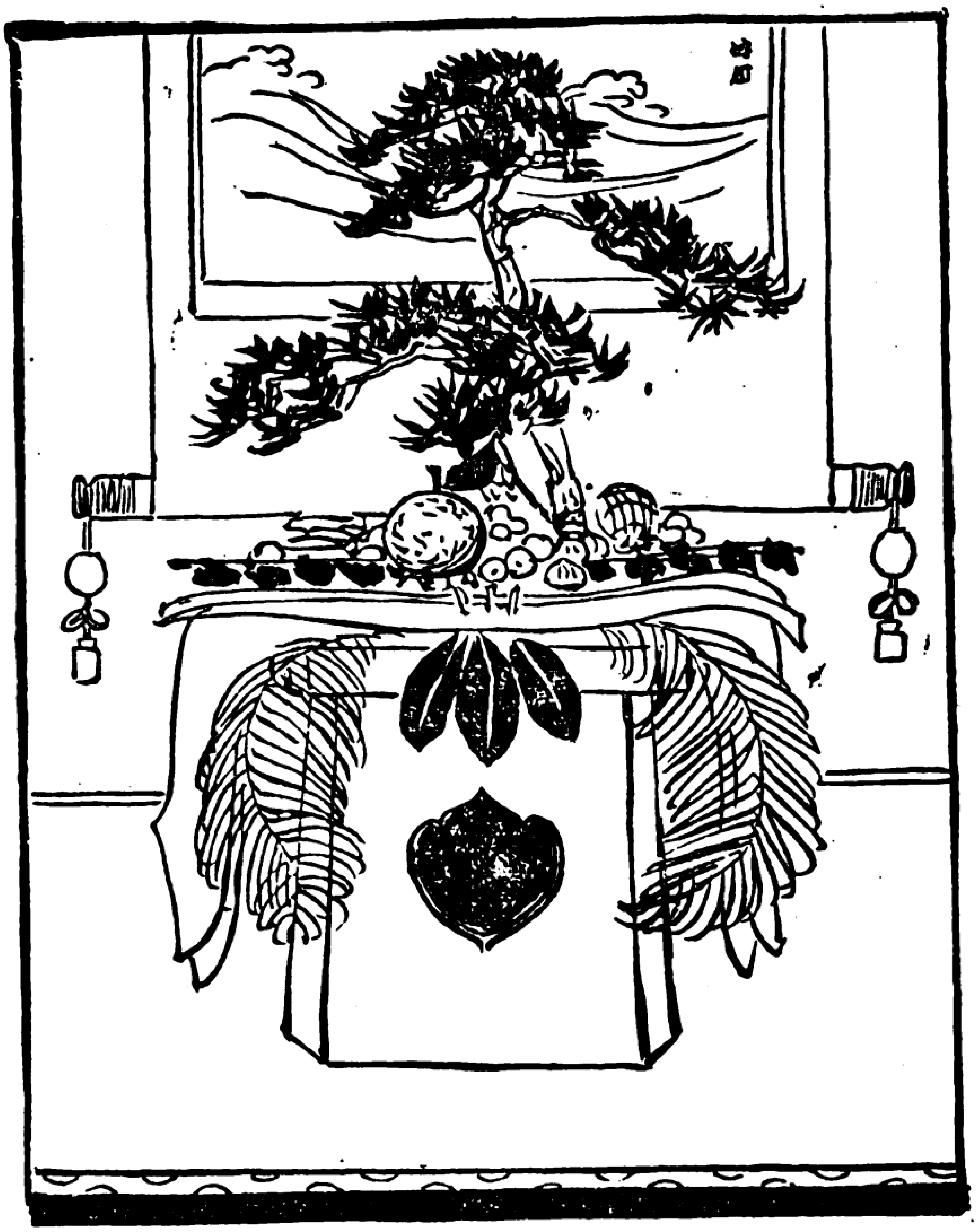
○扨て次は何を出さう。內容は滑稽趣味をも加へよとの編輯部からの注文もあるので、幸ひ今狂言の滑稽美を研究しつゝある際のこと、それをとも思うたが、美學といへば、食はず嫌ひの多い今の世の中。これほど面白い學問が他にあらうかと言ひたいのを、暫く遠慮して次に御典醫の逸事を出さう。讀で可笑しくば、可笑しい理由を美學の先生に質したまへ。悲劇喜劇は、玉碎美學、瓦全美學でなうて、誰れが巨細に趣味多く說明しやう。敢て我が田に水を引くのでない。

●氣輕な御典醫

今日は陸奥どのが上がらしやると御典醫の〇〇〇陸奥守が、參内する日には局方が朝から待ちをられたとやら。

その逸事を書くまでに、一つ言ひたいことがある。それは外でない。奥道一の戯著、「醫者風流解」に、

あるき〳〵飯くふ醫者の乞食かな芝翫の眞似は戸をあけてから



と云ふがある。これが御典醫を痛罵した狂歌である。中には稀れに、供一人に、例の御藥籠を入れた挿箱を擔がせ、次裃で往診も徒歩姿であつたが、流行醫であると、皆駕に乘り、全盛であつたのは、六尺の四枚肩、駕脇に若黨さへ股だち取て附き從うたのである。此の駕の出入りが、慣れぬ間は却々むづかしかつたので、何うかする

と頭を打つ、片足跨げて出るに出られぬこともある。稽古をさへしたものさうな。まして芝翫の眞似などするには、餘程慣れたくすしでなくては出來なかつたのである。

俳優といへば、河原乞兒といひなした時代にも、五位六位の御典醫がその科介を眞似たのである。後高かに駕を降す。引戶を引く、上蓋を刎ね上げる。草履を投げ出す。皆六尺又は若黨の所作であるが、輿中の先生豫て身仕度してをつて、左に横たへた刀おつ取り、片足草履に掛くるや否、すつくと立ち、扇子でぽんと袴の襞の亂れを正す。若黨は路を避けて蹲がみゐる。提げ刀で咳ばらひ。御見舞の聲に送られての花道、隨分面白い刀圭先生の芝居ではないか。

今此の眞似をして笑はせるドクトルは、京に唯だ一人しかないが、それは兎も角く、陸奥どのもお駕であつた。御所の御臺所門で下乘は無論のこと。それから御典醫の詰所に出て、こゝで着替をしられる。

陸奥どのは五位であつた。赤裝束を召す。冠をきられる。所謂衣冠の姿で、扨て御機嫌を伺はれる。それが相濟むと、局衆が待つてをられて、

陸奥さま「今日は御歌を一つ遊ばせ。此の御菓子戴だかしやつて」

と所望せられる。又嫐られるものぢやとは豫て承知でもあるので、謹で辭退をされる。すると、

「それでは、何卒何なりともお隱し藝を遊ばせ」

と、早や局方の豊な頰には笑ひが浮ぶ。陸奥守どの、勅なればといふこなしで、その御菓子の盛られた小四方を引き寄せ、恭しうおし戴き、三つ四つ二つ手に取て、

「さらば御免を蒙ります。御覽下されませ、修學院の中の御茶屋は御存じで御座りませうな。あの御板戶の夜な〳〵跳ねて出たと申す鯉の眞似を致して御覽に入れませう」

何をするのかと思ふと、御菓子を宙に投り上げては冠の紐も斷れるかと氣づかはれるほどに、大口を開いて、それを啖つと受けて食べるのである。

それが又た至て上手で、高き御天井にも觸れる許りに投げ上げては受けられる。否、落しもし、拾ひもするが、一擧一動、總て可笑味があるので、局方の高笑ひは言ふまでもなく、側近き御翠簾の内にも、笑はせられる御聲の洩れることもあつたとは、亦名譽な光榮ある御典醫ではないか。三字名の苗字といへば、知る人は知らうが、それは姑く憚かつて置かう。殊に先帝の御氣に入りであつたとは、益ゝ有難いことではないか。



果ては大奉書に盛られた、麗はしい御菓子を其儘おし戴き、逃げるが如くに引き退つて、又も著更へすました顏で、病家あるき。芝翫の眞似は知らず、誰れの眞似をしられたであらう。

文藝の春

春の一夜

大江百合香

「角帽に海老茶式部のひぢ鐵砲
　　　　　　靜肅にして犯すべからず」
大和さん十八番の空讀に、集まつた男女一齊に咄と笑つた。笑ふからいけないんです靜肅ですよと、大和さんもくすぐつたいやうな顏をして斯う云つて、今度は眞實に靜肅に讀みはじめ



た。
「みかの原・・・・
「湧きて」の聲が掛るか〻らぬに、素早い事、ハイハイツと札が飛ぶ。
こゝ駿河臺は山本邸の奥座敷、金襴たつ大廣間に、例年の如くかるた會を催すとて招待狀に接して集りたる人々總數凡そ三十餘人。吾れこそ今宵の月桂冠得んものと、腕をさすり身を乘り出し、よき敵御參なれと兩軍相對してひかへた勢のもの〳〵しさ。
意氣甚だ揚り、讀札が減るにつれて、興は益々加はる。あと五六枚となつた時の賑かさ。
讀みにかけては名うての辰野さんは例の美音で音吐朗々、中頃になつて讀みつゞける。
惜しい事、遂々一枚の差で、勝利は源氏の手に歸した。
明ちやんは御主人役と云ふので、難有くもないメンバア掛り。片隅の火鉢にかぢりついてる私を見上げて、殊更に百合さんと呼んで
『君はれ、高橋さんとですよ、ソラ彼處に居る方山田さんの右手に!』
云はるゝ彼方に目をやれば、高島田重げに厚化粧した美しの人、張りのある目をうつむけて仰せかしこまつて中程に座を占める。もう此の渦卷の中に捲き込まれたから、大に奮闘しなくてはならない。
林さんの美しい讀み振りに　吾れしらず手が延びて、ヒラリハラリと札が飛ぶ。
「春の夜の夢・・・・」
「ハイツ」
「名こそ惜しけれ、白露に風の吹きしく秋の野は





つらぬきとめぬ玉ぞ散りける、秋風に」

「オツトコイ」

「月のかげのさやけさ、これやこのゆくもかへるもわかれては、知るも知らぬもあふ坂の關：……」

「ヨイシヨ、ソラ來たツ、御免ツ、と各〻に面白い掛聲が讀手の美音を絡つて耳に響く。

勝負がついて、審判官がノートに記入を終ると、藤さんは散つた札を集めた。十六燭の電燈の下、松の簪が稍ゆらいで、鬢の後り水がたれさう。

集つた廿餘人の男女達の內、知らない顏は十人許り。

また始めた。上の旬の順に並べながら、下手ですから敎へて下さいましと廣澤さんに云ふと目白臺のお手並拜見だの、お手柔かに願ますだのつて、眞面目くさつて仰つしやる。隆さんは近眼鏡越しに、

『君、天狗の鼻を折つてやつてくれ給へ』

ですつて。

煙草の煙が室內をこめて、息苦しい如、息がはづんで頰が熱い。鋭い眼差しは絶えず札の上に注いで、手はわなく〳〵とうちふるふ。眼中あるは唯札許り、互のハートの鼓動さへもしや聞えはせぬかとのやう、胸は躍つて時めく。

「ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲聞けば

……父かとぞおもふ母かとぞ想ふ」

廿五枚の持札は、瞬く間に散るのか飛ぶのかひら〳〵はら〳〵と空にかへて、ひらりと落つるもの、疊をすべつてかくるゝ札、纎手に採られて投げ出される札——。むら雨の——

さながら晴天の霹靂、御免遊ばせの聲よりも疾く、廣澤さんの持札はひらりとかへつてもう見えない。

「ハイヨツ、」「失敬」、「御免遊ばせ。」

我れからいだす聲異樣に甲走つて、狂ちみたやうで可笑しい。

危い所を通り拔けたと安心したのか此方の油斷で、持札が少くなるに連れて敵は獰猛に競つて來る。對手の太刀先鈍つたと見るや、勇躍した廣澤さんのあざやかな御手並にとう〳〵二枚





殘されました。

「お茶――、皆さん札をあつめて下さい」

若い者つて仕樣のないもの、明ちやんが妙な節をつけてどなつた。スル／＼と襖の開く音、障子をさつとおし開ける音、外の冷たい空氣が水のやうに流れ込んで、熱し切つた腦に心地よい感覺を與へる。丁度此の時高島田の女の手によつてお茶とお菓子が運ばれた。雜談についでは天狗の鼻合せ、無邪氣の氣焔に、小卅樣迄笑はされて、嬉しさうに微笑みながらふすまの外に消えられる。

「小松原さん、是非どうぞ」

「駄目ですよ、僕は風邪を引いて聲が出ない」

其の癖御風邪らしい容子も見えない。壽枝さんも絹さんにまじつて、れ、御願いたしますよ、是非れ、と切に賴み入つてる。

「何でもいゝよ、絹さん、水を持つて來たまへ。」

明ちやんに云ばれてあたふた水を取りに行く

「さ、お蒲團は此所でございます。」「お水もここへ置きますから――」、「ちよつと露ちやん恐れ入りますが電燈をこちらへ!」

明ちやんは象牙細工に黑塗りの琵琶取り出して、床の間に正面の座蒲團の右手に置いて、其の儘。

「さ、小松原君、所望々々。」

もう絕體絕命の小松原さんは、仕方なしに立ち上つて席を移すと、琵琶を取り上げた。一座靜然として水を打つたやうな。

祝ひのためにか松ばやしを一曲。次には皆の望にまかせて、常陸丸を、――

あの悲壯な常陸丸を!

嘸その御聲の男ましさ!高低自在に消えも入るべき妙なる其の音を、强く張りたる四絃も切れよと九寸のばち先に響かして、「身體こゝに谷まりて…、」細めた聲を忍び音に、しつとりと落したるたくみさ、まあどうしてかうも御上手なのかしら。

膝もくずさず悠然と琵琶をかゝえる其の態度きやしやな手にばちを取つて、絣の御召の胸の邊りゆるぎもなく…。

「十年の間朝夕に、みがき鍛へし日本刀、試さん敵を前に見て、遺恨の刄一太刀も報いん事





も泣く許り。」

咳一つせずしんとした室の内に、張のある美くしい聲が床しい音をまじえて衆の耳に滲けるやうに入る。天才!!小松原さんはたしかに天才でゐらつしやる。

拍手の音、喝采の聲賞讃を降るやうに浴びて樂手は伏目になつて琵琶を置いた。亡き師翁が愛でにし高弟とは、誰が目にも耳にも知られた。

廣蓋にうづ高く盛られた菓子は、皆の腹中に成佛して、まがきに菊の金蒔繪が、二三つ殘つた桃山の影からのぞいて居る。みかんの皮も黄金に高く。

琵琶の音に酔はされて面々の前へ、標準の取札は出された。

伊勢田さんとは互角の御敵手、息もつかずに三回續ける。どうして仲々工科だつて馬鹿には出來ない。早いの何のつて有りやしない。かるたの上手な人は、必度、すりも上手かも知れないわ。ホヽヽ、まさかれえ丁度狐色に焦げた半ぺんのやうな角帽かぶつて、近眼鏡光らせながら歩く所は、どうしたて刑事に尾行られさう。オホヽヽ御免遊ばせ。

千變萬化の秘術を盡して敵の心膽を寒からしめた娘子軍の將、今年の初陣に美事討死か、と口惜しがつたか、嬉しい事、間一髪!今にも首かき切らんとする刹那!!

「しのぶれど色に出にけり我が戀は……」

「おゝ此の札こそは敵手にあれば逃さぬ札。」

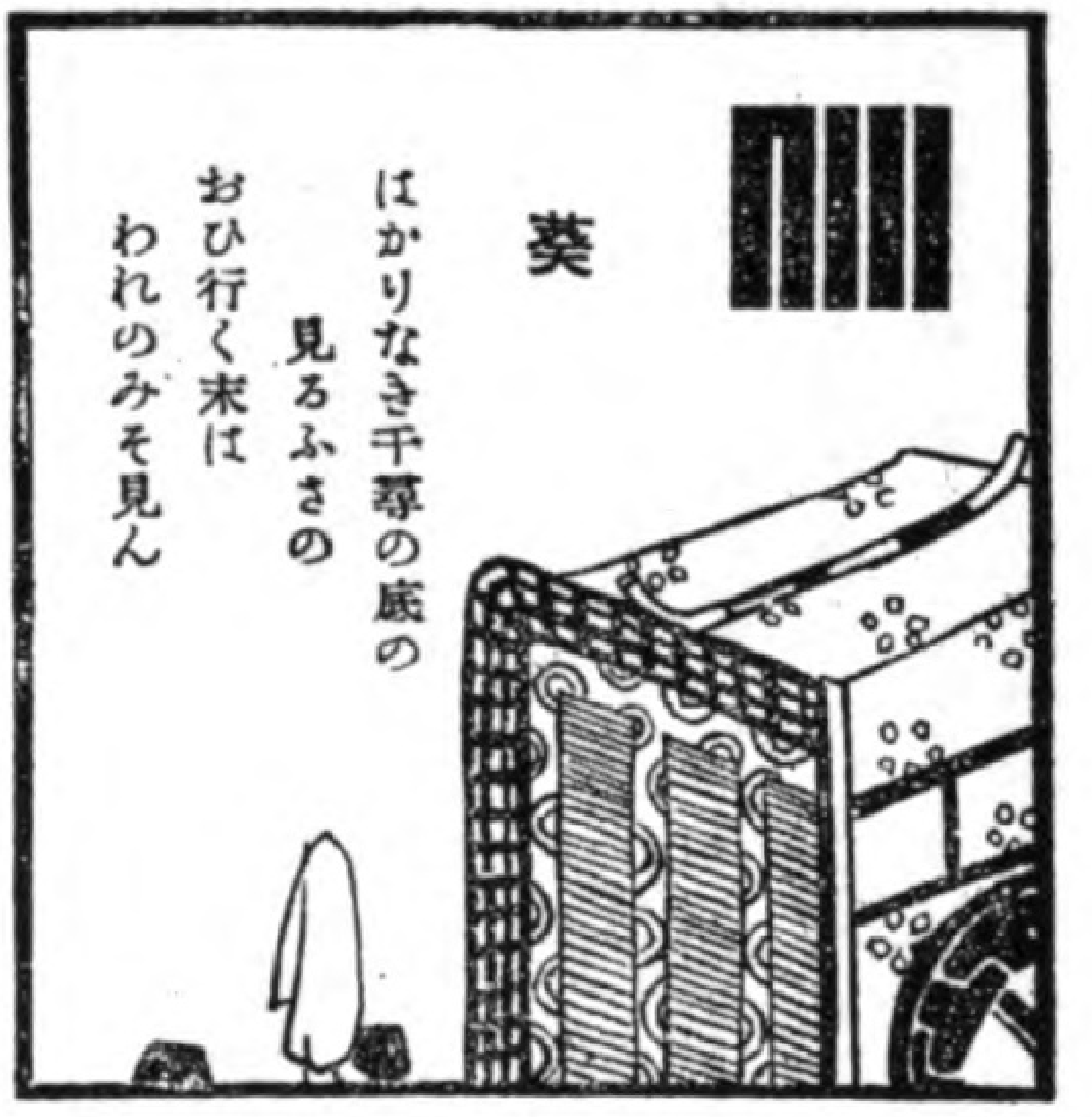
「失禮ッ」、『ヤッ、やられたのかッ』

うかりける人を――。

ひろむ所をつけ込つて右手が延びると、はげしかれとは祈らぬに、勢よくパラ〳〵ッと札が亂れた。五尺何寸の男一疋、晴れの場に討死して、切歯扼腕、今に仇を取つてやるから、と口惜しさうだつた。

岩瀬男爵が只一人の弟君、部下に名だゝる○○○銃ベースのチャンピオンときくからに、嘸無骨なとあて推量がカラリ外れて、これは又眉目秀麗の好男子、流石外國まで遠征の御腕前ものなれる交際ぶりには、少からずあはてまし





た。

「姉から聞きました、あの三四年前、僕の邸の庭へ菫を摘みにいらつして、姉とお近づきになつたんだ相ですね、詩的な、美しい、而して無邪氣な何と云ふ綺麗な、お近づきのし方だらうと思つて居ました、又ちよい〳〵いらしつて下さんませんか、姉も始終申して居りましたが……」

秀でた眉のあたりを右手に輕くこすりながらこんな凖仰有つた。

いつ果つべしとも知れぬ今宵の集まりよ。更けたれば、とて誰樣の御家からか御迎への俥が來た。美代子さん御歸り遊ばす。御時計は止めてあるのでわからない。

組みをなし、又かへて、二回三回――四回――。小女の春の誇りを、今宵、此の時、痛切に感じた。

「や、一時になる、又今夜も器械體操かな」寄宿舍に居る竹村さん、岡さん、獨言ちながら席をすべつた。

松の内

津末操子

御民我れ生けるしるしあり天地の榮行く時にあへりと思へば

高らかにこの古歌を誦すれば、心自らひらけ欣に小躍るを禁められませぬ。奈良の往昔、始めて大陸の文明に接した私共の祖先は、かくの如き雄麗な剛健な辭を以てその當時は讃美致しました。

彌榮金甌缺けず二千五百七十有二年、國運益盛んに文物益開け、私共の祖先が夢想だにもしなかつた明治の聖代を現じ出す事が出來ました。

この大御代に生れ合つた私達は、何と云ふ幸福で御座いませう。御民我れ生けるしるしあり天地の榮行く御代と高唱し、感じて聖恩の無窮と國運の隆盛とを豐さかのぼる初日の出に對して、先づ感謝し奉ります。

悠々たる人生の行路、煩悶に囚はれたり不遇を悲しんだりして成す事多き身を以て徒ら





に、酔生夢死するのは、「生れた」といふ幸福を忘却するに始ります。せめて松の内七日が程は、人々常日頃のさもしい自己を忘れ、不滿を忘れ、不平をわすれ、老いたるも若きも富みたるも貧しきも萬民一途、生れしまゝの本來に立ちかへり、私念を挾まず互ひに、時を同じく聖代に生れ合ひし祝福を感謝したいと思ひます。かぎりなき感謝の念讚美の情、敬虔の心持を以て、松の七日を過したいものです。一月の雅名睦月の起源は、人々睦び合ふによりむつ月といふのが轉じたと申します。上戸ならば屠蘇に酔ふもよし、下戸ならば雑煮の椀の數きそひ給へ人妻も少女さびして鞠もつかむ、羽根も追はむ幼き君と共に雙六の方も振ふ可く、親戚知人の子女をお招きして姑君は讀み手の役、歌留多の遊びも面白いでせうまた歌留多會に徹宵徹夜して、騒ぐ勇氣がありましたらば、ほんの一日だけでも、老境に入つて何等の樂のない方を慰めて上げたいと存じます。前途輝く希望を有する年若き者には、愉樂の天地の新年でも、すでに老年の方には、よしや花の如き子孫にかこまれ、一家繁榮の中にありましても、衷心には我が衰頽を思ふ無量の感慨がおあんなさるでせう。そんな方に一日ゆつくりお相手して、五十年七十年の前、紅顔の美少年たりしその昔金紋先箱の諸侯登城の樣、裲襠かたはづしの御祝着姿、おぼろな回憶の糸、またくりかへさせ申し、すげんだ口許に、孩兒の樣な無邪氣な笑をたゝへさせて上げたい。前途なき老境の方の喜は青年得意の時代を想起するより大きい事はありません。お耳の遠いのや、お歯のぬけてお話がきゝとれない御老人あらばいやだと思召さず慰めておあげになりませ。

何にしろ松の内七日は自分の出來るだけ、私の周圍の人を愉快にさせてあげたい。さうして自分も樂たい。元日や神代の事も偲ばるゝ。渾然として自然も人も融けあひ、彼此なく自他なく、虚偽なく手段もない、皆樂しい人にしたい淳朴な美人にしたい。これが私の理想で御座います。



一夜あくれば

紅梅

母さまは、半襟をつけ終つた。けれども、まだ針箱の蓋も閉ぢず、たゝみながら、かう、胸にゆくあたりを合せてみて、おぼろに繡つた鎗梅の、つぼみの糸を氣にしながら、しづかに火熨斗をあてゝいらつしやる。

しづかな、靜かな、つごもりの夜……。忙がしくつて、クル〳〵眼をまはして居るのは、火鉢のかたへのちがひ棚に、チヤツキ、チヤツキとセコンドをきざむ、おき時計の人形ばかり……。



それを見い〳〵、種々のことを考へながら、私は銀瓶に挿してある水仙の花片を、いつのまにか、持つてた紅筆で染めてしまつた。ひよいと、手にさはつたみだれ髮をとつてよんで見たけれども、二三枚めくると、色のあせた菊の押花が出て來たので、厭になつて伏せてしまふ。

「母さま！」

火がよく起つてきたので、少しおあたりなすつたら……と思つて呼びかけたが、まだ、熱心にいじつていらつしやる。

「母さま！」

ひよいと肩へさはると

「え、まあ驚愕したよ！」

やつと振り返つて、急にそこらを片づける。

「少しお暖りなさいましな！好いお火よ……」

「おや、どうも御親切に……恐れ入りますれえ！」

と笑ひながら

「オヽ冷た……こら……」

襟かき合せつゝ、突然冷つこいお手を、私の頰にちよつと觸れる。

「あら……だから先刻から呼んで居たのよ！ちつともおやすめなさらないのですもの……」，

「ちや止せば好かつたねえ！母さまはまた、早く拵へといて上げないと、元日からお前にうらまれやしないかと思つて……」



糸切歯の金をちらりと見せて、お首をかしげてほゝ笑まれる。實際に母さまはお優しい：：今さらのやうに勿體なさが身にこたへる。

「まあ何うも濟みません……」

火熨斗の火を叮嚀に、火鉢の中へとりながら……。

冷え切つたお湯呑を二つ、ざつとお湯をとほして温めて、宇治の葉を芳しう入れて二つへ注ぐ。

「ねえ母さま！元日がすみましたら、此襦袢の上には、あの絣御召を着ても好いんですわれ？」



つて伺ふと

「あゝ、悪かあないけれど、もう一の雨がすりの方が好いぢやあないか？この襦とうつりもよし……絣々つて、さう荒いものばかり着たがつて、急に縞ものになるとき如何するの？」

「厭よ、母さま、今つから縞なんて……私一生着ないからいゝ！」

「そんな事が出來るものかね。ぢやお前、母さまの年になつても、やつぱり若い女と同じやうなのばかり着てゐる心算なの？」

「まさか、さうなれば又その樣にもしますけれど、今つから見つともないわ。治代さまだつてお召ものはみんな絣よ！」

云ひながら、母さまのお手の下を、そつとくゞつて火に暖る。母さまはまだ、お氣が附かないらしい。私の手の上へ、そのまゝお手をかざしながら

「ぢや、まあ明日お祖母さまにでも伺つて御らん！十八にも成るのに見つともないつて、必度さう仰しやるから……」

云ひ／＼、火ばしを取り、火をかき起さうとして、ふと見つけて

「まあ……何だか火の氣がなくなつたと思つたら……ほんとうに人がわるいねえ！」

「だつて母さま……ホヽヽヽヽ。」

母さまは一寸にらむ眞似をしながら、ふと、時計を見て

「オヤ、もう十一時ね、お離屋ぢやもう疾うにお寢みでせう？さ、富美ちやん、寢ませうよ！」

「えゝ。」

私はちつとも眠くは無い。けれど……。





藤やをよんで手つだはせつゝ、お部屋へ入つて帶をとく。

「母さま！明日は四時に起して頂戴よ。」

「何故？用もないのにそんな時分に起きて、風邪でも引たらつまらないぢやありませんか？」

「ぢや富美子さま、お火が起つた時分に、藤やがお起し申しませう？」とかたはらから……。

「ぢや必度よ、藤やよくつて……。

かたく約束しておいて床へ入る。

「お寢みあそばしませ！」

藤やは電燈へ青い掩ひをきせ、襖をしめて出て行つた。

眼をとぢたけれど、却々寢つかれない。

あれ、風もないのに、竹の葉ずれがサヤ〱と鳴る。葉守りの神が舞ふて居るのではないかしら……さうして今夜のうちに、草や木のあらゆる精が地に下りて、明日の朝を彩るのではあるまいかしら……。

丹塗りの枕をかへして、母さまの方をながめると、もうすや〱とお寢つてゐる。じつと見つめてゐると、灯の光が仄あをくて、水の國へでも流れて來たやう……手をうごかせば、白い泡がわれかへつて、床の立琴も、柱かけの結び柳も、藻草のやうになつて、ゆら〱となびきさうだ。あゝ美しい、うつくしい。いゝえ、灯が美しいのぢやなくつて、私がさゝやかなうれしみを持つて居るからだ。

春がくる、春が來る。紫紺地に、動賦模樣をあつらへて染めさした二枚着も、一昨日三越から仕上つてきてゐる。指をかゞめて樂しんでゐた、お彈初めや歌留多會、また、新年會茶の湯のお當會なども目のあたり。七くさ粥祝ふ時までゝさへ、私の身體は可成に忙しい、さうさう、誂へてやつた琴爪が、まだ出來て居なかつたつけ、早速届けて貰はなくつちや。

あゝ焦れつたい、目瞼がすぐにもくつ付きさうに成つて居ながら、何故かなか〱寢つかれない。髷が重いせいか、うしろへかう引つ張られるやうで……三日の朝あたりには、早速初結ひをしなければ……。

先刻も、お治さんが挨拶にきて「まあ、かんかんが好く出來ましたこと、誰れ、お千代さん





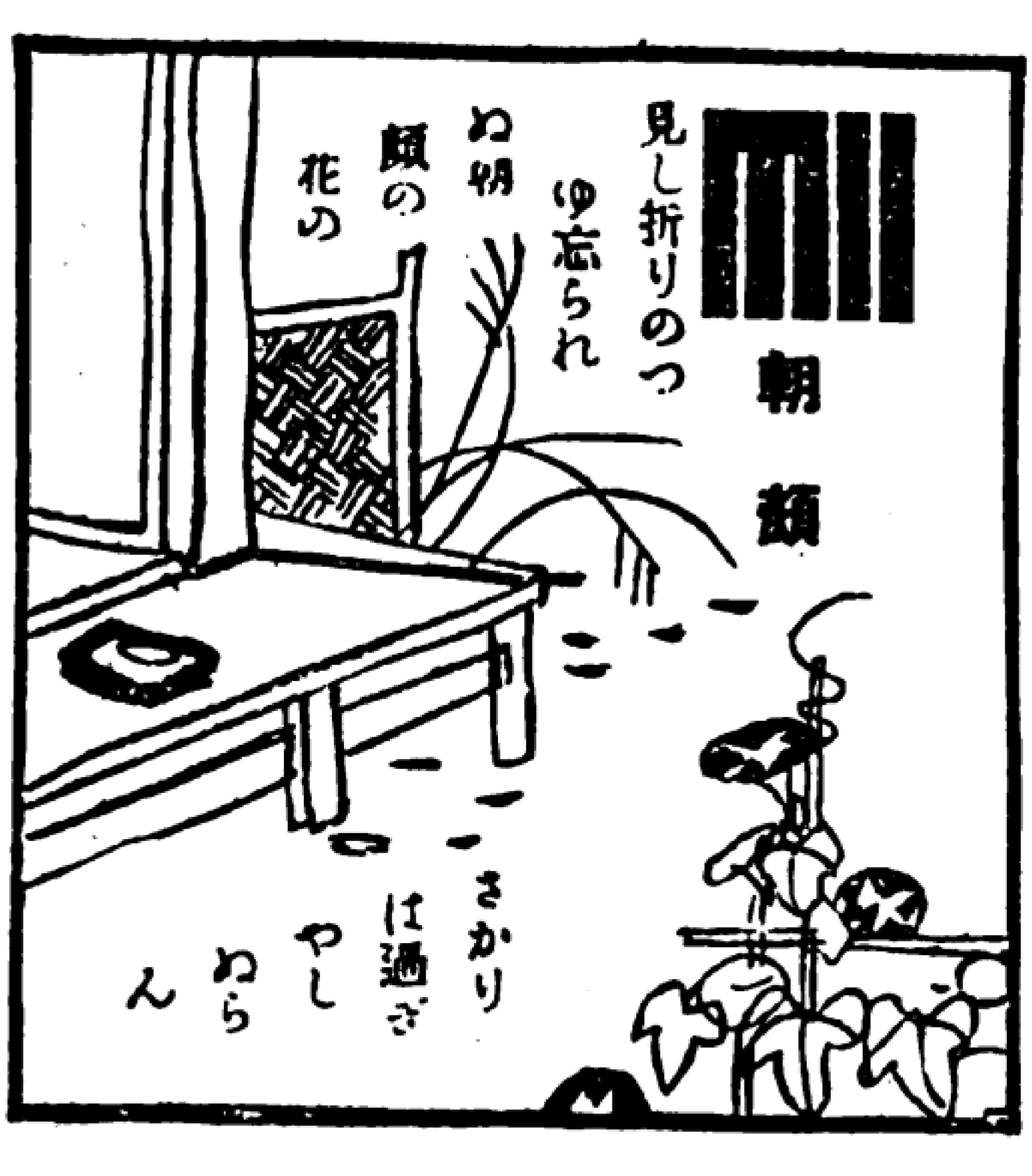
ですか？なんて好いお毛でせうかねえ！此の鹿の子の間切れが可愛らしいこと……あゝ私も最う一度、此様な高いのに結つて見たいわ！」つて……。鳥ぢやあないけれど、もう四十からにもなつてゐて、ほんとうに氣の若い人！あの連中はいつも暢氣だから、一時間も一しよになつてゐると、まるで別世界へでも行つたやうになる。今度身體が樂な時に、一日しつかり浚つて貰はう。あの人の地は清元だけれど、歌澤は又義太夫直傳の喉だけあつて、却々きけるつて、何時かお祖母さまも仰しやつた。ずゐ分品の好いものだつて仰しやるから、こんどお稽古をはじめやうかしら。私はじたい長唄の方が好いのだけれど……。

寝返りをすると、枕の鈴がチリ〳〵と鳴る。此節はくゝりの桔梗も自分でぬふし、晝間見ても、かけ布の油じみてるやうな事はない。年からいへばあたりまへだのかも知れないけれど、たゞ何となくうれしく思ふ。鈴を下げたのは、私の新考案で、動くたんびに、このチリ〳〵いふのが、又なく心持をさわやかにさせる。好い夢を見やうとするのには、どうしても、枕のすべてが美しくなくつちや駄目だ。

さう〳〵、今日、松やにいひつけて丈長を買ひにやつた時、門のそばで仲町のお君さんに逢つたつて云つたつけ……。あの方も損な女だ！いくらお顔がみにくいからつて、人並はづれて居るわけぢやなし、そんなに悲観しちまふ事はありやあしないのに……。

「展覽會へ行らつしやらなくつて？随分好いつて云ひますわ！」つて誘ひかければ

「行つたつて駄目……私のやうにもう若い血潮の冷えきつて了つてる人間が、何を見たつて面白いものですか、私の眼には、たゞ大勢の人が自分の口を干かさないために、頭や腕の力を絞つて〳〵しぼりぬいて、拵へ上げた苦しみの固りとしか、何にも他には見えないんですもの。好い着物きて、うれしさうに若い男女たちが歩いてたつて、ちつとも羨ましいとも思はないかはりにすぐと後からわすれてしまふ……。」つてこんな事を云ふ。





まだ私よりは二つしかちがはぬ年だのに、お君さんはほんとうに、少女の血潮といふものがなくなつて了つたんだらうか。いくら心からとは云へ、一たび去れば再びとはこぬ花の時代を……お〻嫌だ〳〵、私なんだか考へたゞけでも身震ひが出る。

生れてこゝに十七年！母さまが絶えず注いで下さる惠の露、愛のもろ手につちかはれて咲いた花だもの……たゞ潔くうるはしく、永久にかなりたいのが私のねがひ！もう今宵ひとよさで十八になる。乙女てふ華やげる名の、だん〳〵に消えてゆくのが悲しいけれど……また嬉しいやうな氣持もする。何といつても人生は、今の私の年ごろが一番樂しい時だもの。人に束縛されない自由の天地！それに又、淨樂の光をもたらしつゝ、いま春は訪れやうとしてゐるものを……。もう一日だつて、一時だつて、淋しくくらしちやあ勿體ない。あこがれて、聲のかぎり歌へるだけうたふて……處女でなくては味はれぬ、純い歡樂のかぎりを、心のまゝにつくさなければ……。まだ〳〵ゆくてはゝるかに遠い、人生の階段を、いまのぼりつゝ行くわたしの胸に、すべての觸れるものは、みな、美しい小鳥となり、蝶となり、また匂やかな花となる。そして私はそれらのすべてを、溫い血しほで育むでやるつもりだもの……。お〻希望の花！いざさらば、わが世のかぎり、胸の園生にかをりてよ……。

なりしもあたりの寂寞をやぶつて、百八つの鐘が一杵また一杵……餘韻はるけく……自分の心も、いつか夢路をたどつてゆく。

若き友へ

野菊女

歳月人を待たずとかや。關守なき月日は一分一秒の猶豫もなく、ことしも暮れとなりて候。さらでも心あはたゞしうのみ暮し居り候、世話女房の私共は、差迫りたる年の瀬を、如何にして超ゆべきか、苦心慘憺たる有樣に御座候てありし昔の學の窓、うたゝ戀しう思ひ出され候折柄、御文到着、たしかに拜承いたし候。さ



ろは御卒業期も目前にせまりたる新年を、あだに過さじとの御用意、質實なる平素の御心がけもほの見えて、たのもしう、はた、有がたき御志と存上候。仰せの如く、もの新しくといふ年の始めの初よろこび、きのふの鬼も禮にくるとさへ申し居候ものを、まして、青春の血汐高なる若人は、蕉園女史式の濃厚化粧に、大路ゆく人の眼を集めつゝ、羽根つくもよし、歌留多遊びもよけむ。再びはこぬ人生の春を自在の翼、思ふまに／＼花やかに遊樂なされ候も、



元より結構なる事には候へども、倘一歩を進めて考ふれば、得易からざる此の新春の期を利用して、なすべきの研究は、いとさはに、諸嬢の前に提供せらるゝにはあらずやと愚考いたされ候。即ち、若き御身等は、いたずらに歌留多に熱中し、華やかなる空想の美酒にのみ醉ふべきの時にはえなかるべく、日頃は學窓深く、浮世の風遠く、實世間と沒交涉なる君方の、今、開放せられたる、新春の天地に於いてこそ、社會の眞味をも了解すべく家庭の百態をも研究比較すべく、善き妻、良き母のいろ／＼をも仔細に觀察考究なされ候て、他日の資料となすべきに、逸すべからざる好季節かと存ぜられ候。家庭に責任ある人妻の身とは異り、簡單なる學生の御身にしあれば、萬事を億劫に思ひ給はで、同郷先輩の御家はさらなり師の君方、御親友、知己、それ／＼の御家庭を眞面目に御訪問なされ候て、日頃疎遠の罪をも謝し給ふべく、老をなぐさめ、幼きをいたはり、併せて其特徴を察し長所を見習ひ、或は側面をうかゞひ給はゞ、誠に得る所多かるべしと存じ候。まことや百聞は一見に如かずとの諺、私などは今にしてつく／＼と思ひ知られ、學生時代にあまりに出不精なりしを悔み居り候。

要するに、心を傾けて、よく遊び給ふと共に顧みて心にやましからざる、有益なる獲物を忘れ給はぬやう、廣き意味に於て、充分御活動なさるべく、蓋、其賜物たるや、未來に於て餘裕ある無限の樂地を生じ候事、歌留多の猛者を以て誇り候よりは、より以上、大なる者あら





んと存ぜられ候。

さてもかく申す私は、淋しき田舍の、何處を見ても花やかなる色もなき中に、人並らしく松立て屠蘇くみて、お雜煮を祝ひ候が、せめてもの心やり……。平々凡々、悠々閑々たる天地に、賀客の訪ふも稀れなれど、さりとて襤褸綴りもあまりなれば、詮方なう、南窓に肱をよせて、初刷のひろひよみ、うつら〳〵と莊子が蝶の跡にも追ひ申すべく、至て現代離れしたる長閑さを樂しみ申すべく候。さあれ、新らしき年に入らば、又新らしき想も湧き申すべきか……只今商人の糯など、もて參り候まゝ、失禮ながら、これにて擱筆いたし候。かしこ。

我里の正月

野中君子

△初日の光り

明けまして御目出度うございます。いよ〳〵こゝに、明治四十五年は生れましたのね。さあ皆樣、御一緒に、榮え行く御代の春をお祝ひ申さうぢやございませんか。

　年のはじめのためしとて
　　たはりなきよの芽出度さを
　松竹たてゝ門ごとに
　　いはふ今日こそたのしけれ

豐坂のぼる初日の光りに、萬象いき〳〵と輝らされて、新らしい氣はどこの隅にも溢れて居ります。

ほんとにお正月ほど、人も我れも同じに嬉しい事はありませんねえ。それもそのはずですわ、あの忙しかつた苦しかつた師走の境を一夜のうちにぬけて、此の光榮ある初春の朝に私達は甦り得た人なんですもの。

あれ、雀がしきりに大平の御代をいはふて、千代々々と囀つて居る。私もなんだかしやべり初めをして見たくなつた。さて何を喋舌つたら宜しいでせう。お祖母樣はねえ元日早々理窟張つた話は大禁物だよ、つて仰しやいますの。これは眞個ですね。と云つてこんな片田舍に穴





飲みたやうな生活を二十年つゞけて居る私にぐつと砕けた粋なお話のある譯もなし。面白くはないけれど、此地あたりの正月の風俗を一ツ二ツ申して見ませう。場處は、みすゞかる信濃の國の西のはて北安曇郡は〇〇の里と申しますひと口に、信濃路の奥深うわけ入りて……など云ふ位ですから、山のある事は恐ろしいもの取りわけこの北安曇なんかは只南が少しあいてるばかり、三方ぐる〳〵と高い山々に圍まれて居るんです。小學校の生徒がよく歌ひますわ、かう

山岳めぐるきたあづみ
高根の雪はなつさむし
…………………………

あの名高い日本アルプス(白馬山)は、西北方の空高う厳然たる姿して聳えたつて居ります。

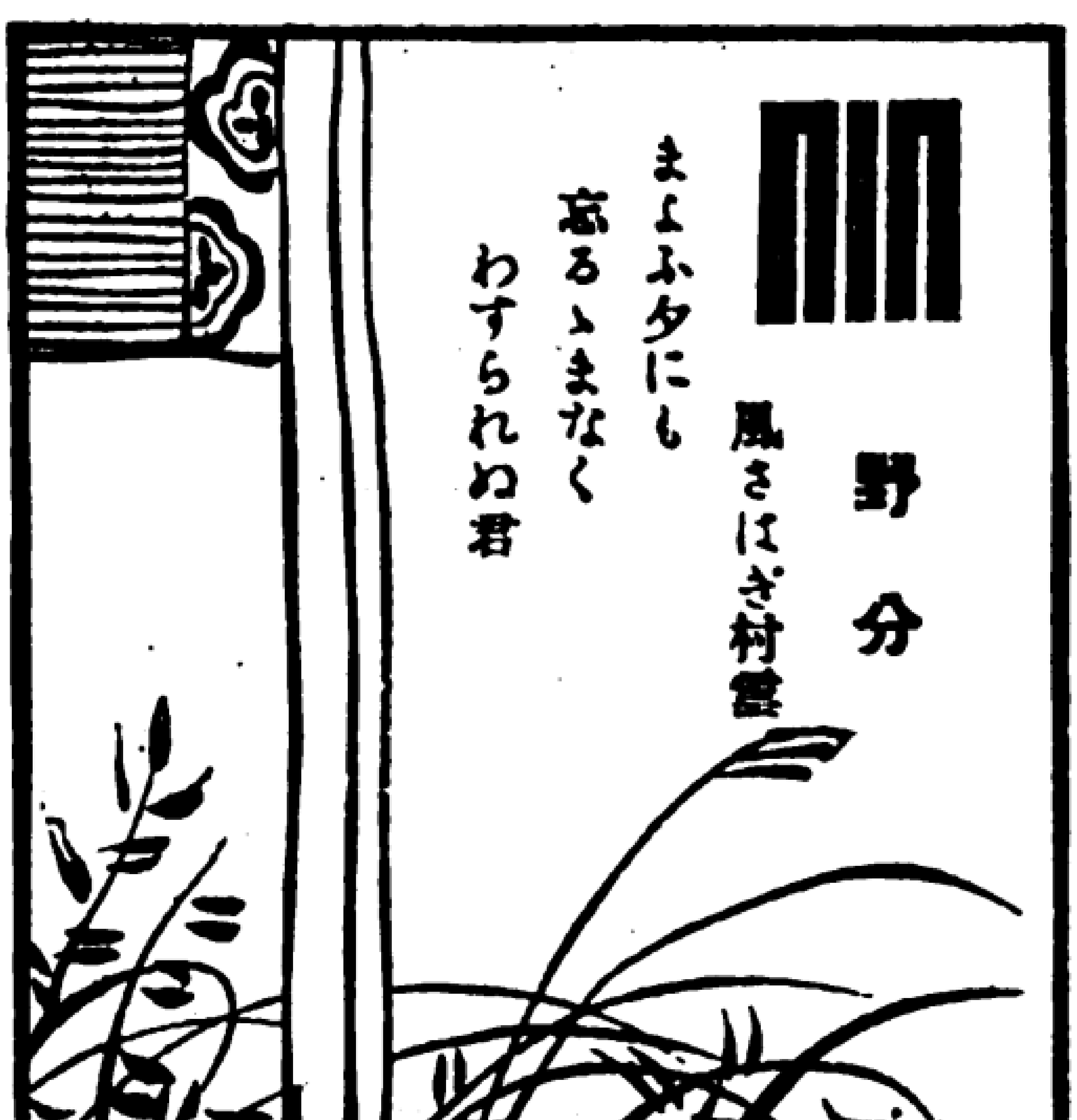
△風變りのお飾り

先づ新年のお飾りの事からはじめませうか。歳暮の二十五六日頃から、思ひ〳〵に吉日をえらんでは、お松迎へと申して、近くの松林へ行つて門松を伐つて來るのですが、飾るには三十一日の日からでございます。

竹の少ない土地のせいか、これを添へて立てる處は殆ど無いやうです。松と松とへ注連を張つて、その中間へ橙、交讓木、格注草、昆布鎌倉蝦など懸けるのは何處も變りはないでせうれ。その他にこゝでは、藁で椀の形したものを作つて、それへ洗米に田作を入れて松に結ひつけます。

鏡餅は小さいのを幾つも取つて、神棚や佛壇はもとより、物置へでも納屋へでも馬小屋でも穀倉でも、あらゆるところに神様が御座ると云つて、七八寸の小松の枝に前の藁椀をつけたものといつしよに供へますので、元日の朝はそれをくばるのになか〳〵忙しう御座います。私宅などでは十五六飾もまるめて、厠へまで供へる案例です。

お屠蘇と云ふものは有りませんで、正月でも矢張り普通のお酒でございます。お吸物は白魚





に白髪こんぶ、青海苔、この三品をお椀に入れて、上から熱湯をかけたもの。家によつては多少の相違はあるかも知れませんが、まづ大抵これのやうです。併しこのお吸物はお正月ぎりで他の時には致しません。

お雑煮は三ヶ日で、これには又是非、鰤を副物にする事に極まつて居ます。

△花嫁の里歸り行列

服装は常のまゝで、ちつともおしやれをしません、でも上流(?)になると男子だけは羽織袴の禮服で年賀に廻りますけれど、女などは前掛一ツも除らないで御年始にあるく人が多うございます。一體この邊ぢや、紋付の小袖なんかは婚禮か、さもなければ葬式にのみ着用するものだと心得てるんですもの。可惜松竹梅の裾模様だつて、只むなしくかびくさい箪笥の底に沈んだきり、お正月でも浮世の風に逢はされぬ果敢なさ。

それでも流石に去年あたり來たばかりの花嫁さん達は、美しく着飾ります。そしてお里歸りをするんですが、此時は俥よりをもに馬に乘ります。紅や白の蒲團をいくつも馬の脊へ重ねて、その上に盛裝の花嫁御寮がチヨコナンと坐つて、あとから花聟はじめ、媒介者や親戚の人々が六七人も徒歩でつゞくのです。馬の鈴音にぎやかに、シャラン〳〵と練り行くところはほんとに見ものです。お正月の二日か三日に街道を歩いて居ればこの里歸りの行列の二ツや三ツには屹度逢ひます。

御年始の進物には、お餅を一尺眞つ角位に正しく切つたのを、二枚或は三枚重ねて、奉書へ包み、熨斗をつけ、末廣を添へて持ちあるくのですが、三月や五月のお節句にもかう云ふ事をします。大昔からの習慣ですつて。

お客様にはやはりお酒とお雑煮とを進めます女客には特に甘酒をふるまふ家もございます。

此里の松の内は極みじかくて、三ヶ日過ぎれば早々門松を取り拂つてしまひます。

△道祿神祭りの奇習



新年附録

新案家庭雙六 娘の一生

紛華を極めたる極彩色石版

笹木幸子案　井川洗厓書

新年號 婦女界

一冊金十五錢　郵税金一錢半　六冊金九十錢　十二冊一圓七十五錢

東京神田 同文館 振替東京一三五

各大家の意見

◉修學せんとする婦女の心得　文學博士 中島力造

◉現代は學問ある女を要求す　文學博士 桑木嚴翼

◉余の見たる女子の虚榮心　文學博士 村上專精

◉宜しく趣味の向上をはかれ　文學博士 幸田露伴

◉婦人の缺點弊風を攻むる好時機　高島平三郎

◎賢母と愚母　宮田修

◎倫敦通信　大谷繞石

◎文藝折々　沼波學士

◎英詩評釋　若月學士

◎日常作法　笹木幸子

◎新年祝物　安藤生

◎今年流行のショール

◎正月に咲く花

◎現代女流面影

▼福壽草の話　伊藤博士

▼よく遊びよく働く動物　下田次郎

▼私の新年　戸川殘花

▼簡易主義の正月　佐治實然

▼舊幕時代の新年　内藤鳴雪

▼女學生の今昔　櫻井ちか子

◉小説 柚湯　三宅花圃

◉小説 お由　野上彌生子

▲名婦傳『平政子』　千萬樹

▼正月室内の遊

▼諸國正月の奇習

▼全國雜煮旅行

▲衛生的な臺所

◉處女の衛生　大瀬醫學士

▲西洋料理 家庭新年宴會

◉正月と子供の食物　豐福醫學士

■新年號には附録新案家庭双六『娘の一生』あり見落しなく御購入を乞ふ■

女(ろの一)



謹賀新年

圖書雜誌勉强販賣

合資會社

東京堂書店

東京市神田區表神保町三番地
電話本局百二十三番
同　同　二五五二番
同　特　二百四十八番
振替口座東京第二百七十番



女(るの二)

内藤千代子著

ホネームーン

希望に滿ちたる新らしき歳のはじめに 新らしき人々の爲めに新らしく草されし小說以上に面白き書物、その名を「新婚旅行」と云ふ。すでに愉快ならずや。内藤千代子の名は天下の耳目を驚かし 前著スヰートホームは忽ち八版を重ねたりと知らば、誰でも讀んで見たくなるべし。まことに四十五年劈頭の快著

目次

▲ホネームーン▲新婚旅行▲紅雀▲若き日の戯れ▲華族系▲春の乙女▲學生の都會▲花つみの夢▲セラニアム▲コスモスの頃▲帝都の秋▲現代の人より▲鵠沼日記▲虚榮の都へ！▲帝劇の蝶屋

杉浦非水君裝幀

定價六十五錢　郵税六錢

内藤千代子著

スヰートホーム

所謂「スヰートホーム式」なる語を各女學校に流行せしめし奇書

今や「八版」成る――定價金六十五錢　郵税六錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替口座東京二百四十番　博文館

女(その三)

面目一新せる新年號

文藝倶樂部

●菊判本文紙數三百二十頁 ●原色寫眞版一枚
●寫眞版 光澤紙刷八頁替通四枚 二色刷光澤紙‥‥二頁 ●木版摺錦繪一枚
正價一冊金廿五錢 郵稅一冊(本誌)三錢

娘盛りの 第十八卷 第一號 目次

本誌は左記未曾有の大附錄を添附するのみか現文壇の巨匠森鷗外氏が興味中心を標榜する樺太脫獄記てふ長篇を掲ぐ其の如何に波瀾に富、其如何に變幻極りなきか、恐らく新春第一の讀物たらん。次に三島霜川氏作町の娘を收む。其の姿の優に愛らしさ、見ん人目を峙てん。第三、第四には、新進作家中の白眉廣津柳郎氏作八月の夜及び高橋仁氏作旅役者とを載す。共に清新の氣紙上に溢る。偖夫新講談に至りては斯界の奇傑大島伯鶴氏に囑し出世の春駒を口演せしむ。新春の讀物として是れ程芽出たきものなからむ長廣舌には饗庭篁村氏江戸趣味を論じ、其の他全誌趣味と實益とに充實し年の改まると共に其面目を一新せり切に祈二愛看一



新年附錄 美人寫眞双六
文藝倶樂部編輯部案
山中古洞氏畫

東京 博文館 本町

年と共に新なる本誌の發展

日曜畫報

四六判四倍大本文（光澤紙）四十八頁●寫眞版及木版挿繪澤山●本文二色刷乃至六色刷

新年號

一月一日發行

正價十錢郵税本誌限二錢

□二倍大●

新年號は口繪記事ともすべて普通號の二倍大となし、新春の慶に加ふるに本誌創刊滿一周年の紀念祝意を表せり。

□寫眞●

一層その材料を精撰し、上高貴の御肖像より市井の雜觀に及び益々本誌獨特の光彩を發揮するに努むべく 別に募集中の懸賞寫眞を發表せり

□記事●

内容は一々列擧せざるも新春の慶福と興趣は全紙面に横溢し、新春の行樂は本誌に依つて更らに一層の意義あるものとならん。

□懸賞●

考へ物、當てもの等興味を中心とする新案續出するは本誌の一特色。現に非常の人氣にて發展中の **全國十美人投票** は新春に入り愈よ大勢定るべし。

□大附錄●

新年號には讀者家庭の額面用として本誌一面大の大附錄 **春こゝろ** を添ふ。筆者は有名なる美人畫の天才、その得意の作を精巧なる十數回の石版極彩色刷とす。蓋し各種新年附錄中の白眉たるべきものなり

□新活字●

右の外新年號より全誌の活字をポイント式に改む、此新活字は本館印刷所の新たに鑄造する所にして字體鮮明從來使用のものに優るは勿論此活字に代ゆる結果一頁のみにても約四百字以上全體にて七千餘字（約二頁）の記事を増加することゝなる。

博文館
東京日本橋本町三丁目
振替口座東京二百四十番

女（るの五）

文藝倶樂部 第十八卷第二號 增刊 （二月十五日發行）

講談 落語 女夫揃

仲よきものを、鴛鴦の女夫といへり、げに女夫中のよきばかり美しくもまた羨ましきものはあらじ、本誌は初春の讀物として、女夫揃の一篇を世に捧ぐ、この書を一たび繙き玉はゞ、犬猿啻ならざる女夫中も、やがて蜜の如くならん事、印紙を貼って請合ひ申す

目次

● 女夫の仇討 一龍齋貞山
● 越後傳吉 神田松鯉
● 桐ケ谷紀聞 桃川如燕
● おかふい 三遊亭小圓朝
● 子別れ 柳家小さん
● おそなへ 五明樓玉輔
● 野狐三次 秦々齋桃葉
● 鬼夫婦 小金井蘆洲
● お禮參り 柳亭燕枝
● 三夫婦 三遊亭圓喬
● 正直夫婦 錦城齋典山
● 揚卷助六 田邊南龍
● 祐天吉松 神田伯山
● 柴木村甚助 早川貞水
● 一心 三遊亭圓右

菊判：紙數三百二十頁 口繪極彩色錦繪及艶麗美人寫眞版十數葉挿入

東京本町 博文館

定價金二十五錢 郵税金二錢五厘

ぬりもの

美術蒔絵物

常陳列縦覧御随意

東京日本橋通室町

木屋漆器店

電話本局 九百九拾七番

長 千七百拾番

美顔術

脱毛術を行ふ

神田駿河臺袋町九番地

東京美容院

院長 北原十三男

電話本局一七七一番

尙當院藥品部に於而最新美顔藥品毛髮藥品一切やせる藥等發賣

詳細なる說明書進呈要郵劵三錢

(女ろの八)

四日の朝は、村の男の子供達は、みな雪袴に雪沓(藁製)の甲斐々々しい身仕度で、深い雪の中を橇をひいて門松よせに參ります。誰家のも一緒に集めて、廣い田の眞中へ運んで行つて、小屋——と云ふよりは細長い塔見たいなものを建て、夜になるとそれへ火を放けて、「道祿神はおん馬鹿だあ……」などゝわい〳〵騷ぎながら丸燒にしてしまふのです。

道祿神祭りと云つて子供がどんなに待つてせう。私共も少さい時分には、子守に連れられてこれを見に行くのが、お正月の樂しみの一つでした。

そしてこの火で餅を燒いて喰べると、蟲齒を病まないつて、みんなよく見物ながらおかちん燒きに行きます。

三四年前の本誌に見えた、相州片瀨附近で行る左義長の遺風だとか云ふ事に一寸似てるぢやありませんか。

併し近頃はこゝらの子供までが、時流?にかぶれたとでも云ふのでせうか、惡い智惠が出て道祿神樣の小屋を建てるのにことよせては人の林へ行つて大きい上等な木を伐つて來て、そつと何處かへ賣りとばし、そのお金で飲食すると云ふいやらしい習慣がついたやうです。全體今の子供はこましやくれ過ぎるから何をするとこ見ても可愛氣がない、つて老人達は云ひますが、まつたく、こんなお祭りなどは、餘り物質的に傾いては興味が失くなります。況や神代の昔も偲ぶてふ奥床しい年のはじめに於てをや——なんて、とんでもない理窟の眞似は禁物禁物。

△お正月の手毬遊び

何しろ名高い雪國の事とて、此頃になればもう野も山も悉く眞白となるが常ですから、到底門松くゞりつゝのどかに追羽子するなんて事はめつたに出來ません。まあ家の中で歌留多や手毬突きでもして遊ぶんです。此の邊の毬唄はそりあ可笑しいんですよ。私共だつても一生懸命唄つて突いたもんですが、何だかちつとも要領の解らない珍妙なうたです。

昨夜生れた龜の子は
今朝早やおきて池のすみ

がはじまりで、半程へ行くと

彌り道者みな道者
彌り道者のその中に
十七八なる姫の女郎
下にはちん〳〵縮緬で
上には羽二重繻子の帶
足袋は紫ぬひのひも
八ツ緒の雪駄を踏みこんで

變手古な唄でせう。かう云ふことが長く〳〵あつてそれから一番おしまひに。

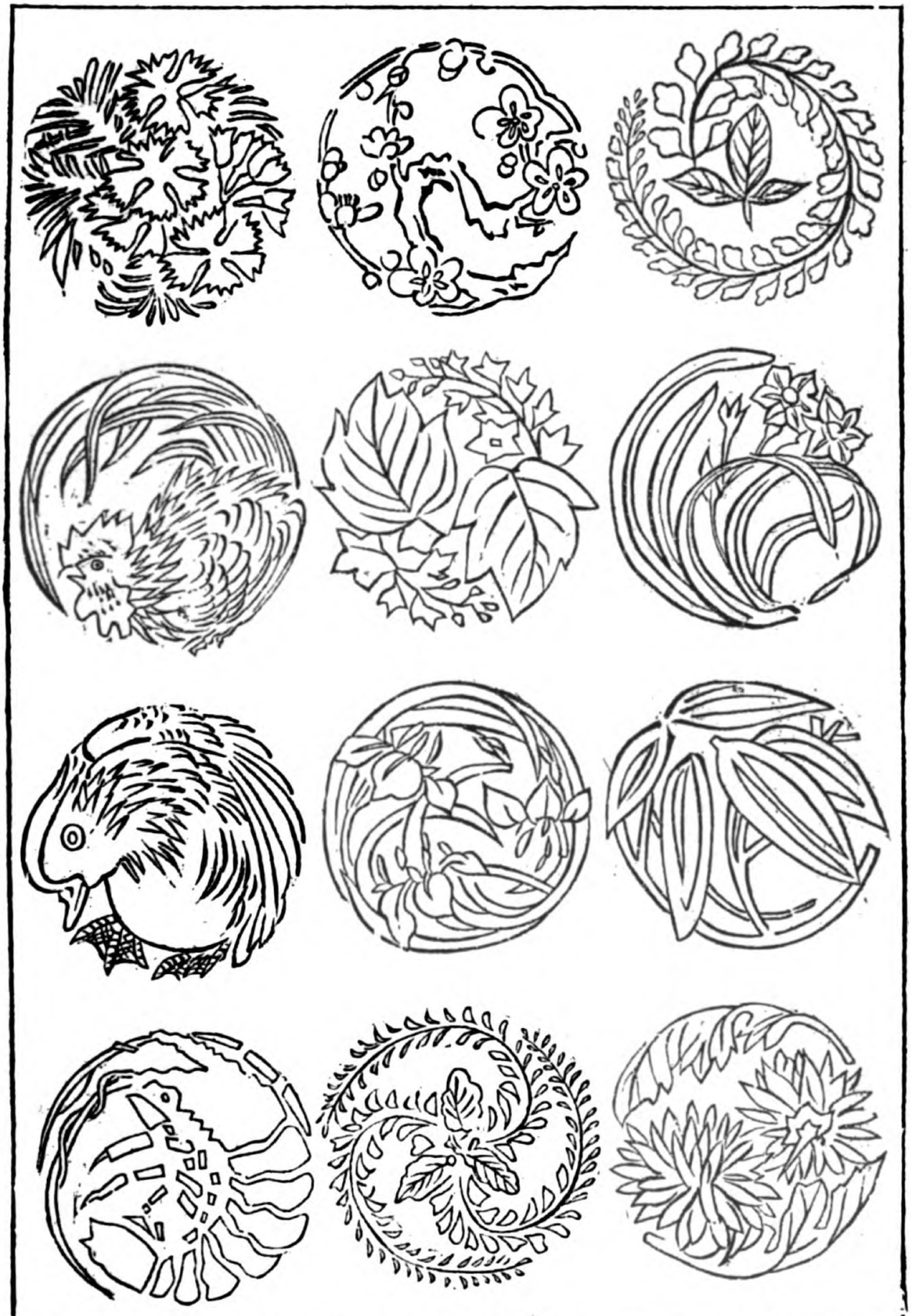
今日今晩となりの惠比壽講、よばれて行たら蒔繪のお椀で、お鯛お吸物、おつゝらつゝらと一杯すひませう。二はいすひましよ。……十ばい吸ひましよ、これでまづ〳〵私が向うの〳〵、〇〇樣から〇〇まで、一貫お渡し申した。

と突き終つてひよいと毬を袂へ入れ時のうれしいこと。

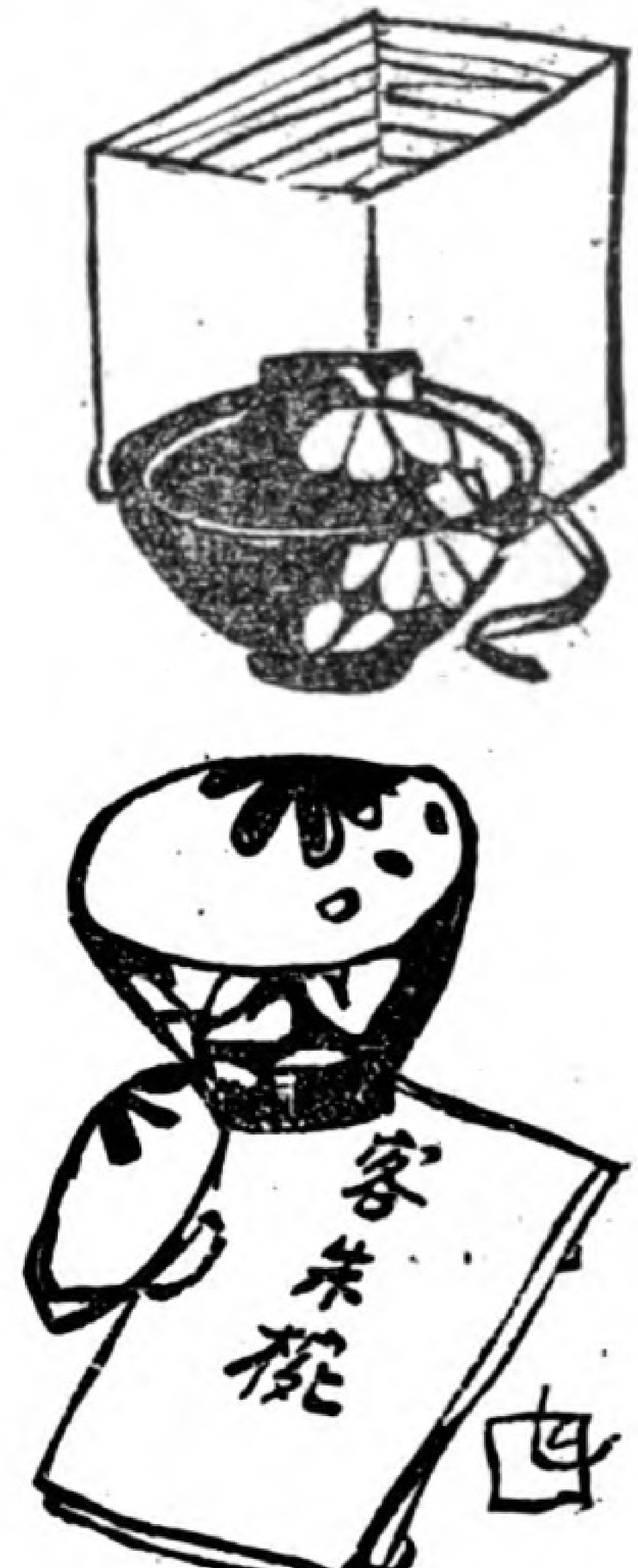
オヽお炬燵が大分寒くなつて來た。お火が消えてむべ山風や吹き渡るらむ。

さあ今度は妹達と歌留多でもして遊ませう。

新案花鳥模樣



△藤△水仙△笹△菊△梅△桐△燕子花△藤△撫子△鷄△鴛鴦△海老



家政整理の要件

女子大學教授　井上秀子

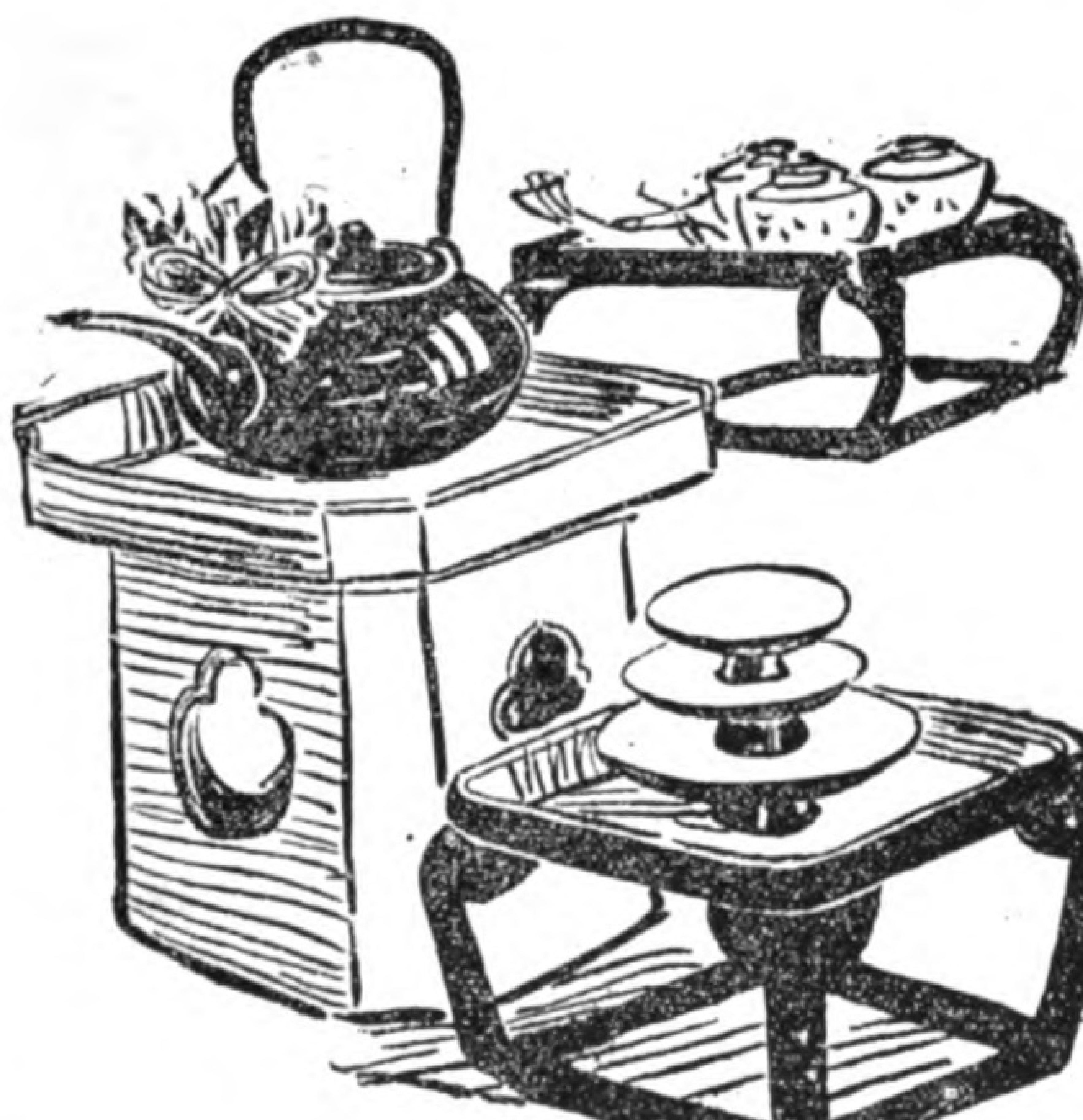
財政がすべての根本

婦人が一家の主婦となつて家政を整理する上に就いて最も大切なる要件は家計を立てる、即ち暮しをつけて行くと云ふ事であります。これは丁度國家の經營に財政が最大切で、軍備にせよ外交にせよ皆この財政を外にしては語る事の出來ないのと同樣で一家にとつても矢張りこれがすべての問題の根本となるのであります。この根本即ち家庭の經濟を整へる事が出來なかつたならば從つて家庭の團欒も一家の幸福も維持する事は出來ないのであります。處が一家の經濟を立派に整へて行くと云ふのは云ひ易くして實現され惡い事柄でありまして、少しく注意を怠りますと濫費に流れて支出が收入に伴はないやうな事になり、また餘りに支出に注意して厘を積み毛を蓄へると云ふ事になれば吝嗇に陷りますし却々中庸を得ると云ふ事は六ケ敷のであります。併し六ケ敷からと申して捨てゝ置かれる事ではありません、一家の經濟は一國の經濟の根源でありますから家政を司る者は是非共この經濟問題に就いては種々の工夫を凝らし、研究を積んで出來得る限り巧妙に處理する事が肝要であります。

豫算は航海者の羅針盤

然らば如何にしてこの目的を達したらよいかと申しますと、それに就いては先づ第一に豫算を立てると云ふ事が必要であります。豫算などゝそんな手數のかゝる事はせずともと云ふ人もあるかも知れませんが、こ

れは決して面倒な仕事でも何でもありません、大きくしては一國の經濟の豫算、小にしては一家の收入支出の豫算即ち暮し方の標準であります。これは恰も航海者の羅針盤と同じやうな物で單に經濟のみに限らず豫算のない仕事と云ふものは一向に先きが見えませんで暗を行くと異らないのであります。羅針盤を失ふた航海者がまだと思ふて居る中に暗礁に乗り上げるのと同じくまだ大丈夫と思ふて居る中に支出が超過して仕舞ふやうな事は珍らしくはありません。これに反して豫算が立てば大體暮し方の標準が出來るのですから住居にはどの位、食物にはどの位、被服には何程その外敎育費、交際費、圖書費と云ふ工合に殘らず割り當てゝ計算しますからその內から自由に取捨選擇も出來ますし、又各部分の支出が平均して行きます。それ故に例へば被服費と食費に許り費し過ぎて交際や敎育の出所がないなどゝ云ふやうな不都合は決してないのです、私は是非皆さんに豫算をお作りになる事をお勸め致します。



豫算の立て方

豫算を立てると申しましても或る人のやうな一日の米代が何程、副食物に何程、薪炭費はどれ位と細々と一つ〳〵に割り當てた窮屈な云はゞめのこ勘定と云ふ遣り方は不賛成であります、さうでなくもつと科學的に且つ經驗的に大ざつぱな豫算を組んで置いてその中でお互に融通の利くやうな仕方が宜しいの

で、先づ一ヶ月の收入を百分比例にして假りに百圓の收入とすればその百分の二十を食費に、十五を住居に、十を被服にと云ふ風にして置くのです。この費目の分け方は家政に堪能なる人々の經驗から割り出されたものを模範とし參考とする事が初心の人にとつては最安全な方法でせう。その家政經濟に精通した人の理想的の豫算によつて一年二年を經驗して見るのです、そして月末や年末にはその豫算と實際の支出とを照らし合はせて見て超過したか餘つたかを調べてそれによつて自分で多少工夫を凝らして行くのです。

　次の豫算表は世界中の經濟を考へて割り出したものですから參考として示しました。

次の表は米國家政學の泰斗リチード夫人の理想的豫算であります。

(1) 年收二千圓乃至三千圓の家、家族五人

一	食物費	收入の百分の	二十五
二	住居費	同	二十
三	被服費	同	十五
四	燃料、燈用及庭園、修繕費	同	十五
五	旅行、休養、書物、慈善、貯蓄	同	十五

(2) 年收一千圓乃至二千圓の家、家族五人

一	食物費	收入の百分の	二十五
二	住居費	同	二十
三	被服費	同	二十
四	燃料、其他	同	十五
五	旅行、教育其他	同	二十

(3) 年收八百圓乃至一千圓の家、家族五人

一	食物費	收入の百分の	三十
二	住居費	同	二十
三	被服費	同	十五
四	燃料、其他	同	十五
五	旅行教育其他	同	二十五

(4) 年收五百圓乃至八百圓の家、家族五人

一	食物費	收入の百分の	四十五
二	借家料	同	十五
三	被服費	同	十
四	燃料燈用其他	同	十
五	休養教育	同	二十

(5) 年收五百圓以下の家、家族四人

一	食物費	收入の百分の	六十
二	借家料	同	十五
三	被服費	同	十
四	燃料其他	同	五
五	休養教育其他	同	十

次の表は右のを基礎として我國の事情を參酌して作つたものでありま

す。

中流社會にて年收八百圓乃至千圓の家

一 食物費 收入の百分の三十
二 住居費 同 二十
三 被服費 同 十五
四 薪炭燃料其他 同 十五
五 教育、慈善、圖書、雜誌、貯蓄 同 二十

家計簿の選び方

なほ一つ家計を整へて行くには簿記の方法が宜しきを得なければなりません、家庭の簿記が不正確であるとか又は複雜で誤り易いなどでありましたならば徒らに時間と手數とのみを費す許りでそれ丈けの効果はありません、所で家計簿記の最も理想的のものとしては、第一に簡便であると云ふ事が最初の條件なのであります、御承知



の通り一家の主婦と申すものは極めて多忙な職責でありまして、育兒やら子供の教育やらその他臺所の事から交際向きの事に至る迄萬事萬端、手も下し指圖もせねばならぬのでありますからいくら金錢の出納は正確にせねばならぬと申したとて朝から簿記を睨んで許りは居られません、それ故に出來るだけ手數の省ける簡便なものを欲するのであります。簡便と云ふ事と同時に今一つ大切な條件は綿密な事であります主婦が金錢の出納は一錢二錢の細かい所から千圓萬圓の大金迄も扱ふのでありますから好い加減の事では後になつて金錢出入の狀態が分らなくなつて終には家計

が紊亂すると云ふ事になりますので何處迄も綿密である事が必要です。この二つの條件を兼ね備へたもので初めて完全なる簿記でありまして、簡便であるからして不精にならずに一寸記入が出來るし、又綿密である點から間違ひなどは起らないのであります。

かうして完全な理想的な簿記の記入を致しましたならば月末になつて簿記を見て直ぐに住居でも食物でも交際でも何程費やしたかゞ一目瞭然として分ります、これで即ち簿記の目的が達せられたものと云ふ事の出來るもので、要するに科學的な經驗的な豫算を作つて且つそれを完全な簿記法によつて日々月々の出納を明らかにして行き、こゝに初めて秩序あり、餘裕ある家計を營む事が出來るので、從つて一家の幸福繁榮を來たす事も得られるのです。今日の如き我國の狀態に於ける國民は一家の基礎を固定させて各〻主婦が巧みに家計を整理して行くと云ふのが最も大切な事で、個々の家庭がかくの如く健全に形成されたならば國家は期せずして富強になる事は火を見るよりも炳らかなる事實であると思ひます。

▶消化と空腹は別物◀

吾々が食する物は皆な消化されて、體中に吸收せられる。此の消化作用は食べた時から、消化の早きものは五時間、遲きものは二十四時間位で終るが、二十四時間經過するも尚ほ消化し得ないものは、悉く體外に排出して了ふ。けれども腹がへると云ふことは茲にいふ消化を了へたといふ事とは必ずしも同一ではない。腹がへつても消化は必ずしも完うしたるものとは言へない。腹がへると云ふことは、消化の終る時に起る感じでなくて、胃が空虛となつた時に生理的に起る感じである。彼の不消化で下痢を起した場合に尚ほ腹のへるのを感ずるのが其の證據である。つまり胃の中に食べたものがあつて多少の刺戟さへあれば飢を感じないが、それが無くなると此の刺戟もなくなり從つて搔くが如く嚙むが如く絞るが如き感じを生ずるので、之を飢感と云ふ。即ち腹がへると云ふことは胃が空虛になつた時に胃壁を作る細胞の特殊の能力によつて生ずる一種の感じである。右の説明によつて、茶や水を以ても一時の飢を凌ぎ得る理由、煙草を吸ふも一時飢を忘るゝ理由なども知る事ができる。


新年互礼会

世に拗た女の噂



尾崎恒子

○

黒地に白菊のお裙模様すらりと着流した立姿、餘り高すぎぬ島田に花簪、定紋打つた金の平打、お角かくしに前髪ふつくりと濃い眉を半分かくした、なつ子さんの花嫁姿はうつくしく、そして可愛らしうございました。お迎に來たお仲人さんに連れられて住みなれたお部屋を出る時、振りかへつて、先生、と沈んだお聲で私をお呼びになりました。

私は毎月六七度は屹度なつ子さんと逢つてゐたものです。ある時は鵠沼の海岸に連れ立ちあの一時評判になつた平塚明子さんの身の上を噂したこともございました。

四十一年の八月でした。私はなつ子さんと鵠沼に倦み、江の島鎌倉にも厭いて、茅ケ崎の南湖院に入院中の保持よし子さんと云ふ方を訪ねて見ました。保持さんは「トクサ」と云ふ俳句雜誌に、紅雨女史の名を以つて投吟していらしつた、女子大學の秀才で、旅のつれ〴〵に、突然お尋ねしたのでした。逢つて見ると、氣さくな、おもしろいお方で、暢氣な私達とは早速に相談が極つて、それから三人打ち揃ひ、舟遊びに出かけた。芋畑や豌豆畑の細道を通りぬけ、松原に差し掛かると、此處ですのよ、いつか私が獨歩さんと二人で散歩して居たのは……と紅雨さんは立佇つてのお物語あの溝を渡る時、私は手を引いてあげましたら、眞山青果さんが、それを見たのですつて。そして、素つ破ぬいて國木田獨歩君はモルモット式の美人と手を引いて松原を散歩してゐたなんて、眞山さんも隨分ですわね、人の事をモルモット式だなんて、私はそんなにモルモットに似て居て？　なんて面白い話談を聞かして

下さいました。舟遊びといつても誰れの持舟ですか、主の知れない捨小舟、あれに乗りませうと紅雨さんは先きに立ち、私となつ子さんとは後に尾いたものです。舟はすーつと離れて、馬入川の河口に出た。紅雨さんは白絣の長い袂を帯に挾んで、近眼鏡を掛けて、一生懸命に棹をあやつり、私達は澄まして、お客様然と舟の中央に坐つてゐました。

丁度二町ばかりも川上に上ぼつたと思ふ頃、紅雨さんは、あゝもう私は草臥れた、あなた、漕いで頂戴なと仰しやる。アラ私、舟なんか漕いだ事ありませんわ、と云ふと、大丈夫よ譯はないわと棹をお渡しになつたので威勢の良いなつ子さんは、それぢやア私しが、やつて



見せませう、と力一つぱい棹さすと、横にむいてスーッと蘆の間に入り、アラ大變と三人は笑ひ出してしまひました。誰も居ないと思つてゐた蘆の中には大公望然と一人の男が釣をしてゐた三人はびつくりしてアッ御めんなさいとあやまりましたが、又それがをかしくなつて笑ひ崩れてしまひました。その中に棹はひとりでズン〲と川下の方へ流れて行つて仕舞つた。あゝ大變、どうしませうと騷ぎ出しましたが間に合はず、棹は平氣で流れて行く。……良くつてよ、今に誰かの舟

が來るから、と紅雨さんは樂觀してゐらつしやる。なつ子さんは、と見れば、之れも平氣な顏で、如何かなりませうと澄ましてゐらつしやいました。

なつ子さんの花嫁姿を見送つてゐた私の胸には、この茅ケ崎の舟遊が輪のやうに描かれた。先生と呼ばれて、はつと自己に復り、つと傍に寄り握手しました。私は交り初めて丁度七年の今宵初めてなつ子さんの手を握つたのです。落付いてね：：エ、有難うと云ふ御返事は、聞こえぬほど、微で、そしてお顏は眞蒼でした。

式扇を持つたお手のあたりまで、すつぽり、とプエールに包まれた可愛いうつくしいなつ子さんを乘せたお俥は前後八臺の俥と數十の提灯に送られて影



はだん〳〵小さくなりました。その影が見えなくなつた時、私は思はずハンケチを眼にあてました。そして私は切に〳〵なつ子さんの幸福を心に祈りました。

○

平塚明子さんといへば、世間では謎の女のやうになすつて入らつしやいます。

平塚さんは謎の婦人ですか知ら。

私は平塚さんの事を聞いたのは、歸る術も知らない例の小舟の中で、な

つ子さんと一緒に初めて紅雨さんから聞いたのです。聞いて見れば、明子さんも別に變人でも何でもありません。二十一歳の若い婦人が好かぬ男との結婚を無理に強ひられる。いやだと云へば不孝者だと、しかられる。明子さんも幾夜を一人涙に明したでせう。終には遣る瀬ない心の悲しさを師の君森田學士に打ちあけて同情を求めた。森田學士は明子さんの言葉に一々賛成なさいました、一方は嫌な〳〵蟲の好かない法學士一方は優しい氣の合ふた師の君。文學好きの明子さんは、文學士を理想の人としてゐたのださうです。新しい時代の空氣に育つた明子さんは、自由な戀に落ちたのも自然の成行。成らぬ戀に悶えて暮すよりは、一層の事、鹽原あたりの山奥で、戀しい男といつしよに死なふと覺悟をしたのも、さら〳〵無理では御座いません、と親友の紅雨さんは明子さんの爲人を仰しやいました。で、もしあの時、二人の傍に親切なやさしい人が居て二人を夫婦にして上げたなら、明子さんも、今頃は素直な若奥樣になつて居らつしやるだらう、と、私は其後明子さんの噂を聞く度毎にひそかに同情して居ます。私の見てゐる明子さんは謎の婦人でなく普通の明子さんなのです。否、禪學は明子さんの皮相でせう。

○

本莊幽蘭さんと云へば、惡婆、と申しては失禮ですが、なんでも大變な女のやうに評判されて入らつしやいます。

幽蘭さんも、世間の評判に反抗もし、冷笑もして入らつしやるやうです。

今から三四年前の頃、幽蘭さんが本郷座の側の、土屋、と云ふ芝居茶屋の隣りに、ミルクホールを開いてゐた事がありました。隨分突飛な風をして、或時は黑紋付に紫袴、お下げ髪に白襟で居た時があつた。さうかと思ふと、大工や左官の着るやうな印半天を引つかけ、つば廣のお釜帽をかぶつて、近處を歩いたりして居ましたので、初めの中はおもしろ半分に、飲みた

くもないミルクを、飲みに行つた男も随分あつたものです。一度でも行くと、まう幽蘭さんは、なじみになつてしまひ、往來で逢ひますと、やア君どうしたい、チト來たまへな、なんて男の肩をたゝいたり、手を引つぱつたり、随分亂暴な事をされるので、終には、誰も幽蘭軒の前は通らない樣になつたのです。

　そんな調子ですから、近處では誰一人女史に同情する人もなかつたのです。處が夏の初めのある夕暮、私は散歩に出て、本郷座の角まで來ました。フト向ふを見ると、幽蘭さんは湯上りの浴衣の肩に洗髪をパラッと散らし、店の前に立つて爪を切つて入らつしやいました



本郷通りの方からやつて來た角帽と顔を合し、アラ山本さん（と云つたやうに覺えてゐます）と、珍らしくも靜かに、丁度優しい女が、なつかしい男に逢つた時のやうに、ニッコリ笑つて何か二タ言、三言、話してゐましたが、男はたゞ頬笑んで、其のまま別れて行きすぎ、土屋の前で振りかへりましたら、幽蘭さんは淸い乙女のやうな眼指で、ジーッと男の行く姿を見送つてゐました。其の横顔は薄い影を落して如何にも淋しさうに見えました。

　其後、霙の降る冬の夜など、薄い灯かげの下で私は火鉢を圍んで幽蘭さんと、しんみりと身の上ばなしでもしたいと、時々思ふこともあります。あの横顔を思つて。

○

中央公論に出た鷗外博士の百物語は、小説としての良否は無論私には判りませんが、女主人公の人柄が、私の知つてゐる、鹿島屋夫婦に似てゐたのでおもしろく拜見しました。

此男の傍には少し背後へ下がつて、一人の女が附き添つてゐる。これも仕度が極地味な好みで、その頃流行つた紋織お召の單物も、帶上も只管目立たないやうに心掛けてゐるらしく、薄い鼠が根調をなしてゐて、二十になるかならぬ女の裝飾としては、殆んど異樣に思はれる程である。銀杏返しに結つて體中で外にはない若い色をして居る六分珠の金簪を挿した、たつぷりある髮のおくれ毛が仰向いてゐる片頰に掛つてゐる。好い女であるが、どこと云つて鋭い、際立つた線もなく、凄いやうな處もない。僕は一寸見た時から、此の男の傍らに、此の女のゐるのを、只何となく病人に看護婦が附いてゐる樣に感じたのである。

といふのを讀みますと、一時榮華を極めた、鹿島清兵衞さん夫婦の人柄が、ありありと眼の前に現はれました。清兵衞さんと云へば、本郷四丁目の蛇の目鮨の裏で、その日〳〵の烟りも立てかねるとか何だとかいはれてゐますが、清兵衞さんは、世間の口はなんと言はうが、まア幸福な人ですわ。たとへ新川の旦那樣でゐた處が、古めかしい四角四面な型にはまつた、家庭に囚はれて卒氣のない內室を相手にして、財產の番人をしてゐたつて、つまらない。それより思ふ事を仕盡して、何處までも好いた人と手鍋さげての侘住居も、却々粹とやらで、ありませう。私は清兵衞さんとおかみさんの胸の中が開いて見たいと思ひます。薄い布團に二人は熱い胸を合せてゐるでせうと思ふと、私は他事ながら何だか嬉しくなりますわ。

世には焦れ〳〵て、相愛の仲でありながら、無風流な理性や意識に妨げられ、樂しい、嬉しい戀が出來ず絹の小袖に淚を包んで、その日を送つてゐる女も隨分ありますわ。

○

昨年の五月、鵠沼に赴つた時、一度逢つて見たいと

思つてゐた、女學世界で評判の高い內藤千代子さんのお宅を、慈敎庵の尼さんに案內を賴んで、尋ねて見ました。千代子さんは先月から東京へ行つて居ます。とのお母アさんのお言葉で、がつかり致しました。せめてもと其處に遊んで入らしつた、お妹さんを拜借して御一緒に海岸を散步しました。龜ちやんは十三、目のぱつちりした、髮の黑い、愛くるしい、お子さんで、私に向ひ、あなたは小母さん？　姉さんと呼んでいゝの。などゝそれは〳〵人なつこいお子さんでした。

名手の打つた盆石のやうな、澄んだ富士の見える海岸で、白砂の上に、ねころんで濤の音を聞きながら、かはゆい龜ちやんの口から、いろ〳〵無邪氣な、お身の上ばなしを伺ひました。お父さんは彫刻師であつて、龜ちやんが八ツ、千代子さんが十五の秋、腦卒中で急に歿くなつたのだとか。家はお母アさんと、おばアさんとの女三人、さびしくていけないと龜ちやんのおはなしでした。貝や小石を拾ひ、橋をわたり、松原を拔けて、慈敎庵に歸り、二人で片瀨まんぢうでお茶を飮み、一緒に御飯をたべました。……昨日新橋を立つ時、博品館で買つて來た、ルビーの入つたブローチを出して龜ちやんに、之は今日の紀念よ、持つてゐて頂戴ね、とお渡しすると龜ちやんは眼を丸くして、まア綺麗ね、と、うれしい樣子でした。それぢやア私しもう歸りますからね、あなたもお家へ歸つて頂戴、そしてお母アさんに宜敷、といふと、わたし、そこまで送つて行きますわ、と龜ちやんは蝦茶色の元祿袖の可愛い姿で、鵠沼館の案內札の立つてゐる松原の角まで送つて下さいました。

スヰートホームの著者、內藤千代子さんは、這んな可愛ゆい妹御を持つて入らつしやるのです。龜ちやんが拾つてくれた貝や小石は、今でも私の盆石箱の中にちやんと入つてゐて或時は黑塗りの桂盆に飾られることもございます。

○撫たほど平な海や今朝の春　南江
○若水にひと足早き日の出かな　撫月

新案懸賞

答案に關する詳細は次頁にあり



夫婦合せ

解答は葉書に限る
一月十五日〆切



夫婦合せ の意味は別段説明するまでもありません。どの男と、どの女とを選んで配合せたらば、よからうといふ皆さんの意向をお尋ねするのであります。

解　答 は別紙見本の通りに願ひます。

懸賞の方法 は、多數の御意向で定めます。多數で定まつた夫婦を標準として、夫れに合ふたものが第一等で、合はなければ合ふた數の多い分から順々にとります。（若し合ふたのが多數にあれば抽籤で定めます）

解答〆切 は一月十五日限りです。

當選發表 は二月一日發行の本誌で發表致します。

賞金

一等	金拾圓	一名
二等	金五圓	一名
三等	金貳圓	三名
四等	金壹圓	十名
五等	金五十錢（圖書）	二拾名



◎解答書式は點數調査の便宜上左の通りの人名順序に願ます。即ち例記せる男性の側の×××の處へ女性の名を記入することに願ひます。

（用紙端書）

東京市日本橋區本町三丁目博文館
女學世界夫婦合せ係
御中

（表面）

（藤原 鎌足）×××　（菅原 道眞）×××　（在原 業平）×××
（鎭西 八郎）×××　（平 清盛）×××　（平 敦盛）×××
（武蔵坊辨慶）×××　（阿 新丸）×××　（足利 尊氏）×××
（一休 和尚）×××　（大石 良雄）×××　（頼 山陽）×××

住所
氏名

（裏面）

◎新案懸賞夫婦合せは本誌二月一日發行第十二卷第三號に於て其成績を發表しますが、それと同時にこの當選十二夫婦に就ては歴史上に活躍せるそれ〴〵の人物の性格、並に其配合の批評を最も痛快にして趣味ある讀物として掲載致します。即ち

◉歴史人物十二夫婦評傳

と題する記事がそれであります



つれ〴〵日記

柴田環

△昔の人（十月十六日）

八時過ぎ稽古の方交々來宅、午後珍らしき人來りぬ、我身四歳の頃よりつき添ひ居りし女にて、二十餘年ぶりにて尋ね來しなり、『お幼な顔其まゝにお健やかにて、お目出度う』とこの人今は人の妻にて、身分も相應なるが、『さる雜誌にて貴孃のお寫眞を見、おなつかしさに堪えがたく、お尋ねいたせしなり』との挨拶、なつかしさに互の目には涙をたゞふ。

『あの折はお孃樣も幼稚園通ひ、おどりの稽古も遊ばし、かへりはいつもおんぶ〳〵との仰せにて、自分もまだ十五の意地わるざかりとて、隨分お泣せ申した事も有りました』など語る。

『さう〳〵その折、そなたは前髪を切り下げて居ましたね』と云へば、

『さやう、束髪にあみをかけたのが流行ましてね』と話も、なか〳〵つきざりし。

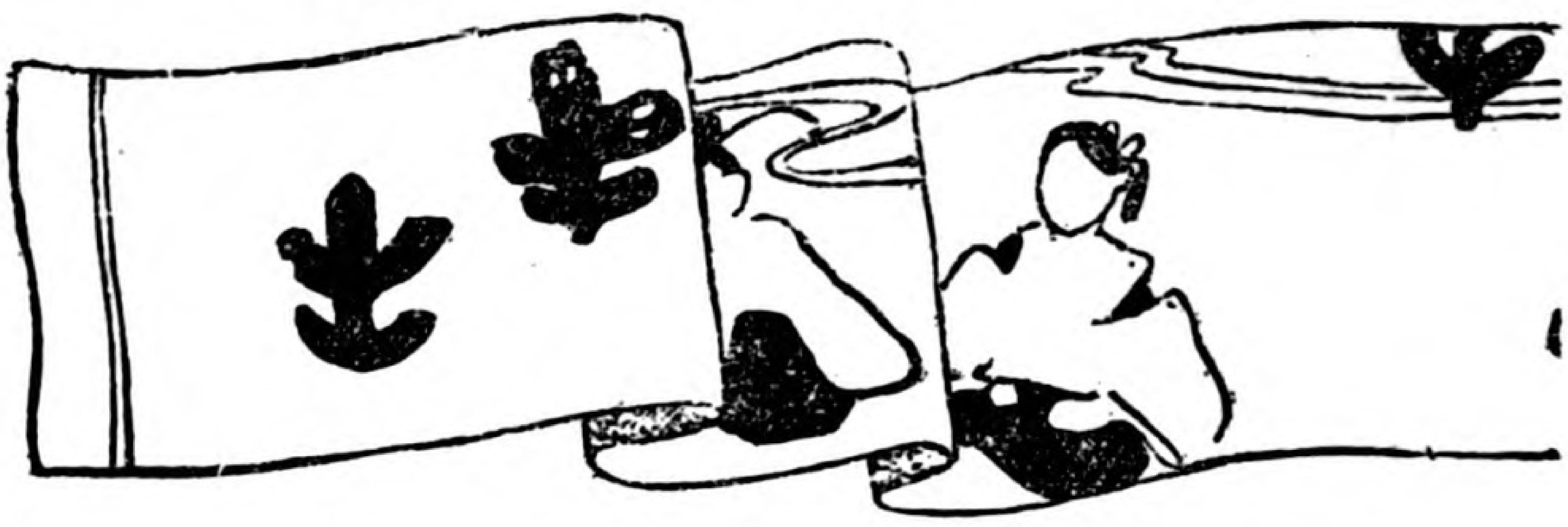
△伊太利聲樂家（十一月十七日）

伊太利大使館のガスコ氏の御紹介にて、懇意になれる伊國の男聲高音部聲樂家アルフオンゾ、サルユリイ君とオペラ相談のため會合、同君は佛伊兩國語以外に話されず、私には尤も不得手な佛語に、二三の伊語を加へて會話せしが、其苦しさはお話にならず、オペラ談を試みたのも先方の言葉と私の話す事とが行違ひとなり、隨分と滑稽の事多かりき、その時返す〳〵も佛語の必要を感じぬ。

かくて談話の不自由なりしに係らず、事一度び音樂に及べば、相手は理解以上に理解せられぬ、げに美術や音樂は、世界共通のものと、しみ〳〵思ひたりき。サ君の男聲も聲の高き、且つその美音は日本には未だなきものなり、おもへば我邦の音樂、中々に前途遼遠ならんとの念起りぬ。

兎に角帝劇との約成り、サ君と共に歌劇カワレリヤを演ずべし、甘く行くものにや心





配なり。

△米國觀光團（十一月十八日）

朝六時半起床、午前中は六人に教授し正午入浴、雜誌記者某氏の來訪を受け、午後一時より更らに四人の稽古をなす、多忙ゆゑ晝食はパンにてすます。二時半召使同伴にて、新橋發鎌倉海濱院ホテルに赴き、米國鑛業觀光團のため晩餐後の獨唱をなす、井上元帥、都築男其他の貴賓臨席、米人には外國語の歌、一しほ氣に入りたりとの事、『故鄕の音』の如何に心の琴線にふれし事よ。

△自働車（十一月十九日）

波の音に心地よく眠さむれば、日光熙々として海濱一帶を照らしぬ、よべのつかれまだ回復せざれど、約束なれば九時と云ふに、英人某氏の自働車にて宮の下に向ふ。海濱院ホテル滯在の老婦人、我が薄着らしきを見て、親切に自から暖かき毛皮のマントを脫して貸し與へられぬ、かゝる程に今朝ほどの快晴は、いつしか曇となりて空あやしく、風さへつよく、自働車上の客は隨分寒かりき、殊に車上の客は、あたりの景色を見んとて被ひを除けたれば、其寒さも一しほなりき。兎角するうちに馴れぬこととて苦しくなりて、二の宮をすぐる頃は、はや堪へ難く國府津の手前にては、全く急病人の如くなりぬ、このときは餘りふつゞかにて記すに堪へず。

國府津につきて少しく心地爽やかになり、美しき山の景色、今をさかりと照りはへる紅葉の色、實に仙境とおもひぬ、鎌倉より三時間にて宮の下富士屋ホテルに着き、入浴後午餐會に臨み、土産物などとゝのへ、午後三時十五分と云ふに、また鎌倉に歸る。

午後六時半、鎌倉にきつ、八時半觀光團のために獨唱をなす、今日途上國府津にて樺山大將の御家族におめにかゝり、大將夫人のお言葉に、『樺山は芝居はきらひなれど、あなたがオペラをなさるとの事にて、始めて芝居へ參りまして、先月は帝劇に行きました』との仰せ、劇場へ足を向け給はぬ大將閣下にして、かゝるお思召ありしは、歌劇のため心強く感じぬ。





臺所化學 日用帳（一）

須田桐蔭

近頃ろ女子向きの雜誌の增加した事は非常なもので誠に結構な事ではあるが、何れも大同小異で型が大抵極つた樣である、精神修養的記事も素より必要ではあるが、千篇一律では少々鼻に付て來る、純娛樂的のものは讀者受けは善からうが、讀だ後に得る所は一も無いのである、科學的の記事は頗る大切であるに拘はらず、餘りに眞面目、餘りに地味で兎角讀者受けが惡いと見えて、何れの雜誌も此方面に筆を染め居ないのを頗る遺憾に思ふて居つた、然るに本誌が讀者の嗜好に阿諛せずして特に本欄を設けられたのは此種の雜誌に一新生面を開いたもので實に敬服の外無いのである。併し前申した通り根が眞面目のものであつてさう面白く書き樣の無いものである。所謂良藥口に苦しであるが甘い口直しは誌面の過半を占めて居るから其れを樂みに勉めて本欄を讀まれよ。

△家庭科學の活かした數へ方

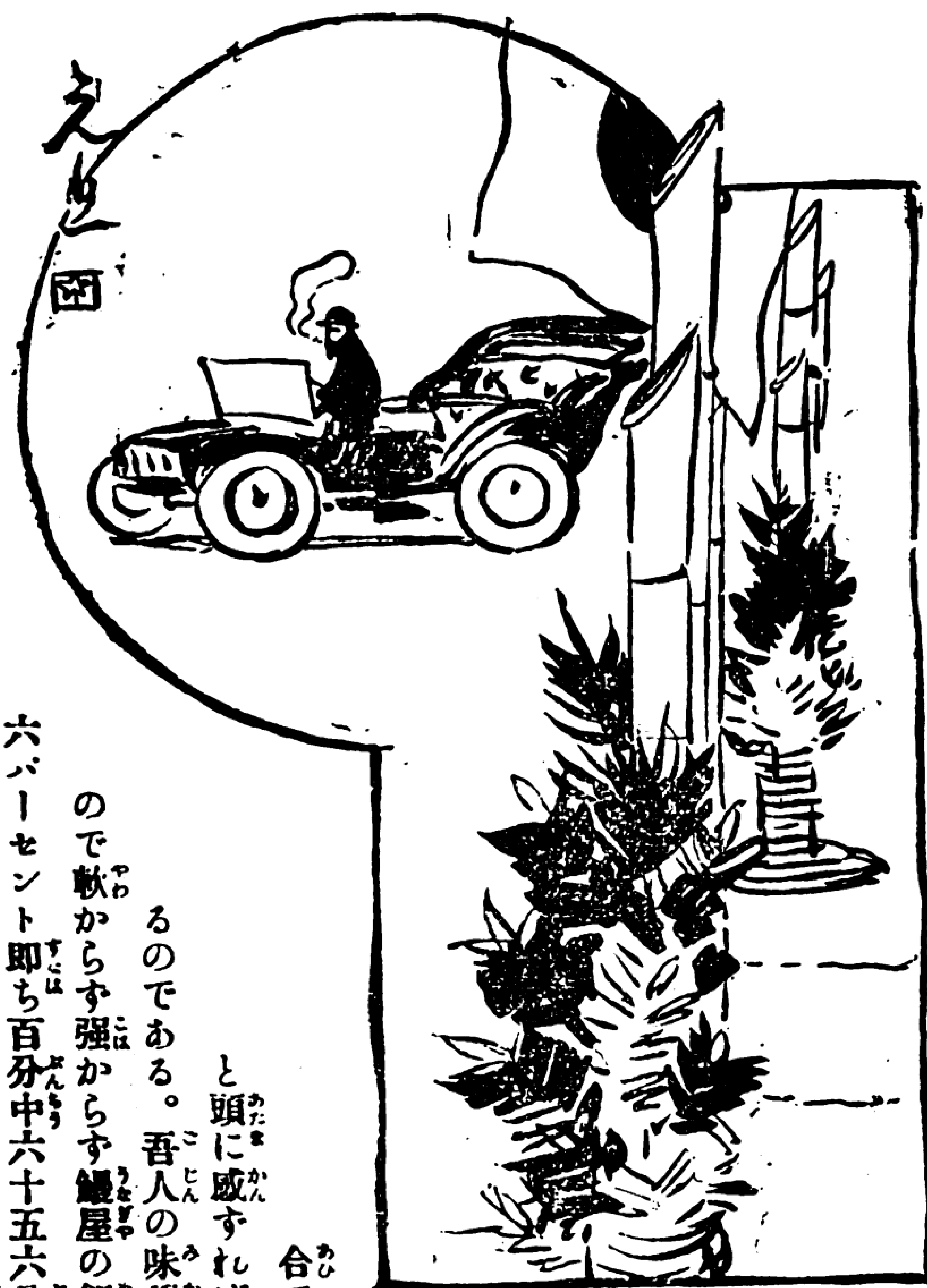
女子が日常家庭に於ける仕事は男子よりも遙かに理化學的素養を要する事柄の頗る多きに拘はらず、高女校の生徒は概して數學、物理、化學の學科を嫌ふ傾きがある。殊に其三科學の應用とも云ふべき家事科と來ては其最必要學科たるに拘はらず其冷淡なること驚くべき程で授業中レターは縱横に机から机へ飛で居ると云ふ有樣である、語學などは比較的歡迎されて居るがホームを作つた後に實際外國語の役に立つ向きは極めて稀れなもので實は『水を下さい』がギーブ・ミー・オーターで西洋人に通じなかつた所が大した關係は無いの

である。其に反して家事科の衣、食、住の部の如きは全部應用理化學であるに、其が少しも消化されて居らぬからホームを作ると忽ち顛手古舞をする事になる、今の高女校長は一般に家事科の教授には頭を惱して居る樣である。私の考は或は違つて居るかも知れないが是は先生の講義が單に活字の解釋に止つて死んで居る爲めではなからうかと思ふ、既に家事科に冷淡であるから裁縫や料理や洗濯の實習に冷淡なるは當然の結果であつて、趣味は益々文學的に傾き遂に女文學家の卵子が續々輩出することになる、然らば之を救ふには何うすれば好いか、臺所の女王を作るには何うすれば好いか、私は家事科に活た講義をして貰ひたいのである、現今の家事科教員にも素より立派な人もあらうけれども一般から云ふと國語、歷史、英語抔の教員の方が重視されて居る樣である、今直ぐにと云ふ譯には參らぬが漸次家事科教員の資格を高め教頭同格位の地位に進めて學識あり、經驗あり、地位あり、年齡に富だ立派な奥樣(可成は高等師範出身)を講師に囑託して擔當せしめたならば必ず成績が擧るだらうと思ふ。

△下婢の手加減奥樣の狼狽

私は今一例として御飯焚きに就て一言して見やう、實際中流以上の高女卒業のお孃さんに御飯の焚けるものがあるでせうか、恐くは一人も無いと言つても過言では無からうと思ふ、此お孃さんが新家庭を作る、先づ普通は下女一人だが三年間の着物は對の簞笥に納めてある。御飯は女中が焚て呉れる、刺身は肴屋が作つて呉れる、極めて平穩無事であるが一朝下女が病氣と來たら一大事だ、竈の中へ鉋屑が這入る、石油の注がれた新聞が這入る、マッチが一箱爆發の儘投げ込まれる、烟は竈内に渦を卷て少しも薪へは燃え付かない火は自ら放つ炭酸瓦斯の爲に皆消えて仕舞ふのである。淸や淸やが連發される、遂に辭を卑ふし禮を厚ふして病床の淸を起たしめねばならぬことになる、竈を焚くにも火を起すにも素より化學の燃燒の理が能く解得されて居れば一二回の實驗で直に出來るものである

竈を焚くには炭酸瓦斯と空氣との交換が肝心であつて薪を適宜に組で下より焚き付けの焰の先きを薪に當てる樣にすれば火力強くして容易に焚え付き爰に發生する不燃性の炭酸瓦斯は重いけれども火焔に煽られて上部より竈外に逃散し中の空氣が稀薄になるから下の方からドシ／＼新鮮な空氣が這入つて來て燃燒は益〻盛に繼續される、然るに此理が能く解つて居ないで下女の淸が多年の經驗で自得した轍を踏むのは高女卒業生としては實に詰らない次第ではないか、又御飯の水加減にしても下女杯は殆ど重量や容量の觀念なくして甘く御飯を焚くものもあるが是は昔の獵師が火繩銃の腰だめで飛鳥を射落すのと同格で、大業に云へば技神に入る場合である。只こゝだなと頭に感ずれば既に適量を得て居るのである。吾人の味覺は非常に鋭敏なもので軟からず强からず鰻屋の飯と云ふ所は六十五六パーセント即ち百分中六十五六分の水分を含むもので、それが六十一二分になると餘程硬過るし六十八九分となると軟か過ぎて胃病家の食ふ樣なものになる。



此僅少の差を目分量で仕てのける下女の經驗は豪いが此經驗は却々得られるものでは無い、併し理化學的素養ありて分量と云ふことに注意し米の升目と水の容量を正ふし殊に瓦斯火でも用ふれば火力が一定して居るから下女の三年の經驗も一日の實驗で御飯の水加減位は何でもないのである。臺所の仕事は實際應用理化學と云ふても好いので殊に化學的に關した事が多く又往往細菌學にも涉つて居る、依つて衣、食、住の科學に就て極めて平易にお話をしたい積りで臺所化學と題したのである。

△人は如何なる食物を採るべきか

一體人間は如何なるのもを食べたら好いのであるか畢竟人間も動物と同じく食べたいと思ふ物を食べたいと思ふ時に食へば好いので太古の民は其流儀で健康に生活し繁殖して來たのである、さうして人間は元來如何なるものを好むかと云ふに、人體の構造は雜食即ち肉食と草食の混合物に適する様に出來て居るのである、然らば今でも自然の嗜好に任せて置いたが好いかと云ふに文明國の人民は種々な關係からして甘くは行かないことがある。

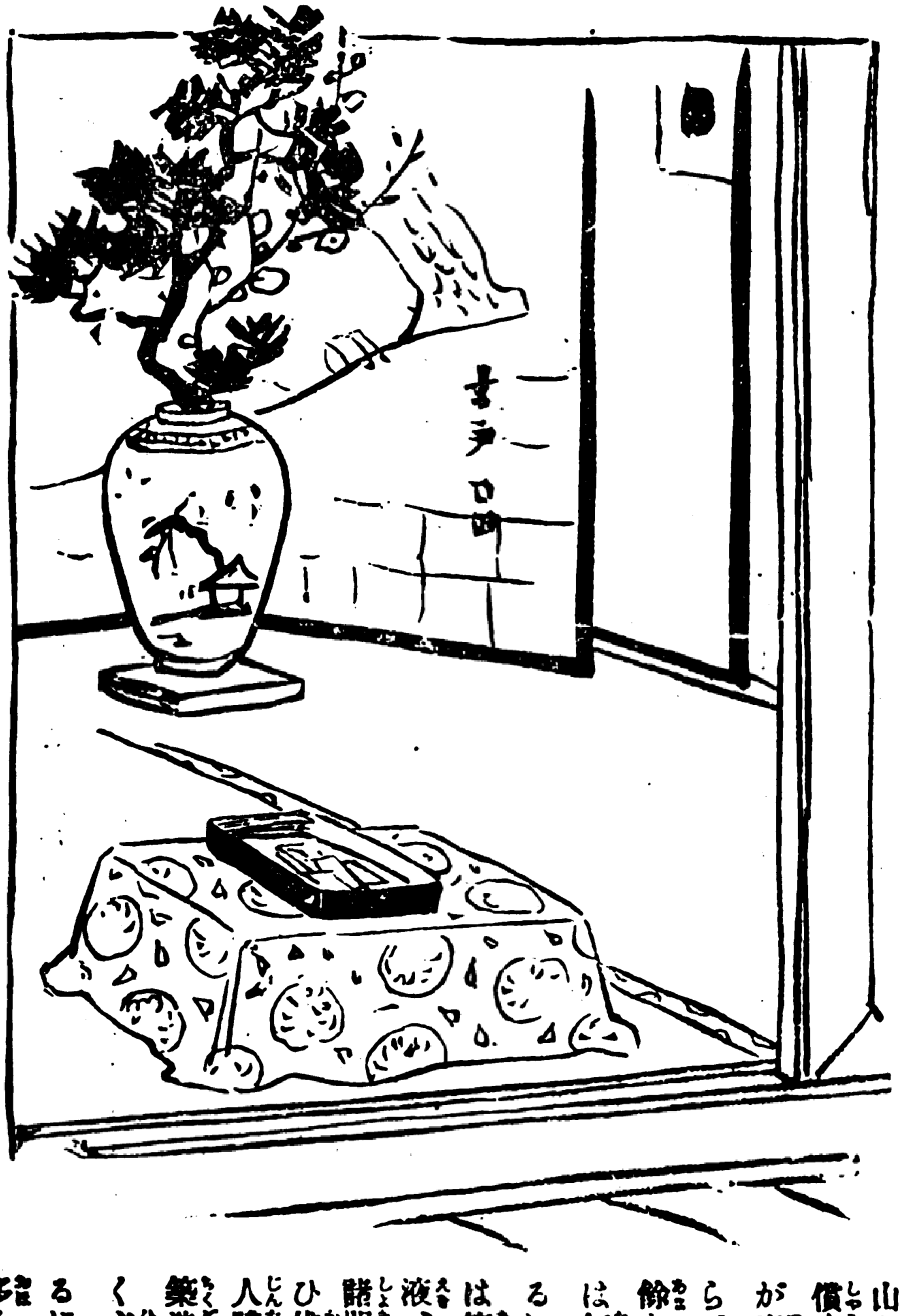
△日本人は食物の嗜好上妙な天性を作つた

世界の人間の中で日本人位不自然の食物を食つて居るものは少ないのである。是は主に神、儒、佛三道の信仰と敎訓とより第二の天性を作つたもので、先づ神道の側より獸肉を禁じ、佛敎の方面より精進即ち菜食を強ひ、將又儒敎の勤儉主義より粗食、粗衣を奬勵した結果、遂に今日の如き稀なる菜食人種になつて什舞つたのであつて、今日では漸次肉食の効は認められて來たが、一方生活難の爲に大多數の人は未だ人間の體質に適當した食物を採ることが出來ないのである。

△肉類をなぜ滋養物と云ふか

獸肉、鷄肉、魚肉・鷄卵抔を通常滋養物と云ふて居るが、實は人間の生活に無くてならぬものは水、蛋白

質、脂肪、含水炭素（即ち澱粉と糖分）並に鹽分（鑛物質全體を云ふので鹽ばかりでは無い）であつて之を營養素と云ふが言ひ代へれば皆滋養物である、然るに蛋白質に富むもののみを滋養物と云ふて居るのは我我の常食は穀類と野菜が主であるから、含水炭素と鹽分に不足を告ぐることは決して無い、脂肪は少ないけれども澱粉質さへ澤山あれば代償することが出來るから、是れも餘り大切では無い。然るに蛋白質は筋肉、血液、內臟、諸器官、言ひ代ゆれば人體全部を築造して行く必要物なるに、之を多く含むものは獸、鷄、魚肉、鷄卵抔の高價品であるから、動もす



れば、不足を生ずるので、遂に滋養物なる名稱は肉類鶏卵等に稱はれて仕舞つたのである。

△食物分析表の見方

能く世人が分析表を見て直に蛋白質をのみ比較して滋養が多いとか少ないと云ふが分析表を見るには水の含量に注意せねばならぬ、即ち乾燥物にして比較して見ねばならぬ。左に二三の例を擧げんに

	生品百分中 水	蛋白質	脂肪	乾燥物百分中 蛋白質	脂肪
白米	十三、九分	七、七分	〇、七七分	九、四分	〇、九分
大豆	九、九分	三四、七分	十八分	三八、五分	二十分
大根	九十四、六分	〇、七分	〇、〇一分	十三、四分	〇、四分
牛肉	七十二分	二十分	五分	七十一、四分	十八分
鶏卵	七十四分	十三分	十一分	五十分	四十二、三分
牛乳	八十七分	三、一分	三、七分	二十七、六分	二十七分

此表を見ると上段の生物と下段の乾燥品、即ち水を除て計算したものとは大變な違ひで何の分析表でも乾燥品として比較して見ねばならぬのである。

△蛋白質が多くても消化せねば何にもならぬ

蛋白質は勿論大切なものではあるが消化と云ふ事に大に注意せねばならぬ、消化せねば土塊と同様である。概して動物性蛋白質は消化し易くして植物性蛋白質は消化し難い、植物性食物中で蛋白質の多いのは前の分析表でも分る通り豆類であるが其蛋白質も植物纖維素と云ふ糟を除て、豆腐にすると頗る消化し易いものになる。動物性のものでも酢貝、酢蛸、蛤の吸物などと來るといくら歯の好いものでも到底細かに嚙み碎く事は出來ないから胃液が滲込まない爲に頗る消化し難い譯である。

日本料理は體裁に於ては西洋料理より寧ろ進歩して居るかも知れないが、消化なのど事は全く眼中に入れて居ない。植物の蛋白質は不消化性の細胞の袋の中に入つて居て之を破らなければ蛋白質は外へ出て來ない然るに從來の習慣上煮豆は皺のよつた堅煮が悦ばれ、枝豆は青いがり〱したのが普通で、甘煮や泥鰌鍋の午蒡抔も亦決して軟いものではない、斯う云ふものゝ軟いのは歯ごたへが無くてまづいと云ふのが一般の

嗜好の様であるが是は單に習慣上の事で、西洋料理では舌で潰る様な豆の煮たのを悦で喰ふて居るではないか、私の家の小兒抔は枝豆は茶色をした莢の中からグヤグヤ豆が出るものと思つて居る、日本人の堅ものを喰ふ習慣は是非とも直さなければならない。悪習慣で不自然を自然に戻すのであるから、西洋人に大豆の堅煮を喰はせる習慣を付けるよりも遥かに楽で中年からでも之を直すことは決して難いことではないのである。



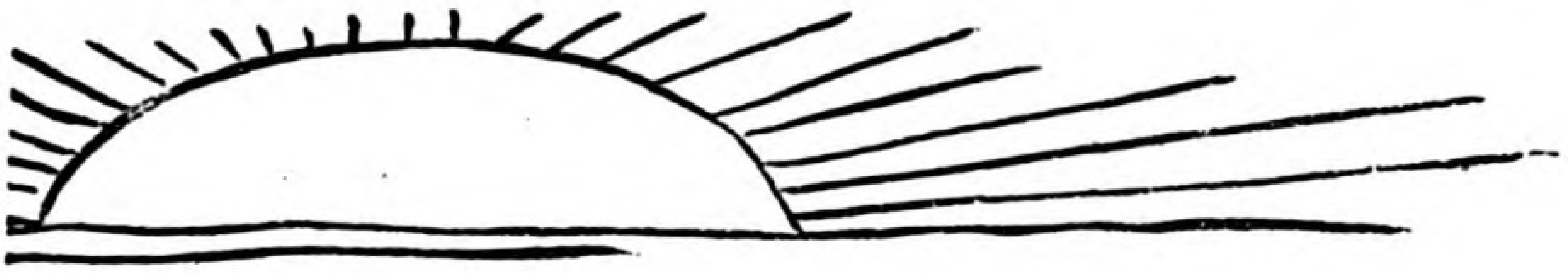
△日本人は脂肪を好む習慣を養ふが好い

脂肪と含水炭素即ち澱粉類とは共に燃焼質と云ふて人體の温度を保ち作業を營む原動力となるもので兩者共通の働きを為して居る、只脂肪は前の働きの外に一部は體内に留まつて

人體脂肪を造るが澱粉には此作用はないのであるそこで、人體に入つてからの働きは脂肪百分と澱粉百七十五分と相匹敵して居る、故に脂肪を多食すれば　隨て穀粉は少なくつても好い譯である、暖國の人は寒氣に體溫を奪はるゝことが少ないから自然脂肪を好まない寒國のものは之に反して居る、エスクイモ人抔は鯨油を常食の樣にして居る、日本人は西洋人や支那人と大差が無い譯であるのに肉食禁制の結果破格に脂肪を好まない人種になつてた、西洋料理や支那料理が遙かに日本料理に比して油濃いのは誰れも皆知る所であつてあの方が自然に適ふた食物なのです。故に可成く脂肪を食する習慣を付けるのが必要であつて御菜には可成く天麩羅やコロッケの樣なものを供へる樣にし甘煮の牛蒡や蒟蒻も油でいためると云ふ樣になれば、自然今日の樣に御飯を澤山喰はないでも濟む樣になり、穀類を消化せしむる爲に消化機を勞することが少なくなるから、隨て消化機病者も少なくなる譯である。

昔は東洋諸國は何れも玄米を食つたものだ、それが段々贅澤になつて白米を食うやうになつたのは享保元祿の頃からの事で、それが維新後輸出の關係上白くした上にも白くすることに苦心して、今ではその爲めに精巧な機械を用ゐて極々の精白米を貴ぶ有樣になつて居る。之れ米の自然性に叛いた細工であつて、玄米のまゝであれば滋養分は自然に完備して居るのに一皮むいて白くするだけ、米の自然の滋養上の成分を棄てゝ居る。即ち我々は態々手間をかけて滋養分を減らして食つて居る。だから最少し世間で滋養健康といふことに注意するに至れば、白米の方法は何とか變つて行かなくてはならぬと思ふ。本より享保元祿以前に立ち返つて玄米を食えといふのではない。昧惑の習慣上白米が食ひ慣れて居る者が玄米に返へることは一寸出來まいが、今日のやうに態々白米にして營養上の重要部分を棄てゝ何とも思つて居ないやり方は當然他に何とか方法が變はらずばなるまい。調理法が甘い物を作つて味覺を喜ばすることに重きを措き過ぎる結果、自然に叛き自然天與の營養分を減損せる例は米ばかりではなく、野菜類・魚類等の調理法に於て皆然ることを見る。即ち態々調理をして重要の滋養分を棄て居る例は殆んど枚擧に堪へざる有樣である。





むかしの風俗

△鳥追ひ

鳥追は例年正月二日、早朝より來る、衣類に絹類を用ゆることを禁ぜられ、都(すべ)て木綿にて見立て、新調するに一寸絹、縮緬と見ゆるものを揃へるこそ妙といふべく、且帯のゝ樣(しめやう)より、襟元の樣子如何に着こなすや、細腰にして柳澗(りうかん)の新月其やさしさ、かむりし編笠の内ぞゆかしく、三味線、二上りの調べ、海上はるかに見渡せば、七福神の寶船と歌ひしは、いとも賑はひてゆたかなる御世の新年、春の心ぞ知られける。

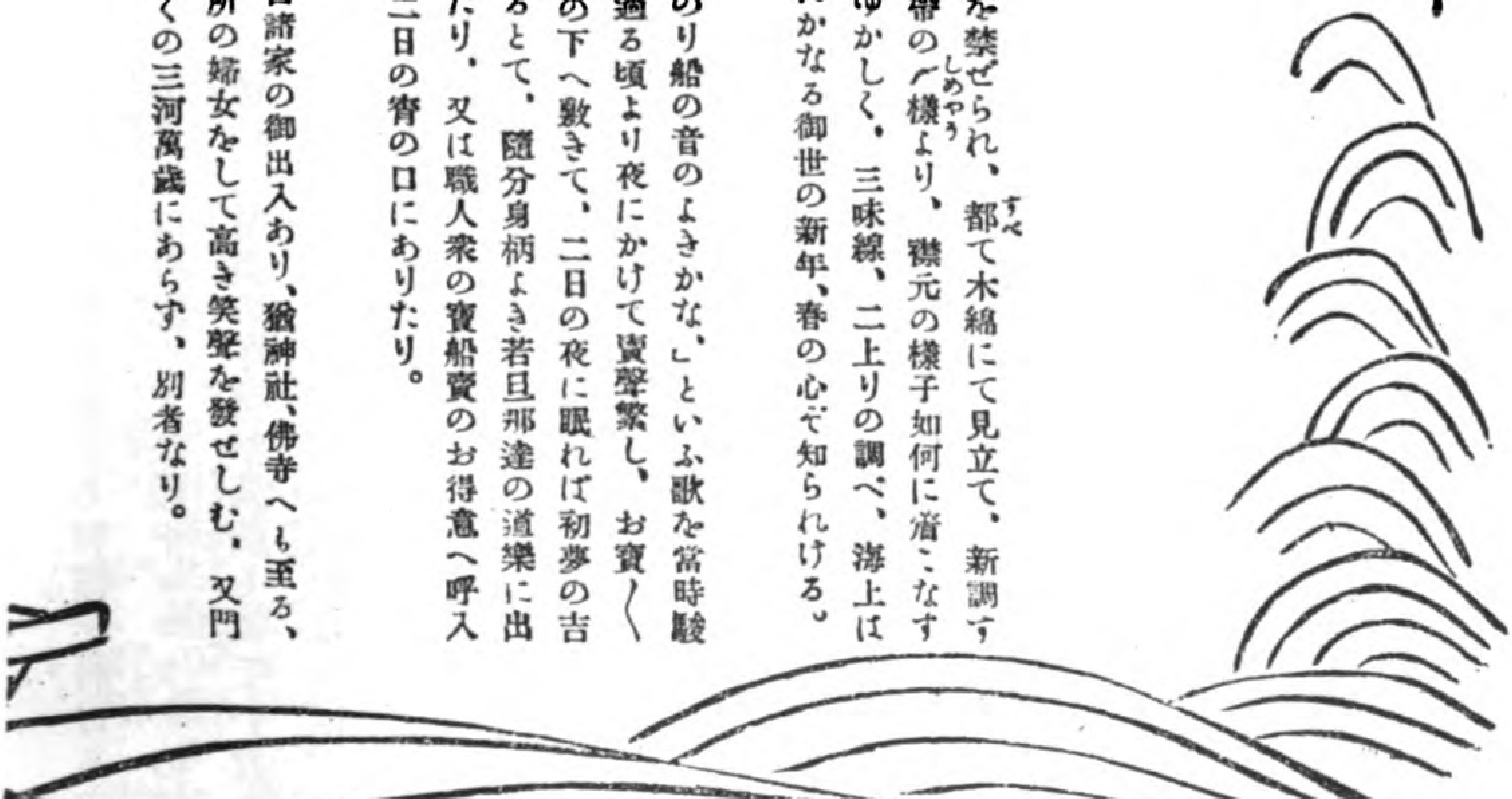
△寶船

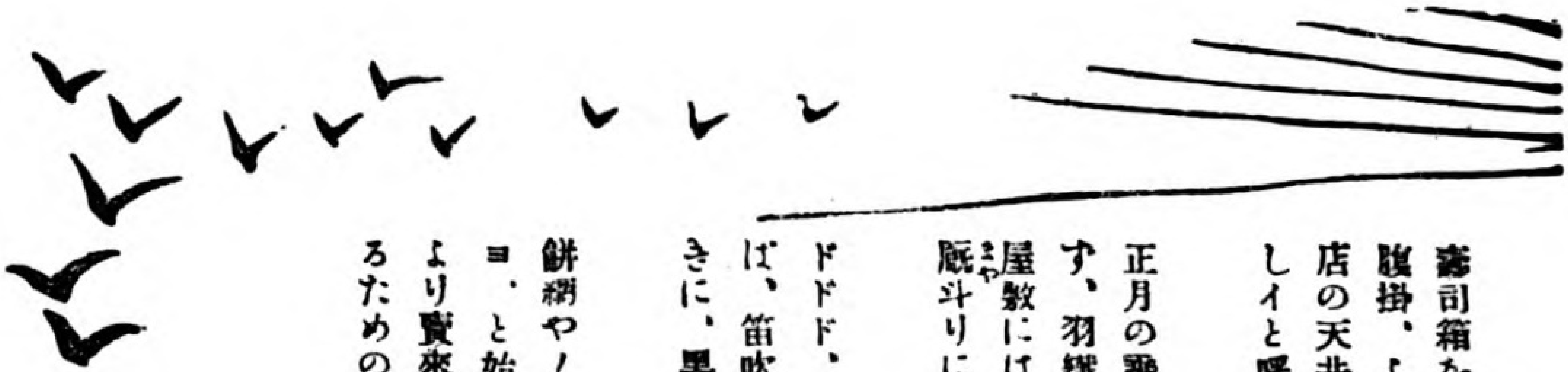
七福神乘合船の圖の上に、「長き夜のとうの眠りのみな目ざめ波のり船の音のよきかな、」といふ歌を當時駿河半紙といひし紙半枚に、墨摺にしたるを賣り來る、二日の正午過る頃より夜にかけて賣聲繁し、お寶〳〵エー寶船〳〵と呼ぶ聲、町屋敷前共聞ざるはなし、此寶船を枕の下へ敷きて、二日の夜に眠れば初夢の吉兆を見、今年の開運といふ、又寶船を賣り歩けば身の幸福を得るとて、隨分身柄よき若旦那達の道樂に出かけるもありて、知れる家に呼び止られ、互に笑ふなどもありたり、又は職人衆の寶船賣のお得意へ呼入られ、御酒の幸ひに預りて、端歌、淸元の隱藝の役に立など、二日の宵の口にありたり。

△萬歳

萬歳は三河の國より、東都へ來り家々の睦ましきを壽ぶく、各自諸家の御出入あり、猶神社、佛寺へも至る、萬歳壽ぶき歌をうたひ舞ふ間に、從ふ所の才藏は戲むれて見る所の婦女をして高き笑聲を發せしむ、又門萬歳といふありて、家々の門戸に立て投錢を貰ふあり、こは全くの三河萬歳にあらず、別者なり。

△こはだのすし





壽司箱を重ね、甍の上に紅木綿をかけて、色どりを粧ひて肩に荷ひ、水淺黄の染手拭、衣類、股引、腹掛、より足袋、草履迄、新たに調べ置て、正月二日を待甲斐ありて春霞棚引初めし大空を、壽司店の天井となし、門松の柱に〆繩の衝立は人樣の造作、其中をゆるく歩みながら、こはだのすーしイと呼聲は、味を廣むる壽の光景、當時の正月に必ずほしき呼物なりき。

△猿　舞

正月の乘合船は缺くべからず、又一蝶風の畫に多し、衣服二樣あり何れが古色なるを知らず、羽織袴の姿あり、萬歲に隨ふ才藏の如くなるあり、年々お出入の大名旗本の馬ある屋敷には必ず參る、町家には稀なり、武家方へ出るや御廏の御召しに應ずるあり又御厩斗りにて御暇給はるもあり、猿の藝づくしも正月の興には可笑くして賑はし。

△獅　子　舞

ドドド、ドン／＼と太鼓の音に、篠笛をあしらひ流し來るは、門獅子舞なりと見れば、笛吹く者より太鼓うつ者、皆新調の衣類、切立の手拭、廊裏草履の鼻緒の眞白きに、黑き足袋、時得し顏色にて諸方の招きを待ちつゝ往來せり。

△餅　網　賣

餅網や／＼と呼び來るや、チヤ最うお正月もお仕舞ですヨ、餅網やが來ましたヨ、と始めて正月遊びを戒められるゝも氣樂な頃といふべし、出れば十五日後より賣來るなり、乾かしたる餅を網に容れ、釣置きて夏の日永の茶受にするための餅をたくはへ置くに必要のものなり。



熱田縁采女



△采女の犠牲

縁の采女は尾張國熱田の里にて由緒正しき人の子なりけり、父母早く世をさりし爲め、伯母の方にて養はれしが其家まづしくて亡き親の供養も心に任せざりしを悲しみ居たりけり、その頃駿河の芦原に大蛇住みて人を害ふ事多かりしかば犠牲を備へて祭るの例なりし、さてその牲となるべきものをとて人買の來たりしを聞き、采女養金三千疋にて身を賣り、その金に一封の書置を添へ

つゆの身のきえん命はをしからできみが心のほどぞかなしき

の一首を記し鬢の髪を切り、それをかたみとして伯母の家にのこし置きける夫より蘆原にて牲となり、蛇に呑れんとせし時、忽然として熱田明神現れたまひ大蛇を退治して縁の采女を助けたまひしと云ふ。

△寵姫の哀感

熊野は遠州池田の驛の倡家の娘なり。貌麗はしければ、平内大臣宗盛都に召して、寵愛しけり、されど彼れ老母に遠く放れしことを悲み、つれに寢食安からざりし。或日宗盛東山の櫻盛りの時、花見の宴を催ふし、熊野も車を同しうしてまゐり、糸竹の調なゝめにして、頗ろ興を添へたりしが熊野は心樂しまずして一首の歌を詠めり、宗盛いとゞその至孝を感じて暇をたまひ餞別など厚くして家に歸しやりぬ。その後平家亡びて宗盛捕囚となりて池田の宿にやどりければ、さしも勢ひ盛んなりし宗盛の一時に衰へしを悲しみて左の一首を詠めりけり。

もろともに思ひあはせてしぼるらしあづま路にたつ旅のさ衣



熊野

厳島の有子



△歌人の惜別

有子は厳島の宮の内侍なりし、徳大寺實定卿、この島へ詣でたまひし折、御滯留のつれ〴〵にこの有子を召して琵琶など弾かせられ御手すさびに

山のはに契りて出でん夜半の月、めぐりあふべき折を知られば

といふ歌を與へられければ、有子束の間も忘れもやらず、御側に侍りしが、事はてゝ都に上りたまふといふに、今は忍び難く、せめて都に近き方までおくり奉らんとて、便の舟をもとめ同じ苫窓に付添ひて身を浮濱に任せつ袖汐たれてほしもあへず、終に津の國住吉の濱の沖にて夜半の月に向ひて此歌を詠み別れを愁しみ入水して果てしとなん享年僅かに十七歳。

△艶女の決心

袈裟は渡邊左衛門渡が妻なり、こゝに遠藤武者盛遠といへる北面の武者あり袈裟が艶麗深きよそほひに魂をうたれ、遂に道ならぬ戀慕を云ひかけ、もし思ひ叶はずば、おん身の母を殺さんとまで言ひ迫り、いかんとも遁るゝすべのなかりしぞゆゝしけれ、袈裟とくと思案して言葉を和らげ御身にしたがひ參らせんこと安しといへども、夫ある身は自由ならず、君もし眞に妾を愛したまへば夫を害したまへかしと、言葉を約してその伏戸ををしへ、その身夫の親にやつして終に盛遠に討たれぬ、さて書置細々と認めて一首の歌を枕邊に添へたりけり、盛遠伏戸を出でゝ月明りに透し見ればこはいかに男の首とおもいしは案に相違の袈裟なりければ魂地に落ちて膓九廻しぬ、詮方なくて自ら名乗り出で刀を授けて渡に討れんと云ふ、渡其覺悟に感じこれ宿業の然らしむるところなりと二人ともに出家して袈裟の後世を弔らひしとなん。



袈裟御前

中將姫



△佛界の奇蹟

中將姫は聖武天皇の寵臣横佩大臣豐成公の姫君なり、三歳のとき母君におくれ成長して繼母の妬にあひ、雲雀山に捨子となり、その時實母のことをなげきて一首の歌を詠めり、かくて母の菩提の爲に剃髪して善心尼と稱し法界に入りて大願をおこし、蓮のまんだらを造らんと志しけるに老尼來りてこれを助け、又若き女の訪らひて糸を染め、ほどなく成就していとも奇しき曼陀羅は織り成されたり、これ菩薩の來迎したまひしなりといふ、寶龜六、四月十六日二十九歳にして逝りぬ、今大和當麻寺にて執行する練供養といふは、中將姫の往生の體をうつしたるものなりといふ。

△賢母の教訓

千里は平群の朝臣廣成の母なり、この母廣成が幼き頃より養育に心を用ひて、文よみ、もの書きの友を選びて交はらせたれば、長じて博識の譽れ高く、天平五年遣唐使を仰せられてもろこしへおもむくとき、千里誡めの言葉をつくして、『此韓使にあふものは人倫の規模なりと雖も、もし虚飾の事あらば、わが大和國のきずとなりて、末代に至るもこれを消むることなりがたし、われ今汝に別ろことはいと悲し、さはいへ言葉に出すにたらず、猶この後身を愼めて事なかれかし』と教訓して、餞別にこの歌を詠み與へしとなん。

平群千佐登



橋の妙女



△至孝父の罪を償ふ

妙女は橘逸勢の娘なり、父逸勢罪ありて伊豆の國に流さるゝにあたり、妙別れを歎き泣く〳〵あとを慕ひて行くに、人々これをとゞむれども肯かず父に離れずして慕ひけるが、父は途中遠州板垣の里にてあへなく身まかりければ、その亡骸を葬りてのち尼となり妙沖と號して、墓の側に庵をしつらへて香花を手向けて追慕すること十年に及びぬ、この事都に聞えて帝感じたまひ、嘉祥三年父の罪をゆるしたまひ、正五位下を追贈せられければ妙沖よろこびに堪へず棺をたづさへて、都にのぼり、なほも供養おこたりなく世を送りしとぞ。

△貞婦の優情

いつの頃にや美濃の國笠縫の里に民子といへるものあり、年頃添ひなれし男の、ほかに家建てゝ、新たに妻を迎へ家具など皆持運びて、さらに民子にものいふこともせざりけり、かゝるほどに或時その男民子が所持の衣類を借りて、今の女に着せなどせしが程すぎて衣類をさん〴〵に着荒して返しやりける、その折に雉子、雁、鴨、などの鳥を添へて贈りかへしぬ、民子其鳥の名を一首にこめ歌をよみて遣りければ、男面目なくてや、またもとの家に歸り住みて、外に心を移さず、民子を愛し、一入睦ましくなりしと云ふ。

笠縫の民子



鶴の意匠


こうりん鶴

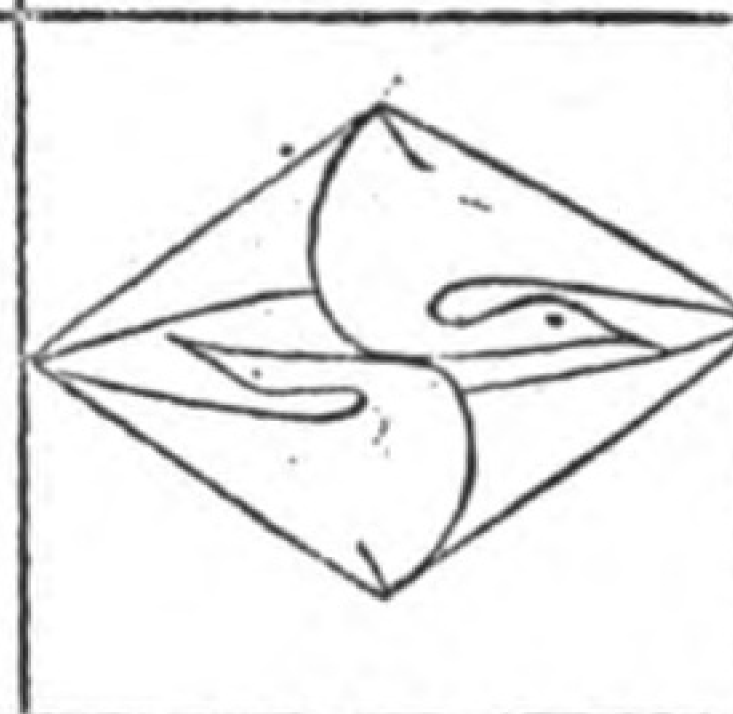

光琳三ツ鶴

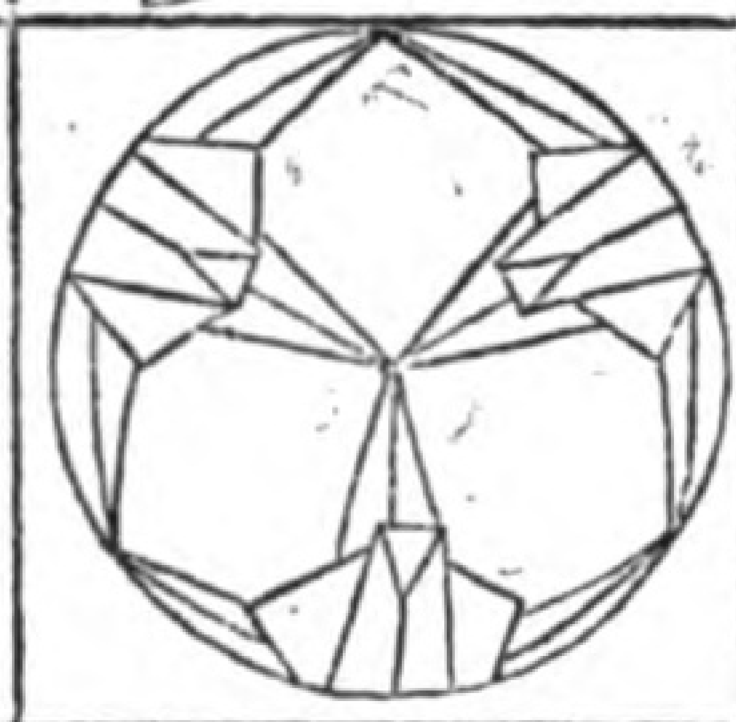

つるの丸

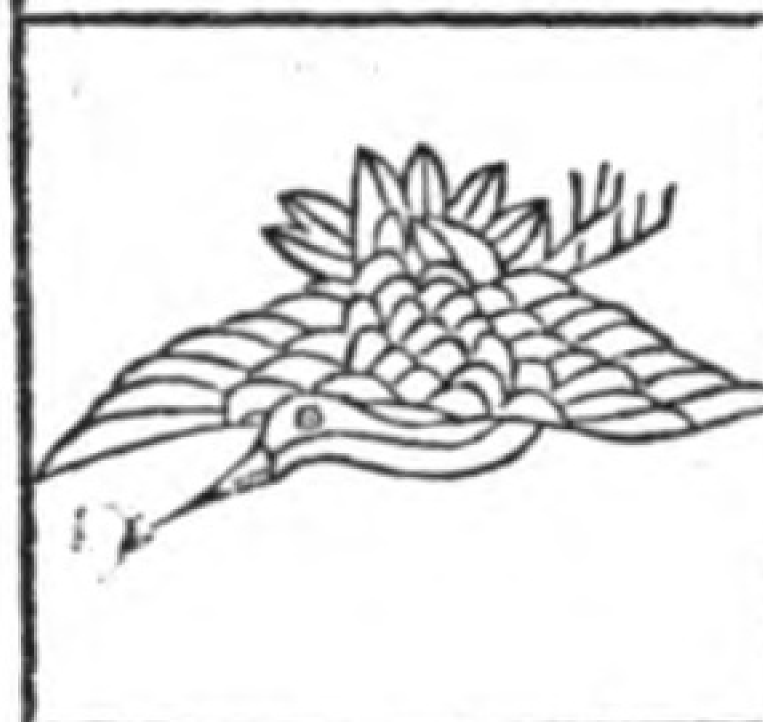

中ぼつくり鶴


鶴桔梗

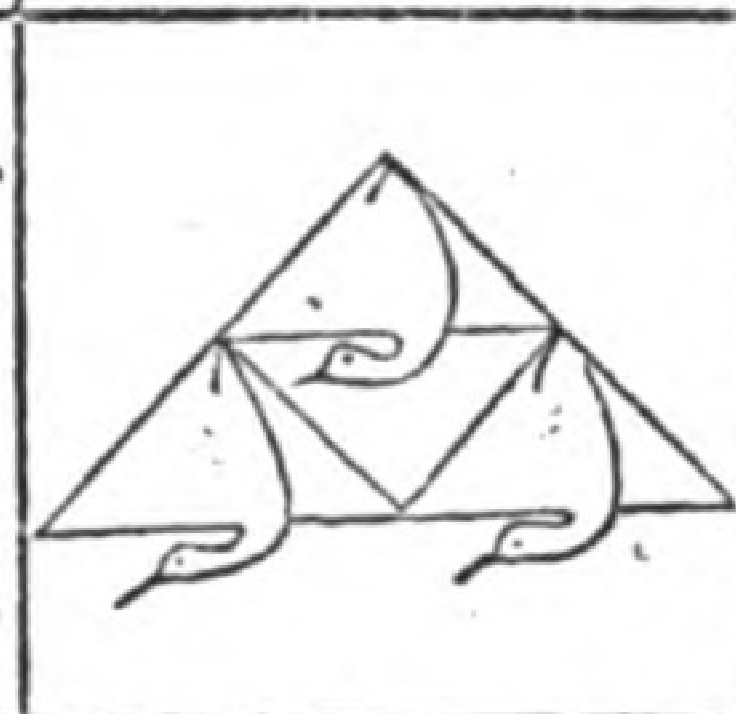

折つる


光琳鶴ひし

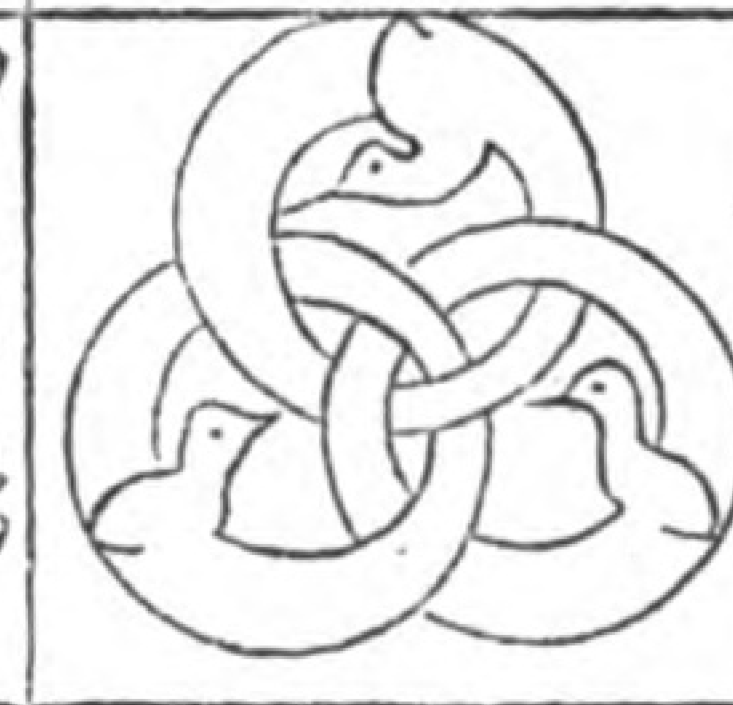

三ツ折つる


とびつる


喰ひちがひ鶴


三ツうろこ鶴

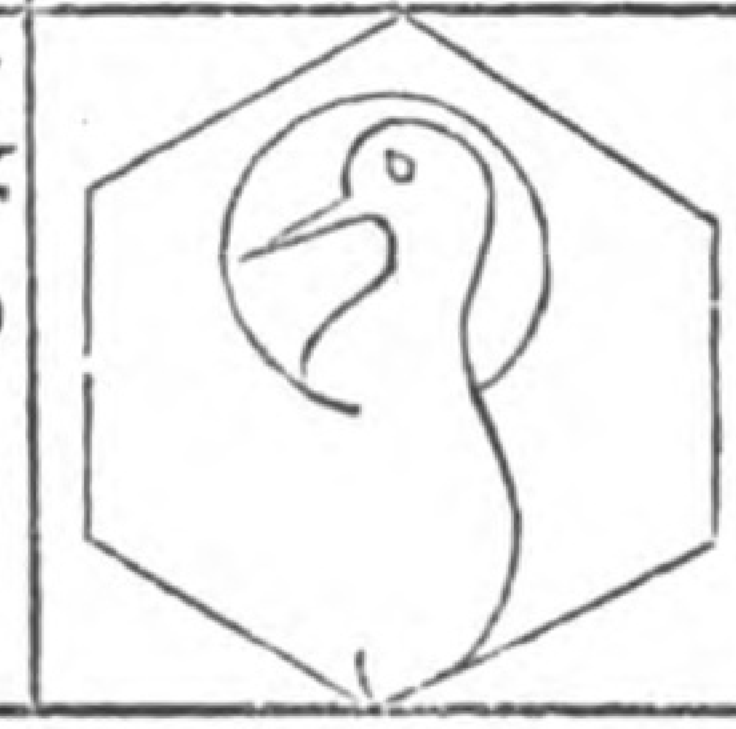

ゑば三ツ鶴


かなわつる


四角鶴


之の字鶴


さうのむかひ鶴


光琳六角鶴


舞つる



句に現はれた女性

福原雨六

○

口紅や四十の顔も松のうち　子規

改まつた年の始めには、平生どの樣に扮裝をやつして居る者でも、こざつぱりと髮も結はうし、着物も着換へませう。そして一寸お化粧でもすれば、四十女も見違へる程美しくなります。その姿を主人が見て、心地よく思ふのは、初春の家庭に取つて、どんなに愉快で幸福なことでせう。一年の計は元日にありと云ひます。どうか一家の主婦たる人は、先づ元日の此の心がけを初めとして何時も美しくにこやかにありたいものです。

○

元朝のすこし暇ある美人哉　大江丸

男も主人と云はず、召使と云はず、暮より春へかけて、なか／＼忙はしいものですが、女もまた女だけに暮の仕事に引續いて元日の支度があつて、一方ならず忙はしいものです。初鷄の聲に起き出で、目出度く元日を迎へようとするには、髮も夜の内に結んで置かねばならず、朝になつて箒をつかはぬやうにと、夜の中に隅から隅まで掃除をせねばならず、何彼と仕事があります。さればこそ此の句のやうな目出度さもあるのです。

○

若水や手にうつくしき薄氷　武仙

今は井戶が廢れて、夫れ程の苦痛はないが、水道の出來ない前は、山の手邊などではことに深い釣瓶井戶

で隨分難儀なものでした。元日の風は冷めたい、身を切る樣なものです。

若水に顔うつしみる女かな　玉鬼

年を一つ加へたものゝ、今朝は若がへつた樣で、皆ないそ〳〵とします。

○

屠蘇さして小謡聽かん娘の子　立志

お祖父樣を正座に、家族が行儀よく居並び、赤いお膳についた時は、どんなに目出度いことでせう。日當りのいゝ窓の上に、梅の鉢、福壽艸の鉢、水仙の鉢が三つ四つ並んで、同じやうに嬉しい春を迎へて居ります。

お祖父樣は屠蘇の醉に、大黑樣のやうな笑ひをしながら、好きな謡を一とくさり終つて、孃や、お前のいい聲で、どうだお祖父さんに聽かしてくれい、アハ、と睦しさがあふれる。

妹箸に持ちなやみけり芋頭　風馬

小さい妹は、持ち馴れぬ祝ひ箸を握つて、ころ〳〵とお芋の逃げるのを、しきりに押さへやうとして、お膳の上を追ひ廻はすのも笑ひの種となつて、眞實に春は目出度いものです。

○

「正月は隣りからでもしやちこばり」で、儀式は儀式で大事ですが、また松の內は粗忽があつても咎めません。川柳に「松の內泣くは七歳未滿なり」とあるやうに、皆な一樣におもしろく笑つて送ります。

元日や女のすなる遊びごと　月村

笑ひさゞめく聲は、門の松風に相和して、こゝの空にも鶴や舞ふらんと思はれます。

遣羽子やおこめに交る年女房　木導

よく地方の人が見て、「東京の女は、いゝ年をしながら羽子をついて」と丸髷の女の、小娘の中に立交つて白粉塗られて騒ぐのを、不思議さうにいふけれど、年の改まると共に若がへるのは結構です。斯て松をひいてまた一生懸命に働いて、夫の奮闘を助くるのが、最も大切な心懸けでせう。

振袖を片手に擧げて手鞠哉　孤舟

歌麿の繪でもみるやうです。羽子の年々に流行のに引代へて近來鞠遊びは、漸次に廢れたが、日本の婦人にはやはり斯う云ふ遊びが相應しいやうですの



春駒や男顔なるをんなの子　太祇

昔は年の始めには春の駒とて、作り馬の頭をいたゞいて、歌をうたひ舞を舞つたものですが、今

は古い錦繪にその俤を止める位で、知る人はないやうです。

鳥追や笠覗かるゝそんな聲　　龜今

此の鳥追と云ふものも、徳川時代の風俗として、正月の松の内の往來に、目出度い姿の一つでしたが、今は殆ど絶えました。これは編笠を赤い紐でくゝつて、美くしい扮裝をした女が、三味線を抱へて目出度い春の門に立つたのです。これも春駒も身分はいやしい者でしたが、二つとも春らしい姿でした。

○

二日の賣初め買初めと云ふ古い習慣は、いまだに行はれて居ります。その日の雜沓は非常なもので、中には暗い中から起き出でゝ、商家の店に立つ者もあります。

女房や買初めの絹五六尺　　樂南

何も夫れ位のものに、こみ合ふ人に裳裾を踏まれ、好んで寒い思ひをせずともと思はれるが、彼の子にあれそ、お祖母様にこれそと、常から心懸けてたものを縁起の買初めに買ひ、目出度い仕事始めに、拵へてあげたいと云ふ婦人のたしなみがみえて、嬉しく感じられます。

年玉や抱き上る子に小人形　　召波

叔母ちやん、おめれとうと、よち〳〵歩みながら追ひ縋る子は、大きな羽子板を抱へて、年一つとつた丈けませて、其の挨拶が眞から可愛く、何も欲しいとねだらないが、どれ〳〵叔母さんが、御褒美に、よいもの買つて上げやうと、目についた小人形、之れがお前さんの妹さんよ、今夜から温順しく抱いて寢て、母アちやんにダゝを云ふのでありませんよ。

○

彈初に指のふとりや琴の爪　　佳茗

他人の家に嫁ぎては、習ひ覺えし琴のしらべも、旣う他ごとのやうになつて、琴は久しく床の間に飾られたぎり、とんと手も觸れず、縫ひ模様の美くしい袋は元の儘に……。今日は兩親の許しも出て、日當りの縁側近く運び出したれど、ツヒ昨日の樣であつたが一二

年、世帶と云ふものに手を染めては、調べもいとゞ氣恥かしく思はれませう。

鍬初め妻は織ものする日哉　八重櫻

農家といつても、仕事は種々あります。殊に近年は各地方共養蠶が盛んで、またかひこから糸をとるとか、それを織るとか婦人の仕事がなかなか多いやうです。めでたい春を藁屋根に鷄が迎へて、軒端の梅の一二輪咲いたあたゝかい窓の下に、カタ〳〵と機を織る音は、家の富、村の富を作り



ます。

○

次ぎの間で餠を燒くなり歌がるた　失名

正月は何處へ參つても、歌がるたとりで賑はひます。近年は殊に流行しますが餘り男の交るのは嬉しくありません。

歌がるた女斗りの夜は更けぬ　子規

平生から仲のよい睦まじい學校のお友だちや、近所の娘さんをあつめて、快よい遊び

に夜の更けるのを忘れるのは、どんなにか樂しいことでせう。お正月の内丈けは無禮講、お竹も、お松も、お梅もこゝへ來て、お仲間へ這入つて御覧、アレお手つけを知らないのと、お竹お梅の失策が、却つて興を添へるも面白い。

振袖に手元のかるた亂れ髮　　繞石

やんごとなき御仁の邸に招かれて、姫さまのお對手するのは、昔しは難かしかつたか知れませんが、今の姫樣であつたら、昔のやうではありますまい。

○

女童の袖くらべけり飾小袖　　几董

松の内は上も下もありませぬ、皆な美くしく着飾つて、春の賑やかな景色に、一倍の色を添へます。

若菜野や赤裳引する雪の上　　闌更

百人一首の歌に「君がため春の野に出でゝ若菜摘む」とあるのと同じく、矢張り昔のすがたで、今は見る事の出來ぬものです。

妹が子は薺打程に成りにけり　　成美



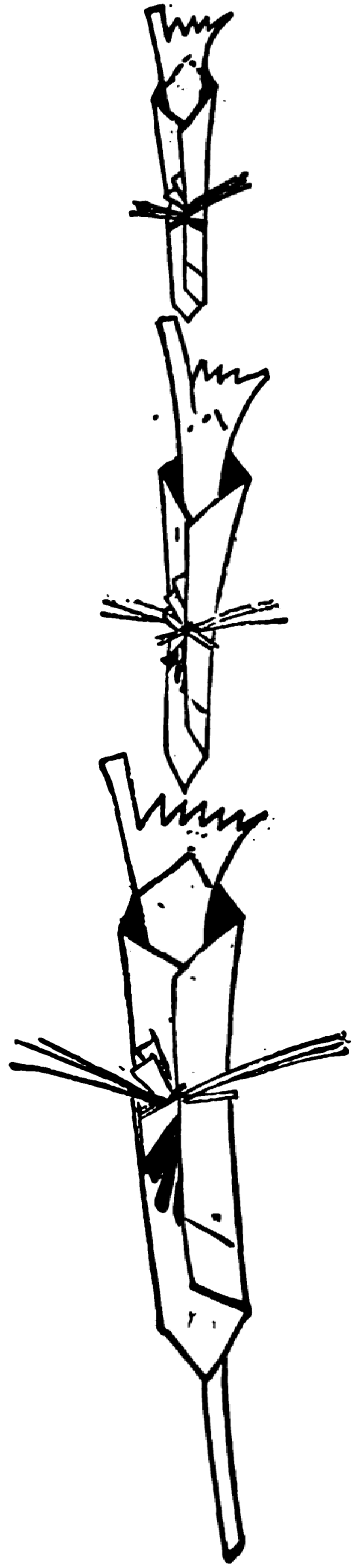
人の日と云ふ七種には、俎板の上に七種をならべて唐土の鳥の渡らぬ先にと云ふ歌をうたつて、ストトンと打囃したものですが、古い習慣は年々廢れてしまひました。

懸想文に祝はれて居る女哉　　碧童

優美な姿の懸想文賣りも、今は繪にみるのみで、常陸帶の古事などは、思ひ及ばぬ事でせう。

一部分の印象





水引と熨斗

笹木幸子

水引の元は紙を折つて用ひたので御座いますが之がこよりとなり、元結となり水引と變つて參りました、人に物を贈る印に必ず用ひられて居りますから一應は心得ておいた方が便利で御座いませう。

水引の種類はいろ〳〵御座いますが今日重に用ひて居りますのが、紅白、金銀、金紅、青白、白、などで紅白は普通の場合には凡て之を用ひます、金銀は非常に丁寧な場合に用ひます例へば婚禮のときなどはよく用ひられます金紅も京都邊では用ひますが正式では御座いません。

青白、(普通黑白と申して居ります)白は凶事に用ひますが白の方が正式で青白は紅白に對して作つたに過ぎないので御座います、略して元結を用ひます。

結び方は正式には雌結、雄結、結切、追波など御座います、近頃商賣をする人がいろ〳〵な結び方をいたしますが、先づ左にあげますものを心得て御出になればまちがひはなからうと思ひます。

雌結と申すのは普通の結方で、兩方へ輪の出たのを申します略式な結方で御座います。

雄結はあまり用ひませんが紅の方だけ輪にして結びます、之を婚禮のときに銚子の柄などに雌結と代る〳〵結ぶことが御座います。

結切は結び切つたもので儀式のときは皆之を用ひます。

追波は結切の端を切る代りに、又切るのを忌むといふ意味から先を箸でくる〳〵まいて波の樣にしたもので、よく婚禮の贈物などについて御座います。

用ひます場所は大抵紙で包んだ中央か、物によつては下の方をしばります、左を陽の色にいたします(向つて右)即ち紅白ならば紅が陽、金銀

ならば金が陽、金紅ならば金(之は陽中の陽で御座いますから)青白ならば青といふ樣にいたします。

婚禮、出産、賀壽の贈物には結び切りか追波を用ひます。

凶事の贈物には結切りを用ひます。

日常の贈答、病氣見舞、水害火災の見舞、餞別、御禮などには蝶結びでよう御座います。

正月、盆、歳暮など儀式の贈物には、やはり結び切りがよう御座いませう。

終りに水引の數で御座いますが、大きいものを包むときは大きな水引で五本七本九本と數を多くしてまゐります、五本ときまつて居るものでは御座いません。

ついでに熨斗の事を一寸申上ておきませう、熨斗は熨斗鮑の略で古くは薄鮑、長鮑など申して神膳に供へました鮑の肉を薄くのしたもので御座います、長生不死の藥であるなど申して居りますが延長といふ意にとつて永久に續くといふことを祈つたもので御座いませう。

それから日本では古來魚類を非常に尊びまして悅のとき人に物を贈るには必ず魚を贈つたもので御座います、それ故に魚類でない品を贈るときは魚類を添へました、こんなことから前の熨斗鮑を贈物に添へる樣になつたので御座います。

祝ひの贈物には此長熨斗を紙二枚につゝみ、水引をかけ添へるのが禮で御座います。此長熨斗も元は鮑で作つたので御座いますが、價が高くなります處から今日では布海苔や、海茸などで作る樣になりました。形や色は同じでも魚を添へるといふ意からは何にもなりませんので御座います。

なほ略しては長熨斗を包んだ形を小さくして。今日皆樣の御用ひになつて居ります折熨斗が出來ました、中央に小さく熨斗が入つて紅白の紙などで包んで水引の代りに金銀の紙を細く切つたので帶がして御座います便利といふ點からかうなつたので御座いませう。此熨斗を御用ひになりますとき赤や青や紫の紙でつゝんだのよりは白か紅白の方がよろしう御座います。

なほ略しては繪熨斗と申しまして折熨斗の形や、水引をかけた有樣を紙にすり出したのが御座います。

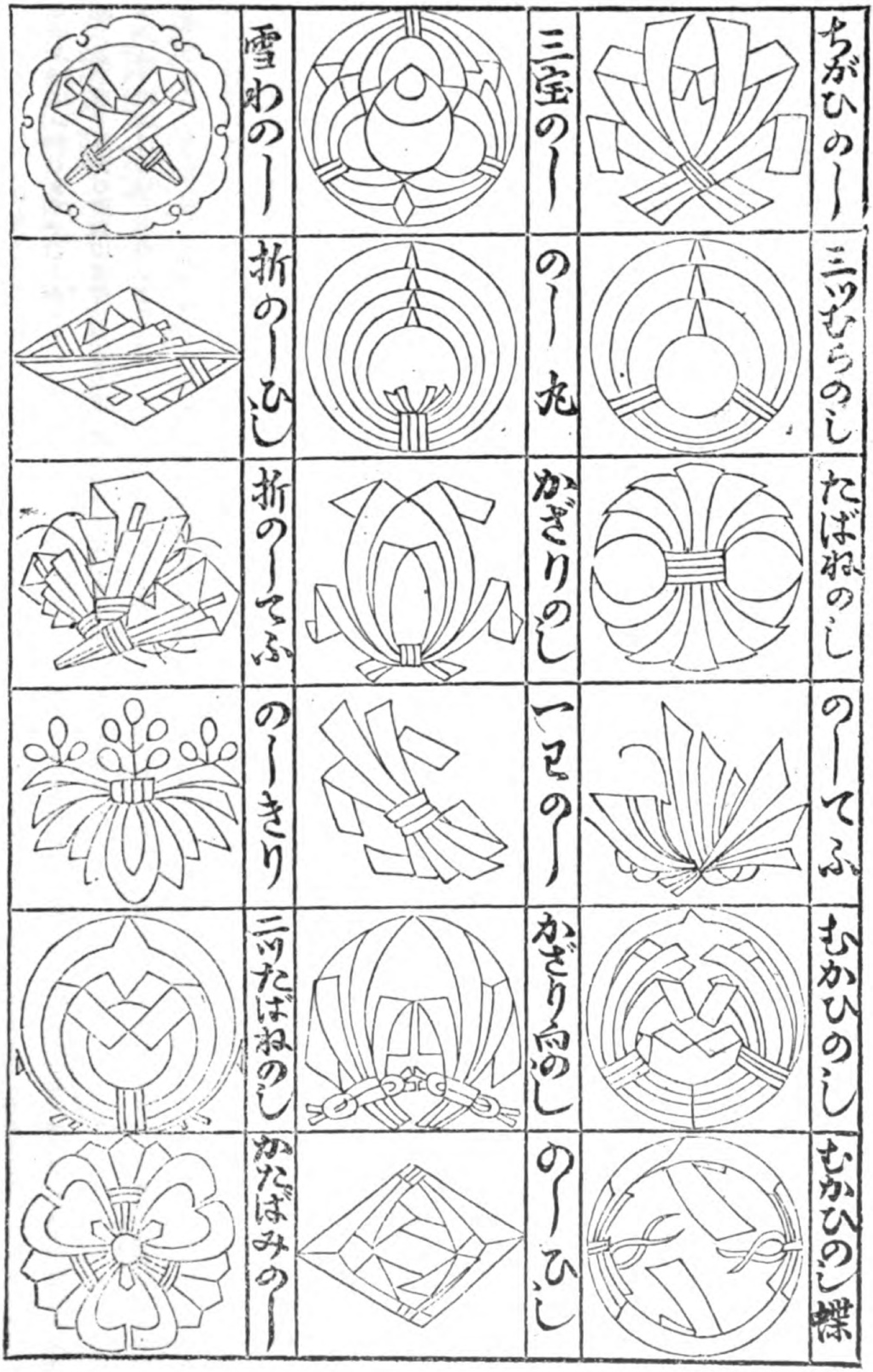
又已むを得ない場合に捻熨斗といふことをいたします、一二寸の紙を四つ折にたゝんで中央を捻つたものを添へることも御座います。

なほ略しては筆で包紙の上にのしと書くことも御座いますが、前申上げたとほり略の略で御座いますから。上輩に對し又儀式のときにはあまり用ひない方がよからうと思ひます、凡て禮とは其場合に適當なることを申します、よく分つて居て臨機應變の處置が大切かと思ひます。

縫初や金絲ふくらむ椿の花　水紫

日のあたる障子ながめて庵の春　桃島

熨斗の意匠


ちがひのし
三宝のし
雪わのし
三ツむらのし
のし丸
折のしひし
たばねのし
かざりのし
折のしてふ
のしてふ
一巴のし
のしきり
むかひのし
かざり向のし
二ツたばねのし
むかひのし蝶
のしひし
かたばみのし



ハイカラ令嬢とその背景

八つ橋

日本の庭に立たせて見た娘の姿

さゝやかと云へば聞えがいゝが、猫額大と申せばいとも貧しく聞えます。東京のお庭はそのどつちの言葉に當嵌るか、それは皆樣の解釋に任せ、初春早々あたら口に風ひかす業はやめに致しませう。

それは兎に角、京童ならぬ新歸朝者のさがなき噂を申すのを聞きますと、どうも東洋風の庭園は箱庭主義でイケないれ、第一人を見れば盜人と思への諺を固く信じて忍返しの割竹や釘づけの防備はイヤどうも怪しからん……と被仰る。

怪しかるか怪しからんか、それは妾の存ぜぬこと、そんな問題はバタ臭い青年諸君にまかせておいて、こゝでは純日本式の樂園地――原始時代の大自然の光景から、花鳥風月を一手にあつめた結構まで、あつさり築きあげた庭園の樣子をひとわたりおしやべりして見たいと思ひます……だがそれは皆んな妾のお友達の家のお庭なんです、隨つてその方々が引合ひに出されるのはなにもかゝり合せた御縁だとお斷念め遊ばせ……ホヽ。

けれど決して惡口を申すのではありません、純日本式のお庭にあつばれ東洋の代表的婦人！……の芽生をならべた對照せは、さつとさつと面白からうと存じます。あらやつぱり惡口ですつて、どういたしまして。

△若松の庭

これはとも子さんの御庭園です。元來が武門の出、お父樣は陸軍の將官お兄樣は海軍の士官候補生でいらつしやる、されば若松の庭と聞くさへすつきりと清廉な軍人肌がうかゞはれて、一入床しくおもはれます。

一目見たら土佐繪といふところ、庭の中央に手頃よ

く軟土を盛つて、それに小松の恰好のいゝのが五六本——人ならば殿上住の公達とも思はれます。それと、並んで左手の丘にはうるさからぬ程度に熊笹を配らつてさらさらと風に鳴ることもあります。この二つの丘の間が飛石づたひ。すぐうしろを圍んだ建仁寺垣の眞青なのが黒い蕨繩とシックリ色の配合が出來て、目の覺めるばかり綺麗でそして快活なお庭でございます。マアいゝこと配色の妙てこゝね、こゝを應用して帶地をこしらへたらきつと好いことよ……無頓着なとも子さんもかう云つて小首を傾げたほどでございますもの。

お家着はいつも筒袖を召していらつしやる。辨慶物のハッキリしたのがお好きで、お髮は束ね髮、さう申せばお兄様の詩吟を向ふにまはして筑前琵琶の一節ぐらゐは行けさうに聞えますが、どうしてそんなおてんば娘ではございません。琴の名手、鶯のやうな美音は聽くとしも聽くものをして恍惚たらしめるといふくらゐ……そしてお芝居が大嫌ひ。このお庭の小松が大松となつて早くハンモックが懸るやうになればいゝにと樂しんで被在います。

△水仙の庭

あぐり子さんのお父樣は銀行の重役、萬事凝り性の方だと聞いてをりましたが、その凝り性も世間に多い俗惡なものではなく、ごく〳〵淡白した趣味のあるお方だといふことはすぐと分ります。何故と申して、この水仙の庭の少しも厭味のない氣品の高い設計方を見ましたら、誰にだつて察しがつきます。お庭はその家主の人格の反映だと申すぢやありませんか……。

さゝやかな坪數を割り竹の垣根でくぎつて、外から白壁の土藏がこの小い天地を覗いてゐます。けれどこの白壁の土藏はよその家のお庫でございます。庭の西北の隅に、たつた一本の雄松と錦木が植ゑられてありますが、これは庭全體から申しましたらむしろ客で少し左手に寄つてなだらかに裾を引いた麓に、丈の高いなんとかいふ種類の水仙……志摩の鳥羽邊に多くあるのが十七八株つるぎの如く天にむかつて葉を立てゝゐます。これがどうしても、庭の主、庭全體の締緒となつてをります。

霜ぶくれのしたあぐり子さんが、このお庭に下りたつて小い木鋏をつかつていらつしやるお姿……ほんに水仙の花もたとへつべき美しさ、そ

れに色のお好みも常に草色がゝつたものばかりお選びになります。木鋏といへば無ろん生花に堪能でいらつしやることがわかります、思遣りふかい方だけに始めのころこそ遠慮勝にお庭の水仙な 鋏の歯にかけましたが、このごろでは朝 夕 眺めてゐる花に手をかけるのは無惨だと被仰つて花屋に 御用をおふせつけるやうになりました。

△光琳式の庭

利津子様の御庭園でございます。兄様がある汽船會社の重だつた椅子をしめてゐらしてお父様は楽隠居。されぱこの庭も年寄の好みが遺憾なく發揮されてゐまして、一寸いぶしのかゝつた素人ばなれのしたものでございます。

妾のうかゞつた時はあだかも秋の半ばで、まるで光琳派の絵を見るやうな、つまり有聲の畫といつたおもむきがございました。まづ…つきあたりは曲の手に節目板の塀で圍んでありまして、お座敷の竹縁に附属した手水鉢のそばに一本の錦木があり、下に秋海棠のわびしい花がのぞき、七八本の雁來紅もあつて黄や赤やいろ〳〵に染めだされてゐました。この向ひに捨石ひとつ…それも石山の稜稜しいのではなく、潮氣に黒ずんだ磯石の寝たやうな姿のがおいて



水仙の庭

少しばかりの藪柑子が植ゑ添へてありました。

妾等がうかゞひましても、利津子樣はよく舞扇を帶の間におはさみになつたまゝ、出ていらつしやることがございます。何時でしたか舞浚ひのあつたと云ふ翌日でした、銀杏葉をちらした帶をおしめになつて、それがどんなに艶つぽくお見えになりましたか、舞はよつぽどお達者だと承つてをります。無ろん頭は日本髮、きもの〻柄をお選びになるのがお上手なのは、お友達仲間でも有名な事實でございます。この方が振袖でも召して庭にお下りにならうものなら、お庭はそのまゝの舞臺となつて、なにか妙なる絃樂でもおこりはしないかと思はる〻くらゐ……ご自分でもこんな書き割で舞つてみたいと被仰たことがございました。

△紅梅の庭

福代子さんのお庭でございますが、この方は、御兩親のかた方がお亡なりになつて、お母樣お一人でございますから、おんまり福代子でもございません。けれどお兄樣が文學士でいらして面白いお方、姉樣はさる畫家のところへお嫁つきになつてお近い所に住んでゐらつしやいますから、さう不福代子の方でもございませんわれ。

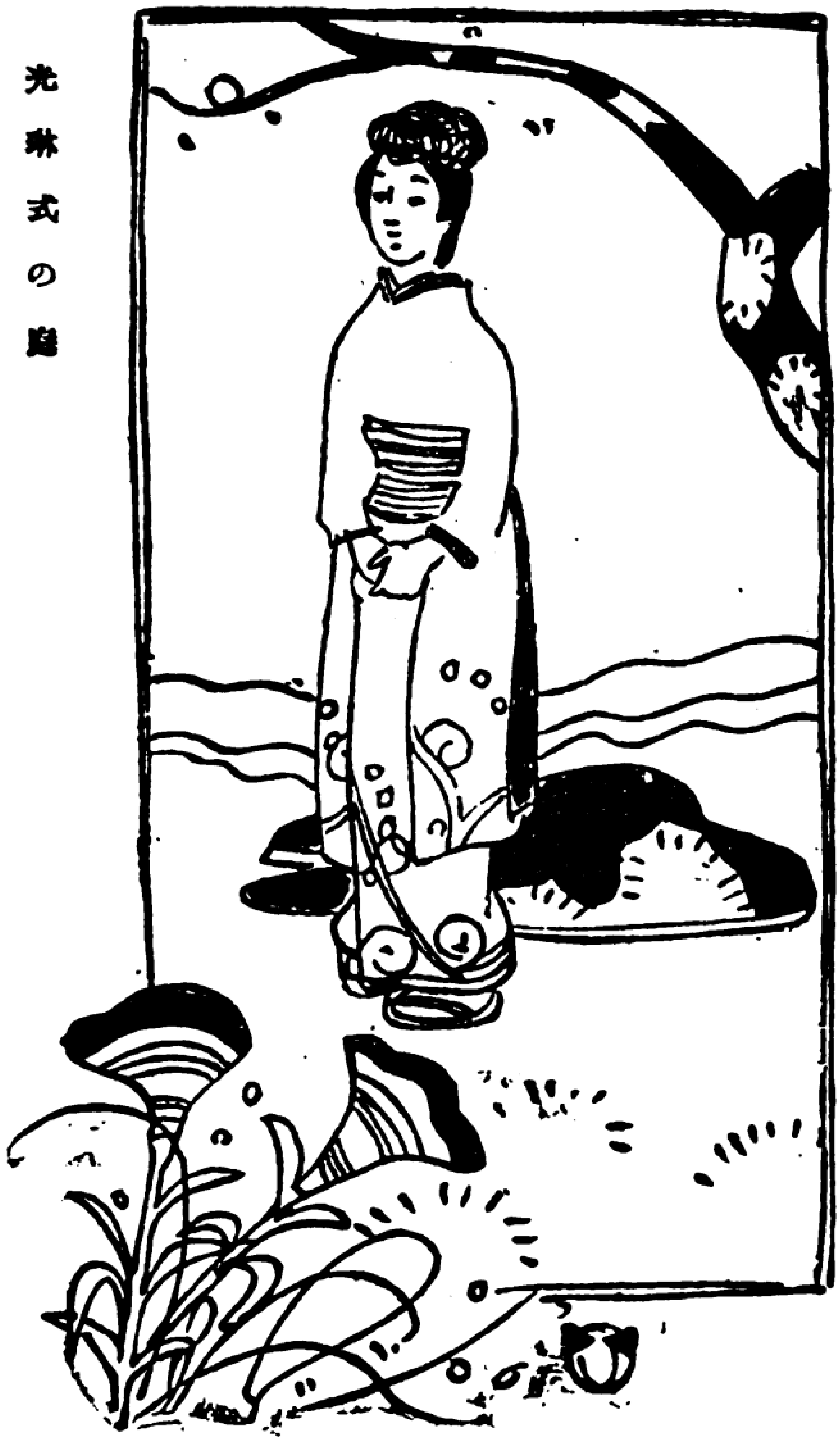
この庭の外圍ひはたゞの板塀でございますが、内には少しはなして四つ目垣が一重繞らしてあります。垣にはなかほどに開き扉のついた生け込み柱の小門があつて、その邪魔にならぬ場所に、紅梅が三本、高く低く面白く組み合せて植ゑつけられてあります。外には八つ手が一株あるつきりで、捨石に苔さへついてゐないと云ふ至極手數のはぶけたお庭でございます。この紅梅は兄樣のお好みださうでして、いつでしたかも『れ、兼好も梅はしろき、うすき紅梅、一重なるが疾く咲きたるもかさなりたる紅梅のにほひめでたきもみなをかし、つて云つてますかられ』つて階下つてゐらつしやいました。

福代子さんもこの紅梅はお好きださうですが、兄樣や姉さんのお婿さんやのやうな筆持つ商賣は大嫌ひださうでございます。理想のハズは工學士それがいけなかつたら辯護士でも我慢するといふ順序ださうでございます。どつちかと申せば無口のはうですが、時々やさしい氣焔をお吐きになります。お髮は殆んど兄樣が壓制的に日本髮においはせになりますが、こんな重たいものを頭に乘せるなんてどの點から云つても無意義よ……て餘憤をおもらしになつたことがあります。福代子さんが庭にお下りになれば蜘蛛の巣を大變氣にしてきつとお拂ひになります、なにごとも足手まとひのきらひな性質がこんなところにでも窺

はれます。そして『兄さん〳〵、さゝがにの…がゐてよ』なんて憎くきれ口をおたゝきになります。

△盆池式の庭

のぶ子さんのお家はかなりな實業家でございますが金寶には縁があつても子寶にはうすく、のぶ子さんたつたお一人でいらつしやいます。されば古いいひぐさですが蝶よ花よ掌中の玉とばかり愛でいつくしみになつて、糸目惜ますお金をおかけになるといふ噂、さもあるべきことゝ存じます。



光琳式の庭

昔の人が水は淺くて流れたるがよし、深きは涼しげなし。と云つたさうですが、このお庭にはもつとも風情よくそのすゞしげなる池を構らつてございます、池の形は瓢形、まつかうの垣根に沿ふて大小二株の合歡木が枝を水の上にさしのべてゐます。その水のせまつたところに三つ二つ飛石がすゑられてむかふに通ふやうに出來てゐまして、土濕りのあるあたりには燕子花とすこしばかりのおもだかとが殊勝らしく抱きあつてゐます。これが花時分ならそれこそまるで友禪染を見るやうでございます。



森律子孃と語る

婦人記者

森家の門を入ると、左の方に車夫部屋があつて、今しもお抱の車夫が俥を掃除して居るところ。玄關の正面には大形の姿見が置かれてある。

訪ふと、直ぐ取次の女中が出て來た。どうぞこちらへと、南向の心地のよい六疊の間に導き、茶菓をすゝめながら、

『只今お孃様は丁度英語の先生がおいでになつて居りますので、大變失禮でございますが、少々御待ち下さる様に。』

と挨拶して出て行く。

△美しい部屋

硝子障子を透してさしこむ氣持のよい日光を受けて、美しう飾られた部屋は一しほ清々しい感じがする。

天井には、四季の造花、目もさむるばかりのくす玉か、ゆつたりと下がり、左の方には友禪の袋をかぶつた三味線が二三挺、右の方の壁によせて化粧簞笥、其の上には博多人形、奈良人形、美しい着物を着せた今様美人の人形などが立つて居る。

黒塗の大きな箱のあるのは、つゞみや太鼓がしまつてあるのかと思つたが、鴨居の上の壁に、三寸位の紙袋に、赤で『大入、森律子孃へ、帝國劇場』と記してあるのを、同じ様に、いくつも〳〵並べて貼付してあるのは、後で聞くまで何だか分らなかつた。

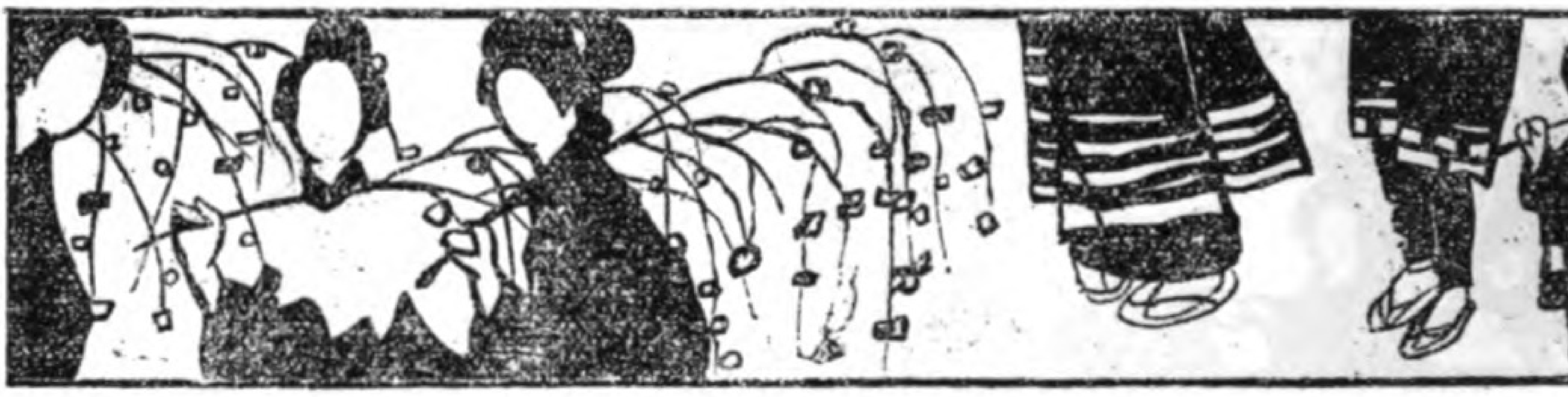
△律子孃の應接ぶり

やがて先生が歸つたと見えて、『大層お待たせ致しました、どうぞこちらへ』と今度は律子さんの居間へ導かれた。

床には文晁の布袋の畫幅にこやかに、黒塗の衣桁には、毛の肩掛などが掛り、其の傍に、『森律子孃へ、律見會』と奉書に書いた反物の贈物が、大きな白木の臺にのつかつてゐる。

表情の巧みな律子さんは、溢れる程の愛嬌をたゝへ、一筋亂れぬローマ卷に、青磁色のリボンと、寶石の輝く飾り櫛一本、至つて清洒な髮飾りに、荒い





矢絣の着物に紅氣なしの友禪ちりめんの羽織、お納戸色の博多の帶、緋縮緬に細かく刺繍のしてある帶〆、江戸紫に紅葉を繡つた半衿の配合もわざとならず美しい。

『まあほんとに物置の様に取散らして居まして。』と十年の知己に對する如き接待振り。

△忙がしい女優生活

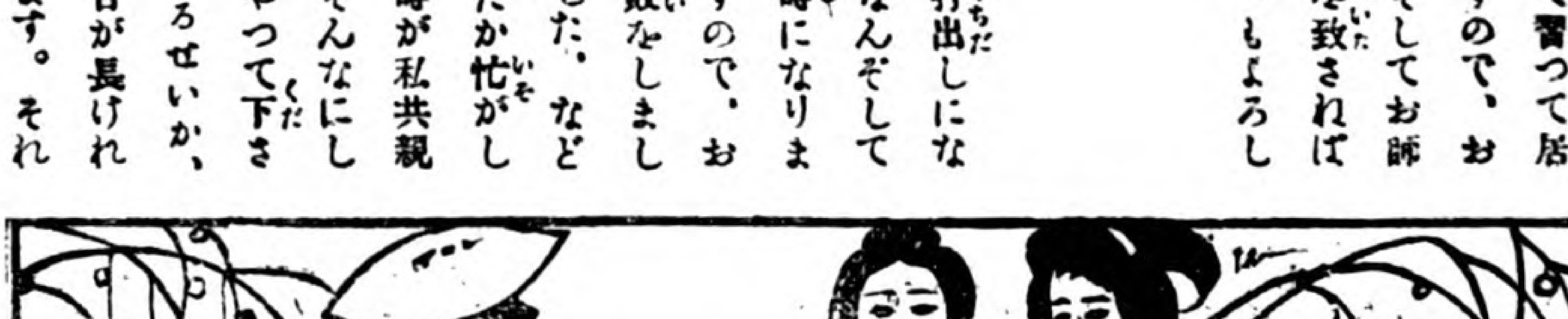
私も折角思ひ立つて、只今迄通つてまゐつたのですから、どうかして日本の女優と申すものは、藝術の點にも人格の上でも、全く神聖なものだと言はれる様になりたいと存じます。昔出雲のお國一派の女優が國を亂すものとして、取締られたやうな不體裁のない様にいたしたいと勉強致して居ります。

二年の間、毎日生徒として學校で敎へられましたが、まだ／＼未熟で御座いますから、只今でもいろいろの御稽古にまゐつて居ります。

朝九時迄に仕度を致して、すぐ踊を淺草と若柳へ稽古に參ります。それから愛宕下の杵屋で長唄を敎はつて、鶴澤文京に義太夫の稽古をして貰ひ、麴町四丁目へ下方を習ひに行きますが、ダンスと薙刀丈は特別に劇場の方へ先生に來ていたゞいて習つて居ります。此の様に朝も早くから出かけますので、お辨當はお稽古先のお宅でいたゞきます。そしてお師匠さんを廻つて四時一寸過迄に樂屋入りを致さればならぬのですから、車に乘り通しと申してもよろしいほどです。

△歸宅後の樂しみ

それから五時に開演致して、十一時に打出しになりますが、風呂に這入つたり、歸り仕度なんぞして居ますと、どうしても宅へ着くのが十二時になります。でも母は必ず起て待つて居てくれますので、お茶を戴きながら、今日は舞臺でこんな失敗をしましたとか、同窓の何子様が見物席に來て御出でした、などといろ／＼話しを致しますので、もう何だか忙がしくて一寸も休む暇がありませんから、此時が私共親子の一番樂しみな時なのでございます。そんなにして暮して、身體を損じませんか、と仰しやつて下さる方もありますが、希望をもつて働いて居るせいか、少しも苦しいと思つた事はなく、今少し日が長ければいゝのになどゝ思つて居る位でございます。それ



さてのぶ子さんのお人柄ですが、一口に申したら毒にもならず藥にもならずといつたお方、板を張つたやうな表情のないお顏は、お美しいにはお美しいが瀬戸物のやうにつめたく、さう申しちやなんですがあの皮膚の下に果してあたゝかい血がめぐつてゐるのかと怪しまるゝばかりでございます。どことなくお寂しいお方、これですべてを云ひ盡してをりませう。

お庭にお下りになる時は、きまつて草履をおはきになります。さうして音もなく水の畔に立つて魚のおよぐさまをさも羨やましさうに眺めていらつしやる、それが花時分なら一層慘らしく、御當人よりなによりあたりの人がつひホロリとして終ふさうでございます。だがお噂によれば、慶應出の秀才とかゞ近々御入婿なさるゝとか……さすればのぶ子さんのお心にもこの庭にも春の暖かい日が射さんものでもないと、陰ながらことほぎ參らせます。

△雜木植込の庭

自からせん子ぢやないおせんよと被仰る。かならずしも語呂が惡いからばかしではなく、萬事令孃ぶるのが大嫌ひでいらつしやる……おせん樣のお父樣は博士で某大學の教授、無頓着なお方だものですから澤山のお子供さんもみんなが皆んなのび〳〵とお育ちになります。

お庭は檜、樅、榧などのうゑこみ、森々として、どこか深山めきたる風情があります。沓脱とゝなりして自然石なうがつた手水鉢があつて、下にはかたのごとく熊笹藪柑子がのび、土どめ縑帶のかざり石があらうといふ寸方……それはともかく奥底しれないこの樹立はほんとの森を木柵に取つてこしらへたものとしか思はれませぬが、實は市街雜閙のあひだにあるのですからそんな筈はございません。坊ちやんの健一さんなどは、芝居でご覽になつた忠臣藏の猪だといつてプウ〳〵鼻息あらくこの樹の間をよくあばれ廻つたものです。

おせん樣は前にいつた御氣性、よくこのお庭で紺屋のやうに弓を張つて干しものなど遊ばすことがございます。

△文人式の庭

秀子さんのお庭でございます。お父樣は醫者お祖父樣は漢學者ださうですが、なるほどさう聞けばこのお庭はまさしくお祖父樣のお好みになつたものと睨んでもよもや僻目ではなからうと存じます。

先づ‥‥外圍の塀がアンペラの網代組の筵ではられてあるといふ浮世ばなれのした趣向、その塀にそふて千竿の修竹、芭蕉い眉長き葉が地をなめやうとして、その下に陶榻長なりの敷石古瓦が地面に食ひ入つておもむきのある道が出來てをります。一口で申せば南畵の軸でも繰りひろげて見たやうな氣持のする庭でございます。

雜木植込の庭



紅にそめし畫も口なしのゆきけの空にまたかりへけり　（千濤）

秀子樣——少々色淺黑くおわすがハッキリとしたお顔だち、いつもお髪は高島田ときめていらつしやる、それにしては金の腕輪はちと腑におちかねますが、それがかへつて調和よく見えもいたします。母御は口ぐせのやうに、「まだホン赤子で‥」とおつしやいますが、そのねんねい姿等に一字も讀めないやうな漢書をすら〳〵ととゞまりもなくお讀みになります。

よく晴れた日など芭蕉の下の陶榻にからだをもたせ

ていらつしやる所は、なんだか支那の小說でも見るやうな心地がいたします。島田がかへつて芭蕉葉とうつりがよいといふ評判でございます。

△薔薇の庭

未來のピアニスト濱子さんのお庭園、お父樣は外國に行つてらつしやるとか：：お母君は世に聞えた賢夫人、なか〳〵六ヶ敷い御議論も有したまふとうけたまはりましたが、それでゐてお小さいをりは隨分「女大學」攻めにあつたお方だそうでございます。

お庭はどこまでも蕭洒としたおつくり、どつちかと申せばハイカラの趣きがそこゝに窺はれます。まづ目をやつた正面に二つ三つの花壇が、衣の裾をさまたげぬやうに所を得てこしらへてあつて、春秋の花ざかりこそよからめとしのばれます。：：すこしかたよつて二三本の古松、その根もとに一株の薔薇が、よろよろと生え上つてゐるといふ寸方です、ところがこのふしくれだつた嚴丈な松とどこまでも優方に出來た薔薇と、の、まつはつた具合つたらそれはほんとに情致のあるものでございます。さうしてその下にこれは飽まで古風な石造の水溜が滿々と水をたゝへ、松の翠花の紅をそのまゝの姿に寫して、一層なつかしいおもむきを添へてをります。

濱子さま、ふるい草村北星さんの「濱子」といふ小說のヒロインとはスッカリ裏を行つたご性格：：それは赫々たる功名心に燃えていらつしやるお方でございます。お話がなんともいへないお上手、佛蘭西やイタリーのおはなしをこともたくみにお語りになる時など、まるで音樂でも聽くやうにうつとりとさせられてしまふ程でございます。それでゐて御嗜好は日本の羊羹、時々お友達の手のひらなどをピアノ臺のかはりにおつつきになつて、指先きの力をご自慢遊ばします。

このお庭にお下りになると、きまつてメンデルソンのなんとかいふ曲を聲ほがらかにお歌ひになります。お友達などお手紙をさし上げる時は、たいてい「紅ばらの濱子樣おもとへ」と書くとになつてをります。







百人一首下馬評

司馬僧正

◎藤原基俊は、可なり學問もあれば、和歌も上手であつた。併し他人の歌を遠慮なく批評するので、其割合には人望がなかつた、俊成卿のやうな好い弟子を持つたのは、大に此人の幸福である。

◎法性寺入道前關白太政大臣、其名は藤原忠通、此人の歌は一體に品位があつて爽快である。

◎後德大寺左大臣は即ち實定公である。『時鳥鳴きつる方を眺むれば』の歌は、時鳥の歌の中で第一等であるさうな。

◎道因法師は、殆んど狂的に和歌に熱心であつた。七八十歳になるまでも、始終住吉神社に通つて、秀歌を得させたまへと祈つてゐた。

◎源俊頼朝臣が或時近江國鏡宿を通ると、遊女が歌をうたつてゐた。能く聽くと、

　世中は憂き身に添へる影なれや

　　思ひすつれどはなれざりけり

斯うである。これぞ自分の詠んだ歌である。俊頼は面白く思つて、此事を永正僧正に話すと、非常に羨しがつて、早速、

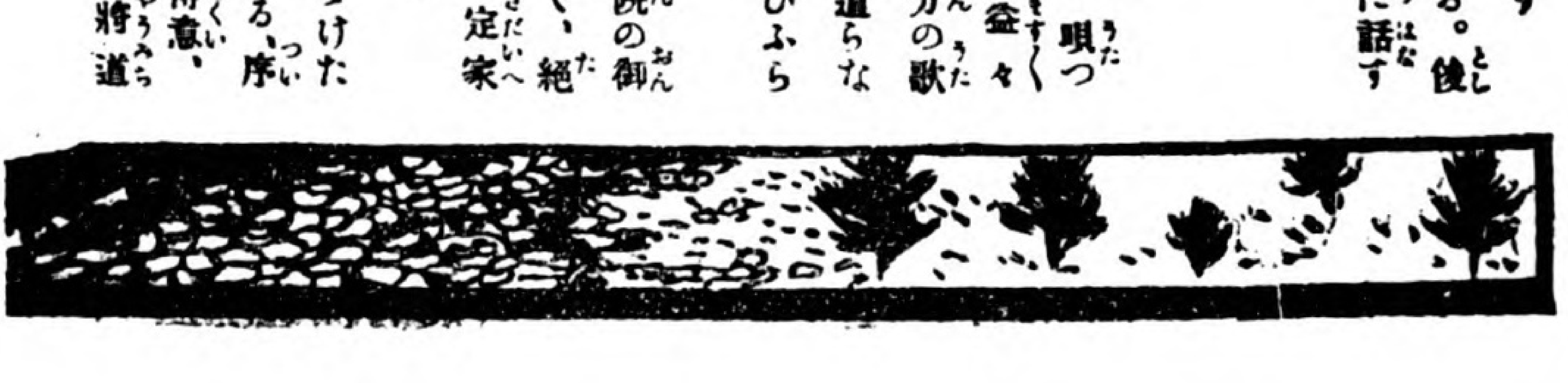
　　聞くたびにめづらしければ時鳥

　　いつも初音の心地こそすれ

と云ふ一首を作つて、道因法師を雇つて、唄つて廻らせると、琵琶法師はこれを聞いて益々羨しく思ひ、自分も盲人に賴んで、自分の歌を唄つて廻らせやうとしたけれど、何も遣らなかつたので、唯だ賴んだことばかりを云ひふらされたさうである。

◎皇太后宮太夫俊成は、後鳥羽院の御師匠である。九十一歳の高齢で沒するまで、絶えず歌道に心を碎いてゐた。權中納言定家は實子であり、寂蓮法師は養子である。

◎俊成卿の歌を作る時は、毎時もすゝけた淨衣を着、桐火桶に倚りかゝつて案出する、序でに云ふ、西行法師は椽側で詠むのが得意、和泉式部は顧を懷中に埋めて考へ、右大將道綱母は夜燈火に背むいて詠む。



◎俊成卿の子定家卿の時は、恰度上には後鳥羽、順徳兩院が頻りに和歌を嗜ませられたので、和歌全盛の時代となつた。
◎併し當時の歌は、唯だ詞を綺麗に飾ることにばかり苦心してゐた。就中定家のが最も烈しい。

いづくにか今宵は宿をかりごろも
　ひもゆふぐれの峯の嵐に
駒とめて袖打拂ふ蔭もなし
　佐野のわたりの雪の夕暮

二首とも定家卿の歌である。前者は殆んど巧妙な縁語で持ちきつてゐる。後者は萬葉集にある。

苦しくも降りくる雨か三輪の崎
　佐野のわたりに家もあらなくに

を本歌として、雨を雪とし、更に精錬したものである。併し一寸讀めば『駒とめて』の方が好いやうであるが、再讀、三讀、繰返せば繰返すほど、段々『苦しくも』の方が身に染みて好くなつて來る。
◎寂蓮法師も亦た、餘り考へすぎて、却つて品位の無い歌を作る。是れは後鳥羽院の御批評である。
◎正三位家隆は、若い時は餘り名人でなかつた。中年からメキ〳〵上手になつた。一生涯に六萬首も作つたほどの多作家だけれど、概ねすら〳〵と、餘り飾らずに詠んだところが嬉しい。
◎參議雅經は定家卿の門人である。達者な歌人ではあるが、餘り秀歌は無い。先づ百人一首の中にある『三吉野の』位が好い方である。
◎二條院讃岐は源三位賴政の女である。『我が袖は』の歌が非常に好かつたので、沖の石の讃岐と呼ばれるやうになつた。
◎要するに當時の歌は、詞こそ巧妙であれ、内容は貧弱なものである。此時に際して大に異彩を放つた兩人の歌人がある。即ち西行法師と鎌倉右大臣とである。
◎西行法師の歌は悲痛である。鎌倉右大臣の歌は豪爽である。
◎西行法師は世の激變を實驗して無常觀を起した人である。鎌倉右大臣は即ち源







實朝、生れながら天下の權を掌握した人である。

◎西行法師は自分自身で、

心なき身にも哀れは知られけり
鴫立澤の秋の夕ぐれ

を非常に好い歌だと信じてゐた。恰度千載集の披露の時である。東國から京都へ向つて行く途中で『鴫立澤』の歌が落撰したと聞いて、其れなり引返して東國へ歸つたさうである。

◎彼れは自分の死期を知つた時に

れがはくば花の下にて春死なむ
その如月の望月の頃

と詠じて、建久三年二月十六日に死んだ。

◎鎌倉右大臣の歌は、流石東國的の雄々しさがある。

箱根路を我が越えくれば伊豆の海や
沖の小島に波のよる見ゆ

武士の矢なみつくろふ籠手の上に
あられたばしる那須の篠原

◎百人一首の中に入れたかつたと思ふ人が澤山ある。山上憶良、源三位賴政、藤原秀能、宮内卿、俊成卿女、顯照法師などは是非とも入れて貰ひ度かつた。歌の撰抜も今少し念を入れて撰つて貰ひ度かつた。併し定家卿も餘程に家庭に持囃されやうとは思はなかつたらうから、何うも已むを得ない。

△のの字の多き歌

（十字）　靈元法皇御製

老の身の腰ののびたる杖つきの
のの字のなりの字の如くにて。

（十一字）　武者小路實蔭

かたかなののの字のなりの似たものの
さゝの葉の繪のすみの一筆。

（十二字）　風早公長

まるのののの字のなりの世の中の
人の心の丸きのぞよき。

（十四字）　中院通躬

のの宮ののちのしのぶののちの世の
あきのかたみのたれののこりて。





森律子孃と語る

婦人記者

森家の門を入ると、左の方に車夫部屋があつて、今しもお抱の車夫が俥を掃除して居るところ。玄關の正面には大形の姿見が置かれてある。訪ふと、直ぐ取次の女中が出て來た。どうぞこちらへと、南向の心地のよい六疊の間に導き、茶菓をすゝめながら、

『只今お孃樣は丁度英語の先生がおいでになつて居りますので、大變失禮でございますが、少々御待ち下さる樣に。』

と挨拶して出て行く。

△美しい部屋

硝子障子を透してさしこむ氣持のよい日光を受けて、美しう飾られた部屋は一しほ淸々しい感じがする。

天井には、四季の造花、目もさむるばかりのくす玉か、ゆつたりと下がり、左の方には友禪の袋をかぶつた三味線が二三挺、右の方の壁によせて化粧箪笥、其の上には博多人形、奈良人形、美しい着物を着せた今樣美人の人形などが立つて居る。

黑塗の大きな箱のあるのは、つゞみや太鼓がしまつてあるのかと思つたが、鴨居の上の壁に、三寸位の紙袋に、赤で『大入、森律子孃へ、帝國劇場』と記してあるのを、同じ樣に、いくつも〳〵並べて貼付してあるのは、後で聞くまで何だか分らなかつた。

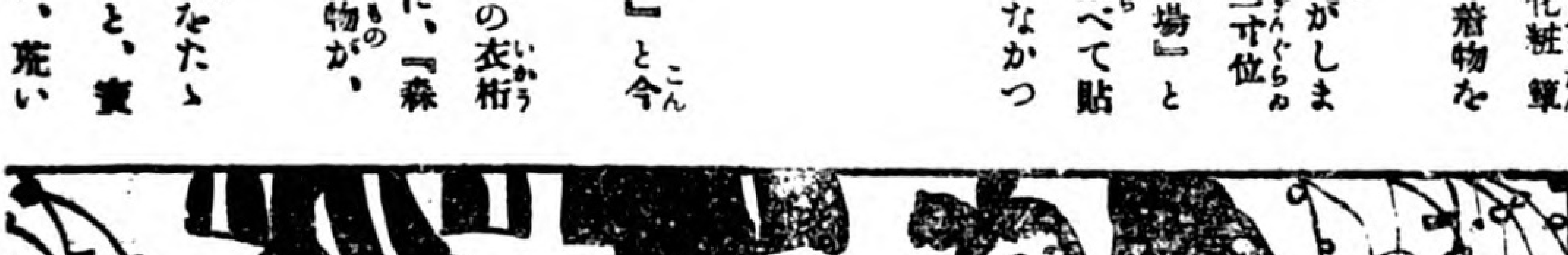
△律子孃の應接ぶり

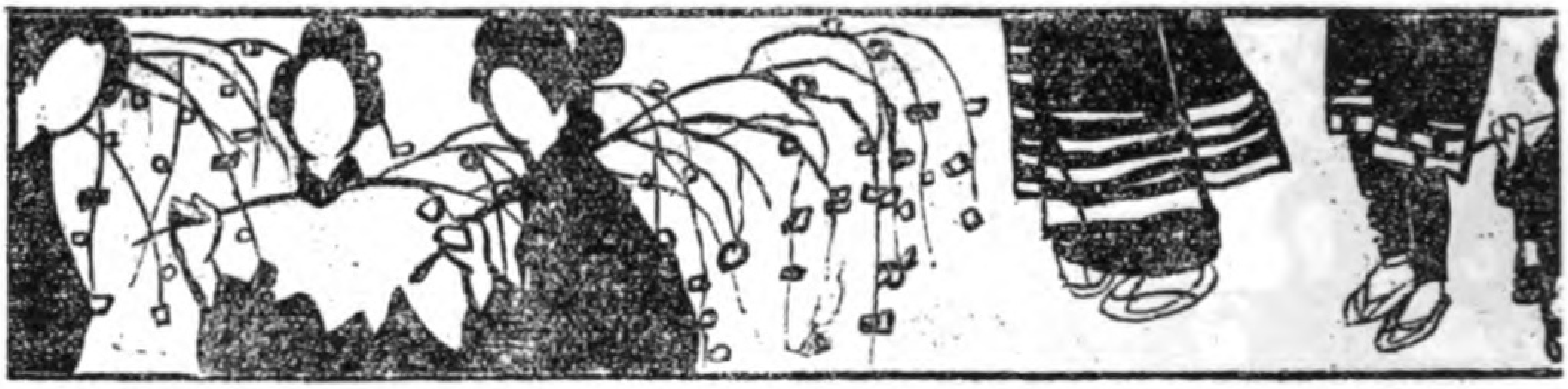
やがて先生が歸つたと見えて、

『大層お待たせ致しました、どうぞこちらへ』と今度は律子さんの居間へ導かれた。

床には文晁の布袋の畫幅にこやかに、黑塗の衣桁には、毛の衿卷や、肩掛などが掛り、其の傍に、『森律子孃へ、律見會』と奉書に書いた反物の贈物が、大きな白木の臺にのつかつてゐる。

表情の巧みな律子さんは、溢れる程の愛嬌をたゝへ、一筋亂れぬローマ卷に、青磁色のリボンと、寶石の輝く飾り櫛一本、至つて淸洒な髪飾りに、荒い





矢絣の着物に紅氣なしの友禪ちりめんの羽織、お納戸色の博多の帶、緋縮緬に細かく刺繍のしてある帶〆、江戸紫に紅葉を繍つた半衿の配合もわざとならず美しい。

『まあほんとに物置の樣に取散らして居まして。』と十年の知己に對する如き接待振り。

△忙がしい女優生活

私も折角思ひ立つて、只今迄通つてまゐつたのですから、どうかして日本の女優と申すものは、藝術の點にも人格の上でも、全く神聖なものだと言はれる樣になりたいと存じます。昔出雲のお國一派の女優が國を亂すものとして、取締られたやうな不體裁のない樣にいたしたいと勉强致して居ります。

二年の間、毎日生徒として學校で敎へられましたが、まだ〳〵未熟で御座いますから、只今でもいろいろの御稽古にまゐつて居ります。

朝九時迄に仕度を致して、すぐ踊を淺草と若柳へ稽古に參ります。それから愛宕下の杵屋で長唄を敎はつて、鶴澤文京に義太夫の稽古をして貰ひ、麴町四丁目へ下方を習ひに行きますが、ダンスと薙刀丈は特別に劇場の方へ先生に來ていたゞいて習つて居ります。此の樣に朝も早くから出かけますので、お辨當はお稽古先のお宅でいたゞきます。そしてお師匠さんを廻つて四時一寸過迄に樂屋入りを致さればならぬのですから、車に乘り通しと申してもよろしいほどです。

△歸宅後の樂しみ

それから五時に開演致して、十一時に打出しになりますが、風呂に這入つたり、歸り仕度なんぞして居ますと、どうしても宅へ着くのが十二時になります。でも母は必ず起て待つて居てくれますので、お茶を戴きながら、今日は舞臺でこんな失敗をしました、同窓の何子樣が見物席に來て御出でした、などといろ〳〵話しを致しますので、もう何だか忙がしくて一寸も休む暇がありませんから、此時が私共親子の一番樂しみな時なのでございます。そんなにして暮して、身體を損じませんか、と仰しやつて下さる方もありますが、希望をもつて働いて居るせいか、少しも苦しいと思つた事はなく、今少し日が長ければいゝのになどゝ思つて居る位でございます。それ





に英語の先生に一週に二時間來て戴きますが、その豫習復習にもいつも追はれて居ります。

只今の樣な生活を致すに就ても、學校で習つた事がどんなに爲になつて居るかわかりません。一寸顔をこしらへるに致しましても、學校で繪畫を習つてあるのと無いのとは、餘程ちがふ樣に存じます。舞臺に立つ上に認きましても、種々な場合に普通學が活きて働きますから、私は朝出る時には、必ず書物を用意して、あちらこちらと行く車の内で、それを讀むやうに致して居ります。

△藝の研究材料

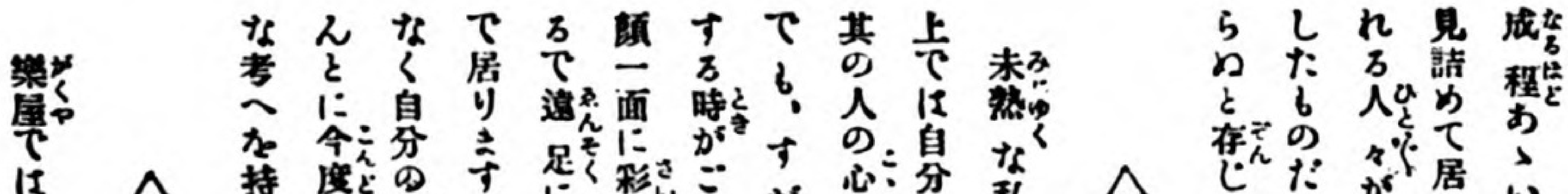
此の前の興行に『鎌倉武士』といふのがありまして、丸姫の役に當りましたが、一寸能がゝりのせりふがあるのがどうもうまく行きませんので、畫家の鳥居清忠さんが謠曲に精しいので、無理に御願申して謠を稽古して戴きましたが、別に專門の先生に御賴み申して研究したいと思つて居ります。また以前西洋婦人のサムソンの役を振られた時には、每日食後に築地の居留地へ西洋婦人の歩き振りを見に參りました。また其の途中、杖を突いたお婆さんを見て、成程あゝいふ樣に腰を屈めて、などゝ思はず其方を見詰めて居る樣な事もございます。古今名優といはれる人々が其人を現はす上には、此の點に餘程注意したものださうですから、私共は尚更苦心せねばならぬと存じます。

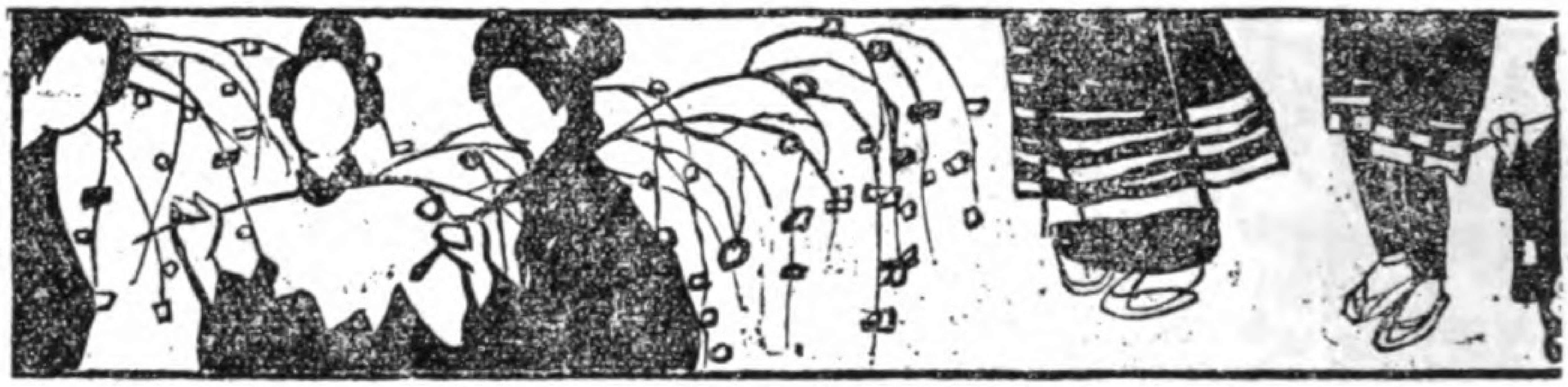
△樂屋へ歸つた時の氣持

未熟な私共が生意氣な事を申す樣ですが、舞臺の上では自分のする役々に依り、全く其の人の境遇、其の人の心持になつて居ますので、樂屋へ歸つて後でも、すが〳〵しい氣持のする時と、いやな感じがする時がございます。大勢で水兵の樣な服を着て、顔一面に彩色をしてダンスを致した後なんぞは、まるで遠足にでも行つて來た後の樣に、皆ではしやいで居りますが、惡性の人になつた後なんぞは、何となく自分の品性迄が汚なくなつた樣な氣がして、ほんとに今度はあんな役になりたく無い、などゝ我儘な考へを持つ事もございます。

△樂屋の風紀

樂屋では皆なそれ〴〵部屋がきまつて居ります。





そして同窓の方同志とならばお互にお話しても差支へありませんが、男子の俳優の方とは其の間に嚴重な區別があつて、決して自由に口を利くなぞいふ事はございません。舞臺上の事で打合せが致したければ、取締の方に其の事を申し出て、連れて行つて戴いてお話をする位なものでございます。女優として藝術に身を委れては居ましても、婦人として踏む可き道、守る可き立場は、決して忘れてはならないのでございます。家へ歸ればお孃さんかもしらないが、餘り威張つて居る、などゝ樂屋で批評される事もありますが、私共は第一回生であると云ふ上から申しても、後の人々の手本にならねばなりませぬし、凡ての方面に自分共の責任を深く考へて、決して輕卒なまねは出來ないのでございます。母なんぞも樂屋へまゐつて見まして、大變に安心致しましたゞほんとに此處の風紀の嚴重なのを皆樣に見て戴きたい樣でございます。

△今後の覺悟

毎度申す事ですが、女優志願を致した當時は、もう種々な方面から攻撃を受けたばかりでなく、十年間もお膝下で御教育下さつた跡見先生からは、勘當同樣になりましたし、鄕里の親類などからは絶交な申込まれるし、今迄仲よく交際したお友達なぞは、途中でお目にかゝつても顔をそむけて知らぬ風をされるし、新聞紙上ではいろんな事を書き立てられる、といつた風で、ほんとに心細く情けない氣が致しましたけれども、一度決心した以上はどこ迄も忍んで、自分さへ其の道を過らなければ露心に恥ちるところはないと、自分で慰めて居りましたが、此頃になつて先生の御怒りも解け、皆樣からも、どうぞしつかりなすつて御成功を祈りますなどゝ、奬勵の御言葉をいたゞく樣になりましたので、ほんとに一層の確信を以て勉强致して居るのでございます。

△緣喜の大入袋

まあ、彼の袋でございますか、あれは私も樂屋の人となつて初めて知りました。『大入袋』と申して大入のあつた時の吉例として、役者を初め劇場内の人々へ緣喜を祝ふ心で分配しますので、中には十錢銀貨が一個入れてございます。お陰樣で興行毎に大入がございますので、紀念の爲めにあの樣に貼付て、多くなるのを數へて樂しみに致して居ります。





春宵記

内藤千代子

金屏に銀燭燦ゆる春の宵、たのしいまとひでございました。あの、奈美樣のお宅で、祖母樣が御還暦のお祝ひをかねまして……この。祖母樣ほんとにさばけた進取的の御氣性でゐらつしやいますので、若い人達が大好き。この夜集ふたのも、御親類のお老人などお一人もお見えにならず、御兄妹がお友達の方々ばかり。

祖母樣に差上げるお祝ひの品は、何でも十錢以下にかぎるとの御申渡しがございましたので、ほんとに困つて了ひました。私、いろ〳〵考へましたが、仕方なくあの、懷爐灰をもつてまゐりましたの。六時と云ふ御案内の時刻に、おくるゝこと二十八分、ジャリ〳〵と砂利をふんでお玄關に立てば、もう一ぱいの編上げやら緋鼻緒やら大きな指のあとのへこんで居る薩摩下駄や、どうだらけのボコ〳〵靴や、お座敷のさまも目に見えるやう。：：……ベルおす指もわな〳〵震ふて………。

『まあよく、おそかつてねえ……』

と奈美様、握り合つた手を二度三度、つよく／＼打ち振る。つゝいてお嫂様の貞子様、上原さん式のルイザにまつ白い花を左へさして、

『まあ、皆様おまち兼でございますよ、さあ／＼どうぞ』

私の肩にお手を加へておつれ遊ばす。電燈の光りまばゆき其一間、若々しい二十何人の瞳が一時に此方へ動いたので、はツとしながら靜かに一禮する。正座のお祖母様は黒紋羽二重のお被布、振りに紅絹うらを匂はせて、みじかく切り下げのお髪もまだ黒々と、何處となくしまつたお顔立ち。

『お〻よく來て下さつた。さ、此方へ』

『は。あ、お兄様、……先日は――』

やゝ進み入り、御主人公にも御挨拶すれば、

『イヤ、何』

と手あぶりのふちを撫でながら、御めいわくさうな御様子。お兄様は帝大の法科ですけれど



ほんとに堅い御方。いつも貞子樣に、貞、丸髷に結はなければ何處へもつれて行かないぞ、なれ合者みたいでみつともない、とやかましう有仰るのでございますつて。

　あちらからも此方からも知つた方からは目禮されるにいそがしくて、私、つひ、隣席の方の紅茶々碗を袂に引かけおそゝう致しました。

　食卓にならびますと、英法一年の遠藤樣、おすしのお代りが無慮八杯、直經七寸もありさうなお皿にでございますよ。高等工業の森樣、袖口からハンカチをつかみ出し、涙ふいてゐらしたのを、私ふつと見つけて了ひましてね。ホヽヽヽ何ぼお故郷が山國だからつて、おさしみのワサビをいきなりお口へもつてゐらつしやるなんて、よくまあ笹つ葉を召し上らなかつたと不思議で御座いますわ。

　およし遊ばせ、貴女こそと、つきつけたりおし返したり、ずゐ分お盃を虐待致しまして…。私の傍には女子美術學校風の束髮の、色の黑い女學生がゐらつしやいます。中村さんとか有仰いました。その隣席は奈美樣で、お十八だけれどもまだ肩上げもあるお被布姿の可愛らしさ。この座の中で一番のベビーちやん。それに對してお從姉の時子樣。この方非常に仕舞が御堪能でゐらつしやいますの。薄紅くお頰をそめて、扇子片手に立上られ、裾高に召したすみれ袴の下から、黑い靴下凛々しくみせて、すらりと高いお姿は、露をふくんだホワイトローズ。お祖母樣のお謠曲でめでたく高砂を舞ひ納められる。妬ましいほどのおん手ぶりでございました。

　みんな大學の方と承はりましたが、何ですか、いる、かに似たお目つきの方や、眉の薄い淸國留學生顏や、重箱のやうなの、なんきんまめのやうなの、岐阜提燈のやうなの、散蓮華のやうなの、學士となつた曉にも花嫁君が少々御悲觀遊ばすだらうと思はれやうな…中には細面のお雛樣立ちで、貴公子風の方もゐらつしやいましたし、お鼻の高い丸顏の方もゐらつしやいましたし、それから何とか有仰る工科の方には、長い顏



色の白くる

ハンドコロン溶液

本劑は歐米貴紳淑女粋士間に大高評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥と大に性狀を異にし本劑の力に依り皮膚の新陳代謝を盛にし且つ漂白性あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に白色艶美となる 價A印並製壹圓 B印特製壹圓五拾錢

毛のはへる

毛髮生養液 原名ベグネス

本劑は最も進步せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛芽の發育を速にし完全なる毛髮叢生す又本劑は拔毛を止むる効能著しく又常に香油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき無名の賣藥に迷ふ勿れ價並製壹圓卅錢特別製貳圓

わきが

全治確證

新治療藥 ラピヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織内にある毒素を潔清驅逐し惡臭を止むる作用を有する最近發見の有力劑にして如何程劇烈の難症も特別製を用ひよ忽ち臭氣を止め病根を全滅せしむ速に用て苦惱を脫せよ 丙價七拾錢乙價壹圓卅錢特別製貳圓五拾錢

ぢを治す

全治確證

無痛全治する特効藥

本劑は近世醫學界の貴重なる新發見藥を以て座藥に調製したるものにして是れを肛門內に挿入するも少しも疼痛を覺えず體溫の爲徐々適切に溶解して直接病患部に作用し穴痔蓮痔疣痔裂痔脫肛又痔瘻の初期等痔病一切に對して神効を奏す 半劑八拾錢壹劑一圓五拾錢特別製二圓八拾錢

月やく下し

通經新劑

名藥メリルピン

此藥は子宮を痛す如何程長き月經止りも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て峻烈なるも毒も身體に害なくたやすく下る月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別精製貳圓參拾錢

專賣 東京神田區小川町四十

オリエンタル藥館

女(その一)

恭賀新年

博文館主　大橋新太郎
副館主　大橋進一

編輯部

主幹　坪谷善四郎

巖谷季雄　石橋助三郎　石坂橋樹　石井民司　伊尾準　伊東祐穀　生田調介　長谷川誠也　服部保　濱田徳太郎　西村恵次郎　本多昌明　沼田藤次　岡村久壽治　大竹昌春　女屋秀彦　荻原一羊

海賀篤磨　鹿野直司　河岡英男　金子馬治　金子範二　加藤重雄　武内鋠平　田山錄彌　竹貫登代多　竹貫直人　武信由太郎　武田櫻桃四郎　鷹野勇雄　高村眞夫　長井氏晸　中原司馬雄　中村四郎

長瀬金平　浮田和民　内山正如　松原岩五郎　前田長太　前田晁　小柳覺　淺田彥一　阿武信一　齋木寛直　里見麻次郎　木村定次郎　木川専介　南木性　三間保治　鈴木徳太郎

（いろは順）

營業部

支配人　羽田福太郎

大野金太郎　山田静三　杉山常次郎

田中六藏　上村恭三　宮川大壽　堀野賢龍　里見謙吉　佐藤憲斌　遠藤好夫　關謹平　金子督太郎　細野佐藏　松原濱之助　谷俊三　玉井喜重郎　小峰正一　兒玉幡太郎　有田利雄　番場宗八　權藤文雄　横田地巴　繁田郁藏

今井玉三郎　福澤市太郎　今井淳　永井泰　林彥之助　中村長　內藤憲輔　塚脇十三　富所三郎　磯岡鷲郎　矢澤潤三　松木玉之助　廣瀬貞一　石平彜夫　小林久四郎　菅五太郎　木村照治　堀七　中村龜次郎　岡本慶學

石川甚右衛門　儀賀常次　佐藤誠　渡部吉藏　早川多輔　山本順治　松澤義一　中田國治　柳川松次郎　牧武　松本勇次　渡邊明義　行方從藏　藤井留芳　海方利三郎　鈴木鈴一郎　小野寺一郎　櫻井潔　市川松之助　本間一司　野口廣三

女（なの二）

博文館特別割引券

迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈上し愛讀諸君平素の御眷顧に酬いんとす

圖書御註文の方は下段切取線内の甲種券 雜誌御註文の方は乙種券を添へ期限内に御申込被下度候

●本券は各種とも一人一枚限り有効とし數枚御送付あるも割引の歩合を增すものに無之候

（切取線）

（甲種）

博文館發行

圖書特別割引券
（女學世界新年號）

●圖書御註文は此券を切取り御添附の事
●有効期限は明治四十五年二月十日限り
●期限中は定價の一割引を以て特賣仕候
●豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす
●館友は館友規定引の外尙圖書五分引豫約品二分引の事●總て前金の外無効とす



（切取線）

（乙種）

博文館發行

雜誌特別割引券
（女學世界新年號）

●雜誌御註文は此券を切取り御添附の事
●有効期限は明治四十五年二月十日限り
●期限中 一冊賣は定價の五分引●冊數に依り割引ある前金拂込は其金額の三分とす
●館友は館友規定引の外割引せず
●本券は前金註文の外は効用なし
●申込の節は博文館小賣係宛のこと

女（その三）

内外洋紙製紙原料大販賣

謹賀新年

株式會社 博進社

專務取締役 山本留次
取締役 中村孝吉
同 長沼恒次郎
監査役 大橋新太郎

本店 東京市神田區錦町一丁目
（電話本局長 四九〇〇 一六〇三、二四一〇）
支配人 富谷松三郎

事務員
九里誠一　中川薫司
織田保次郎　横山幸七
鷲淵忠雄　長谷川金之助
池田健三　松浦靜三
杉山幸次郎　奥山作治
大島久吉　遠藤廣吉
小野村佐市　丸山信治
仁平周一　車良吉
鈴木菊次　岩田久造
武藤米一郎

支店 大阪市東區瓦町二丁目
（電話東長 四四五、一四〇八、一五〇八）

事務員
松本作造　岩波慶次郎
小川林一　中村光次
宮下眞次　川井佐一
中村松太郎　廣瀬政次郎
八木永吉　増池宗次郎
岡山定三郎　岡崎靖一
打田精一郎　奥田幸男

賀正

帳簿及文房具製造販賣

文運堂

本店 東京市神田區錦町一丁目 電話本局 七八〇、六〇三
支店 大阪市東區瓦町二丁目 電話東長四四五、一四〇八、一五〇八
堂主 山本留次
支配人 長谷川丈太郎

事務員
金原要一郎　黒澤倉治　大石吉英
塚脇十四三郎　柴田照三　山本次郎
出雲寶太郎　伊藤善四郎　田中弘
岩瀬幸三郎　谷口利光　馬場宗太郎
奥田駒次郎　横田芳彦

恭賀新禧

藥種貿易商

合資會社 博愛堂

東京市日本橋區本町三丁目 電話本局二八六番
代表社員 大橋進一
監督 山本留次
支配人 宗像仲吉

事務員
小川徳次郎　山崎重郎　江口修三
海老原直一郎　德田廣志郎　栗原久四郎
前田伯　渡邊五郎　渡邊八郎
平野克二　水谷巽　川奈部隆
中村辰之進　福岡眞爾　谷本國太郎

女（なの四）

謹賀新年

東京市小石川區久堅町一〇八　電話番町四六番 七三二番 一八七二番 一九七〇番

博文館印刷所

理事 大橋光吉
支配人 高橋季吉
副支配人 水谷景長
技師長 君島潔

總務部

伴了藏　神保平三郎　小川豊太郎　岡本裕　金綱彌　清水慶次郎　片桐吉四郎

飯塚市郎治　永原哲藏　上村安治　野島次男　高橋正信　上野朝太郎

御田村龍吉　高橋良平　新井和臣　澁谷復二　加瀨亥之三郎　高橋松太郎

營業部

山田英二　小川徳三郎　高橋賢治　野口辰夫　馬場喜作

内藤習次郎　荻原勝次郎　須田武三郎　今村利彦　鈴木喜之助

市川七作　山本定輔　安孫子俊男　川端勘一

工務部

田丸信次郎　永田喜健　横山弘識　松浦政吉　渡邊倉之助　井上多吉

祓川研太郎　伊藤景介　佐藤磨　多木壽一　佐野貞雄　大塚武夫

吉岡泰次郎　松本八三郎　大江幸吉　尾形幸男　榊原健三郎　石井義雄

恭賀新年

各種印刷

精美堂

東京小石川久堅町百八番地　電話番町九三二

營業部

吉野貞治　白井赫太郎　相馬倣治　笹川欽藏　松永米次郎　武藤安五郎　佐藤正三　薦田總之助　佐藤仲藏　森垣榮　風間政市　中野嘉郎

工務部

塚原錦三郎　武藤武　大谷庸　田村楠一郎　高井茂三郎　高田清　若井信次　田村忠治　杉山龜壽　水生元巳　飯村豐次　中島錦造

((再　版))

森鷗外君　巖谷小波君　坪谷水哉君　序

今井翠巖君著

(最新刊)

調査 **女子東京遊學案内**

(附錄)・・・・最新東京實測明細地圖

四六判美本紙數七五〇頁正價五拾八錢郵稅拾錢

萬朝報評

曩に好評を博せる「男子東京遊學案内」の姉妹書にして、またこれ好評を博すべきものたらずんばあらず、苟くも都下に學校養成所講習所私塾と稱するものはその何種たるを問はず網羅して痒き所に手の届きたる心地す

東京　博文館　本町

女(その五)

女(その六)

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 田村貞策君・朝夷孤舟君共著

第八編 **簡易治療法** 藤井靜子女史著

第十五編 **家屋と庭園** 内山正如君著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 鹿野化骨君著

第廿三編 **刺繡術指南** 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第卅一編 **衛生と衣食住** 福田琴月君著

第卅二編 **東西名婦の面影** 高須梅溪君著

本書は著者が新時代の女性に向つて健全なる思想と優雅なる感情とを吹き込まんために東西を通じて最も傑出せる貞婦孝女賢婦女傑等數十人を捉へて新しく平易に描寫したるものです書中に收められた婦人は何れも波瀾多く變化に富んだ生涯を送つたものゝみですから。事實そのものが活きた小說で之を寫した筆も亦繪のやうに美しくあります一度本書を繙くと一氣に讀ませられて而かも忘れ難い眞感化を與へられます挿入した多くの畫と金言とは又た有益多趣最も深い印象を與へるでありませう

第卅三編 **婚姻のかゞみ** 河崎醉雨君著

【上編】婚姻法＝●緒論●婚姻の沿革●日本の婚姻の沿革●婚姻の定義●婚姻の豫約●婚姻の種類●夫の選擇●妻の選擇●婚姻の成立●國際婚姻●婚姻の無効及取消●婚姻の效力●婚姻の消滅●婚姻の屆出書式【下編】婚姻禮式＝●日本の婚姻禮式●朝鮮の婚姻●歐米の婚姻禮式……【附錄】日本各地の婚姻風俗

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

◎第一編 社交：三項◎第二編 社交の得失：四項◎第三編 談話其の一：二項◎第四編 談話其の二：三項◎第五編 談話其の三：六項◎第六編 談話其の四：四項◎第七編 談話其の五：六項◎第八編 談話其の六：三項◎第九編 社交と辯舌：五項◎第十編 奥様の話しぶり：二項◎附錄 西洋婦人の日常禮式：十二項

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

●第壹 國民の務め○國家に對する務め○國君に對する務め●第貳 少女の務め○父母に對する務め○學問の務め○健康の務め○友情の務め○忍耐の務め○勤勉の務め○兄弟姉妹に對する務め●第三 妻の務め○良人に對する務め○舅姑に對する務め○家政に對する務め○社交に對する務め○育兒の務め○僕婢に對する務め

佛國メルマン會社釀造



食卓用として
又薬用として
到る處の家庭に
愛用せられ
つゝあり

マルタン赤白葡萄酒

アルコール分少く滋養
豊富なる葡萄酒



横濱
東京 山田屋

賣捌は全國
和洋酒薬店
にあり

女(その八)

天下の婦人は必ず讀め

「月やくの滞り又は不順は如何すればよいか」

月やくの滞るのには種々の原因がありますが、兎に角婦人に取つては、甚だ心配な事であります何うしよう、何うしよう、と迷ふて居る中に益々重くなつて、愈々困難になり、危険が加はり遂に之れが基となつて生命に関する様な重態に陥る例が尠くありません。月經の滞り又は不順の人は此際一刻の猶豫もなくひみつ丸を御服用なさい、斯道大醫直接の方剤を仰ぐに等しき効能があつて峻烈に流下しますが衛生上には何の害もなく却て生殖機關を強壯にする秘薬であります、郵券三錢添へ申込めば詳細知らします

藥價
●一剤八十錢 ●二剤一圓五十錢
●三剤二圓 ●別製三圓

但し送料八錢送れば密封送附す

東京市京橋電話局横金六町

發行所 笹山積愛堂藥房

振替東京一五八四番

のエス(犬)がよくお似申して居りました。

水橋さんと云ふのは時子樣のお家の書生さん？まあ食客と云ふ御身分なので。お髭の手前もございませうものを…。さう〳〵このお髭には毎日コテの代りに燒火箸あてゝ手入するのでございますつてネ。時子樣のお靴のかゝとより黑く美しいカイゼルがピンとはね上つてそれにどう〳〵あまり頭に油をつけるので乳母さんが、夜は帽子か頰かぶりして寢て下さい布團がたまりませんから、と申しましたさうで、ホヽヽヽ。



奈美樣の發起で歌留多が始まる。何誰のお手並がどうなのやら、あまり大勢なので半分はませつ返し、私なんか例の伊勢道で、ちつとも讀人のお祖母樣のお聲がきゝとれないので、あら、決して負けたからつて云ひわけするのぢやございませんけれど、何だか飲みあましのビールみたいに氣のぬけた戰ひ。おまけに先方が老獪ぞろひ。憤然として中途から此方は手を引いて了ひ、江森樣を參謀にすつた

もんだの末、チャンケンで勝敗をきめる事となりまして、ホヽ、あの江森様がお袖をまくり上げて、小柄なお身體を飛び上るやうにしながら勢こんで、チッチのヤ？　無念、中原の鹿は彼の手に落ちた。抗議を申しこむまもあらばこそ、黒々と額口にあざやかな向ふきづ、これは少々蠻的行爲でございますわネ。

　しまひにはかるた札なんぞそつちのけ、指輪送りが始まるやら、神鳴様やら、男女混合の目白おし、お座布團など半座を分け合ふと云ふさわぎで、ずゐ分文部省あたりの御趣意を蹂躙した所爲でございますけれど、ぬり立てのペンキではなし、袖ふれ合ふたぐらゐでまさかね。ハーモニカのお上手な方、ピヤノ獨唱でさわがれても、オーガニスト、尺八スト。何誰でしたか、障子の傍へ行つて、『汽車が出ますよ、ポツ、ポツ、ポツ』ツてお吹きなさると、丁度その通りの音がいたしますのね。一寸おもひつきだと存じました。

　佛英和女學校の方ときいた新庄さんとか、奇拔なお髪にして、納戸色の氣取つたお袴ばき、英詩の朗吟を遊ばしました。私にはよくわかりませんでしたけれど………。

『花の都を立ちいでゝ、浮き音になくか鴨川や、末白河をうちわたり、粟田口にも着きしかば、今は誰れをか松坂や。』朗々たる美音、切々たる吟韻、とてもお祖母様とは思はれませぬ。

　貞子様はお得意の表情體操。

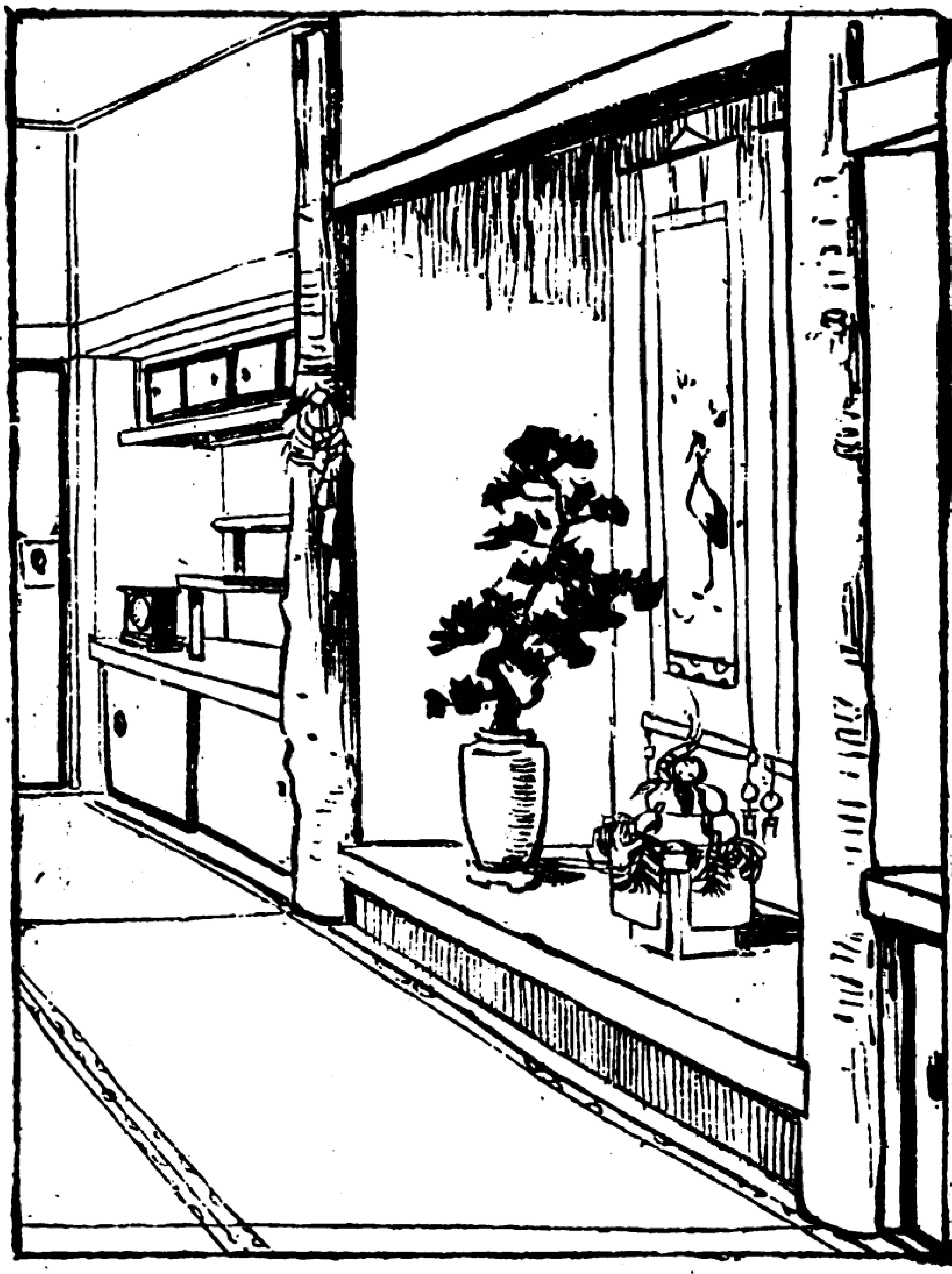
『水ようたへ、こゑたかく、かせようたへ、こゑたかく、はるは、つねに、とひ、きつゝ』

　流石は目白の寮舎に起きふし遊ばした方。はアお年はお二十一、それは〳〵お優しい慕はしい奥様でゐらつしやいますの。もつとも生意氣有仰るやうなであつたらば、お兄様の鐵拳がたちまち頭上に舞ひ下りますわ。

　遊びつかれて一人、二人、お縁に窓にそと座をぬけになる方もあつたので、私も末座に引下つて、火鉢によつてうつとりして了ひました。

　私の知つてる大學生の中には、もう高等學校時代か

ら夫人おもちになつてる方もございます。二人のベビーにパパさんと呼ばれてる方もございますの。今宵からしてお集りになつた方々は、さアどうで御座いませうか。男子にとつては結婚なんて重大な問題ではございますまいけれど女はこの一事によつてもう未來がなくなつて了ふのですもの。生涯の運命が定つて了ふのですもの。めざましい活動、發展、をしさうであつた友さへも、意氣地なく囚はれて、反抗もなし得ず、こ



ぬか三合の君とおちついて、もう友達なんかいらんのださうです。あゝ、女つて果敢ないものでございますわね。弱いもので御座いますわね。

いつまでも處女で居たい？處女の誇を保ちたい？とこんなあつまりにおいてなど、一入痛切に感じます。が、さもしいとお笑ひ遊ばすかも知りませぬが、友のたれかゞ地に引く袖の振長う、花やかなその夜の晴姿を見ては、流石に心のときめきますものを‥‥。

ましてや一生オールドミッス、猜疑の世間に冷やかな生活、老來の寂寥！　それはとても堪へられませぬ。最後よ、花やかにきたれ！　とさけびし事もあつたれど、死、いまはそれを口にするさへ耻ぢてます。ではどうしても結婚しなければならないのか……。

中尉の妻か、商學士か、醫科、工科、それを不足とではございませんけれど、けれど、けれど、行かば心操ほろぶるを……。あゝ、ブラウドに生くる女のおろかさを、たんとお笑ひなされて下さいませ。

「まあ千代子樣、何ですねえ、こんな隅つこに？。さ、ずつとお進み下さい。中座遊ばしたのは何誰、卑怯ぢやございませんか。皆樣、どうぞ、いらして頂戴、さ」

茶楪には乾葡萄を添へて、新たにそゝがれたる玉露の香り高う、居ずまひ直して見交す皆樣のお顔は、若きほゝ笑みに輝いて居りました。今度私の隣りにゐらした小山樣、分の厚い前髪、長い髢、お化粧のお上手なつゝましやかな、私、學習院の方かと存じましたのよ。ところが、お茶の水はお口が達者とかねて承まはつて居ましたけれど、まつたくしきつめた大理石の上を、清水のさら／＼と走るやう。お美しい時子樣と一對の當夜の花。

あの、皆樣の中には私がどんなにか飛び切りのハイカラで、傍へもよりつけぬ樣であらうとおぼし召してゐらした方もあつたさうですに、こんな高髷なぞ結ふて囚はれたやうな女であつたのに、少からず一驚をおきつし遊ばしたのですつて。

ついでに讀者諸君へも申上げますわ。私のことを萬年娘だの、いつまでも／＼十八だのと有仰る方は、どう云ふわけなのでせうね。私、ほんとに去年は十九でございましたわ、一昨年は十八でございましたわ。その前の年は十七で、今年は二十でございますのよ。それも二十日ばかりを一年とかぞへる情ない身の上、明治二十五年十二月生れよ。よくお指をお折り遊ばして頂戴な。

Ｙ樣の『千里眼』は大好評でね、私もその時からもう

一間へだてゝどんな物でも透覺いたしますのよ。ホヽホヽ、お腹の皮よらしで拜見致ましたのは、武裝競爭二筋の手ぬぐひと一つのお茶碗と二本のお箸とをまん中へおいて、二人向き合つて坐つて、「一、二、三、」で手を三つたゝいて、いそいで鉢卷して、お箸をとつてチンとお茶碗たゝいて頭へさして、も一つ手をたゝいてそのお茶碗を早くうばひ取る、と云ふので、もうお羽織も何もぬいぢやつて、コバルト色の兵古帶がとけかゝつたのも知らずに……。

それから手品、めかくし、トランプ『あゝ玉杯に花うけて』や、『春高樓の――』なんか合唱する。

『叫べや健兒百千度、海陸四方幾萬里、巉峭峙つ起伏の岨、澎湃寄せなん怒濤の響、其處邁進の活舞臺、其處奮闘の大天地』

精一杯の聲をあげてテーブルをたゝく。

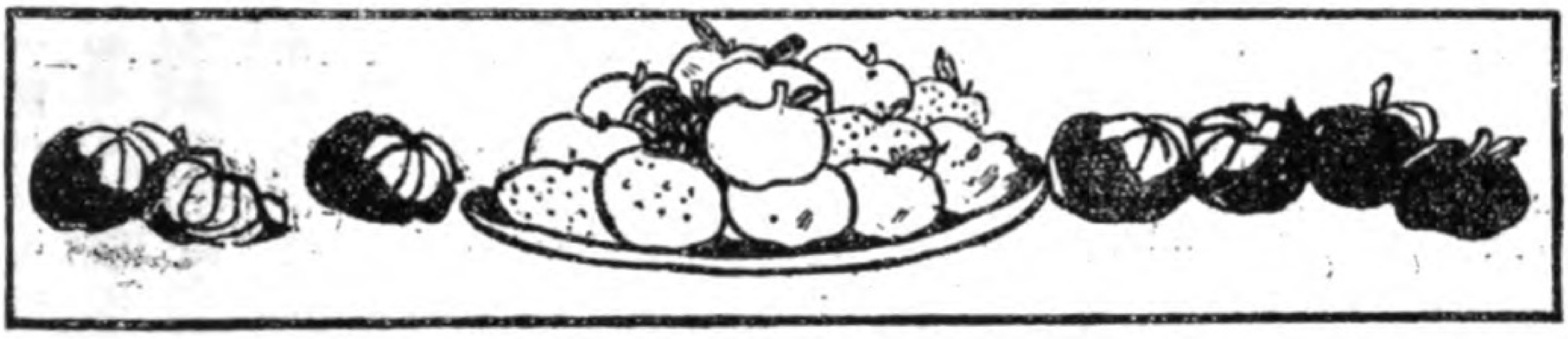
『お迎ひの俥も見えて居ます。またあまりおそくなつても……』

とお祖母樣の御注意に、今更のやうに我にかへつて云合せたやうパチ？とひらけば、十一時半。あらためて御挨拶申して、皆樣互に會釋し合ひながら同時に座を立つ。

お玄關へ出で、あの飛白のお羽織召した活潑な原田樣とやらを、はじめて一高の方と知りました。頭にかほる柏葉の章、マントはおつて。貞子樣は外套やコートを着せかけるやら、御きげん好う、左樣なら、の聲聲と共に敷石に鳴るステッキ、下駄音、たちまち起るわだちの響！私も車上の人となつて『奈美樣！』と今一度ふり返り、まもなく、門外へ走り去つた。

星も輝く春の夜の、双側の屋敷の木立の梢が點々と聳えて、提燈の火影、夜風にゆらめく。

皆樣！日毎にせまり來るたゝかひ？、御奮闘遊ばして、光榮ある月桂冠を得たまへや。つまづく石さへ何とやら、野路の村雨晴るゝまを、しばし木かげのやどりにも、深き縁のありときく、いつかはまた、親しう語り合ふ折のありもやすると、はかなき事もはゝ笑まれて……。



お正月と胃の腑

口餅

お正月のたべものは、いつも定まつた雜煮、田作、數の子、昆布巻などで、胃腸の弱い人に取つては皆なよくない食物ばかりです。雜煮餅は、大體が澱粉で、正米と同じやうなものですが、餅は固まつて居るから胃に入つてからも餘り消化されず、腸に至つてやつと消化されるといつた風ですからこれをたべるには、よく咬んで唾と十分混ぜることが第一です。さすれば澱粉は唾液の中にあるプチアリンといふものゝ爲に砂糖分と化るのであります。所が餅はよく咬み切れないから、充分唾液と混ぜることができず、兎角不消化になります。搗き立ての餅ならば柔かくてよからうと思ふ人もあるが、これは大間違で、搗きたての餅は猶唾液が沁み込まないで、一層不消化です。それよりは寧ろかき餅のやうな水分のないものゝ方が消化がよい。雜煮餅なども、少し堅くなつた餅を用ふる方がよく消化されます。

口數の子

數の子は粒の周圍の皮がいけません。あの小さな粒はなか〳〵一々咬み碎かれるものでないから、殆ど消化しないので、之を食べて胸が燒けるといふのも其の爲めです。數の子は實は滋養分に富んでゐるのだけれども、こんなに不消化だから、何の足しにもなりません。

口かまぼこ

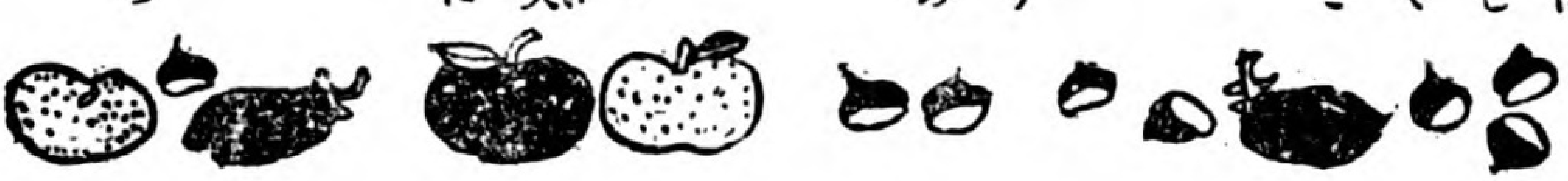
蒲鉾も、材料にする魚類は消化がよいが、作る時にうどん粉で練りかためるから、食べても胃液が中まで沁み入らなくてやはり不消化です。

口昆布まき

昆布巻にしても、海藻類は大部分は不消化ですから、無論よくはありません。たゞ昆布巻にしてある昆布は大抵柔かくなつてゐるから、他の海藻よりは消化は割合によい方です。

口粟づけ

あは漬は魚の骨を取つて酢に漬けたものだから、まづ消化はよい方です。





□黒　豆

黒豆は蛋白質も多く、澱粉も相應にあつて消化もよく、また非常に滋養分にも富んでゐるが、其の皮は殆んど消化されないものであります。

□酒とビール

酒は極く純良なものを少し飲むのならいゝが、正月は強ひられて兎角飲み過ぎになりがちです。アルコールの害は別として、直接の害は胃液を薄くすることで酒を飲んだ後で食べたものは、どうしても消化が不充分になります。また多く水分が胃に入るのですから、胃が膨れて、其の爲めに胃弱を起し、慢性胃加答兒の元となる恐れがあります。ビールにしても同じ道理です。

□酒の効能と害毒

酒類は、一方からいへば體の精分を増すもので、蛋白澱粉、脂肪等が燃えて酸化して人體の生命と體温とを保つてゐるところへアルコールがゆくので、それが前の精分の代理をして二倍に燃えるから、人間の生活を豐富にするが、他方には先のやうな著しい毒作用があるから、差引くと結句毒作用の方が多くなります。又屠蘇酒は澤山強ひられるものでもなく、胃液の亢奮劑となつて却つてよろしい方です。

□要愼専一

單に消化の點からいへば、胃腸の弱い人には以上の品は皆な悪いが、普通の健康な人にはさう大した影響を與へません。却つて或程度まで不消化な物も食べて胃の抵抗力を養つて置く必要があります。胃はぢきに馴れるものですから、健康な人は、盛に食べもして胃を馴らす必要があります。働らく人は頭が肝腎であります。頭の健全な人は、第一に胃が強くて食物などつさり食べる人であります。

□昔人の衛生

昔の人は魚の頭はよし、骨はよして、尻尾まで餘さずがみ〳〵食べて了つたものです。骨を食つた位で傷めるやうな弱い胃袋は、憚りながら持合せがないと言つて威張つたものです。風邪を引いたといへば、よし來たとばかり諸肌ぬいで薪割を始めるといつた風でした。少し亂暴かも知れないが、またその中に道理もありませう。





謎字のあそび

これは足利の末頃京都の縉紳家にて、もてあそばれし謎の一種にて、随分ひねりたるもの多かりし中にて分り易きもの二つ三つ拾ひ出して見れば、

△やぶれた蚊帳　　蟲の名

やぶれたる蚊帳には蚊入る(蛙)と解く

△海の道は十里に足らず　　貝の名

海の道は濱より十里に足らぬは九里なりけり(蛤)

△竹の中の雨　　武藝の名

竹の中に雨はやぶさめ(鏑馬)なり

△泉に水なくして龍かへる　　夏の野菜

泉の字水無ければ白となる、りうなかへりてよめばうりとなるこれを合せて(白瓜)と解けり

△嵐は山を去つて軒の邊にあり　　玩具

嵐の字の山を去れば風なり軒の字の旁は車なり合せて(風車)と解く

△竹生島には山鳥もなし　　樂器

山鳥を合せれば島の字となる此字なくて竹生の二字を合すれば(笙)となる

△秋の田の露重げなる景色哉　　蟲の名

秋の田の露おもきは稲の穗の垂るゝさまにて穗垂(螢)と解けり

△春の農夫　　衣類の名

春は農夫の田を鋤かへす時なればなり(襷)

△田舎の人の聲　　金屬

田舎人の聲は訛謬あるを以て(鉛)と解く

△魚とる鳥の物忘れ　　食品

魚とる鳥は鵜なり、物忘れは鈍なる故にうどんと解きたり(饂飩)

△廿人が木にのぼる　　飲食品

木の上に廿人の字を添ふれば(茶)となる

△文机の上の源氏物語九の巻　　家具

ふづくゑの上はふの字なり、源氏の九巻は須磨の巻なればあせて(襖)ととく

△因果は覿面　　家畜

覿面は正に明かなるの意にて報いぬと解きたるなり(むくいぬ)

△酒のさかな　　佛具

さけをかへしてけさとなる、さかなは逆名の意に



て逆さにして名となるなり（袈裟）

△腹の中の子の聲　　木材

子の字の音はしなり是をはらの中に入るれば（はしら）となる

△狐のともし火　　衣類

狐の火は尾にともすよしにて尾火と解きたり（帯）

△一字千金　　草花

師恩は苑に通よへり（紫苑）

△御前にさぶらふ　　樹木

御前にさふらふは御用を待つの意なり（五葉松）

△柚は皮ばかり　　勝手道具

柚子の酸味は實にあり、皮ばかりにて酸味を取去たる意なり（炭斗）

△川風　　野菜

川風は水を吹く意にて（水蕗）と解きたり

△夏の蟲　　人倫

夏の蟲を火を取りによる意にて（ひとり）と解きたり

△戀には心も言もなし　　裁縫用具

戀の字に心も言もなければとりて（絲）となる

△紅の糸腐りて蟲となる　　天象

紅の糸の篇腐り變じて蟲となれば（虹）の字となる

△ともし火將さに消なんとす　　家具

燈きえんとするは油の將さに盡なんとする意にて解きたり（油坏）

△水鳥やめされよ　　野菜

水鳥は鴨の意なり、めされよは物賣の語にてうりの意合せてかもうりと解く（冬瓜）

△母には二度合ふて父には一度も合はず　　身體の一部

これは（唇）と解す、其わけは母ははゝなり即ち齒々なり、父はちゝなり、即ち父なり、さて今齒を以て唇を噛む時は上齒には下唇が合ひ、下唇には上齒が合ふ故に齒々には二度合ふといふ、然れども自からの唇もて自らの乳に合はす事は出來ざるなり

新年の化粧と晴着の着方

理容館主　遠藤波津

年が立返りますと何となく氣ものび〳〵としまして、日頃は御子様方の御世話や、御家政向の御用が繁くて、めつたに外出を遊ばさない奥様やお嬢様方でも、御親族や御知己の方々へ御年始に御出かけ遊ばすので御座いますから其おこしらへに就て、御化粧のしかたと晴衣の召し方を御話し申上げませう。

△入浴の仕方

冬向はどうしても、冷い風の爲めにお顔の皮がちゞまつて、多少荒れぎみになつて居りますところへ、行なり石鹸を塗つた手拭でごしごしおこすりになるのは、全くよろしく御座いません、これはく〳〵の禁物で御座います。それで御風呂の時でも一番のちになつて、湯氣でもつて皮膚ものび毛孔の充分に開いた時分にお顔を洗ひ遊ばすので御座います。

△濡れた手拭は大禁物

誰しも風呂から上りますと、上氣した顔をぬれた手拭でふくのは氣持のよいところから、何の氣なしに致しますが、あれはいけないので御座いますから、出來れば乾いて居る「ガーゼ」か何かですつかり水分を拭てしまうので御座います。

△念入の新年の御化粧

新年の事ですから、平常よりは御入念にまた晴れの御召とうつりよく、ことにお化粧がくづれぬ樣に致さなければなりませんから、一番初めに白色のハイセスツクタリームを御顔から頸の方へ指先でもつてお塗りになりますと、開いて居る毛孔へ滲け込んで、ごみや脂肪と一緒になつて鼠色になつてまゐりますから、それをガーゼでよく拭き取りまして、ライラック水をつけて、今度は赤色のポンピヤンクリームを塗りまして、指先でそつとこすりますと、垢の樣によれて出ますからこれをよく拭き落して、御顔の地色に合つた頬紅をつけるので御座います。そして其上へ令嬢方や若奥樣は煉製、又うす化粧の奥樣方は水おしろいを塗りまして、水刷毛でよくのばしてまゐるので御座います。此時に普通の水でなくほんの刷毛がしめるだけでよろしう御座います故、ライラック水を御用ひになりますと、御化粧がむら〳〵になつたり、又どんなに脂肪の浮出易い質のお顔でも、それをおさへる事が出來るので御座います。

△束髮の方は襟くびが大事

特別にお髮を束髮に遊ばす方は、えりくびのお化粧がうまく出來ませんと、全く見劣りが致しますから、お耳の後ろの方から生え際の方へすうつと一刷毛にして置き度いので御座います。一寸の御化粧ならば掌でといて澤山で御座いますけれども、やつぱりこんな時には刷毛で

遊ばす方が出來ばへもよし、經濟でもあらうと存じます。

△化粧の仕上は粉おしろい

罎なり水なりで立派に出來上つたお化粧でも、仕上はやつぱり粉がよろしう御座います。之はパフ、と申して手前共で販賣致して居りますがこれに粉を含ませて、はくので御座います。

そして一番終りにライラック水をたら〳〵と掌におとして、そつとお顏をおさへてお置き遊ばすと、お化粧が活きて艶がありますからかういう風に遊ばして、一日車で外出遊ばしても、決してくづれる事はない事を保證致します。

尙フエースナフキンと申て、白色のビロードの様な地合で半巾形になつたものが御座いますが、これに粉を振つてお置きになつて、お車の内などでお鼻のまはりなどを御なでになれば、少しも眼立たずにお顏直しが出來るので御座います。

△眉墨と口紅

もうちやんとお化粧が出來上りましても、眉毛の上に粉がとまつて居たりしてはいけませんから、よく御注意になつて、もし眉墨を御使用になるのでしたら、やわらかい絹の切につけてそつと輕く眉をふけばわざとらしくなくくつきりと新月のお眉が引立つてまゐります。口紅も京都邊では笹紅とか申して青光りのする様につけますがあれは、どうも自然のお化粧では御座いませんので、やつぱりふだんの御口唇の色でなくてはいけないので御座います。

△顏面をマッサージする事

冬向になると頰の一部が紫色になると仰やる方がありますが。これは血の循環がよろしくないのが原因なのですから、常に其心持で指先でお顏をマッサージ遊ばすのがよろしう御座います、殊にお風呂上りの時などは全體に血の循環がよくなつて居る時ですから、一寸した注意で直すことができます。附加へて御話し申上て置きます。お額は此矢先に示す様に左右へ眉の下は内方へ、頰は斜に上へ〳〵と遊ばすので御座います、これは美顏術の施術を致す一番初めに行なつて居るので御座います。

△美顏術用の化粧品と器械

よく皆樣から美顏術に使ふ器械といふものは、一體どんなものか、先づ一度見度いものだと言はれますが、決して外科手術に用ひる様な器械では御座いません。いづれも極く精撰致した護謨で製造したやわらかい器械ですから、これを使用致しますのは、丁度私共が永年習慣として居ります、布の糠袋で以て顏をこするのと同じ事で御座います。

元來美顏術は、各人天與の素質を生理衞生の上から出來るだけ研究致した結果、自然に從つて益々其美しい點を進め、故障となる分を取除こうと致すので御座います。其爲めにいろ〳〵な道具を使用致すのですが、本來此指、殊に若い婦人のやはらかな指先は、申迄もなく、裁縫とか刺繡造花などの技工の上にも誠に適當なものだと伺がつて居りますが柔らかな指先は天然に與へられた美顏器と申してもよろしいの

であります。

此指先で以て生理解剖の原則に從つて、局部局部を摩擦するので御座いますが、器械は其指先の及ばない點を補ふので御座います。これは化粧品と共に化粧具箱に納めて御座いますが旅行用として携帶便利に出來上つて居りまして、中味はいつでも相當の代價を以て御つめかへ申上る樣に致して居るので御座います。

△腰紐のしめ方と下〆で ちやんと格好を拵へる

着物を召す時に先づ、足袋を召して腰卷をなして長襦袢を合せましたならば半衿のところを程よく致しまして、それがくづれぬ樣に紐をしめるので御座います。さうして腰帶をして着物の衿を合せます時に、此位といふところで先づ細紐をしめて置て、次にたくし上たのが餘り多過てもかつかうがよろしくなく、又前にばつかり出て居て後の方はまるでなく、腰帶がむき出しになつて居るのは、お尻が大きく見えて實に不合好なものですから、其邊をよく見はからつて、伊達卷なり下〆なりですつかり帶下のくづれのしない樣に致して置くのですかう致して置けば彼の堅い地質の帶をきつくしめ付けて、苦しい思ひをせず、又幾度立居をしても、衣裳にくづれがしてまゐりませんので御座います。

△脊中に皺をこしらへぬ事

そしてお太鼓にでも御帶を結ぶ方は、特に注意して脊中に皺をよせぬ事が大切で御座います、これは伊達卷なり下〆を卷く時に脊筋の縫目をちやんと中央にきめたならば、其餘つた巾は皆脇の方へ引て、脇の縫目の處で三つ折に致して置きますと、脊にも胸にも少しも無理な皺が見えないので御座います。

△立矢の字は之と反對

立矢の字にお結びになる場合は前と反對で脊筋の左右爪の字の風に兩方から、皺を寄せますがこれは帶が肩の處迄もまゐりますから、それで以て隱れてしまふので御座います。さう致しますと、お召物も損じませんし、堅い帶でしめ付てありますから、窮屈だといふ樣な事もなく、そして下着の褄が餘計に出るとか、何とか云ふ樣な心配もなく、心地もよく召して御出になる事が出來るので御座います。此上にお帶を御好みのかつかうに御結びになればよろしいので御座います。

△襦袢と着物羽織の袖丈を揃へる

御襦袢から御羽織迄、同一の寸法でお仕立になつて置きましても扨重ねて召して御覽になると襦袢の袖がたくれたり、羽織の袖が長かつたり致すもので御座いますが、これはどう致しても下〆を結んだり、帶をしめたり致しますから、やむを得ず多少の違ひが出て來るので御座いますから、もうちやんと盛裝の出來上つたところで、脇あきのところを、グイと上に引上げて袖に手を入れて、お合せになればきちんとよく合ふのでございます、殊にお羽織などを召す時には必ず、御注意遊ばす樣に願ひます。

これでお芽出度い新年の御化粧と御盛裝が出來上つたわけでございます。



在原業平

物集梧水

今はやがて千年あまりの昔になりぬれど、その名は尚ほ人の耳に新しきかな。抑や在原業平とは如何なる人ぞ平安朝の初めなりけり。淳和天皇の天長二年といふに平城天皇の皇子阿保親王と桓武天皇の皇女伊登内親王との間に生まれぬれば、世が世なりせば、如何に目出度かりけむに、折から藤氏の一族いよ〱權を專らにして、萬乘の光さへ、その紅を奪はれむとしつれば、假令その身は皇族に在すとも、いとゞ轗軻不遇の歎きありしこと、推して量られぬべし。

更に業平には、苦しく悲しきことこそ有なれ。皇室の恨み、我身の怨み、うらみても尚ほ餘りある藤氏の女に、高子といへる、黑髮ながく麗はしき女ありけり。業平、この女を戀ひて、辛う相思の間になりぬと思ひきや、忽ち權勢と虚榮とは奪ひ去られぬ。生れながらにして自負心つよく、詩的情緒に溢るゝ業平の、爭で大に歎かざるべき。その東くだりの一節、その放縱生活の全斑、すべ

て是れ煩悶悲痛の餘影にあらずや。

春の夜

白馬の節會よ、子日の遊よと、宛ら醉へるが如う忙はしかりしが、正月も早や何時しかと十日を過ぎぬるほどに、何ぞや、物など忘れたらむやうに、世の中のさま、又淋しう冴えかへりき。

それの日なりけり。業平、五條なる皇太后の宮に參りて、黄昏すぐる頃ほひ、罷りさがらむと思ひしに、すゞろ哀しき情の、ひし／＼と胸に迫る如う覺えければ、我れにもあらで、西の對の屋へと歩みゆきけり。

『あはれ斯かる夜なりしよ。』

獨りつぶやきて、不圖愕きさまに見廻しゝに、其處には誰れも居らざりけり。いと靜かなる宵の、梅壺のわたりより、芳ばしき花の香のみ、そこはかとなく漾ふ。

業平は、人影のなきに心安う、庭面に突出でし板敷に座を占むれば、夕月ほのかに梅の梢にかゝりて、昔のこと、今のこと、さま／＼の俤、幻影のやうにぞ浮び出でたる。

『あはれ高子の君は、今いかにして在すやらむ。こゝに、この處に、去年の春までは、兩人並びて月を愛でしに、今は邂逅の逢瀬だに難う、甚とゞ哀れに悲しうなむ。然るにても長良の君ほど、心憂き人はあらざらんめれ。高子の君の隱るゝやうになりしも、大概は長良の君が所業なるは、云はでも宜べなり。嘸ぞや高子の君も、切に悲しう覺えつらむ。』

業平は、斯く心に言ひつゝ、高子の父長良を怨み、兄基經を恨みけるが、扨て我れに情厚かりし高子の事を想ひめぐらせば、在るにも堪へず、身も心も掻きむしらるゝやうに覺えて、大空を仰ぎさま、太息を吐きぬ。

更ふくるまゝに、月いよ／＼清く、花の香いよ／＼たけかりければ、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
我身ひとつは元の身にして

と、甚と低う詠み出で、幾度か繰返しつ又繰返しつしけるが、夜のほの〴〵明くる頃ほひ、人目を忍びて歸りにけり。

あくた川

さる水無月の、宵闇に稻妻しきりに閃きて、甚と物怖しき時なりけり。業平、兼ねて諜しあはしゝことにこそ有なれば、夕暮すぐる頃ほひ、五條の宮の築地の邊なる、一際小暗き木立の蔭に佇立みて、高子の出づるをば、今や遲しと待ちたりけり。

軈てしと〳〵と忍びやかなる跫音すと思へば、

「いと遲う侍り。いざ。」

と、美しき低聲しにけり。業平微笑みつゝ、

「然は、待ちたまひね。」

と應へて弓、箙なんど、脇へ搔いやりさま、高子が玉の腕を拉りて脊に負ひつ。闇の夜を何方へとも知らず、小走りに走りゆく。

芥川の邊を沿うて、下流へ〳〵とゆきけるほどに、大空彌が上に曇りて、雷神おどろ〳〵しう鳴り出でたり。業平、心も心ならず、物をも云はず急ぎければ、高子、闇にも著き草葉の露を指して、

「あはれ何ぞ、美しの白玉や。」

といみじう問へど、業平、何の答へもせず、尚ほ小走りに急ぎゆく。折から颯と一陣、風吹くかと思へば、大雨俄かに濺ぎたてゝ降りぬ。

業平、はたと困じて、何處に雨宿しなむと、其處等邊を見廻しゝに、路のべの傍らなる、一叢茂き木立の蔭に、社祠のやうなるがありしかば、嬉しと思ひて、近よりて見るまゝに、社祠にはあらず、甚と古びたる木造りの鄕倉なりけり。

「少時、此處にて雨宿してむ。」

と云ひつゝ、入口に走り寄りて、高子を下せば、

「あな怕し。鬼にても出でつらめ。」

と、可憐げに打震ふ。

「いかで然ることやはある。奥の方へ入りてよ。」

と云ふほどもなく、紫電つゞけさまに閃めきわたりて

端なく映し出されし、數人の人影こそあれ。

此は曲者かと、業平、矢庭に弓を採りて矢をたばさまむとすれば、彼の人影の中より、

『其處に在すは誰ぞ。』と云ひつゝ蹤々と近よるを見れば、此は如何に、高子が兄の基經なりけり。

業平は、膽も消ぬべ







く驚きて、何の應へも爲さでありしに、基經、又もや閃めく稻妻の光に高子の姿を見出しつ、下人ばらに命じて、直だに引立てゝ歸りにけり。

この折なり。業平、あまりの驚きに、少時呆然たりしが、基經等が去りける後、宛ら夢より覺めしやうにおぼえて、甚くと口惜しう蹉跎りしつゝ、

白玉か何ぞと人の
　問ひしとき
露とこたへて
　消なましものを

と吟じ出でぬれど今更其れも詮なかりき。

高子を奪ひかへされてより以後は、業平は唯だ佗しう暮しぬ。今一度の逢瀬をと思へど、其れすら終に仇なりけり。

吾嬬路

あはれ辛き浮世や。少時都を出でゝ未だ見ぬ歌枕など眺めなば、些かは心の慰めにもなりぬべしとて、それの年、彌生の末つ方といふに、從者二人三人を具して、東方を指して旅立ちけり。

初旅の、大概知らぬ路ばかりなれば、北へ入り、南へ出で、其處此處を彷徨ひありきぬ。

三河國八橋に到りしは初夏の頃なり。いと熱き日光の、大空高う赫々と輝きければ、暫時涼しき處をと思ひしに、折よく澤の邊に出でぬ。業平は馬より下りて綠の木蔭にやすらひ、從者と共に割籠を開き、餉喰べむとして、不圖その邊を眺むれば、蜘蛛手に流るゝ水の上に板橋打架け、澤には杜若の花、今を盛りと咲きたりけり。

從者ども興にまかせて、

「かきつばたの五文字を句の頭ごとに附けて、旅の心を詠み出でなば、甚と面白かりなむ。」

と云へれば、業平少時思案して、

から衣きつゝ馴れにしつましあれば
はる〴〵きぬるたびをしぞ思ふ

とぞ微吟しける。從者どもこれを聞きて、都に遺し置きける妻を思ひ出で、すゞろに涙を流すものもありけり。

五月の末つ方には、駿河路へ入りぬ　宇津の山の、いと小暗き峠路に差かゝりぬれば、木立の茂み、蔦かづら、行手は遮りて、心細さ云はむ方なし。

折から彼方より來かゝる一人の修行者あり。篠懸衣身に纏ひて、甚と甲斐々々しき扮裝なるが、摺違ひさまに業平を見て。

「斯かる路には、いかで坐する。」

と問ふ。業平振返りて熟く見れば、都にて知れる僧な

りけり。
「思はぬ處にて逢へるものかな。少時物がたりなむ。」
と、業平も馬より下りつ、互ひに旅路のことなど語りあひしが、軈て別るゝ折、
「都へゆきたまはゞ、言傳てゝたまへ。」
とて、歌詠みけり。

駿河なる宇津の山邊のうつゝにも
夢にも人に逢はぬなりけり

初秋の風身に沁む頃、行き／＼て武藏國を過ぎぬ、夕陽、草原に傾きて、空はたゞ水色に暮れむとぞすなる。一行の者足もたゆたげに、歩きけるが、忽ち夕風に戰ぐ蘆の蔭より、白く流るゝ隅田川を望みて、皆なその邊に集ひけり。

少時は此の大なる河の流れを眺め暮して、遠き都のことを思ひ居たりしに、軈て渡守の男の、
「疾く乘りたまへ。日も暮るゝに。」
と呼ぶ聲に愕かされて、皆な舟に乘りぬ。折から水面に白き鳥の群れ浮びて、或は起ち、或は飛び、小さき魚を啣みけるが、其形の、未だ見しこともなければ、
「彼の鳥は何ぞ」
と問ふに、渡守の男、甚と訝しげに、
「これなむ都鳥にこそ。」
と答へつゝ艪を推しけり。業平これを聞きて、すゞろに都の情人を思ひて、

名にしおはゞいざ言問はむ都鳥
我が思ふ人はありやなしやと

と歌ひ出づれば、一行のもの感慨に堪へで、皆な泣きけり。

みちのく振

陸奥の女こそ、可憐しくもなか／＼に可笑しけれ。業平の此地に入りし時より、眞心盡して待遇せし女の數女ありしが、別きても其中に、熱き情を捧げし女ありけり。

この女はじめて、業平を垣間見しより、忽ち戀の焔に思ひを焦しぬ。あはれ此のまゝ焦れ死にゝ死なむよりは、縱や命こそ短けれ、蠶の蝶に生れ來りしならば、

嬉しき夫婦の契を結ぶべかりしにとて、

なか〳〵に戀に死なずば桑子にぞ
なるべかりける玉の緒ばかり

と、覺束なくも詠み出でゝ贈りければ、業平も、鄙振の哀れさ一入深く心に泌みて、少時はこの女と契を結びぬ。

然るに或夜のことなり。業平、この女の家に泊りて、家鷄の音に驚かされつゝ歸りゆけば、二更の空に月影冴えて、夜は未だ明けむともせず。その折なり。この女、家鷄を怨みて、

夜も明けば狐に喰めなむ家鷄の
未明に鳴きて情人をやりつる

とぞ歌ひける。

陸奥の女は、大概斯かる狀なりければ、たとひ如何ばかり哀れと思ふも、尙はなか〳〵に都人には比ぶべくもあらで、業平の心、今は切に都の空戀しうなりまさりぬ。

斯くていよ〳〵都へ歸らむと思ひける日、この女に會ひて、

栗原の姉齒の松の人ならば
都のつとにいざと言はまし

と歌ひて、其れとなく、都へ伴れて歸るべき女ならぬを諷しけるに、この女、思ひ違ひて、己れを都へ伴れて歸るかと、甚と悅ばしげに點首きしこそ、いみじうあはれならずや。

小野の宮

當時、文德天皇の皇子に、惟喬親王と申す御方おはしましけり。第一の皇子に在しゝかど、藤氏の出にあらねばとて、御位にも即かせたまはで、甚と味氣なく世をわたりましぬ。

然りながら此の親王、月に、花に、風雅の御心深かりければ、偏へに業平が詞藻を愛でさせられて、何くれとなく、常に御招ぎありけり。

それの年なり。惟喬親王、數日水無瀨の離宮に坐しましゝが、折しも彌生の空のどかに晴れて、御心地甚と勝れければ、業平を始め、御供數多率つゝ、交野わ

たりそ鷹狩にゆきましき。

その日、甚と麗かなりければ、御狩のことなど大概は等閑になりて、唯だ櫻花に憧憬れながら、其處よ此處よと彷徨ひたまひぬ。

「渚の院の櫻花こそ、美しう咲きたらめ。」

と、親王の云ひたまへば、御供の者ども、

「さこそ候はめ。」

と應へまつるに、軈て渚の院へぞ行きて見給ふ。實に此上なう美しき景色かな。丘には松の翠の色深く、庭には老木の櫻花、今を盛りと咲き匂ひければ、人達皆な悦びあひて、櫻花の枝を髷に爲つゝ、

「あはれ〳〵。」

とこそ罵りたれ。此折なり。業平は興に乘じて、

　世の中に絶えて櫻の咲かざらば
　　春の心はのどけからまし

と口ずさみぬれば、御供の一人は其れに和して、

　散ればこそいとど櫻はめでたけれ
　　うき世になにか久しかるべき

とぞ歌ひける。斯くて夕暮近き頃ほひ、御供の者、酒持ちて參りぬれば、親王微笑ませたまひて、

「更に、何地へかゆきて飲まむ。」

と云ひたまへば、御供の者ども、

「天の川こそ可けれ。」

と申す。親王いよ〳〵悦ばせられて、

「さらば、いざ行かむ。」

と、櫻樹の下を立去りたまひぬ。やがて天の川の邊に到りましゝ頃は、黄昏の色ひし〳〵と迫りて、夕月淡く山の端に浮び出でけり。

「實に面白の風情や。」

「春の夕べこそ、限りも知らず艶に美しけれ。」

「夢ともわかぬ景色かな。」

などゝ口々に云ひあひて、緑の草を茵に、酒酌みかはしけり。

良ありて興の愈〻増すほどに、親王、業平に向ひたまひて、

「今日遊びけるを題に歌よみて、我に土器參らせよ。」

と云ひたまへば、業平、土器を捧げながら、

　狩暮し七夕つめに宿からむ
　　天の河原に我れは來にけり。



と歌ひければ、親王、それを繰返し〳〵吟じて、
『あはれ佳き歌にこそ。』
と賞でたまひぬ。側らなる紀有恒と云へるもの、

一歳に一度來ます
君待てば
宿かす人も
あらじとぞ思ふ

とぞ和しける。興は尙ほ盡きざれども、夜露いと滋く置きわたりければ、いざとて水無瀨の離宮に歸り給ひぬ。然りながら今宵の此の好き月に背きて寢なむは、甚と心のこりなりとて、小夜ふくるまで大殿に酒酌みかはしけるが、親王の大に



酔ひたまへるほどに、終に座に堪へたまはで、
「月も入りなむ。我れも寝なむ。あはれ酔ひけり。」
と云ひたまひて、其のまゝ寝なんとしたまひけるを、
業平、興の未だ盡きざるとて、

飽かぬだにまだきも月の隱るゝか
山の端逃げて入れずもあらなむ

と詠みければ、紀有恒、親王に代りて、

おしなべて峰も平らになりなゝん
山の端なくば月も隱れじ

と、返歌したりけるとぞ。

斯くさまに親王も、業平も、互ひに心を盡して、憂き歳月を過しけるに、貞觀十四年の秋、親王は俄かに御髮おろして、都に近き小野の里に籠居り給ひぬ。時に御歳二十九。未だしかるべき御齡の、甚と御あはれにまし〳〵けり。

業平の、深雪踏みわけて、小野の里を訪ひまゐらせ涙に掻暮れて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや
雪踏みわけて君を見むとは

と詠みしは、翌る十五年の正月の事にしありけり。

忍草

業平の夢寐にも忘れがたかりし高子の君は、抑や其後、如何になり給ひけむ。語れば涙の種なりけり。彼の芥川にて、兄基經に引連れられて歸りし後は、業平に逢ふこと更に叶はで、夜となく、晝となく、唯だ物佗しう暮しけるが、軈て其の情人遠く東國へ下りぬと聞きては、涙の袖、一入濡れそぼちけるに、距るもの日々に疎く、弱きは女の心なりとかや、何時しか父の言葉に順ひて、晴の盛裝いと華美かに、やがて天皇の御側に奉仕する身とはなりにき。

斯くて一年あまり過ぎぬるほどに、業平は東國より歸り來りぬ。高子は天皇の皇子を產みまつりぬ。然れば互ひに顏こそあはさね、心々に煩悶えしなるべし。

貞觀十一年、春如月の頃なりけり。高子、大原野神社へ詣でけるが、是れぞ我が產みまゐらしゝ皇子の、

春宮に立たせ給へる御儀式にて、其折の行列の美々しさ、業平さへ其中に交れりけり。

神詣で終りて後、人々を召して引出物などを賜はりしに、あはれ此折なりき、業平は昔のこと、今のことさまぐの思ひに亂れて、無量の感に堪へざりければ高子の御車の後より、

大原や小鹽の松も今日こそは
　神代のことを思ひ出づらめ

と、一首の和歌を口踊さみて、私かに昔の怨みを神代に寄せて洩しければ、車の内なる人、其れを聞きて、涙落しにけり。

また、それの時なりけり。業平、後涼殿の挾間を通りけるに、御局の簾垂の蔭より、

『忘草をば、忍草と云ひ侍るにや。』

と、昔懷しき聲の聞えければ、振返りて見しに、忘草をば差出してけり。業平、それを手に取りて、

忘草生ふる野邊とは見るらめど
　こは忍ぶなり後もたのまむ

と詠みければ、簾垂の内なる人、背平を向けて、哀れにぞ泣きける。

斯く業平は、その折々毎に、我が切なる情を歌ひ述べけれども、歌にすら言はで已みにし高子の、その胸の中こそ如何なりしか。己が產みまつりし皇子の甚と物狂はしう坐しましゝも、偏へに高子の、己が心を惱まし給ひけむ故かとぞ覺ゆる。皇子とは即ち陽成天皇のことなりけり。

逝く途

人を看ること淺き輩は、その放縱なるを見て、直だに業平を譏るめれど、其は大なる誤なり。所謂ゆる世の賢き人は、大概その思へる所と爲す所とを違へて、技巧を用ひて世渡りするが故に、多く譏らるゝ所も無けれど、頼母しげなる所も更々なし。業平は、唯だ己が思ふことは、少しも飾らず其のまゝ行ふ故に、端なく他に爪彈きせらるゝことあれど、交際ひて見れば此上なう頼母しかりし人なるべし。戀すれば直ちに其の

情人を率て走るなど、いと面白し。戀人を奪返されて失望落膽し、東方へ下るなど、更に面白し。一度戀へる情人には終生忘れかねて、折々歌を贈れるなど、愈く面白からずや。殊に轗軻不遇の親王に對して傾倒せし其の赤誠こそは、此世の盡きざる限り、偏へに感謝すべきものなれ。

斯く他に對して赤誠ある人は、親に對しても赤誠深かり。さる師走の事なりけり。長岡に住める老母の許より使者來りて、文の中に、

老いぬれば然らぬ別れもありといへば
いよ〳〵見まくほしき君かな

と、一首の歌の記されてありければ、業平驚きて、取る物も取りあへず、母がり參りけりとかや。

世の中に然らぬ別れの無くもがな
千代ともたのむ人の子のため

とは、この折詠みし歌にぞ有なる。

斯く業平は赤誠ある人にしありければ、その詠み出でし歌さへ、坐ろに人を感動さぬはなかりき。

寢ぬる夜の夢を果敢なみまどろめば
いや果敢なにも成りまさるかな

大方は月をも愛でじこれぞ此の
つもれば人の老となるもの

などの如きは、誰れかは宜べと點首かざるべき。

あはれ、此の赤誠ある歌人在原業平朝臣は、憂き世の樣々なる煩悶を歌ひて、元慶四年五月の二十八日と云ふに、五十六歳を一期として、遠く此世を去りぬ。病氣篤く愈ゝ逝かむとする時、

終に逝く途とは兼ねて聞きしかど
きのふけふとは思はざりけり

明治四十四年度（自一月至十二月）博文館新刊書

博文館は毎月十八種合せて百數十萬部の雜誌を發行すると共に時代の要求に應じて社會百般の新書を發刊致し居り候今や壬子の新年を迎ふるに際し茲に昨一ヶ年間の新刊書を掲げて本誌愛讀者諸彥の劉覽に供し候總計一百七十六種皆是れ最新の選に係れるもの希くは陸續御用命あらんことを

製本符號　◉洋裝上製符　●洋裝並製符　㊀和裝上製符　△和裝並製符

正價（円・拾錢）　郵稅（拾錢）

【地理歷史書類】

◉	東京帝國大學理科大學講師 鳥居龍藏君著	蒙古旅行	（菊判六一四頁）	一,八〇	三
◉	理學士山崎直方君 理學士佐藤傳藏君 共著	大日本地誌 第八卷 九州	（菊判一二〇〇頁）	三,〇〇	一六
◉	田山花袋君著	新撰名勝地誌 東山道西部	（四六判六一八頁）	六〇	八
◉	同	新撰名勝地誌 東山道東北部	（四六判六六〇頁）	六〇	八
◉	同	新撰名勝地誌 北陸道の部	（四六判六一八頁）	六〇	八
◉	同	新撰名勝地誌 山陽道の部	（四六判五六二頁）	六〇	八
◉	田山花袋君著	新撰名勝地誌 山陰道の部	（四六判約六百頁）	六〇	八
◉	坪谷水哉君著	山水行脚	（四六判四九四頁）	八〇	八
◉	理學博士日下部四郎太君著	北極探檢談 前編	（菊判二〇〇頁）	九〇	八
●	島貫兵太夫君著	新渡米法	（四六判二七五頁）	四〇	四
◉	鈴木天眼君著	南阿南米行	（菊判三二〇頁）	九〇	一〇
●	松尾樂山君著	馬來半島の猛獸狩	（菊半截二六〇頁）	二八	四
◉	文學博士井上圓了君述	日本周遊奇談	（四六判三七五頁）	七〇	六
◉	坪谷水哉君著	海外行脚	（四六判四一〇頁）	七〇	六
●	押川春浪君 中村直吉君 共編	五大洲探檢記卷五 歐洲無錢旅行	（四六判三〇二頁）	四五	六
◉	木村鷹太郎君著	世界的研究に基づける 日本太古史 上卷	（菊判五二〇頁）	二,〇〇	一三
●	海軍少佐水野廣德君著	此一戰	（菊判四一〇頁）	一,〇〇	一〇
●	文學博士萩野由之君著	少年日本歷史讀本 天の浮橋	（菊判一四二頁）	一八	四
●	同	少年日本歷史讀本 大國主神	（菊判一四二頁）	一八	四
●	同	少年日本歷史讀本 天孫降臨	（菊判一三八頁）	一八	四
●	同	少年日本歷史讀本 橿原の宮	（菊判一三〇頁）	一八	四
●	同	少年日本歷史讀本 三種の神器	（菊判一三〇頁）	一八	四
●	同	少年日本歷史讀本 新羅征伐	（菊判一三〇頁）	一八	四
●	文學博士姉崎正治君著	南北朝問題と國體の大義	（四六判一一四頁）	一八	四
●	文學博士箕作元八君著	西洋史新話 ギリシアの撥亂	（菊判二一六頁）	五五	八
●	同君著	西洋史新話 テーベの勃興	（菊判二五六頁）	五五	八

（二）

【傳記　實業　政治書類】

◉ 獨逸帝國　ドクトル・オブ・フ井ロソフー三上正毅君著（菊判三七七頁）　一,三〇　三

● 少年百科叢書 西洋十大戰爭　平川芝峰君著（三六判二九〇頁）　二八　四

● 少年百科叢書 世界名君傳　前田越嶺君編（三六判二八八頁）　二八　四

● 少年百科叢書 世界名臣傳　同　君編（三六判二八四頁）　二八　四

● 少年百科叢書 冒險英雄傳　河岡潮風君著（三六判二八八頁）　二八　四

● 少年百科叢書 發明と偉人　前田越嶺君著（三六判三〇〇頁）　二八　四

● 少年百科叢書 少年立志篇　堀内新泉君著（三六判三〇〇頁）　二八　四

● 少年百科叢書 少年時代 名士の苦學　岡本鼦園君林有隣君共編（三六判二九〇頁）　二八　四

● 虞翁論　駐米英國大使セームスブライス氏原著　内ケ崎作三郎君譯（四六判一九四頁）　附、虞翁の愛兒に與へたる書翰　三八　四

● 日本紀ばなし 動物神話　文學士渡邊北海君 竹貫佳水君 共編（四六判三七四）　六〇　六

● 八面鋒 朝野の政治家　中野正剛君著（四六判二七五）　四五　六

● 竹亭回顧錄 維新前後　伯爵東久世通禧君述（菊判二七四頁）　六〇　八

◉ 農藝物理 農具學　農學博士稲垣乙丙君著（菊判四六四頁）　二,二〇　三

● 通俗水産業叢書 鰹節の製造　大竹健吉君著（菊判二八六頁）　七五　八

● 通俗産業叢書 實用 養豚法　林敬三君著（菊判一四〇頁）　三五　四

◉ 通俗農業大全　農學士鈴木敬饌君編（四六判九四〇頁）　一四〇　八

◉ 實驗 朝鮮果樹園藝　農學士高橋久四郎君校閲　高津敬三郎君押切祐作君共著（菊判二五〇）　一,〇〇　八

◉ 園藝叢書 實驗 苹果栽培法　興津園藝試驗場長農學士恩田鐵彌君著（菊判三七三頁）　一,四〇　三

◉ 農業要覽　農學博士横井時敬君 農學士白鳥吾市君 共著（四六判中截五六〇頁）　五五　六

◉ 農作園藝 栽培法大全　農學博士稲垣乙丙君 和田猷吉君 共編（四六判七六七頁）　一,四〇　三

◉ 折衷 洋風建築設計圖集　小野武雄君著（菊四倍判銅版圖五拾枚）　二,五〇　一六

◉ 最新 商業要義　商學士高島誠一君著（菊判約三〇〇頁）　九〇　八

● 實用商業簿記　商學士大石善四郎君著（菊判三一六頁）　九〇　八

● 商業小說 老商人物語　品川卯一君譯（四六判二七八頁）　三八　六

◉ 都市 行政及法制 上卷　法學博士井上友一君著（菊判四二八頁）　一,〇〇　三

◉ 都市 行政及法制 下卷　同　君著（菊判四二八頁）　一,〇〇　三

◉ 日本之社會　法學博士戸田海市君著（菊判六一四頁）　一,四〇　三

明治四十四年度(自一月至十二月)博文館新刊書

破壞思想と救治策	法學博士添田壽一君著	四六判一七八頁	四〇	四
日本之經濟	法學博士戸田海市君著	菊判七二八頁	一,五〇	三
明治四十四年世界年鑑	伊東祐穀君著	四六二倍判一四五〇頁	八,〇〇	一六
陪審制度談	法學博士江木衷君著	菊判一五〇頁	四〇	六
新舊對照改正市町村制 附 改正理由	博文館編輯局編	菊半截三四八頁	三	四
改正市制町村制詳解	坪谷善四郎君著	四六判三九四頁	三〇	六
軍人志望勉學法	松美佐雄君著	三六判二八六頁	二八	四
壯丁讀本	陸軍少將渡邊棋十郎閣下校閲 湯澤直藏君大槻震八郎君共編	菊判八〇頁	二五	六
日米戰爭	米國ホーマー、リー將軍原著・池亨吉君譯	菊判二四〇頁	七〇	六
軍旗物語	松美佐雄君著	四六判三一八	四〇	四
人體解剖學 下卷	醫學士石原弘君編	菊判五四六頁	三,〇〇	三
健康の生涯	紐育體育局長醫學博士ルーサーギユリツク君原著 シドニーギユリツク君 水野和一君共譯	四六判二一〇頁	四〇	六
現代名士の養生振	岡本鶴園君編	四六判三三〇頁	四五	六
社會の强敵 治療し得べき結核病 豫防し得べき結核病	哲學博士アーレン、ケー、ファウスト君著	四六判一七六頁	三五	六
朗吟詩歌集	渡邊殖編	三六判約三〇〇頁	二八	四
和漢朗詠集國字抄 全四册	故四條公任卿輯 高井蘭山先解	半紙判木版刷	一,二〇	八
和漢諷詠類選	梁南渡邊殖君編	四六判四五〇頁	八〇	一〇
其日庵叢書 第一編	杉山茂丸君著	菊判三七〇頁	九五	一〇
名流百道樂	双楓書樓同人編	四六判四九〇頁	九〇	八
業才學	堀內新泉君著	菊判三四〇頁	六五	八
最近歐米劇壇	中村吉藏君著	四六判四二八頁	一,〇〇	八
停雲集	文學博士姉崎嘲風君著	四六判五九四頁	一,二〇	八
日本神話愛と劍	木村小舟君著	四六判三五五頁	五五	六
經外遺傳逸語訓譯	文學博士遠藤隆吉君譯	菊判三九〇頁	五八	一〇
荀子新釋 中卷	文學士久保天隨君著	菊判三五〇頁	四五	八
荀子新釋 下卷	同君著	菊判三五〇頁	四五	八
孫子新釋	同君著	菊判二四七頁	三八	六

【經濟 法律 兵事 衛生 文學 漢文書類】 (三)

【漢文 作文 俳句 戲曲 小說書類】

文學博士根本通明君講述	◉詩經講義上卷	(菊判五二四頁)	一,二〇	三
同君講述	◉詩經講義下卷	(菊判四六〇頁)	一,一〇	三
文學士久保天隨君著	◉作文資料記事文鑑	(四六判約五一五頁)	七〇	八
福井庄三郎君 高須梅溪君 共編	◉文案資料商用文鑑	(三六判四七〇頁)	六〇	八
戸野みちゑ君 近藤正一君 共著	▲實用女子作文全書	(菊判五二二頁)	六五	三
中川四明君著	●形似神韻觸背美學 ▲一名 新俳諧美學	(菊判二三六頁)	四〇	六
星野麥人君編	●類題百家俳句全集 春の部	(四六判横綴七四八頁)	六五	八
有田風蕩之君編	◉袖珍新俳句	(四六判半截二二六頁)	四〇	四
角田竹冷編	◉芭蕉句集講義 秋の巻	(四六判二六二頁)	三八	六

今井柏浦君撰	●最近新二萬句	(四六判横綴一、一〇〇)	一,〇〇	三
文學士佐々醒雪君著	◉俗曲評釋第四編上方唄	(四六判二七八頁)	五五	八
同君著	◉俗曲評釋第五編小唄と端唄	(四六判二七八頁)	五五	八
文學博士佐々木信綱君校	●新謡曲百番	(菊判約四五〇頁)		
岡崎櫻洲君編著並作譜	●最新琵琶歌聚英 紅梅の巻	(菊判五四頁)	三〇	四
	同 小櫻の巻	(菊判五三頁)	三〇	四
徳田秋聲君著	◉名家小說文庫秋聲叢書	(菊判一〇〇〇頁)	二,〇〇	一六
泉鏡花君著	◉名家小說文庫鏡花叢書	(菊判一〇〇〇)	二,〇〇	一六
山田美妙君著	◉名家小說文庫美妙叢書	(菊判一〇〇〇頁)	二,〇〇	一六
故福地櫻癡居士遺著	◉櫻癡全集上編(全部三冊)	(三六判一二四〇頁)	一,二〇	三

江見水蔭君著	●冒險小說女水夫	(四六判五六〇頁)	五五	八
前田晁君譯	●短篇十種モウパッサン集	(四六判三二〇頁)	四五	四
押川春浪君著	●險奇小說破天荒	(四六判四一八頁)	五五	六
江見水蔭君著	●小說高麗男	(四六判五〇六頁)	五五	八
博文館編輯局編	◉講談文庫出世譚	(四六判四五〇頁)	五五	八
同	◉講談文庫名人譚	(四六判四五〇頁)	五五	八
同	◉講談文庫烈婦傳	(四六判四五〇頁)	五五	八
同	◉講談文庫武士氣質	(四六判四五〇頁)	五五	八
同	◉講談文庫義士外傳	(四六判四五〇頁)	五五	八

明治四十四年度(自一月至十二月)博文館新刊書

- 博文館編輯局編 ◉講談文庫 怪談集 (四六判四四六頁) 五五 八
- 同 ◉講談文庫 人情話 前編 (四六判四四六頁) 五五 八
- 同 ◉講談文庫 人情話 後編 (四六判四五〇頁) 五五 八
- 龜井まき子君著 ▲家庭百科全書 洋食の調理 (菊判二九二頁) 四五 八
- 福田琴月君著 ▲家庭百科全書 衞生と衣食住 (菊判三一四頁) 四五 八
- 高須梅溪君著 ▲家庭百科全書 金言對照 東西名婦の面影 (菊判三〇〇頁) 四五 四
- 河崎醉雨君著 ▲家庭百科全書 婚姻のかゞみ (菊判三二八頁) 四五 八
- 福田琴月君編 ▲家庭百科全書 交際と談話 (菊判二八二頁) 四五 八
- 高須梅溪君編 ▲家庭百科全書 婦人日常座右銘 (菊判三〇〇頁) 四五 八
- 一戸清方君著 ▲家庭百科全書 日用家庭理科 (菊判三二八頁) 四五 八
- 前田曙山君著 ◉花卉應用裝飾法 (菊判三〇〇頁) 九〇 一〇
- 男爵石黒忠悳君著 ▲增訂好求録 茶器鑑定法 (菊判七七頁) 四五 四
- 慶應スコアラー 直木松太郎君考案 ◉野球試合記録帖 (菊判横綴) 三〇 六
- 同君著 ◉現行野球規則 (四六判) 四〇 一
- 竹貫佳水君著 ●少年魔術遊戯 (四六判二二四頁) 三〇 六
- 同君編 ●少年百科叢書 先哲百言 勉學訓 (三六判二七〇頁) 二八 四
- 同君編 ●少年百科叢書 讀書法 (三六判二八四頁) 二八 四
- 森村市左衛門君述 ◉少年 實業訓 (四六判約一三〇頁) 三八 六
- 河岡潮風君著 ●少年百科叢書 少年雄辯術 (三六判二八〇頁) 二八 四
- 竹貫佳水君著 ●幼年 繪話百番 太郎の巻 (菊判彩色刷一〇〇頁) 三三 四
- 同君著 ●仝 次郎の巻 (菊判彩色刷一〇〇頁) 三三 四
- 同君著 ●仝 花子の巻 (菊判彩色刷一〇〇頁) 三三 四
- 同君著 ●仝 三郎の巻 (菊判彩色刷一〇〇頁) 三三 四
- 竹貫佳水君著 ●少女思出の記 (四六判二〇六頁) 二八 四
- 沼田笠峰君著 ●家庭學校 少女百話 (四六判三二〇頁) 四五 六
- 山岸荷葉君著 ●少女小説 氏か育か (四六判約二〇〇頁) 三八 四
- 巖谷小波君著 ◉小波少年 お伽百話 (菊判九八四頁) 一、六〇 三

【講談　家事　遊戯　少年　少女書類】

(五)

明治四十四年度（自一月至十二月）博文館新刊書

【兒童　理科　數學　哲學書類】

著者	書名	判型・頁數	定價	郵稅
巖谷小波君著	◉改訂袖珍 日本お伽噺	（菊判半截六六〇頁）	一、一〇	六
同　君著	●世界お伽文庫 忠義猫	（菊判一〇八頁）	三	二
同　君著	●世界お伽文庫 鬼火物語	（菊判一一〇頁）	三	二
同　君著	●世界お伽文庫 二人山賊	（菊判一一〇頁）	三	二
同　君著	●世界お伽文庫 羊息子	（菊判一〇六頁）	三	二
同　君著	●世界お伽文庫 朝日姫	（菊判一一六頁）	三	二
巖谷小波君著	●世界お伽文庫 孝女アンネ	（菊判一〇八頁）	三	二
理學士安田篤君著	◉植物學各論 隱花部	全二冊（菊判一五九〇頁）	五、〇〇	二〇
理學博士遠藤吉三郎君著	◉海產植物學	（菊判八四四頁）	四、〇〇	三
理學博士三宅驥一君　バチェラー、オア、アーツ　野原茂六君　共著	◉農學校用 植物生理學敎科書	（菊判一三四頁）	三五	六
澤田順次郎君	●最近十二年間官立學校入學試驗問題詳解	（四六判八六二頁）	九五	三
進化學專攻海野幸德君	◉興國策としての人種改造	（菊判三九五）	一、二〇	八
澤田順次郎君著	●少年百科叢書 天界之觀察	（三六判三〇四頁）	二八	四
同　君著	●少年百科叢書 地界之觀察	（三六判三二六頁）	二八	四
木村小舟君編	●少年百科叢書 採取及整理	（三六判二七八頁）	二八	四
黑田湖山君著	●少年百科叢書 最近飛空術	（三六判二七四頁）	二八	六
理學博士石川千代松君　中島茂一郎君　共譯	◉驚くべき世紀	（菊判三七二頁）	九〇	三
理學博士遠藤吉三郎君著	◉生物學的人道觀	（菊判一四〇頁）	四五	五
東京高等師範學校敎授理學士林鶴一君閲　和歌山縣粉河中學校敎諭大上茂喬君編著	●世界叢話 數理の奇談	（四六判三二六）	三五	六
理學士宮本藤吉君著	◉高等數學講義 立體解析幾何學	（四六判二五二頁）	八〇	六
理學士宮本藤吉君著	◉高等數學講義 平面解析幾何學	（四六判二九五頁）	八〇	六
理學士根津千治君著	◉高等數學講義 微分學	（四六判三〇〇頁）	八〇	六
理學士松村定次郎君著	◉高等數學講義 應用數學	（四六判二九〇頁）	八〇	六
獨逸ショッペンハウエル氏原著　文學博士姉崎正治君譯	◉意志と現識としての世界 中卷	（菊判六四六頁）	一、六〇	三
同	◉意志と現識としての世界 下卷	（菊判七五六頁）	一、八〇	三
文學士栗原基君譯	◉人間修養論	（四六判四三〇頁）	七五	六
故佐伯剛平君著	●人生の最後	（菊判一一五頁）	二八	四
來原木犀庵君著	◉通俗靈怪學	（四六判二四〇頁）	四〇	六
文學士虎石惠實君譯	●過去の宗教と未來の宗教	（四六判約一五〇頁）	二五	四

明治四十四年度(自一月至十二月)博文館新刊書

【修身 英語 辭典 日記類】

● 文學博士三島中洲君閲 河野宇三郎君著 三教統一論 (菊判二三七頁) 四〇 六

◉ 文學博士井上哲次郎君閲 文學士有馬祐政君 黒川眞道君共著 國民道德叢書 一卷 (菊判六〇四頁) 一、二〇 一三

◉ 同 同 君著 同 二卷 一、五〇 一六

● 瓜生寅君謹解 勅語通解 (菊半截二一〇頁) 三〇 二

◉ 岡倉由三郎君著 英語教育 (菊判二七六頁) 八五 八

● 今井翠巖君著 最新増訂 男子東京遊學案內 (四六判八五〇頁) 七五 一〇

◉ 坪谷善四郎君編 北白川宮大妃殿下 臺灣御渡航紀念帖 一、〇〇 八

◉ 萬朝報英文記者今井信之君著 英文 葉書の書き方 (菊半截三〇〇頁) 五五 四

◉ 神戸高等商業學校長水島鐵也君校閲 上田貢太郎君著 貿易商業 通信文英譯例題 (三六判一三〇頁) 三八 四
▲附 貿易商店員心得

◉ 石川鴻齋君校訂 鼇頭音釋 康熙字典 (四六判銅刻三三〇〇頁) 五、〇〇 一六

◉ 法學士秋山正議君著 中學 英和雙解辭典 (新形長形七六〇頁) 七〇 六

◉ 堀内秀雄君著 海軍術語字彙 (三六判二五八頁) 六〇 四

◉ 文學士鴻巣廣盛君 文學士阪元雪鳥君 西村酔歩君共著 新式解說 俳句大辭典 (四六判六〇〇頁) 一、三〇 三

◉ 博文館編輯局編 明治四十五年 當用日記
最新統計表重要規則書添附各五四〇頁

▲大形 (菊判上製金文字入) 五五 一四
▲中形 (總革別製) 八〇 一〇
▲中形 (四六判脊皮特製) 五〇 一〇
▲中形 (同形總布上製金字入) 三八 一〇
▲小形 (菊半截總布金文字入) 三〇 八

◉ 博文館編輯局編 明治四十五年 懷中日記
最新統計表重要規則書添附

▲新形 (細長形總布金文字入三百頁) 二〇 二
▲上製 (總布金字入三百餘頁) 一八 二
▲並製 (模皮金字入三百餘頁) 一三 二

◉ 博文館編輯局編 明治四十五年 ポケット日記
知人名簿金錢出納錄重要規則等添附
總革製三方金緣舶來紙薄手美本

A號(厚形)…(記入欄一日一頁 四四〇頁函入) 五五 四
B號(薄形)…(記入欄一日半頁 二二〇頁函入) 四五 四
C號 薄形)…(記入欄一日一頁 四四〇頁函入) 六五 四
C號は前後季二冊に別ち差換使用
▼右三種共 吸取紙附とす▲

◉ 女學世界編輯部編 明治四十五年 家庭日記 (四六判五〇〇頁) 三八 八
▲家庭の心得家事整理欄等百六十頁添加

● 博文館編輯局編 四十四年夏期休暇 女學生日誌 (菊判六四頁) 三 二

● 同 四十四年夏期休暇 小學生日誌 (菊判計六種)
●尋常科三年用 ●同 四年用 各五、五 二
●尋常科五年用 ●同 六年用 ●高等科一年用 ●同二年及三年用 各七 二

(七)

近刊豫告

- 理學士山崎直方・法學博士佐藤傳藏共著 ◉大日本地誌 北海道及樺太（菊判）
- 文學博士有賀長雄著 ◉西洋歷史 上卷（菊判）
- 田山花袋君著 ◉新撰名勝地誌（南海道の部）（四六判）
- 木村鷹太郎君著 ◉世界的研究に基づける日本太古史（下卷）（菊判）
- 陸軍中尉鎌田覺之進君著 ◉震天記（菊判）
- 前田雪子君著 ▲家庭百科全書 偉人の妻（四六判）
- 栢原昌三君著 ●少年百科叢書 日本十大戰爭（三六判）
- 田鎖綱紀君著 ◉大日本早書學 邦語速記術（四六判）
- 久保醫學博士著 ◉鼻科學 下卷（菊判）
- 文學士久保天隨君著 ◉新式實用 作文大辭林（菊判）
- 工學士田中宗一郎君著 ◉工業護謨化學（菊判上製約一千頁）
- 南條文雄君・マクス・ミューレル君共著／正文君延凌君・岡本著 ◉和英清鮮對照 梵文阿彌陀經（菊判約二五〇頁）
- 文學博士遠藤隆吉君著 ◉東洋哲學大全 上卷 ▲附 各宗より見たる阿彌陀經（菊判約一〇〇〇頁）
- 文學博士加藤玄智君著 ◉宗教學（菊判約九〇〇頁）
- 眞宗本派本願寺勸學島地默雷師校／眞宗大谷派本願寺講師古谷覺壽師閲 ◉浄土眞宗聖典（三六判約八〇〇頁）
- 藥學士越澤渦滿君著 ◉家庭日常 調劑寶鑑 諸藥劑、顔料、香料、飲料製法及家庭理科（四六判約八〇〇頁）
- 村井知至君著 ◉複式英語會話（四六判）
- 博文館編輯局編 ◉日本法令大全（菊判）
- 樋口一葉女史著 ◉一葉全集二冊（菊判）

- 池邊義象君著 ◉日本法制史（菊判）
- 嚴谷小波君著 ◉學校家庭 敎訓お伽噺 前編 西洋の部（菊判）
- 文學博士姉崎嘲風君編 ◉樗牛文選 文は人なり（菊判）
- 前田長太君・前田雪子君共著 ◉新式 中等佛語獨修（四六判）
- 文學博士遠藤隆吉君著 ●女子補習讀本（菊判）
- 博文館編輯局編 ◉袖珍 日本法令提要 上編（四六判）
- 同 局編 ◉同 下編（四六判）
- 東京市編纂 ◉東京市史稿 皇城篇第一（菊判）
- 文學士吉田豐吉君・法學士內田節三君共／勝屋英造君編 ◉世界學說要覽（三六判）
- 田山花袋君著 ◉花袋文話（四六判）
- 文學博士佐々木信綱君著 ◉和歌入門（菊判）
- 山田美妙君著 ◉お伽諷刺 智惠ぶくろ（四六判）
- 伊東祐穀君著 ◉明治四十五年 袖珍 世界年鑑（菊半截）
- 今井柏浦君著 ●口語 新書翰文（菊判）
- 前陸軍通譯山口虎雄君著 ◉新式獨修 露語獨修（四六判）
- 岡本米藏君著 ◉紐育市外の地所（菊判）
- 松村吉則君・林勝助君共著 ◉英和實用 商業會話寶典（三六判）
- 法學士河上肇君著 ◉資本及利子步合（菊判）
- 理學士遠藤又藏君・工學士戶原與四郎君共著 ◉電氣技術便覽（四六判半截）

（八）

花籠

女學世界定期增刊

春の野に、かげらう燃ゆる草の上、胡蝶となりて香に醉はん。天津乙女よ、花の姿よ、青春十八、彩鳥の霓のかんむり、誰が爲にかゝざる。青春十八天雲のかすみの衣、誰が爲にか粧ふ。かざしの花よ、あげ羽の蝶よ、御身は今何をかさゝやき、何をかかたる。戀のほのほか榮耀のあこがれか、精神慾か、物的か、そも〳〵又一路向上の聲なるか、煩々悶々の生活の叫びなるか。花籠に滿載せる金玉の文字、今しばし秘めさせたまへ。

一月十五日發行



誌友倶樂部

▲明けましておめでたう、紅梅さまのお筆、ほんとうになつかしいわ、私「千どり」や「菊の宴」をよんで泣かされたうちの一人ですけれど又毎號つゞいて出る「ともし火の下」を拜見して腹筋のない洒落なお筆に、ほと〳〵チヤームされてしまひました。眞の滑稽は却つて眞面目な方のお筆によつて初めて味はれるものだつて、まつたくね、どし〳〵次をお出しあそばして頂だいな。(君子)

▲私の居る處は、卌界の人種展覽會場と呼ばるゝこゝ、布哇です、故郷を遠く三千里の海路をへだて、送る日も迎ふる日も、年が年中、野山の草木みどりこく、葉は繁り、赤い花、白い花、絶え間なく咲き匂ふて居ます、氣候は冬知らずのしのぎ買い易きです、だけれども、國にそびえしマウナケヤの山頂には、まだらに雪の様な雪も見られます、ほんとにね、目に見るものは美しいが、私は矢ッ張り日本が戀しい、故郷がなつかしい、どうしても私共は日本の新鮮の空氣を吸ひませんではね、生きてる心地は致しませんわ　オゝ有難い大御代に生れし幸ひに女學世界と申す嬉しいものが有りまして、澤山の新鮮のうつくしい空氣をのせて來ます、そが中で、人好き〳〵のよりみどり、私は野衛様大好きで、大急ぎて頭腦に入れて、後とは出したり入れたり、幾度もくり返し〳〵呼吸致します、何卒〳〵野衛様、此の後もます〳〵お振ひ遊ばして、貴女の博いお胸をおわけ下さいませ、末ながら埼玉縣下の姉様方お懐しうございます、賢いお姉君様をお持で、野ぎく様御自愛遊ばせ、誌友の皆様、御榮え遊ばせ、埼玉縣下石槻の皆様御願ひ致します、杉戸と云ふ處はお近いさうですが、其の杉戸の內山醫院のお嬢様でみつ子様と云ふ方は、只今お內でせうか、それとも御在京でせうか、御手數 恐入りますが、お知らせ下さいませ、此の誌上で。(布哇赤い花)

▲私は先日女學世界十一月號を或る人に借りて讀んだ「紫水女」と云はるゝ人の「工場通ひの辛き經驗」を見て、末の「………そして母にゝ甘なつとう五錢入を買つて歸りました……で思はず涙がにじみました、嗚呼實によい心掛けです、須らく女子は斯くありたい、全篇を通じなく共、此一句だけで優しく女子らしき心が現はれて居る、私は男子ですが、彼、記事を讀んで、思はずまれに思ひました、願ふらくは、彼の作の主よ、私の許迄御住居をお知らせ下されたい。(小石川區音羽町一ノ十三小橋濟吉)

▲誌上の花とたとへらるゝ皆々様、さめ〴〵とそんな悲しい事を仰有らずに、いつまでも華やかな筆を御ふるひ遊ばして下さいまし。(和歌山陵花)

▲雪賓りの聲に占領された根室の街は非常に淋しいわ、海はこれからだん〳〵荒くなるし、街路は人通りが少くなるし、しまひには家々の廻りに冬圍がめぐらされて、雪の路上をスケーチングボーイが走つたり、馬橇が飛んだりします、イヤだと云つても、一旦冬だと宣告されたら最後堪りません。街から街へ「氷魚や氷魚よござんすけえ——」なんて越後女の賣聲がする。海は氷るし。凍つた海上を橇が走ります。(根室ぶじ子)

▲「銀河西に流るゝ溫泉宿……」歡様、芳様、お二人のお姿目に見る様ですわ。オホゝゝゝ羨しくつてよ、願はくば私もそんなになりたいものですれ、千代子様、ます〳〵お振ひ遊ばせよ。さらば。(福岡縣築上郡廣澤後藤文子)

▲本年の最終號、ほんとにようございましたけれど、十七の年として本誌をよむのは之れが名殘りかと思つて、なんとなく悲しく淋しい氣が致しました、おなつかしい千代子様のお作、相變らず嬉しく拜見致しました。「銀河聲なく西に流れし溫泉宿の秋の夜のさゝやき……」なんてあたり、ほんとによいのね、私いつも千代子様のは暗誦して了ふ程くり返しますのよ、千代子様、なんて字見たばつかりでも、戀しさなつかしさに、胸が躍る、どうしてこんなにすきな

んだらう我ながらをかしい僕君のことが思はれる、けれどだけれともきつとまうなんですわれ、そりや多い人の中ですから、中にはお氣に召さない方もおあり遊ばすかも知れませんけれど大多數はれ…、瑠璃姫の夜逃げつてどんなのでせう、ほんとに新年號が待遠い、しかしその時分には私は十八にならればならぬと思へば悲しい、アゝさらば千代子樣、御すこやかに樂ある春を御迎へ遊ばせ、皆樣もどうぞ…（さゆり）

▲廣い世にはずゐ分似た生活を送る人も有るものネ、御なつかしい並木英樣、「生活主義と帶の模樣」の君の御作を讀んで、ほゝゑまずに居られませんでした、どうしてマアかうもよく似てゐるのでせう、私も昨年の春ボールやラケットと悲しい別れをして、垣に蟲のすだく頃他の家の人となつたので、未だ學生時代の風が失せず着物を短かく着るので、いつも笑はれます、おまげもすゝめるが嫁、いつも昔のまゝのローマに巾廣のリボンで市内を歩くので、車夫なんかお孃さんどうですかつて云ふから、おかしくつてたまりませんよ、私はまだ經濟學少しも頭にない只昔のテニスにあこがれてゐる、此の後は君にならつて少しは家庭の整理でもしませう、（横山茶花）

▲記者樣、御機嫌宜しうお暮しでございますか、扨私こと癡眼も鈍く、文も拙いので、未だ一度も寄稿したことはございませんが、將來發達の見込がありませんでせうか、私に一片の御同情を賜はらば、何卒思ひ切るがよいとか、否とか此の神聖な倶樂部紙上で答へては下さらないでせうか、私は決して／＼恨みは致しません、只私はそれによつて今後の方針を變ずるか變じないかに決めたいと存じますから…、どうぞ／＼伏してお願ひ申し上げます、こればかりは何故か一人で決心出來ません、私は弱くて意氣地のない女なのでございます。（大津市山本瑠璃）

▲大塚伊勢子樣、あなたは比企郡は小川町の方でゐらつしやいませう、大變ハイカラでゐらつしやいますわれ、福子さんといふお妹さんがおありぢやありませんか、私の千里眼はすつかり的中でせう、いかゞ私も十三の時小川へは行つたことがありますの、なか／＼いゝ所ですわれ、それから攝子さんとやら、何處でゐらつしやいますの、埼玉にも愛讀者はたくさんありますれエ、野菊さんは糸隆子つて仰るとかつて聞きました、大山大將に似てるといふ御眞人には、よそながらお目にかゝつたこともありますが、御本人は知りません、埼玉も大いにふるひませうよ、れえ皆さま、（まがき子）

▲十一月號の「工場通ひの辛き經驗」の文子さま失禮ですが、貴女もしや新淀川十三あたりに御住まひ遊ばす方ぢやなくつて？、あたしも其邊に住む不遇の孤子なのよ、女學世界が何よりの良き友なの、（なにはの都白薔）

▲「女先生の性格」をおかき遊ばした森の花樣つて何處の御方でいらしやいますの先生の御名や御擔任の學科は少しは違つて居ますけれど、中の事がらはそつくり私の學校の先生ですわ、家事科の先生をくさすのは皆さんですけれど、文學史の先生をおほめ遊ばすのは御自分が大もてだつたものだから、（與謝の浦にて友千鳥）

▲記者樣へおたづね致します、私はずつと前から女學世界を唯一の友として居ます田舍者ですが、いつも村の本屋から買つてゐますが、今度直接お送りをして頂かうと存じてゐますが、一ケ年の前金二圓八十錢と郵税一冊の割で十六冊分三十二錢お送り致しましたら宜しいですかおたづね申ます、（但馬の一少女）
それを本館倶樂部小賣係へ宛てゝお送り下さればよろしいのです。

▲十一月號の村雨樣、憧れの夢の時代を過ぎた私どもには、しみ／＼同情に耐えません、讀んだ後に深い印象を殘す樣な確りした作者の苦心もうかゞはれます、こんな眞面目な種のものが多くなるだけ、雜誌の品位が上る樣に思はれます、何卒御自重あそばして、ます／＼おふるひ下さいまし（本郷白露）

▲皆樣は初秋の窓の下に、天女の樣な舞踏を遊ばして、形色は水晶の如く、味はスイートな抄の樣な者を惜げも無く紅唇からおふりおとしになつてる、ダリヤ樣、コスモス樣と申上げる方で居らつしやいませう、げに御羨しい限りで御座います、私は此度初めて誌友倶樂部に入れて頂きますのですが、學生時代を退いた事は、自解してるのですが、今何時代と稱するものか理らぬ程の太平線以下の人間ですから、御笑ひ下さいませ、御おこり遊ばしては折角の事も陽炎、實の處秋香樣の御教へにすがらうと思ひますのよ、萩香樣、御聞き下さいますわネー、何時も御玉稿に眼が充血する程熱中して、私は目的の無い時代を進行してるのですのネー、皆樣歌香樣が

御聞き屆け下さる樣祈つて頂戴な、私も御返禮は屹度する事よ。內藤千代子樣、失禮な事御願申上げますが、どうか私が今後如何に運解致ましたらよろしいかと云ふことを御教へになつて下さいませんか、私は十六歲の秋から今十九の秋まで（今後も）呪ろはれて／＼まゐりましたものです、泣いて／＼必死の努力で正義に正義にと進んだのですが、今は淚も有りません苦しいのよ、咲く花でありながら、日影にまはされたかなしさ、咲かずにしぼむあさがほです（すま子）

▲松平鏡子の君の「女繪師」ほんとにいゝのね、私れ、ほんとに泣きました、あの路子樣いまあ……如何なればあのやうに運命の波にもてあそばれたのでせう、御同情いたします、日々窓邊に身をよせて、幸うすき路子の君のおかへりをまちつゝある京子の君のみすがたが、目の前にうかびますわ、（なごやきよ子）

▲私しはある會社の寫眞部に務めて居る日本人ですが、米國の風ぞく又は景色の寫眞エハガキを澤山持つて居ります、皆さんの內で御入用の方は左記へエハガキでお知らせ下さい、一人一枚づゝ必ず送ります、記者樣御入用なれば御一報下さい、5×7形の米國の學生又、は奥さんや學校、又は圖書館や景色を送つて上げます、返禮は入りませぬ（在北米堀內）

(H. D. Horiuchi R. 601
Deseret News Bldg
Salt Lake Cit, U. S. A. Utah.)

▲私は幼少の頃よりくせ毛で、物心つき初めた時分より實にそれが氣になつてなりませんでした、街などで美しいお髮の方を見た時の羨しさ羨しさ實に泣きたい樣な氣がするのでした、くせ毛直しと言ふ樣なものも隨分使つて見ましたが、何の効もございませんでした、所が知人に藥化學の研究者がございまして、その方がそれに就いていろ／＼と心配してくれまして、到々今度その方のお陰で、他の方と異らぬ髮と成る事が出來ました、誌友の皆々樣の中には、私と同じ樣な思ひに泣いてゐられる方もあるだらうと思ひます、それ等の方々は郵券封入下名へお申込み被下いましたなら、詳しくお知らせ致したいと思ひます。（京都市西堀川三條上ル吉川方つれ子）

▲村雨樣、家庭に持つ私共には、言ひしれぬ同情の淚が禁じられません、五六日前も若い主婦となつてるお友達が集まつてお噂をしました、みな同感を持つて讀んだと申されました、若いお方にはこの悲哀はお解りになりますまいか、世の中の經驗をなめた妻には、誰方にもある悲哀で、そして誰にも話すことの出來ぬ悲でございませう、村さめ樣もしや貴樣は京都の第一出ぢやございませんか、思ひあたる節がございますもの（神田忍草）

▲川上樣の「愛なき良人の妻」を拜見しまして、あまりの事に奥樣のお身の上が偲ばれて、本當にお氣の毒で成りませんでした、私の友にも矢張お醫者樣の奥樣で實にお氣の毒とも可哀想とも申上げ樣のない方が有りますの、夫の君は元陸軍の軍醫をお務め遊ばした方ですが、坊樣と孃樣迄もある奥樣を無理に實家へおやりに成り、無邪氣なお見樣方を見なる人のところへ置去りして、今は朝鮮の某所に在職して居るのです、實に奥樣やお見樣のお身の上が氣の毒では有りませんですか、其の方には血も淚もなきかと、本當に他人の事乍らもおうらめしうございます、（山梨水仙花）

▲誌友の諸姉樣よ、明けましてお目出度う存じます、本年も相變ず御敎導下さいませ、本誌投書家の膳立表を申上げませう、內藤さんのおつ野菊樣のおなます、磯千鳥樣のおさしみ、松平さんのお吸物、オホヽ、皆樣お口に召しまして、つゞいて二の膳は只今お臺所で（花吹雪する巴港にて百合子）

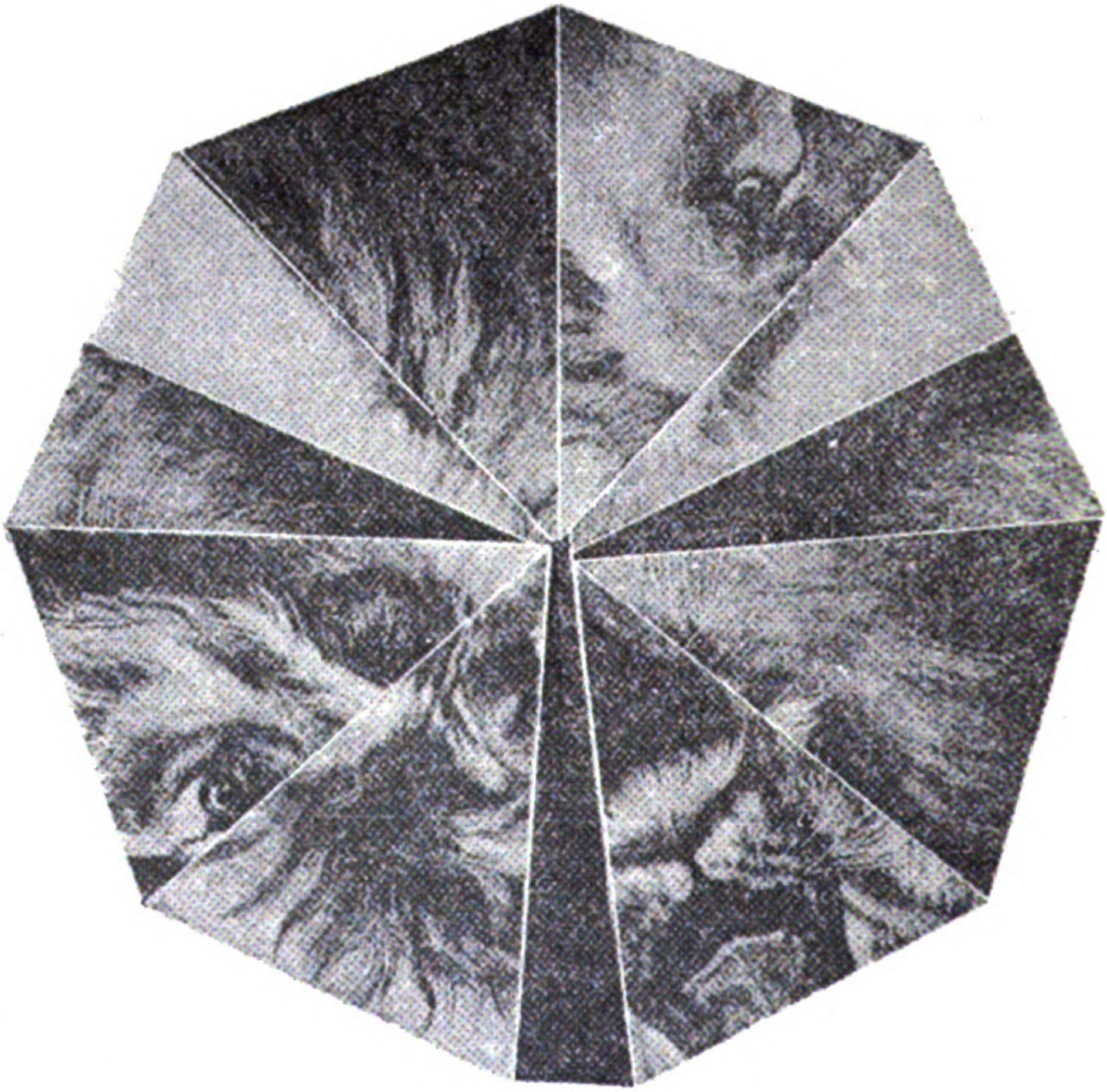
新年用の繪葉書

年が改まると共に、いろ／＼珍しい繪葉書が出來ましたが、大家眞筆、勅題繪葉書、同新年繪葉書、閨秀畫家勅題繪葉書、女流名畫新年繪葉書なども　其の內のよく出來てゐる品々です、川合玉堂、跡見花蹊、尾形月耕、池田蕉園、河崎蘭香、川端玉章等大家四五十名の人々が筆をとり、何れも優美な書振りです、發行所は本鄕區妻戀坂便利堂、其他同所から勅題と松竹梅、啞生の新年勅題繪葉書といふやうなものも出ました。定價は大抵一枚二三錢位、

應募◎和歌◎俳句

は一月十五發行の增刊『花籠』紙上に揭載すべし

◁懸賞くみ繪▷



◎この繪紙を白線から切り取り十一片となし、内一片を除いて十片で組み合せれば、ひとつの顔になります。

◎組み合せられた繪をそのまゝ半紙にはりつけて御送り下さい。

◎用紙には住所姓名の外何も書いてはいけません。

◎御送りになるときは、繪紙を狀袋に入れて開き封とすれば郵税二錢で濟みます。

◎名宛は（東京日本橋區本町三丁目博文館女學世界懸賞くみ繪係）とお書き下さい。

◎正當に組み合せられた方には二十名限り抽籤により賞品（圖書切符一圓宛）を差上げます。

◎〆切期日は一月十五日限り、發表は三月一日發行本誌第三號で致します。

募集（一月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

（報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈）

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
〃四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●書目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十四年十二月十八日印刷納本　第拾貳卷第壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

博文館出版

圖書拔萃目錄

（目次）

◎十八大雜誌…………二

◎婦人書類…………四

一 家政及家事經濟
二 禮式
三 料理
四 手藝
五 茶の湯活花及住居
六 家庭衛生
七 修身及立志
八 作文習字及習畫
九 家庭雜書
十 定期刊行全書
十一 全部完成全書

◎文學書類…………一〇

國文 和歌
新體詩及唱歌 小說

◎歷史書類…………一八

◎傳記書類…………二〇

◎地理書類…………二三

新年御進物用恰好の圖書種々取揃有之候

御註文規定摘要

△御注文は前金たるべし、又郵劵代用は必ず一割增の事

△御送金は振替貯金最も御便利に候、金高壹圓以下は手數料壹錢相添へ共に御拂込被下度候

△書狀宛名は『東京日本橋區本町三丁目博文館小賣係』の事

△一時に金五圓以上の御注文には正價一割引の館友劵を呈す

製本符號

● 洋裝並製
◉ 洋裝上製
△（白抜） 和裝並製
◬ 和裝上製
▲ 菊判（縱七寸五分横五寸）
▲ 四六判（縱六寸横四寸二分）
▲ 小判（菊判及四六判の半截）

△**御進物用圖書切手** 優美なる函入とし三百五十餘頁の本館總目錄を添へ申候金高は壹圓以上御隨意に調進可仕候、地方は送料雜費拾錢申受け候（圖書の御引替は全國賣捌店共通に有之候）

△**圖書陳列所** 本館發行書は勿論、特約發賣品をも總て取揃へ陳列致置候間、御來覽被下度候

△**圖書總目錄** 總目錄御入用の方は往復葉書を以て御申込被下候へば御送り可申候



明治四
博文館發行

太陽

毎月一回一日發行▲外に増刊年四回（定價同一）▲大判（四六判二倍大）本文二百五十六頁▲原色寫眞版一枚▲二色刷寫眞版一枚▲光澤紙寫眞版十二頁

正價（◎壹冊參拾錢 ▲郵税參錢）前金（郵税共）●四册金壹圓廿七錢●八册金貳圓四拾四錢●拾六册金四圓六拾八錢

日曜畫報

毎週一回日曜日發行▲太陽二倍判（四六判四倍大）總紙數二十八頁▲石版彩色刷表紙▲本文中寫眞版及彩色刷繪畫數多挿入

正價（◎壹冊拾錢 ▲郵税壹錢）前金（郵税共）●十册壹圓●二十册壹圓九拾錢●三十册貳圓七拾六錢●五十册四圓四拾錢

實業倶樂部

毎月一回一日發行▲外増刊年二回▲菊判本文百六十頁▲光澤紙寫眞版四頁▲普通寫眞版二枚

正價（◎壹冊拾五錢 ▲郵税壹錢半）前金（郵税共）●四册金六拾三錢●七册金壹圓〇七錢●十四册金貳圓〇五錢

實業少年

毎月一回一日發行▲外増刊年二回▲太陽判（四六判二倍大）本文七十二頁▲光澤紙寫眞版四頁

正價（◎壹冊拾錢 ▲郵税壹錢）前金（郵税共）●四册金四拾貳錢●七册金七拾錢●十四册金壹圓參拾六錢

農業世界

毎月一回一日發行▲外増刊年四回▲菊判本文二百四十頁▲原色寫眞版一枚▲石版彩色畫一枚▲光澤寫眞版四頁

正價（◎壹冊貳拾錢 ▲郵税貳錢）前金（郵税共）●四册金八拾三錢●八册壹圓六拾壹錢●十六册金參圓拾貳錢

文藝倶樂部

毎月一回一日發行▲外増刊年四回▲菊判本文三百二十頁▲木版錦繪一枚▲原色寫眞版一枚▲光澤寫眞版二色刷二頁▲同光澤紙刷八頁▲普通寫眞四枚

正價（◎壹冊廿五錢 ▲郵税貳錢半）前金（郵税共）●四册金壹圓〇五錢●八册金貳圓●十六册金參圓九拾錢

冒險世界

毎月一回一日發行▲外増刊年四回▲太陽判（四六判二倍大）本文百二十八頁▲内彩色刷繪畫數多入▲二倍大石版彩色口繪一枚▲寫眞版口繪四頁

正價（◎壹冊拾五錢 ▲郵税壹錢半）前金（郵税共）●四册金六拾三錢●八册金壹圓貳拾錢●十六册金貳圓參拾四錢

女學世界

毎月一回一日發行▲外増刊年四回▲菊判本文二百八頁▲原色寫眞版一枚▲石版極彩色畫二枚▲習畫帖二頁▲光澤紙寫眞版八頁

正價（◎壹冊貳拾錢 ▲郵税貳錢）前金（郵税共）●四册金八拾參錢●八册金壹圓六拾壹錢●十六册金參圓拾貳錢

中學世界

毎月一回一日發行▲外増刊年四回▲菊判本文二百八頁▲原色寫眞版一枚▲水彩畫二枚▲色鉛筆畫一枚▲光澤寫眞版二頁▲普通寫眞版二枚

正價（◎壹冊貳拾錢 ▲郵税貳錢）前金（郵税共）●四册金八拾參錢●八册金壹圓六拾壹錢●拾六册金參圓拾貳錢

婦人書類

【家政及家事經濟】

書名	著者	體裁	正價（圓拾錢）	郵稅（拾錢）
家政學	下田歌子女史著	全二册菊判四三〇頁	各 三〇	六
泰西所見家庭教育	同女史著	菊判二五〇頁	三五	八
家政案内	岸上操君著	菊判二五六頁	二五	四
新撰家事問答	近藤正一君著	菊半截判二六六頁	二〇	四
家事要訣	下田歌子女史	菊判二八二頁	三五	八
名流百家家庭の模範	中村鈴子女史編	四六判四二四頁	三八	六
新家庭訓	三輪田眞佐子女史著	菊判三二〇頁	四五	八
母と子	原胤照君著	全二册 菊判四三〇頁	前編 五五 後編 四五	八 六
兒童訓話母の智識	木村小舟君著	菊判約三百頁	四五	八
最新家計簿記	曾我部龍一君	菊判一三四頁	二五	六

【禮式】

書名	著者	體裁	正價（圓拾錢）	郵稅（拾錢）
增訂日本女禮式大全	坪谷善四郎君著	菊判五九二頁	九〇	三
▲蒔繪函入和裝美本			一、二〇	一六
新撰日用女禮式	日本婦人正風會々長 中島義式君著	菊判一八六頁	二五	六
女子禮法教科書	同君著	菊判二六四頁	三八	六
新撰小學女禮式	同君著	菊判二二〇頁	二五	六
禮式と作法	高等女子師範學校教授 佐方鎭子女史著	菊判三三八頁	四五	八
女子普通禮式	下田歌子女史著	菊判二六二頁	三五	八
和洋禮式	大橋乙羽君著	菊判二四八頁	二五	六
新撰女子作法書	中島義式君著	菊判一四〇頁	二五	六
新式化粧法	藤波芙容君著	菊判三〇二頁	四五	八
婚姻のかゞみ	河崎辭雨君著	菊判三二八頁	四五	八

日本固有の女禮の美性と泰西普通の禮式の外に女子の知るべき禮式技藝作文作歌其他一切の事を網羅し記事の豐富と文章の流麗に加ふるに製本の美なる世に比類なし（日本女禮式大全）

書名	著者	體裁	正價（圓拾錢）	郵稅（拾錢）
巴里婦人の交際振奥樣の顧問	前田雪子女史著	三六判四〇八頁	四八	六
交際と談話	福田琴月君編	菊判二八〇頁	四五	八
西洋男女交際法	宮本桂仙君著	菊半截判二三六頁	二五	四

【料理】

書名	著者	體裁	正價（圓拾錢）	郵稅（拾錢）
四季毎日三食料理法	治庖會本部教場主任 安西古滿子女史著	菊判千餘頁	一册 一五〇	一册 六
▲全四册 春、夏、秋、冬に分册				
惣菜料理	赤堀吉松君 赤堀峯吉君 赤堀菊子君共著	菊判二八一頁	四五	八
四季料理	大日本割烹學會長 石井泰次郎君著	菊判三一〇頁	四五	八
年中行事家庭儀式料理	笹木幸子女史著	菊判三六八頁	一、〇〇	一三
家庭料理法	龜井まき子女史著	菊判二三〇頁	三五	八

著者四星霜の苦心を以て衞生と經濟とに留意し一年三百六十五日毎日三度の豫定献立表をつくられ且つ其料理法は平易の文字を以て反覆叮嚀に記述せられたるものなれば親しく先生に就きて敎を受くるに異ならず何人と雖も容易に會得することを得、實に各家庭はもとより學校及び軍隊にても必要缺くべからざる良書なり（四季毎日三食料理法）

著者	書名	體裁	正價	郵稅
下田歌子女史著	料理手引草	(菊判三三〇頁)	三五	八
藤本藤蔭君著	實用料理法	(菊判二八四頁)	二五	六
龜井まき子女史	洋食の調理	(菊判約三百頁)	四五	八
手塚かね子女史	家庭之友西洋料理法	(菊判五〇〇頁)	一、〇〇	八
佐々木孝吉君著	西洋料理法	(菊判二五四頁)	二五	六
阪本隆哉君著	衞生食物調理法	(菊判一五四頁)	三〇	六
同君著	病者の食餌	(四六判長形一五六頁)	二〇	四
八百善主人著	八百善料理通	(全二冊中本和紙刷)	三八	六
小田原屋主人編	漬物早指南	(中本和紙刷)	一三	四
醍醐山人編	料理早指南	(全二冊中本和紙刷)	二五	六
風羅山人編	料理いろは庖丁	(全二冊中本和紙刷)	一八	四
東京治庖會講師 龜井まき子女史著	和洋菓子製法	(菊判三〇〇頁)	四五	八
報知新聞家庭記者 天野誠齋君著	家庭寶典臺所改良	(菊判二四〇頁)	四〇	八

衞生的臺所の改良は實に清潔と便利と採光とにあり左れど物には順序方法あり『如何にして臺所を改良すべきか』に付て本書は懇切に說明したり

【手藝】

著者	書名	體裁	正價 圓拾錢	郵稅 拾錢
下田歌子女史著	女子手藝要訣	(菊判二六二頁)	三五	八
石崎篁園君著	衣服の調整	(菊判二八二頁)	四五	八
女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著	裁縫指南	(菊判三〇〇頁)	四五	八
吉田調子女史著	裁縫と編物	(菊判二六二頁)	二五	六
飯田呉服店裁縫部小岩井主任 鹽田副主任合著	實用裁縫全書	(菊判二六六頁)	五〇	八
三木とみ子女史著	編物指南	(菊判三〇二頁)	四五	八
磯村大次郎君著	刺繡術指南	(菊判三〇四頁)	四五	八
山田興松君著	摘み細工指南	(菊判二八〇頁)	四五	八
東京女子美術學校卒業 鈴木松子女史著	家庭實用新式美術造花	(菊判二三〇頁)	五五	八
刺繡術專門磯村大次郎君著	實用刺繡術	(菊判一二四頁)	二五	四
山田興松君著	實用造花術指南	(菊判一〇〇頁)	二五	四
森田洪君、鈴木古拙君 牧野等君 共著	應用家庭美術	(四六判三四〇頁)	四〇	六

【茶の湯、活花及住居】

著者	書名	體裁	正價 圓拾錢	郵稅 拾錢
水原翠香女史著	茶道と香道	(菊判三六四頁)	四五	八
岡崎淵沖君著	各傳比較點茶活法	(全四冊菊判六〇〇頁)	二、五〇	小包料 一六
江刺家協一君著	茶の湯大全	(四六判五〇八頁)	六〇	八
博文館編輯局編纂	茶の湯と生花	(菊判二五八頁)	二五	六
青山御流會頭琴松園文雅君 跡見女學校講師松幸齋理參君 共著	諸流生花指南	(菊判三〇六頁)	四五	八
吐月齋惠一鳥君編纂	挿花盆石四時の詠	(全三冊菊判一四〇頁)	五〇	六
秀貫齋月一珣編纂	挿花盆石正風花鏡	(全三冊菊判二〇二枚)	五〇	六
大露庵河村一洗君選	新撰活花圖式	(全二冊美濃紙木版刷)	四〇	六
榮雲齋先生編	挿花大樂抄圖會	(全二冊美濃紙木版刷)	四〇	六

○盆山百景圖　順石軒翁編（全四冊菊判木版刷）　一,〇〇　小包料 三

○室内装飾法　近藤正一君著（菊判約三〇〇頁）　四五　八

○家屋と庭園　内山幻堂君著（菊判三〇〇頁）　四五　八

○娛樂園藝 花と庭　北村東紅君著（四六判二八五頁）　六五　六

正價 圓拾錢　郵税 拾錢

【家庭衛生】

○新撰家庭衛生　醫學士石原喜久太郎君編（菊判五八〇頁）　一,七〇　三

石原醫學士は醫科大學衛生學教室に在りて多年斯學の研究に從事し其薀蓄せる所を披瀝して本書を著はす、本書前編『緒論之部』は衛生に關する汎論にして、後編『各論之部』は●住居の衛生●衣服と飲食物●季候と衛生●旅行と轉地●子供●姙婦と産婦●病の七章より成り、衛生上の諸題目を、凡て是等各項内に網羅して細大洩さず、之を家庭に備ふれば一家衛生上無二の良指針たるべく、兼ねて醫師醫學生の良友、諸學校衛生教科の參考書たるべし。

○新撰衛生生理問答　醫學士石原喜久太郎君閲 首藤環君編（菊半截形二〇二頁）　三〇　四

○婦人の生理と衛生　青山女學院講師牧野清子女史著（菊判三一二頁）　四五　八

●家庭衛生訓　千葉鷗城君 鹿島櫻巷君共編（菊半截四〇八頁）　三五　六

●女子衛生學　海軍大軍醫隱岐敬治郎君譯（菊半截三二〇頁）　三〇　四

○衛生と衣食住　福田琴月君著（菊判三一四頁）　四五　八

○育兒の務　醫學士田村貞策君 朝夷孤舟君共著（菊判三三四頁）　四五　八

●育兒と衛生　西田敬止君著（菊判二四四頁）　三五　六

●母親の心得　下田歌子女史著（菊判二六八頁）　三五　六

○はゝのつとめ　醫學博士三島通良君著（菊判三一二頁）　七五　一〇

○四季應用 通俗療治法 附 養生秘訣　女學世界衛生顧問糸左近君著（四六判二九二頁）　六〇　六

○簡易療治法　新潟縣高田高等女學校教諭藤井靜子女史著（菊判三五二頁）　四五　八

○通俗治療救急法　藥學得業士金澤殿君著（菊半截三一〇頁）　三五　四

●結核菌物語　醫學士廣澤汀波君著（四六判一三二頁）　三〇　四

○衛生指針 姙産婦の務　醫學士田村貞策君 朝夷孤舟君共譯（菊判四二八頁）　七五　八

●復習問答 簡明産婆學　醫學士伊庭秀榮君著（四六判二二〇頁）　五〇　六

●實習産婆學　産科專門醫稲生鑑太郎君著（全二冊菊判二六八頁）　▲上卷七拾錢　下卷八拾錢　上卷通常產 下卷異常產 郵税各八錢

正價 圓拾錢　郵税 拾錢

【修身及立志】

○婦人の修養　鳩山春子女史著（菊判四五〇頁）　一,二〇　三

○婦人日常座右銘　高須梅溪君著（菊判三〇〇頁）　四五　八

○女德の養成　前田長太君著（菊判三三六頁）　四五　八

○子女の教養　棚橋絢子女史著（菊判二九三頁）　四五　八

●女子の修養　女子高等師範學校教授下田次郎君著（菊半截二五〇頁）　二五　四

●女氣質と修養　豐岡茂夫君著（菊判半截二六〇頁）　二五　四

●女學生訓　文學士大町桂月君著（菊半截二五六頁）　二五　四

●女學生の栞　松原岩五郎君著（菊判三三〇頁）　三五　六

○女訓評釋　子河岸櫻所君評釋（菊判四一〇頁）　六〇　八

○婦人美譚　松浦政泰君著（菊判五六二頁）　上卷 一,五〇　三

著者	書名	體裁	正價	郵稅
千河岸櫻所君編	日本女子立志編	全二冊菊判七三六頁	各六〇	各八
安藤紫陽君箕輪撫鼠君共編	名士の父母	四六判一五二頁	二五	四
佛國モリスブロック君著 前田越嶺君譯述	偉人の母	菊判一九八頁	三八	六
前田雪子女史著	偉人の妻	菊判三〇〇頁	四五	八
高須梅溪君著	金言對照 東西名婦の面影	菊判三〇〇頁	四五	八
中央新聞記者田村江東君著	活動せる 實業界の婦人	菊判二四六頁	三八	六
濱本義顯君著	婦女教育 明治姫鏡	半紙刷木版一六五頁	六〇	八
讀賣新聞記者關如來君著	明治の令孃	四六判一八二頁	三〇	六
近藤正一君著	女子職業案内	三六判四六六頁	四五	六
瀬川頼太郎君著	教育資料 子供の聲	四六判三八七頁	五五	六
加藤忠三郎君著	學校家庭 兒童講話資料	四六判二九六頁	三五	六
河岡潮風君著	東都遊學 學校評判記	四六判三八〇頁	四五	六
今井翠巖君著	最近調査 女子東京遊學案内	四六判六五〇頁	五八	八

【作文、習字及習畫】　正價 圓拾錢　郵稅 拾錢

著者	書名	體裁	正價	郵稅
戸野みちゑ女史近藤正一君共著	實用 女子作文全書	菊判五二二頁	六五	三
下田歌子女史著	三體女子消息文	菊判四八二頁	一、〇〇	三
下田歌子女史著	女子作文の栞	菊判二三六頁	三五	八
文學博士佐々木信綱君著	女子消息 文のしをり	菊判三〇〇頁	五〇	八
樋口一葉女史著	通俗書翰文	菊判二四六頁	二五	六
近藤正一君著	古今才媛文集	四六判三一二頁	三五	六
東京女學館講師西田敬止君編	女子消息文範	四六判三一〇頁	三五	六
井田秀生君著	書道手引	菊判三〇二頁	四五	八
下田歌子女史著	女子書翰文	菊判二二八頁	三五	八
佐々木信綱君渥美雅子女史共著	新撰女子用文	菊判二二六頁	三〇	六
下田歌子女史著 阪正臣君書	女子用文習字帖	全二冊半紙刷一四四枚	八〇	八
大和田建樹君著 小野鵞堂君書	明治女子書翰文	半紙刷一〇〇枚	四〇	四
多田親愛君著	假名習字帖 古今和歌集序	綸子表紙美本（▲菊判特製 正價金壹圓貳拾錢 郵稅六錢）	八〇	四
橋千蔭君著	高等女子習字帖 烏丸帖	美濃判二四枚	三五	四
同君著	假名習字帖 新百人一首	美濃判五一枚	三〇	四
多田親愛君書	短册習字帖		一、〇〇	六
新岡久頼君著	いろは三體帖	和紙刷折本	四〇	四
河村墨稼君書	初學手紙の文	全二冊菊判一〇〇枚	三五	六
中村不折君著並畫	花卉山水人物 水彩繪手本	全四輯四六判二倍（第三輯迄既刊）（附錄水彩畫手引）	各五五	各四
三宅克己君著並畫	水彩畫指南	菊判	六五	八
丸山晩霞君著	水彩畫法 女性と趣味	菊判四三〇頁	二、〇〇	八
中村不折君著	鉛筆畫法	四六判一一七頁	六五	八
橋元春郊君譯	繪畫講話	四六判三八〇頁	六五	八

◉書法自在（菊判二五〇頁） 野口珂北君著 小藪女史書 三五 六
●水彩畫手引（四六判二七〇頁） 三宅克己君著 七五 六
▲總クロース上製 正價九拾錢 郵稅八錢
△古今名家習畫帳（美濃判和裝木版彩色刷二冊） 博文館編輯局編 一,〇〇 六
△初心毛筆畫譜（全五册和紙彩色刷） 毛筆畫研究會編 一册 三 二
▲山水之部 ▲花鳥之部 ▲獸類之部 ▲人類及魚之部 ▲雜之部

【家庭雜書】 正價 圓 拾錢 郵稅 拾錢

◉實用家庭百科全書（菊判一二七二頁） 文學士小原要逸君外四君合著 三,六〇 一六
◉實驗問答日本家庭節用（三六判一二七四頁） 報知新聞家庭記者 中村木公君編 一,三〇 八
◉明治少女節用（三六判六四二頁） 少女世界編輯部編 八五 八
●新編家庭の科學（菊判四四六頁） 農學博士稻垣乙丙君校閱 工藤齊君著 八五 八
△日用家庭料理（菊判三〇〇頁） 一戸清方君著 四五 八
△家庭の趣味（菊判三〇〇頁） 文學士大森兜山君著 四五 八

△洋樂手引（菊判約三百頁） 前田九八君著 四五 八
◉俗曲評釋第一編 江戸長唄（四六判二七四頁） 佐々醒雪君著 五五 六
◉俗曲評釋第二編 箏唄（四六判二九五頁） 同君著 五五 六
●家庭に於ける吉凶百談（四六判三六八頁） 奥村繁次郎君著 四〇 六
●現代女氣質（四六判三八〇頁） 櫻井鷗村君著 三五 六
●少女四季物語（四六判二六八頁） 竹貫佳水君著 二八 六
●名媛と筆蹟（四六判三〇〇頁） 中村秋人君著 四〇 六
◉婦人國（三六判三〇一頁） 桐生悠々君譯 四五 六
●衣服と流行（菊判二三六頁） 博文館編輯局編纂 二五 六
◉明治四十五年家庭日記（四六判四八〇頁） 同局編纂 家事重要記事並最新賭規則附付 二八 八
●男のすく女 女のすく男 兩性觀（三六判二六〇頁） 水田南陽君譯述 三〇 四
●女性觀 附通人漫語（菊半截一六六頁） 伊達奥州君著 二〇 二
●現代生活裏面觀察 呪はれたる女（菊判二〇二頁） 元祿姉さん著 三五 六

【定期刊行全書】

家庭百科全書 全部五十册

菊判和裝美本毎編二百頁以上

正價 一册金四拾五錢 拾册金四圓貳拾錢 廿五册金拾圓 五拾册金拾九圓 ▲郵稅一册金八錢宛

【一編】新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
【二編】四季料理 石井泰次郎君著
【三編】裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
【四編】和洋菓子製法 龜井まき子女史著
【五編】茶道と香道 水原翠香女史著
【六編】諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理參君 著
【七編】育兒の務 醫學士田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
【八編】簡易治療法 藤井靜子女史著
【九編】禮式と作法 佐方鎭子女史著
【十編】惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峯吉君 赤堀菊子女史 共著
【十一編】編物指南 三木とみ子女史著
【十二編】婦人の生理と衛生 牧野清子女史著
【十三編】教育お伽噺 木村小舟君著
【十四編】女德の養成 前田長太君著
【十五編】家屋と庭園 内山正如君著
【十六編】魚鳥家畜の飼養 鹿野直司君著

二編｛●腸窒扶斯に就て（宮本博士）●眼の衛生（桐淵博士）●婦人の衛生一斑（木下博士）●眼科衛生談（井上博士）

三編｛●室内空氣に就て（緒方博士）●眼科衛生談　井上博士）●小兒科一斑（三輪博士）●小兒の衛生に就て（弘田博士）

四編｛●腸胃の話（井上博士）●耳の攝生（岡田博士）●乳兒の衛生に就て（緒方博士）●狐憑とヒステリーとの關係（吳博士）●眼鏡の話（井上博士）

五編｛●創傷の話（三輪博士）●神經の攝生に就て（吳博士）●ジフテリアの話（宮本學士）●皮膚の衛生に就て（岡村博士）

六編｛●ペストの話（宮本博士）●身心の養生（大澤博士）●家庭に於て注意すべき二三の學校衛生（三島博士）●產時の創傷染（木下博士）

七編｛●黴毒に關する家庭の注意（高井博士）●家庭と黴菌（遠山博士）●妊娠中の攝生（緒方博士）●便秘の話（井上博士）

八編｛●婦人姙孕力の話　第一（伊庭學士）●肝臟の話（木村博士）●分娩時の攝生（緒方博士）●色盲の話（井上博士）●小兒の感冒の話（瀨川博士）

九編｛●肺癆の話（井上博士）●婦人姙孕力の話、第二（伊庭學士）●小兒の蟲及疳の話（瀨川博士）●產後の攝生（緒方博士）

十編｛●飮酒血族の退化（林博士）不姙症の話（伊庭學士）●生殖の話（大澤博士）●消毒法の大意、一（遠山博士）

十一編｛●癲狂村の話（吳博士）●最適當なる日本婦人の結婚年齡（楠田氏）●消毒法大意（遠山博士）葡萄酒の話（林博士）

十二編｛●聲啞の話（賀古博士）●癲狂村の話（下）（吳博士）●慢性鉛中毒の話（林學士）●口內衛生に就て（石原學士）

文學書類

【國文】

	書名	正價 円 拾錢	郵稅 拾錢
⊙	落合直文君著【文部省檢定濟】中等教育 日本文典（四六判八八頁）	六〇	八
⊙	和田萬吉君著 日本文典講義（菊判四〇〇頁）	一・〇〇	八
△	下田歌子女史著 女子普通文典（菊判二四六頁）	三五	八
●	哲學館大學講師三石賤夫君著 學生參考叢書 國文典（菊半截判一六三頁）	一三	二
●	文學士鈴木暢幸君著 日本口語文典（菊判三一六頁）	四〇 特製 五五	八 八
⊙	落合直文君著 中等教育 文法教科書（菊判一二六頁）	四五	六
⊙	文學博士上田萬年君著 國語學叢話（菊判二三〇頁）	四〇	六
●	文學士小倉博君著 學生參考叢書 國文熟語詳解（菊半截判一八二頁）	一三	二
●	內藤耻叟君校閱大宮宗司君校註 校註神皇正統記（菊判二五八頁）	二五	六
●	中村秋香君校訂 吉野拾遺詳解（菊判一五二頁）	二五	四

	書名	正價	郵稅
●	大和田建樹君刪定【文部省檢定濟】中等教育 刪定徒然草（菊判一一二頁）	一八	四
●	文學博士佐々木信綱君校註 校註徒然草（菊判二〇六頁）	二五	四
●	同君校註 校註竹取物語（菊判七六頁）	一三	二
●	同君校註 校註土佐日記（菊判五〇頁）	一〇	二
●	同君校註 校註方丈記（菊判六〇頁）	八	二
●	同君校註 校註伊勢物語（菊判一〇六頁）	一三	四
●	同君校註 校註更科日記（菊判九四頁）	一三	四

● 萩野由之君 落合直文君 池邊義象君 校註 日本文學全書（全部廿四冊四六判）

正價｛●一冊金參拾錢●五册以上八分引 ●十冊以上壹割貳分引▲郵稅一冊六錢

●第一編
○竹取物語
○伊勢物語
○住吉物語
○徒然草
○紫式部日記
○土佐日記

●第二編

●第三編
○枕草紙
○更科日記
○方丈記

○十六夜日記
○落窪物語
○辨內侍日記

●第四編
○とりかへばや物語

和歌書類

○堤中納言物語
○四季物語
●第五編
○中務内侍日記
○蜻蛉日記
○讃岐典侍日記
○和泉式部日記
●第六編
○濱松中納言物語
○大和物語
○唐物語
●第七編
○宇治拾遺物語
○多武峯少將物語
●自第八編至第十二編
○源氏物語　五冊に分載
●自第十三編至第十五編
○榮花物語　上、中、下三册

●自第十六編至第十八編
●太平記　上、中、下三册
●第十九編
○保元物語
○平治物語
○秋夜長物語
○鴉鷺合戰物語
●第二十編
○平家物語
●第廿一編
○古今著聞集
●第廿二編
○公事根源
○十訓抄
●第廿三編
○水鏡
○大鏡
●第廿四編
○増鏡

北村季吟翁著　枕草子春曙抄（全七册菊判和紙木版）　一、八〇　三

大和田建樹君選　古文讀本（全六册菊判七五六頁）　一、六〇　各四
▲正價一ヨリ五迄各貳拾五錢▲六卷參拾五錢

國學院編纂　名文評釋（菊判四五二頁）　五〇　一〇

落合直文君編　中等教育國文軌範（四六判三八〇頁）　二五　六

鷹野勇雄君著　新撰國文問答（菊半截二六六頁）　二〇　四

大和田建樹君著　日本小辭典（四六判半截形一一八〇頁）　七五　八

大宮宗司君編纂　日本辭林（四六判半截形七二〇頁）　三〇　特製四〇　六　八

佐々木弘綱君岡野伊平君共著　假名遣枕詞字典（四六判）　三〇　六

棚橋淳君著　日本いろは新字典（銅刻四六判四截二二〇頁）　三〇　四

大町文學士、久保文學士、大田淳軒君共著　新式いろは引節用辭典（三六判一一三〇〇頁）　二、〇〇　三

内山正如君著　新撰日本節用（四六判銅刻五二〇頁）　一、〇〇　八
▲總皮特製正價貳圓五拾錢小包料拾貳錢

博文館編輯局編　眞草いろは早引節用（菊半截形銅刻）　二五　四

【和歌】　正價　円　拾錢　郵税　拾錢

文學博士佐々木信綱君著　日本歌學史（菊判六五〇頁）　二、五〇　三

大和田建樹君著　歌まなび（四六判一〇三八頁）　二、五〇　三

同君著　歌の手引（菊判三二四頁）　四五　八

文學博士佐々木信綱君著　歌學論叢（四六判五六八頁）　一、〇〇　八

同君著　増訂詠歌自在（四六判七八〇頁）　一、〇〇　八

落合直文君著　新撰歌典（四六判六一〇頁）　四〇　八

下田歌子女史著　詠歌の栞（菊判二一〇頁）　三五　八

文學博士佐々木信綱君著　詠歌辭典（菊判一三七六頁）　七五　八

宮澤春文君著　作歌自在（菊判二四〇頁）　二五　六

窪田空穗君著　短歌作法（四六判三〇五頁）　三五　六

有賀長伯君著　和歌八重垣（全七册木版刷和紙菊半截判）　八〇　八

文學博士佐々木信綱君著　日本歌選上古の巻（四六判三二四頁）　八〇　六

同君撰　袖珍和歌文庫一編　定家歌集（菊半截二〇二頁）　三八　四

故佐々木信綱君著佐々木信綱君校　和歌世々のあと（四六判一四四頁）　二八　四

佐々木信綱君校註　賀茂眞淵翁全集（全二册四六判一〇〇〇頁）　三五　八

同君校註　香川景樹翁全集（全二册四六判一〇一三頁）　三五　八

同君校註　小澤蘆庵翁全集（四六判五二二頁）　三五　八

佐々木信綱君校註　近世名家々集（全二册四六判一〇七二頁）各 三五　八
同　君校註　明治名家々集（全二册四六判一一五四頁）各 三五　八
仲田顯忠翁編　類題武藏野集（全四册四六判二三〇枚）六〇　八
黒澤翁満翁編　類題採風集（全四册四六判二〇〇枚）五〇　八
同　翁編　むぐら集（全三册菊判木版刷）一、〇〇　八
文學士湯巣盛廣君著　新古今和歌集遠鏡（四六判六六四頁）一、二〇　八
契沖阿闍梨證註賀茂眞淵翁後按　平豐流君増註　後撰和歌集標註（全四册大本和紙刷）八〇　八
佐々木信綱君註　萬葉集（全三册四六判一二二〇頁）三五　六
同　君校註　後拾遺和歌集、相模家集　經信卿母集、高陽院歌合（四六判三九二頁）三五　六
同　君校註　校註明倫歌集（菊判二二二頁）二五　四
同　君校註　百人一首講義（四六判三〇〇頁）二〇　四
同　君著　おもひ草（四六判一五二頁）五〇　六
同　君編纂　竹柏園集第一編（菊半截五五八頁）三五　六

子爵黒田清綱君　村松今朝太郎君編　税所敦子女史共撰　庭の摘草 附德歌記（四六判二六二頁）三五　六
西村眞次君著　和歌と俳句（菊半截三五〇頁）四五　四
〔新體詩及唱歌〕　正價 円拾錢　郵税 拾
河井醉茗君著　新體詩作法（四六判三二二頁）三五　七
中郁秋香君著　新體詩歌自在（四六判八三四頁）一、〇〇　八
大和田建樹君著　新體詩學　菊半截判二二四頁　一五　四
大和田建樹君著　散文韻文　野菊　菊半截判四九〇頁　四五　六
鹽井雨江君　大町桂月君（武島羽衣君合著菊半截判四二二頁）美文韻文　花紅葉　三〇　六
文學士大町桂月君著　美文韻文　黄菊白菊（菊半截判四〇二頁）二五　六
文學士土井晩翠君著　天地有情（菊半截判二三〇頁）二五　四
與謝野鐵幹君作　詩集　檞の葉（菊半截三三〇頁）四〇　六
文學士武島羽衣君著　美文韻文　霓裳微吟（菊半截判三六八頁）三五　六
文學士鹽井雨江君著　美文韻文　暗香疎影（菊半截判三五四頁）二五　六

佐々木信綱君印東昌綱君合著　美文韻文　礒馴松（菊半截判四三頁）二八　六
田山花袋君著　美文作法（四六判三〇〇頁）三五　六
大和田建樹君著　散文韻文　雪月花（菊半截判六二六頁）三五　六
大和田建樹君著　散文韻文　深山櫻（菊半截判七〇二頁）四〇　八
同　君著　散文韻文　藻鹽木（菊半截判五九〇頁）二五　六
巖谷小波君作　東儀鐵笛君作曲（菊判）　お伽唱歌 上下 各 一五　二
樂書刊行協會編纂〔文部省檢定濟〕（菊判）　日本唱歌集　二〇　二
文學士鹽井雨江君作歌　白井規矩郎君作曲　女子軍歌（菊判美本）一〇　二
木村小舟君作歌　田村虎藏君作曲　家庭唱歌　菊半截形洋裝　全部十二册　一册四十頁
正價　一册金貳錢五厘　十二册金廿七錢　郵税三册迄貳錢
〔一〕桃太郎　〔二〕舌切雀　〔三〕松山鏡　〔四〕花咲爺　〔五〕浦島太郎　〔六〕文福茶釜
〔七〕勝々山　〔八〕羅生門　〔九〕一寸法師　〔一〇〕猿蟹合戰　〔一一〕俵藤太　〔一二〕瘤取り

〔小說〕 正價 圓拾錢 郵稅 拾錢

故尾崎紅葉君著 全六冊（菊判上製）

◉紅葉全集

正價一冊壹圓八拾錢小包料一冊拾貳錢宛
總紙數 五六〇〇頁

第一卷 ●色懺悔 ●風雅娘 ●新桃花扇 ●巴波川 ●南無阿彌陀佛 ●拈華微笑 ●戀の蛻 ●此ぬし ●夏蟲 ●關東五郎 ●新色懺悔 ●文ながし ●猿枕 ●わかれ蚊帳 ●七十二文命の安寶 ●二人むく助 ●二人女房

第二卷 ●伽羅枕 ●おぼろ舟 ●むき玉子 ●紙きぬた ●夏小袖 ●戀の病

第三卷 ●三人妻 ●俠黑兒 ●男ごゝろ ●心の闇 ●袖時雨 ●むらさき

第四卷 ●隣の女 ●不言不語 ●鷹料理 ●三個條 ●冷熱 ●浮木丸 ●青葡萄 ●八重襷

第五卷 ●多情多恨 ●安知歇覩林 ●千箱の玉章 ●寒牡丹

第六卷 ●金色夜叉前編 ●金色夜叉中編 ●金色夜叉後編 ●續金色夜叉 ●續々金色夜叉 ●新續金色夜叉 ●煙霞療養 ●紅葉山人傳 ●紅葉著作年表

幸田露伴君著（菊判上製）

◉名家小說文庫 露伴叢書、全二冊

▲前編紙數 九百八十頁
▲後編紙數 九百九十頁
●正價一冊金貳圓小包料一冊拾六錢

前編目次 ●自傳 ●二日物語 ●夜の雪 ●僥倖 ●緣の糸 ●休暇傳 ●毒朱唇 ●ひげ男 ●新學士 ●迷霧 ●和合樂 ●川舟 ●大珍話 ●緣外緣 ●夢がたり ●是はく ●醉鄉記 ●珍饌會 ●獅子庵 ●伊能忠敬 ●まき筆日記 ●客舍雜筆 ●地獄谷日記 ●將棋雜考 ●將棋雜話 ●元祿時代の雜劇 ●折々草

後編目次 ●椀久物語 ●春の山 ●當世外道の面 ●封じ文 ●鐵三鍛 ●自繩自縛 ●蹄鐵 ●冷千氷 ●箱根草 ●讀獵孝行 ●夢日記 ●ひとよ草 ●新浦島 ●鄭成功 ●日蓮上人 ●二宮尊德 ●突貫紀行 ●醉興記 ●易心後語 ●春の一日 ●うつしゑ日記 ●遊行雜記 ●旅の心得 ●知々夫紀行 ●文明の庫

塚原澁柿君著（菊判上製一千頁）

◉名家小說文庫 澁柿叢書

正價貳圓 小包拾六錢

目次 ●釜煮 ●妻の心 ●猿冠者 ●鐵火 ●聚樂殿 ●昌勸左衛門 ●是非もなき ●不老術 ●新粧法 ●夢と夢 ●眞の武士 ●親の面 ●五月女阪 ●三千石 ●男の面 ●由井正雪 ●大石內藏之助 ●碧玉盤 ●大風乾之助 ●他流試合 ●脫走兵 ●振武軍 ●密告 ●此の戀

廣津柳浪君著（全二冊菊判上製二千頁）

◉名家小說文庫 柳浪叢書

一冊貳圓 郵稅拾六錢宛

前編目次 ●非國民 ●兄の煩悶 ●二人やもめ ●五反田 ●親ごゝろ ●淺瀨の波 ●名物松浦饅頭 ●七騎落 ●雪見酒 ●八幡の狂女 ●そまる糸 ●歌加留多 ●亡き母 ●實生櫨 ●あにき ●座敷牢 ●黑蜻蜓 ●紫被布 ●女中心中 ●中川心中 ●くされ緣

後編目次 ●おもかげ橋 ●昇降場 ●骨ぬすみ ●妾 ●今戸心中 ●隅田の夜路 ●罪の闇 ●變目傳 ●都の夢 ●狂言娘 ●畜生腹 ●重づま ●貯金玉 ●花くろひ ●幼時

田山花袋君著（菊判上製千餘頁）

◉名家小說文庫 花袋叢書

正價貳圓 小包拾六錢

目次 ●夕強小女 ●女教師 ●島の心中 ●夫婦 ●新築の家 ●春の別墅 ●一畫家の日記 ●令妹 ●浪花節の名手 ●寫生の花 ●一家の妻 ●初戀の人 ●無華 ●不處の禍 ●二人小屋 ●憶梅記 ●思ふどち ●深山窮谷 ●老僧 ●小桃源 ●みやまの鷲 ●悲劇 ●孤島

江見水蔭君著（菊判上製一千頁）

◉名家小說文庫 水蔭叢書

正價貳圓 小包拾六錢

目次 ●女房殺し ●新潮來曲 ●旅役者 ●林間の高塔 ●滿心の誓 ●紫海苔 ●地底の人 ●崖下の家 ●髭 ●水棲記 ●別莊守 ●紙子くらべ ●つぎ紙子

嚴谷小波君著（菊判上製一千頁）

◉名家小說文庫 小波叢書

正價貳圓 小包拾六錢

目次 ●あゝ京都 ●男の心 ●皿 ●かつら川 ●大磐石 ●合はせ鏡 ●軍國女氣質

◉ 秋聲叢書　德田秋聲君著（菊判上製一千頁）　名家小說文庫　正價貳圓　小包拾六錢

目次　●氣まぐれもの●惡物●ひとり樓●獨らぬ川●みち芝●春の月●みだれ心●里の女●藪かうじ●お靜●見え坊●老骨●思はぬ罪●通譯官●古巣●學士の戀●狂學士●一念●肖像畫●花影●觀海寺の五日●危機

◉ 鏡花叢書　泉鏡花君著（菊判上製一千頁）　名家小說文庫　正價貳圓　小包拾六錢

目次　●外科室●海城發電●化銀杏●慈善會●勝手口●鷺花溪●梟物語●外國軍事通信員●やどり木●月夜遊女●少年行●脚本深沙大王●纐纈●頰白●鷺の灯●そら解●星女郎●紫手綱

◉ 美妙叢書　山田美妙君著（菊判上製一千餘頁）　名家小說文庫　正價貳圓　小包拾六錢

目次　●阿千代●饅旦那●峯の殘月●後の殘月●里見勝元●若白髮●古根●いのり首●しゞみうり●惡の善●孫右衞門●馬丁仙吉●迷耶悟乎●磯千鳥●妻琴●若葉の露●帝國海軍●決鬪●死刑囚の懺悔●たかせ川●性空上人●大博士●破壞主義●勢至丸●太郎定綱●二郎經高

◉ 二葉亭全集　故長谷川辰之助君著　坪内雄藏君、内田貢君、池邊吉太郎君編輯　全四冊菊判帙入上製

◉ 第一卷創作の卷　正價貳圓卅錢　小包拾貳錢
目次（浮雲●其面影●平凡）

◉ 第二卷ツルゲーネフの卷　▲正價貳圓參拾錢小包料拾貳錢
目次（●あひびき●めぐりあひ●片戀●猶太人●夢かたり●うき草●くされ緣

◉ 獨步全集　故國木田獨步君著（全一冊菊判千七百頁）　正價一册貳圓　小包拾貳錢宛

前編　●牛肉と馬鈴薯●運命論者●巡査●酒中日記●富岡先生●空知川の岸邊●郊外●鎌倉夫人●神の子●源をぢ●星●園遊會●春の鳥●少年の悲哀●夫婦●河霧●小春●遺言●初孫●岡本の手紙●わかれ●置土產●湯ケ原より●日の出●非凡なる凡人●畫の悲み●馬上の友●惡魔●正直者●第三者●女難

後編　●竹の木戸●二老人●泣笑ひ●渚●たき火●おとづれ●詩想●忘れぬ人々●まぼろし●鹿狩●二少女●帽子●あの時分●死●波の音●號外●歸去來●別天地●初戀●糸くづ●非凡人●武藏野●入鄕記●湯ケ原ゆき●疲勞●肱の侮辱●都の友へB生より●節操●窮死●戀を戀する人●暴風

◉ 眉山全集　故川上眉山君著（全四冊菊判上製）　總紙數三千三百餘頁
▲正價一册壹圓八拾錢　▲全部六圓貳拾錢
▲小包料一册拾貳錢宛

第一卷　●雪折竹●大盃●奥様●いさゝ川●風流狹言記●書記官●船橋●碧水志●お駒●絃聲●うらおもて●柴栗●逸樂編●有明●鹿の子絞●うつせ貝●黃昏●青葉●島田くづし●寢覺●塵影

第二卷　●梅紅葉●野人●二重帶●鵜澤橋●左卷●行衛●一軒百姓●三銃士

第三卷　●春宵●虛僞の價●爪木折●綾小袖●落葉●春潮●片影●滑稽相撲三人男●澤標●萬平●凡人界●妖艷●弱氣質●希望●小姿記●喜劇仙臺平●裏座敷●明眸●小町紅

第四卷　●新家庭●同胞●寃道●音の戀●梅の家●一夜天下●寶の山●千紅萬紫

● 近作十五篇	田山花袋君編（四六判五一四頁）	七五	八
◉ 小說 藤村集	島崎藤村君著（四六判四九一頁）	七五	八
◉ 小說十二人集	小波、遊柿、風葉、春葉、秋聲外七君作（菊判四一二頁）	八五	一〇
● あめりか物語	永井荷風君著（四六判三九〇頁）	六五	八
◉ 北米の花	田村松魚君著（菊判三七二頁）	一、二〇	一〇
● 一葉全集	樋口一葉女史著（菊判四八六頁）	四〇	三
◉ 伯林土產 戀の畫葉書	巖谷小波君著　和田英作君畫（四六判四六〇頁）▲一名留學生氣質	一、〇〇	一〇

小說書類

著者・譯者	角書	書名	體裁	定價	郵稅
内藤千代子女史著		スウ井トホーム	(四六判三一四頁)	六五	六
福田琴月君著	當世	奥様氣質	(四六判二〇二頁)	三〇	六
村井弦齋君著		女道樂	(菊判四六六頁)	八〇	一〇
同君著		酒道樂	(全二冊菊判五五四頁)	各五五	一〇
押川春浪君著		海底軍艦	(菊半截判三九八頁)	三〇	六
同君著	英雄小說	武侠の日本	(菊半截判四八二頁)	四〇	六
同君著	海國冒險奇談	新造軍艦	(菊半截判三五一頁)	三〇	六
同君著	英雄小說	東洋武侠團	(菊半截判五三〇頁)	四五	六
同君著	英雄小說	武侠艦隊	(菊半截判三三〇頁)	三〇	六
同君著	英雄小說	新日本島	(菊半截判三七二頁)	三五	六
同君著	冒險小說	怪人鐵塔	(菊半截判四二〇頁)	四五	六
同君著	傳奇小說	銀山王	(菊半截判三二七頁)	三〇	六
河岡潮風君著	冒險壯遊	五洲怪奇譚	(四六判四一二頁)	五〇	六
江見水蔭君著	冒險小說	女水夫	(四六判五六〇頁)	五五	八
同君著	小說	探檢女王	(菊半截四二八頁)	四五	四
同君著	小說	牡丹族	(四六判五〇〇頁)	五五	八
同君著	小說	少年探檢隊	(菊半截判三九〇頁)	三八	六
海軍少尉阿武天風君著		海上生活譚	(四六判五二六頁)	五五	八
岡雷平君著	南洋群島	珊瑚島探檢記	(菊半截三一六頁)	三〇	四
江見水蔭君著		大蠻勇	(四六判五四〇頁)	五〇	八
同君著	實地探檢	捕鯨船	(菊判二〇三頁)	三五	八
松居松葉君譯	家庭小說	樂天小屋	(四六判一九〇頁)	四〇	六
前田雪子女史抄譯	家庭小說	小姫君	(四六判二七六頁)	四五	六
河井道子、辻村靖子君共譯	家庭小說	ひとりぼっち	(四六判三七〇頁)	六五	八
若松賤子女史遺稿 櫻井鷗村君編纂		忘れがたみ	(四六判六三二頁)	八〇	八
若松賤子女史譯述		小公子	(菊判三七四頁)	三五	八
品川卯一君譯	商業小說	老商人物語	(四六判二七八頁)	三八	六
森田思軒君譯述		十五少年	(菊判二九六頁)	三五	八
文學士小松月陵君譯		沙翁物語十種	(四六判三〇〇頁)	四五	六
獨逸チヨッケ氏原著、司馬亨太郎君譯	立志小說	黄金村	(菊判)	四八	八
前田木城君譯	短篇十種	モウパッサン集	(四六判三二〇頁)	四五	八
吉江孤雁君譯		ツルゲネーフ集	(四六判四五〇頁)	四八	六
相馬御風君譯	短編六種	ゴーリキー集	(四六判三〇八頁)	四五	六
米國ホーマー、リー將軍原著 池亨吉譯		日米戰争	(菊判二四〇頁)	七〇	六
文學士高田知一郎君 法學士佐藤忍君 共譯		英獨戰争未來記	(菊判三八八頁)	六五	八
高橋光威君譯述	ロビンソン	絶島漂流記	(菊判四九八頁)	四〇	八
押川春浪君譯述	海島探險	塔中の怪	(菊半截判三三二頁)	二五	四
櫻井鷗村君譯述	勇少年冒險譚	初航海	(菊半截判三一八頁)	二五	四

◎史劇十二曲　山崎紫紅君著（四六判五六〇頁）　九五　一〇

◎新譯社會劇　土居春曙君譯（菊判三五一頁）　六五　一〇

△南總里見八犬傳　曲亭馬琴翁著（本箱入）全五十冊（大判三〇五一枚）　三、〇〇　四〇

◎繪本太閤記　博文館編輯局校（四六判一一三八頁）　六五　一三

◎帝國文庫

價一冊七拾五錢　小包料一冊拾貳錢宛

▲全部五拾册四六判上製總紙數五萬餘頁

帝國文庫及續帝國文庫は小說のみを蒐集したるものに非ざれども目錄編纂の便宜上全部を一括して玆に揭ぐ

◎一編　眞書太閤記　卷一
◎二編　眞書太閤記　卷二
◎三編　眞書太閤記　卷三
◎四編　眞書太閤記　卷四　▲附太閤朝鮮軍記
◎五組　源平盛衰記
◎六編　南總里見八犬傳　上卷
◎七編　南總里見八犬傳　中卷
◎八編　南總里見八犬傳　下卷
◎九編　東海、奧羽、木曾江の島道中膝栗毛
◎十編　梅曆春告鳥
◎十一編　通俗三國志　上卷
◎十二編　通俗三國志　下卷
◎十三編　三馬傑作集
◎十四編　柳澤、越後、黒田、加賀、伊達騷動實記
◎十五編　京傳傑作集
◎十六編　種彥傑作集
◎十七編　星月夜鎌倉顯晦錄／北條九代記
◎十八編　通俗十二朝軍談／通俗武王軍談／通俗明清軍談
◎十九編　甲越軍談
◎二十編　通俗吳越軍談／通俗漢楚軍談
◎二十一編　楠廷尉秘鑑
◎二十二編　風來山人傑作集
◎廿三、四編　西鶴全集　上下（禁賣）
◎廿五、六編　滑稽名作集　上下
◎二十七編　其磧自笑傑作集　上卷
◎二十八編　其磧自笑傑作集　下卷
◎二十九編　人情本傑作集　上卷
◎三十編　氣質全集
◎三十一、二、三編　珍本全集　上中下
◎三十四編　人情本傑作集　下卷
◎三十五編　赤穗復讐全集
◎卅六、七編　水滸傳　上下
◎三十八編　忠臣藏淨瑠璃集
◎三十九編　四大奇書　上卷
◎四十編　續氣質全集
◎四十一編　四大奇書　下卷
◎四十二編　近松時代淨瑠璃
◎四十三編　大岡政談
◎四十四編　各宗教傳高僧實傳
◎四十五編　仇討小說集
◎四十六編　馬琴傑作集
◎四十七編　淨瑠璃名作集
◎四十八編　俠客傳全集
◎四十九編　續仇討小說集
◎五十編　近松世話淨瑠璃

◎續帝國文庫

正價一冊七拾五錢小包料拾貳錢宛

▲全部五拾册四六判上製總紙數五萬餘頁

◎一編　眞田三代記　附日本武士道
◎二編　近世說美少年錄
◎三、四編　日本歌謠類聚
◎五編　諺紫田舍源氏
◎六編　竹田出雲淨瑠璃集
◎七編　朝夷巡島記
◎八編　兒雷也豪傑譚
◎九編　江戶作者淨瑠璃集
◎十編　前々太平記　附前太平記
◎十一編　太平記
◎十二編　紀海音淨瑠璃集
◎十三編　續近松淨瑠璃集
◎十四編　近松半二淨瑠璃集
◎十五編　後太平記：北條三代記

◎十六編 脚本傑作集上卷（禁實）
◎十七編 京山全集
◎十八編 校訂落語全集
◎十九編 並木宗輔浄瑠璃集
◎二十編 紀行文集
◎二十一編 一九全集
◎二十二編 漂流奇談全集
◎二十三編 邯鄲諸國物語 續種彦傑作集
◎二十四編 校訂續紀行文集
◎二十五續 續水滸傳
◎二十六編 傾城水滸傳
◎二十七編 文耕堂浄瑠璃集
◎廿八、九編 白縫譚 上下
◎三十編 北雪美談時代鏡
◎三十一編 常山紀談
◎三十二編 萬物滑稽合戰記
◎三十三編 續一九全集
◎三十四編 校訂黄表紙百種
◎三十五編 校訂俳優全集
◎三十六編 校訂俗曲大全
◎三十七編 續々紀行文集
◎三十八編 續馬琴傑作集 下卷
◎三十九編 脚本傑作集 下卷
◎四十編 續京傳三馬傑作集
◎四十一、二編 釋迦八相倭文庫 上下
◎四十三編 種彦短編傑作集
◎四十四、五、六編 俊傑神稻水滸傳 上中下
◎四十七編 校訂近世奇談全集
◎四十八編 校訂名家短篇傑作集
◎四十九編 佛教各宗續高僧實傳
◎五十編 校訂名家漫筆集

博文館編輯局編

◎講談文庫（四六判上製）每編四百五十頁

▲正價一册五拾五錢 郵税八錢宛

既刊書

◎講談忠臣藏 ◎出世譚
◎義士銘々傳 上 ◎名人譚
◎義士銘々傳 下 ◎烈婦傳
◎大岡裁判 ◎武士氣質
◎武勇傳 上 ◎義士外傳
◎武勇傳 下 ◎怪談集
◎俠客傳 ◎人情話 上下二册

◎沼田笠峰君著 少女スケッチ（四六判二五〇頁） 三五 四
◎竹貫佳水君著 少女思出の記（四六判二〇六頁） 二八 四

◎沼田笠峰君著 家庭學校 少女百話（四六判三三〇頁） 四五 六
◎山岸荷葉君著 少女小説 氏か育か（四六判約二百頁） 三八 四
◎巖谷小波君著 休暇の友 笑の國（四六判三七七頁） 八〇 八
◎巖谷小波君著 子供ごゝろ（四六判三七六頁） 九〇 八
◎河崎酔雨君著 少女小説 花子の行衛（四六判一八〇頁） 二八 四
◎福田琴月君著 少女小説 捨兒（四六判一七〇頁） 二八 六
◎巖谷小波君著 小波お伽百話（四六判九八四頁） 一、〇〇 三
△與謝野晶子女史作 おとぎばなし 少年少女（四六判三二五頁） 五〇 六
◎現代お伽作家十二名執筆 お伽テーブル（四六判二二〇頁） 六五 八
◎諸星絲遊君著 古代神話 ぎりしやお伽噺（四六判三二四頁） 六五 六
◎現代お伽十作家共著 お伽花籠（四六判三一〇頁） 七五 八
◎巖谷小波君著 むかしく（菊判二九六頁） 一、二〇 八
◎武田櫻桃外六君合著 お伽寶船（四六判） 七〇 六

歴史書類

正價 圓 拾錢　郵税 拾錢

◎法學博士文學博士有賀長雄君著
大日本歴史 洋裝菊判上製美本
▲上卷（一〇五〇頁）二,〇〇　一六
▲下卷（一二〇九頁）二,五〇　一六

◎國府犀東君著
大日本現代史（全二册菊判上製）
▲上卷（一二〇〇頁）二,五〇　一六
▲下卷（一〇〇〇頁）二,〇〇　一三

◎木村鷹太郎君著（菊判四〇〇頁）
大日本建國史 一,五〇　八

◎文學博士萩野由之君著（菊判一〇〇〇頁）
大月本通史 一,五〇　三
全三册：：：中下卷未刊

◎法學博士有賀長雄君著（菊判一〇三〇頁）
帝國史略 一,三〇　三

◎萩野文學博士著【文部省檢定濟】上下二册
中等教育 **日本歴史** 各 五五　八

●松井伯軒君著（菊判五六四頁）
新撰 **大日本帝國史** 四　八

●增田于信君著（菊判二一七頁）
新撰日本小歴史 一五　六

●足立栗園君著（菊判三三四頁）
通俗日本歴史 二五　八

●坪谷善四郎君著（菊判三五〇頁）
通俗明治歴史 二五　八

◎文學士久保天隨君校訂（四六判八〇〇頁）
重訂 **日本外史** 七五　三

△文學士久保天隨君註釋（全部十二册）
日本外史新釋 各 三〇　六

◎落合直文君 池邊義象君 共著（菊判一一〇二頁）
新撰日本外史 一,三〇　三

●落合直文君 池邊義象君 合著（菊判一九八頁）
家庭教育 歴史讀本 **花の白雲** 一八　四
目次　日本武尊の事蹟　和氣清麿の事蹟　護良親王の事蹟　神功皇后の事蹟　曾我兄弟の復讐　菅原道眞の事蹟

●同（菊判二一五頁）
家庭教育 歴史讀本 **卯花月夜** 一八　四
目次　源義家の事蹟　佐々木高綱の事蹟　那須與一の事蹟　靜御前の事蹟　平重盛の事蹟　俊寬僧都の事蹟　袈裟御前の事蹟　忠興夫人の事蹟

●同（菊判二〇六頁）
家庭教育 歴史讀本 **紅葉の錦** 一八　四
目次　平敦盛の事蹟　楠正成の事蹟　兒島高德の事蹟　森蘭丸の事蹟　藤原師賢の事蹟　阿新丸の事蹟　加藤清正の事蹟

●落合直文君 池邊義象君 合著（菊判二三八頁）
家庭教育 歴史讀本 **枯野の雪** 一八　四
目次　北畠親房の事蹟　新田義貞の事蹟　林子平の事蹟　楠正行の事蹟　赤穗義士の事蹟　高山彦九郎の事蹟

●訂正 **日露戰史** 全部四册 太陽判美本
正價 一册 壹圓貳拾錢　小包料 拾貳錢宛

◎國府種德、梅田又次郎、田山錄彌君著
第一卷 日露初期の海戰〇第一軍初期の活動、其一〇同 其二〇第二軍初期の活動

◎熊谷直亮、牛井桃水、坪谷水哉君著
第二卷 大孤山上陸軍及第四軍初期の活動〇第三軍初期の活動〇遼陽の包圍攻擊〇沙河大會戰

◎牛井桃水、黑田甲子郎、熊谷直亮君著
第三卷 旅順要塞攻陷戰〇奉天大會戰前記〇奉天大會戰後記〇北征

◎陸海軍記　平田 岸上、鳥、部、梅田君著
第四卷 海軍第一期作戰の成功〇日本海大海戰〇戰事の外交〇戰時の後方勤務

●海軍少佐水野廣德君著（菊判四一〇頁）
此一戰 一,〇〇　八

帝國百科全書 全部二百卷中の歴史書
▲洋裝菊判每卷三百頁以上
▲並製正價一册四拾錢　郵税八錢宛
▲上製正價一册五拾五錢　郵税拾錢宛

- ●日本歴史……文學士木寺柳次郎君著
- ●東洋歴史……文學士幸田成友君著
- ●朝鮮史……文學士久保天隨君著
- ●西洋歴史……文學士吉國藤吉君著
- ●北米合衆國史……法學士山本信博君著
- ●現代露西亞……法學士須崎芳三郎君著
- ●露西亞侵略史……法學士須崎芳三郎君著
- ●世界文明史……文學博士高山林次郎君著

歴史書類

- ●日本文明史……文學士大町桂月君著
- ●支那文明史……文學士白河次郎君 國府種德君著
- ●印度文明史……文學士常盤大定君著
- ●日本風俗史……文學士阪本健一君著
- ●世界殖民史……法學士山内正瞭君著

文學士阪本健一君著（菊判一〇八〇頁）
◎世界史　上卷　一,六〇　三
同（菊判一四五四頁）
◎同　下卷　二,〇〇　一〇

長谷川天溪君著（菊判三三四）
●通俗世界歴史　二五　八

文學士久保天隨君著
△東洋通史　全部十二册　菊判三九〇〇頁
▲正價一册五拾錢◎全部五圓◎郵税八錢宛

- 壹卷……三皇五帝○三代の興亡○春秋の世
- 貳卷……（戰國の世○先秦漢族の人文○秦の帝業○楚漢の角逐
- 參卷……前漢の世○兩漢の過渡
- 四卷……後漢の世○三國の分立○兩晉の世
- 五卷……五胡十六國の世○南北朝
- 六卷……隋唐の盛時○唐の初世○唐の中世
- 七卷……（唐の末世○五世十國の世○漢唐間の人文
- 八卷……北宋の盛衰○宋金の對立
- 九卷……（蒙古の勃興○蒙古の隆昌○元室の治世○朱元間の人文
- 拾卷……明の初世○明の中世○明の末世
- 拾壹卷……（清の初世○清の盛世と疆外經略○英人の東漸○明清間の人文
- 拾貳卷……最近東洋事局

太田淳軒君講述
●十八史略講義　全二册（四六判八八六頁）　三〇　八

奥田竹松君著（菊判四四四頁）
●佛蘭西革命史　七〇　八

河上清君著（菊判三三四頁）
●通俗獨逸歴史　二〇　八

文學博士箕作元八君著（菊判二一六頁）
●西洋史新話 ギリシヤの撥亂　五五　八

同 君著（菊判二百餘頁）
●西洋史新話 テーベの勃興　五五　八

文學士久保天隨君著（菊判一六〇〇頁）
◎日本歴史寶鑑　三,〇〇　二〇

文學博士箕作元八君著（菊判二二〇頁）
●歴史叢話　四〇　六

文學博士萩野由之君編述（四六判四二四頁）
◎中等教育日本歴史要解　五〇　六

文學士齋藤隆三君著（菊判一〇四〇頁）
◎近世世相史　二,二〇　一六

同（菊判三四八頁）
●元祿世相志　四五　八

國友重章君閲 恒屋盛服君著（菊判五六六頁）
◎朝鮮開化史　一,〇〇　一三

重田勘次郎君著（四六判四六三頁）
●世界風俗志　五〇　八

巖谷小波君 福田琴月君合著
●少年日本歴史
△菊判全部六册 紙數一册約百四十頁
△正價一册貳拾錢 六册壹圓拾錢 郵税一册四錢

- 第一編……古代の卷
- 第二編……王朝の卷
- 第三編……武家の卷
- 第四編……亂世の卷
- 第五編……德川の卷
- 第六編……明治の卷

文學博士萩野由之君著
●少年日本歴史讀本
毎月一回刊行 洋裝菊判紙數一册約百四十頁

正價 ●一册金拾八錢 ●五册八十八錢 ●十册壹圓六拾五錢 ●廿册參圓貳拾五錢 ●卅册四圓八拾錢 ▲郵税一册四錢宛

- ●第一編……天の浮橋
- ●第二編……大國主神
- ●第三編……天孫降臨
- ●第四編……橿原の宮
- ●第五編……三種の神器

▲續刊▼

- ●第六編……新羅征伐
- ●第七編……厩戸皇子
- ●第八編……弓削道鏡
- ●第九編……藤原基經
- ●第十編……屋島の合戰

▲第十一編以下逐次刊行

傳記書類

正價 圓拾錢　郵稅 拾錢

◎故島谷部春汀君著　**春汀全集**（總紙數二千餘頁）全部三册菊判 洋裝美本
- ⊙第一卷 明治人物月旦 前編　一,五〇　一三
- ⊙第二卷 明治人物月旦 後編　一,五〇　一三
- ⊙第三卷 各種の評論　一,五〇　一三

◎今泉鐸次郎君著　**河井繼之助傳**（菊判四六六頁）　一,五〇　八

◎法學博士阪谷芳郎君編　**青淵先生六十年史**（菊判二三二〇頁）▲一名 近世實業發達史　一,五〇　一四

◎伊藤痴遊君講演　明治元勳 **井上侯實傳**（菊判二五四頁）　三五　六

●高橋光威君著　貝島太助翁の成功談 **炭鑛王**（菊判一五八頁）　二五　六

●成田鋼太郎君編　咖離縦長 **佐久間大尉**（菊判一八八頁）　四五　六

◎海軍省教育本部藏　英國水師提督 **ネルソン傳**　菊判一三二〇頁　一,六〇　一六

◎理學博士鶴田賢次郎君抄譯　自助論の著者 **スマイルス翁の自傳**（三六判三二〇頁）　四五　六

◎菅緣陸君著　**カーネギー**（四六判一五四頁）　二五　四

●文學士煙山專太郎君著　英雄末路 **ナポレオン**（四六判二六六頁）　三〇　四

◎文學士土井晩翠君著　**ナポレオン性格論**（四六判三一七頁）　五五　六

●やまと新聞記者山本龜城君著　**政界の寧馨兒**（四六判三一八頁）　三八　六

●小野田翠雨君著　現代 **名士の演說振**（四六判三二二頁）　四五　六

●東京朝日新聞記者中野正剛君著　**八面鋒** 朝野之政治家（四六判三五七頁）　四五　六

◎双楓書樓同人編　**名流百道樂**（四六判四九〇頁）　九〇　八

●岡本鶴園君著　現代 **名士の養生振**（四六判三三〇頁）　四五　六

●前田越嶺君著　**世界名君傳**（三六判二八八頁）　二八　四

●同君著　**世界名臣傳**（三六判二八四頁）　二八　四

●河岡潮風君著　少年百科叢書 **冒險英雄傳**（三六判二九〇頁）　二八　四

●前田越嶺君著　少年百科叢書 **發明と偉人**（三六判三〇〇頁）　二八　四

●岡本鶴園君著　少年百科叢書 少年時代 **名士の苦學**（三六判約二九〇頁）　二八　四

●長田秋濤君著　**世界富豪の表裏**（菊判二六二頁）　三五　六

●高須梅溪君著　金言對話 **百傑スケッチ**（四六判三七〇頁）　五五　六

●遲塚麗水、內藏昌樹君著　露將校 **旅順籠城實談**（菊判二九四頁）　四八　八

●井上泰岳君著　**我半生の奮鬪**（菊判三二〇頁）　四八　八

◎田中萬逸君著　**死生の境** 前編（四六判五〇〇頁）　七五　八

●福田琴月君著　少年史談 **日本武士**（菊判二三〇頁）　三八　六

●武田櫻桃君、木村小舟君編　少年譜談 **日本武將傳**（菊判一六四頁）　二八　六

●前田越嶺君著　少年史譚 **世界武將傳**（菊判二二二頁）　三〇　六

●**世界歷史譚** 全部參拾六册 每編插入寫眞
▲正價一册金拾參錢　郵稅一册金四錢宛
- 【一】●釋迦：高山文學博士著
- 【二】●孔子：吉國文學士著
- 【三】●耶蘇：上田文學士著
- 【四】●ビスマーク：笹川法學士著
- 【五】●ハンニバル：大町文學士著
- 【六】●マホメット：阪本文學士著
- 【七】●漢高祖：三浦文學士著
- 【八】●ネソン：島田法學士著

【九】●岳飛…笹川文學士著
【一〇】●コロンブス…桐生文學士著
【一一】●ガリバルヂー…岸崎法學士著
【一二】●彼得大帝…佐藤法學士著
【一三】●華盛頓…福山文學士著
【一四】●孔明…安東法學士著
【一五】●ソクラテス…久保文學士著
【一六】●グラッドストーン…酒井文學士著
【一七】●歷山大王…近松法學士著
【一八】●王陽明…幸田文學士著
【一九】●ガーフキールド…白河文學士著
【二〇】●デモステネス…十時文學士著
【二一】●ウヰリヤムセキスピヤー…中村法學士著
【二二】●ナポレオン…土井文學士著
【二三】●孟子…永井文學士著
【二四】●成吉思汗…太田法學士著
【二五】●クロンウエル…松岡法學士著
【二六】●ゴルドン將軍…赤松法學士著
【二七】●グランド將軍…布施法學士著
【二八】●ウエルリントン…高木文學士著
【二九】●クリスピー…名尾法學士著
【三〇】●メッテルニッヒ…森山法學士著
【三一】●カピテンクック…谷野法學士著
【三二】●ジャンダーク…中内文學士著
【三三】●シーザー…柿山文學士著
【三四】●査列斯大王…中大路法學士著
【三五】●フランクリン…熊谷文學士著
【三六】●ニュートン…三好文學士著

●少年讀本

全部五十冊 菊判洋裝並製
每編密畫拾餘圖挿入 一冊約百三十頁
正價一冊金拾參錢 郵稅一冊四錢宛

【一】●高島秋帆 福地櫻痴君著
【二】●白河樂翁公 中村秋香君著
【三】●河井繼之助 戸川殘花君著
【四】●三條實美公 依田學海君著
【五】●曲亭馬琴 饗庭篁邨君著
【六】●井伊掃部守 巖谷小波君著
【七】●山田長政 遲塚麗水君著
【八】●錢屋五兵衛 桐生法學士著
【九】●春日局 岸上質軒君著
【一〇】●水戸烈公 野口珂北君著
【一一】●桐野利秋 春山育次郎君著
【一二】●藤田東湖 大和田建樹君著
【一三】●伊能忠敬 幸田露伴君著
【一四】●新井白石 武島文學士著
【一五】●水野越州 中島二葉君著
【一六】●池大雅 田山花袋君著
【一七】●木内宗吾 松原廿三階堂君著
【一八】●西郷隆盛 川崎紫山君著
【一九】●坂本龍馬 阪崎紫瀾君著
【二〇】●横井小楠 大野酒竹君著
【二一】●貝原益軒 石原醫學士著
【二二】●渡邊華山 渡邊霞亭君著
【二三】●中濱萬次郎 石井研堂君著
【二四】●近衛忠煕公 勢多章之君著
【二五】●間宮倫宗 笹川臨風君著
【二六】●周布政之助 堺枯川君著
【二七】●荻生徂徠 内田不知庵君著
【二八】●松平伊豆 森山法學士著
【二九】●中江藤樹 國府犀東君著
【三〇】●島津齊彬 春山鶴峰君著
【三一】●高野長英 千河岸櫻所君著
【三二】●橋本左内 桐生法學士著
【三三】●釋月照 千河岸櫻所君著
【三四】●平野國臣 白河文學士著
【三五】●熊澤蕃山 幸田文學士著
【三六】●雲井龍雄 玉木椿園君著
【三七】●野中兼山 北村秀陽君著
【三八】●大鹽平八郎 堀紫山君著
【三九】●佐久間象山 塚原澁柿君著
【四〇】●小栗上野介 勢多章之君著
【四一】●阿部伊勢守 熊田葦城君著
【四二】●松尾芭蕉 國府犀東君著
【四三】●石川丈山 田岡嶺雲君著
【四四】●德川吉宗 草野正美君著
【四五】●烈女お藤 藤本藤陰君著
【四六】●林子平 松居眞玄君著
【四七】●塙撿挍 長谷川天溪君著
【四八】●本居宣長 落合直文君著
【四九】●高田屋嘉兵衛 中村冷露君著
【五〇】●大槻盤水 大槻如電君著

◉稻垣農學博士、矢津昌永君共著（菊判二一四頁）
實業學校日本地理教科書　七〇　八

◉稻垣農學博士、矢津昌永君共著（菊判一九〇頁）
實業學校外國地理教科書　六五　八

●理學士佐藤傳藏君著（菊判三一四頁）
日本新地理　四〇　特製五五　八　一〇

●大和田建樹君著（菊判二九六頁）
通俗日本地理　三〇　八

◉田山花袋著　全十二册（四六判一册約五五〇頁）
新撰日本名勝地誌
▲正價一册五拾五錢　郵税八錢

【一】畿内
【二】東海道西部
【三】同東部
【四】東山道西部
【五】同東部
【六】北陸道
【七】山陽道

續刊

【八】山陰道
【九】南海道
【一〇】西海道
【一一】北海道及樺太
【一二】臺灣及琉球

●松永聽劍君編（菊判三六〇頁）
樺太及勘察加　五〇　八

●讀賣新聞記者松川木公君著（菊判一八二頁）
樺太探檢記　三八　八

●文學士田淵友彥君著（菊判三五〇頁）
韓國新地理　四〇　特製五五　八　六

◉理學博士神保小虎君講述（菊判二四〇頁）
地理學叢話　四〇　六

●理學士佐藤傳藏君著（菊判三三八頁）
萬國新地理　四〇　特製五五　八　八

●澁江保君著（菊判三四〇頁）
通俗世界地理　三〇　八

●農學士志賀重昂君著（四六判一九二頁）
訂正增補地理學講義　五〇　八

●同君譯述（菊判三二六頁）
地理講話　六〇　八

△麻生鐵三君著（麻生式折本）
全國鐵道線路名所古蹟明細旅行案内地圖　四五　四

●巖谷小波君金子紫草君共著（菊判洋裝）
少年世界讀本
正價（一册金貳拾錢　全部貳圓拾錢）●六册壹圓拾錢　▲郵税一册四錢

【一卷】英吉利
【二卷】支那、朝鮮、暹羅、斯波及東洋諸國
【三卷】獨逸、墺太利
【四卷】西班牙、葡萄牙、亞非利加各國
【五卷】佛蘭西、瑞西
【六卷】中央亞米利加各國
【七卷】伊太利、希臘
【八卷】露西亞
【九卷】南亞米利加各國
【十卷】丁抹、和蘭、白耳義
【十一卷】土耳古、東部歐羅巴各國
【十二卷】北米合衆國

●竹貫直人君、木村小舟君、沼田笠峰君編　全部七册菊判一册百四十頁
少年日本地理
正價一册貳拾錢　全七册壹圓貳拾五錢　▲郵税一册四錢

●第一編……鄉土及關東之部
●第二編……中部地方之部
●第三編……近畿及中國之部
●第四編……四國及九州之部
●第五編……奥羽及北海道部
●第六編……臺灣及樺太之部
●第七編……朝鮮之部

◉文學士大町桂月君著（四六判五二〇頁）
關東の山水　一〇〇　八

●同君著（菊半截判三一〇頁）
行雲流水　三〇　四

◉神谷有終君編（三六判二七五頁）
東海道旅の友車窓の名勝觀　四五　六

◉大橋乙羽君著　全二册（菊半截判一三五〇頁）
增補千山萬水　正續各五〇　八

◉文學博士井上圓了君口述（四六判三七五頁）
日本周遊奇談　七〇　六

◉坪谷水哉君著（四六判四九四頁）
山水行脚　八〇　八

◉同君著（四六判四〇〇頁）
海外行脚　七〇

◉巖谷小波君著　全二册　角形七〇〇頁
新洋行土産　各一、二〇　八

著者	書名	體裁	定價	郵稅
英國リーズデール卿著 水田榮雄君譯述	●大英貴賓の日本觀	(四六判三〇〇頁)	五〇	六
五大洲探檢家中村直吉君 押川春浪君共著	●亞細亞大陸橫行	(四六判三一八頁)	四五	六
同	●南洋印度奇觀	(四六判三〇〇頁)	四五	六
同	●鐵脚縱橫	(四六判三〇〇頁)	四五	六
同	●亞非利加一周	(四六判二九四頁)	四五	六
同	●歐洲無錢旅行	(四六判三〇〇頁)	四五	六
押川春浪君著	●中村春吉 自轉車 世界無錢旅行	(四六判三四二頁)	三八	六
岡雷平君著	●南洋群島 珊瑚島探檢記	(菊半截判三一六頁)	三〇	四
松尾樂山君著	●馬來半島の猛獸狩	(菊半截二六〇頁)	二八	四
理學博士日下部四郎太君著	◎北極探檢談		九〇	八
陸軍步兵少佐日野強君著	◎伊犂紀行 ▲上卷日記之部 ▲下卷地誌之部	(菊判七二六頁)	▲正價貳圓六拾錢	小包料拾六錢
東京理科大學講師鳥居龍藏君著	◎蒙古旅行	(菊判五六四頁)	一、八〇	一二
田村松魚君著	◎北米世俗觀	(三六判二六二頁)	三五	四
文學博士姉崎正治君著	◎花つみ日記	(四六判六〇〇頁)	一、三〇	八
吉田博君著	◎寫生旅行 魔宮殿見聞記	(菊判四〇〇頁)	九〇	八
田中湄人君著	●最近 倫敦繁昌記	(四六判六四六頁)	一、〇〇	八
坪谷水哉君著	◎世界漫遊案內	(四六判七〇六頁)	一、〇〇	八
同君著	◎改訂增補 日本漫遊案內	(全二冊四六判一三〇〇頁)	各一、〇〇	八
伊藤銀月君著	◎旅行者寶鑑	(三六判三八〇頁)	四八	八
八木井三郎君著	◎學生必携 修學旅行案內 關東の部	(三六判六九二頁)	四五	八
同君著	◎京畿地方 修學旅行案內	(三六判四二〇頁)	六〇	六
森次太郎君著	●歐米書生旅行	(三六判三二〇頁)	三五	六
安部磯雄著	●北米の新日本	(四六判二二三頁)	三五	四
飯島榮太郎君著	◎米國渡航案內	(四六判三七二頁)	四〇	六
島貫兵太夫君著	●新渡米法	(四六判二七八頁)	四〇	六
香川悅次君著	●支那旅行便覽	(三六判六〇〇頁)	四〇	八
石倉翠葉君著	●本派本願寺名所圖會	(菊判三九四頁)	六〇	八
同君著	●大谷派本願寺名所圖會	(菊判二二八頁)	四〇	八
同君著	●佛光寺名所圖會	(菊判一〇八頁)	二五	四
同君著	●日蓮宗各本山名所圖會	(菊判三五六頁)	五〇	八
同君著	●成田山名所圖會	(菊判一五八頁)	三五	六
同君著	●善光寺名所圖會	(菊判二七六頁)	四五	八
同君著	●高野山名所圖會	(菊判三四二頁)	六〇	八
同君著	●日光名所圖會	(菊判五一〇頁)	六五	三
長谷川雪旦君畫	△江戶名所圖會	全二十冊(和紙木版大本一二七三枚)	六、〇〇	二八
同君畫	△江戶名所花曆	全四冊(和紙木版大本一五六頁)	四〇	六
同君畫	△東都歲事記	全五冊(和紙木版刷大本一五五枚)	六五	六
同君畫	△木曾街道圖會	全二冊(和紙木版刷中本判三九枚)	三〇	四



登録商標
美術小間物 化粧品
東京日本橋通二丁目
柳屋本店
電話本局二〇一
フロラー香水
美髪の御料には
柳清香油
けい素香油
が最も愛用されます
二十錢 一圓廿錢 一圓八十錢

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界 第拾貳卷第壹號 (毎月一回十八日印刷納本)
明治四十四年十二月十八日印刷納本
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

定價金貳拾錢 ◎ 郵税(一冊)貳錢五厘